増山遺跡発掘調査報告

二〇一八年三月

富山県砺波市教育委員会　北陸電力株式会社　株式会社上智

増山遺跡発掘調査報告

増山城下町における戦国期集落の調査

―室牧線鉄塔建替（No.62～No.62-2）他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―

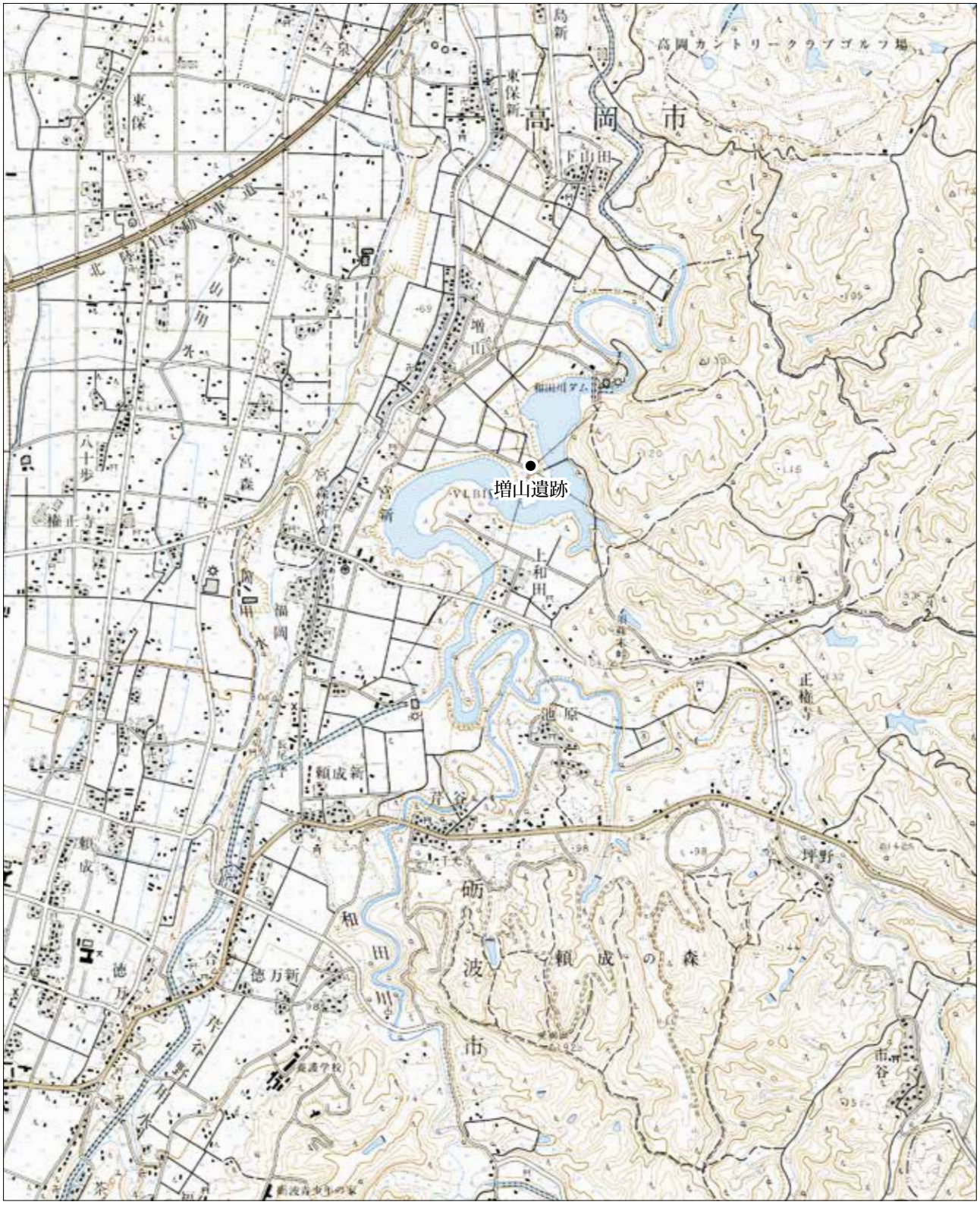
2018 年 3 月
富山県砺波市教育委員会
北陸電力株式会社
株式会社上智

2018 年 3 月
富山県砺波市教育委員会
北陸電力株式会社
株式会社上智

増山遺跡発掘調査報告

増山城下町における戦国期集落の調査

― 室牧線鉄塔建替 (No.62 ～ No.62-2) 他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―



2018 年 3 月

富山県砺波市教育委員会　北陸電力株式会社　株式会社上智

序

砺波平野の東縁、和田川段丘帯に位置する増山遺跡は、南北朝時代から幾多の戦乱の舞台となった増山城の城下町として知られています。廃城後、町は衰退の一途を辿り、今は水田景観が広がり、わずかに土塁や塚が往時を偲ばせます。

さて、このたび北陸電力株式会社の鉄塔建設に伴い、本発掘調査を行うことになりました。付近では、昭和50年代に試掘調査が行われており、それ以来の本格的な調査となります。

今回の調査では、16世紀後葉から17世紀前葉までの集落跡が見つかりました。大型の柱穴をもつ掘立柱建物や多数の井戸など、狭い面積にもかかわらず、350基以上の遺構がひしめきあっていました。遺物では、瀬戸美濃の陶器がはるか太平洋側から数多くもたらされたことや体長40-50cmもあるタイ科の魚が内陸部に運ばれ消費されたこと、また稲・蕎麦・茄子・西瓜・大根・蕪などの植物を栽培していたことなどが明らかとなり、戦国時代の人々が増山の城下町で豊かな生活を送っていたことがわかりました。

このような成果をまとめた本書を、地域の歴史資料としてご活用いただければ幸いに存じます。最後になりましたが、地元増山自治会をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位に深く感謝申しあげます。

平成３０年３月

砺波市教育委員会

教育長　山本　仁史

例　言

1　本書は、富山県砺波市増山地内に所在する増山遺跡の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は、北陸電力株式会社が事業主体となる室牧線鉄塔建替（No.62 ～ No.62-2）工事に伴うものである。北陸電力株式会社の依頼を受けて、平成 29 年度に砺波市教育委員会の監理の下、株式会社上智に委託して実施した。
3　今回の発掘調査は、本遺跡における第 2 次調査である。
4　発掘調査及び整理作業に際し、下記の諸氏・諸機関に指導協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略）
新宅輝久　藤田慎一　藤澤良祐　三浦知徳　木村孝一郎　石井啓　森内修造　橋本正博
5　本遺跡の略記号は「TM Ⅱ」(Tonamishi Masuyama 第Ⅱ次) で、遺物には「TM Ⅱ」と注記している。
6　出土遺物及び原図・写真類は砺波市教育委員会が保管している。
7　本書の編集は片山博道 (株式会社上智) が行い、執筆・分担は各文末に記した。

凡　例

1　本書の方位及び座標は、世界測地系の平面直角座標第Ⅶ系を基準とし、標高は東京湾平均海面 (T.P.) で表示している。
2　遺構記号は、以下のとおりである。
SB: 掘立柱建物 (建物の柱穴は P として単独の柱穴・ピットとは区別する)　SP: 柱穴・ピット　SE: 井戸
SK: 土坑　SD: 溝　SX: 不明遺構・樹木痕
3　引用・参考文献は、註を算用数字で文中に示し、第 1 ～ 3・5 章は各頁の下段に、第 4 章と第 5 章 2 は各節末に掲載している。
章ごとに分けて掲載している。
4　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文・写真図版の番号はすべて一致している。
5　本書で使用する用語は以下のとおりとする。
樹木痕 : 通例風倒木痕・倒木痕と呼称されるが、風倒木痕は風で倒れた木を限定し、倒木痕は倒れた、もしくは倒した木を限定する用語である。本調査では倒れた木だけではなく、立ち枯れた木も想定していることから、「樹木痕」と呼称する。遺構の単位 : 竪穴建物を 1 軒、溝・流路を 1 条、それ以外を 1 基とする。
6　遺構・遺物の網掛けなどは各図に示している。
7　写真図版の遺物は約 4 分の 1 としている。

目　次

序・例言・凡例

第１章　調査の経過 …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査・整理体制 …… 5
　3　調査・整理の方法と経過 …… 5

第２章　遺跡の位置と環境 …… 9
　1　地理的環境 …… 9
　2　歴史的環境 …… 10

第３章　調査の成果 …… 13
　1　調査区及びグリッドの設定 …… 13
　2　基本層序 …… 14
　3　遺構と遺物 …… 19

第４章　自然科学分析 …… 57
　1　試掘調査 (T7) 出土炭化材の放射性炭素年代測定 …… 57
　2　暗渠 (SD010) 出土木材の放射性炭素年代測定 …… 59
　3　井戸 (SE213) 出土種子の放射性炭素年代測定 …… 60
　4　井戸 (SE213) の花粉分析 …… 62
　5　井戸 (SE213) から出土した大型植物遺体 …… 64
　6　井戸 (SE213) 出土の魚類遺体 …… 67
　7　木製品の樹種同定 …… 70
　8　漆器椀の塗膜分析 …… 74
　9　井戸 (SE046･131) 出土礫の石材同定 …… 76

第５章　総括 …… 79
　1　遺物の様相 …… 79
　2　土塁の復元と城下の形成過程 …… 83

写真図版

報告書抄録

図版目次

図 1　過去の調査位置と今年度の調査位置図
図 2　鉄塔建替及び座標位置、試掘トレンチ位置図
図 3　試掘トレンチ　平面・断面図、出土遺物
図 4　地形・地質図
図 5　調査地周辺の遺跡分布図
図 6　調査区及びグリッド設定図
図 7　基本層序概念図
図 8　調査区土層断面図
図 9　SX028 平面・断面図
図 10　Ⅱ層とⅢ層の分布と土層断面図
図 11　遺構配置図
図 12　建物配置図
図 13　区画 1(SB380) 平面・断面図、出土遺物
図 14　区画 2(SB381･382) 平面・断面図、出土遺物
図 15　区画 3(SB383) 平面・断面図
図 16　区画 3(SB383) 出土遺物
図 17　区画 4(SB384) 平面・断面図、出土遺物
図 18　SE002 平面・断面図、出土遺物
図 19　SE039 平面・断面図、出土遺物
図 20　SE046 平面・断面図、出土遺物
図 21　SE047 平面・断面図、出土遺物
図 22　SE131 平面・断面図、出土遺物
図 23　SE133 平面・断面図、出土遺物
図 24　SE175 平面・断面図、出土遺物
図 25　SE201 平面・断面図
図 26　SE201 出土遺物
図 27　SE213 平面・断面図、出土遺物 (1)
図 28　SE213 出土遺物 (2)
図 29　SE214 平面・断面図、出土遺物
図 30　SK001･173 平面・断面図、出土遺物
図 31　SK212 平面・断面図、出土遺物
図 32　SK216･217･218、SK300 平面・断面図
図 33　樹木痕平面・断面図
図 34　暗渠平面・断面図
図 35　遺構外出土遺物
図 36　暦年較正結果
図 37　暦年較正結果
図 38　暦年較正結果
図 39　SE213 における花粉分布図
図 40　マダイ骨格図と名称
図 41　腹椎左側と名称
図 42　出土魚類遺体と計測箇所及び計測値
図 43　タイ科現生標本群腹椎の形態とサイズ
図 44　中世の越中西部
図 45　越中魚津猟業図絵 (天明 5 年)
図 46　塗膜層の赤外分光スペクトル
図 47　遺跡とその周辺の地質図
図 48　器種と生産地の構成図
図 49　城下町の編年図
図 50　ほ場整備事業前土塁断面模式図
図 51　土塁周辺の小地名図
図 52　土塁の復元図
図 53　城下町の復元図
図 54　富山県における城と城下町の分布図
図 55　越中国の中近世建物

表目次

表 1　発掘調査及び整理作業の工程表
表 2　地形と時代別の遺跡数
表 3　増山城と城下町の歴史年表
表 4　遺構一覧表 (1)
表 5　遺構一覧表 (2)
表 6　遺構一覧表 (3)
表 7　遺物観察表 (1)
表 8　遺物観察表 (2)
表 9　遺物観察表 (3)
表 10　遺物観察表 (4)
表 11　遺物観察表 (5)
表 12　測定試料及び処理
表 13　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
表 14　富山県小矢部市桜町遺跡における串田新式系土器に伴う ^{14}C 年代
表 15　縄文時代中期後半～後期前葉の土器型式と ^{14}C 年代との対応関係
表 16　縄文時代中期後半～後期前葉における土器型式と暦年較正年代との対応関係
表 17　測定試料及び処理
表 18　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
表 19　測定試料及び処理
表 20　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
表 21　産出花粉胞子一覧表
表 22　産出花粉胞子一覧表
表 23　樹種同定結果
表 24　樹種同定結果一覧表
表 25　分析対象一覧表
表 26　生漆の赤外吸収位置とその強度
表 27　赤色塗膜層の X 線分析結果 (massz%)
表 28　塗膜分析結果
表 29　分析試料とその詳細
表 30　各遺構の礫の岩石種
表 31　土器・陶磁器編年対応表
表 32　土塁規模の諸元
表 33　歴史年表
表 34　瀬戸美濃を軸とした増山城下町編年表

写真目次

写真 1　基準点測量
写真 2　包含層掘削・遺構検出
写真 3　遺構掘削
写真 4　遺構礫平面計測
写真 5　遺構断面計測
写真 6　遺物検討 (越前)
写真 7　遺物検討 (備前)
写真 8　SE213 から産出した花粉化石
写真 9　増山遺跡の井戸 (SE213) から産出した花粉化石
写真 10　木製品及び木材の光学顕微鏡写真 (1)
写真 11　木製品及び木材の光学顕微鏡写真 (2)
写真 12　木製品及び木材の光学顕微鏡写真 (3)
写真 13　漆器塗膜構造
写真 14　石材の実体顕微鏡写真

写真図版目次

写真図版 1　調査地遠景
写真図版 2　調査地近景
写真図版 3　基本層序
写真図版 4　整地層 (SX028)
写真図版 5　区画 1(SB380)
写真図版 6　区画 2(SB381・382)
写真図版 7　区画 3(SB383)
写真図版 8　区画 4(SB384)
写真図版 9　井戸 (SE002・039・046)
写真図版 10　井戸 (SE047・131)
写真図版 11　井戸 (SE131・133)
写真図版 12　井戸 (SE175・201)
写真図版 13　井戸 (SE213)
写真図版 14　井戸 (SE214)
写真図版 15　土坑 (SK001・173・212・216 ～ 218)
写真図版 16　樹木痕・暗渠
写真図版 17　出土遺物 (1)
写真図版 18　出土遺物 (2)
写真図版 19　出土遺物 (3)
写真図版 20　出土遺物 (4)

第１章　調査の経過

1　調査に至る経緯

（1）過去の調査

増山遺跡は昭和 50 ～ 52 年に試掘調査及び発掘調査が行われており[1]、平成 7 年に工事立会い、平成 18 年に試掘調査[2]が行われており、今回の調査は 2 回目の発掘調査となる (図 1)。

発掘調査以前

土塁東側の字下町までが城下町とされていた。

昭和 50 ～ 52 年調査

調査は第一期 (6 月 6 日～ 30 日)、第二期 (8 月 1 日～ 9 月 29 日) の 2 期に分けて行われた。

第一期は調査対象地約 61.6 ヘクタールを 1 ～ 6 区に分けて試掘調査を行った。試掘トレンチは No.1 地区に 1m × 1m を 5 箇所、No.2 地区に 1m × 3m を 4 箇所、No.3 地区に 1m × 3m を 10 ～ 15 箇所、No.4 地区に 1m × 3m を約 120 箇所、No.5 地区に 1m × 3m を 36 箇所、No.6 地区に 1m × 3m を 14 箇所設定し遺構・遺物の有無を確認した。その結果、段丘全体に中・近世の遺物が散布することを確認し、また縄文時代と古代の遺物も確認されたことから、縄文・古代・中世・近世の複合遺跡として「増山遺跡」と呼称された。

第二期は No.4 区において圃場整備により破壊される①～⑤地点の発掘調査が行われた。調査成果は、①地点 (土坑・溝)、②地点 (井戸・竪穴・土坑・柱穴)、③地点 (遺構なし)、④地点 (井戸・土坑・柱穴)、⑤地点 (井戸・竪穴・土坑・溝・柱穴) を検出し、また、遺物は陶磁器 (珠洲・肥前系陶磁器・越中瀬戸・瀬戸美濃)、土師器、土師質土器、石臼、煙管等の室町時代から江戸前期の遺物が出土した。この調査成果により、当地域が城下町として初めて明らかにされた。

1 砺波市教育委員会 1978『富山県砺波市梅檀野遺跡群予備調査概要』
2 富山県砺波市教育委員会　2008 『増山城跡総合調査報告書』

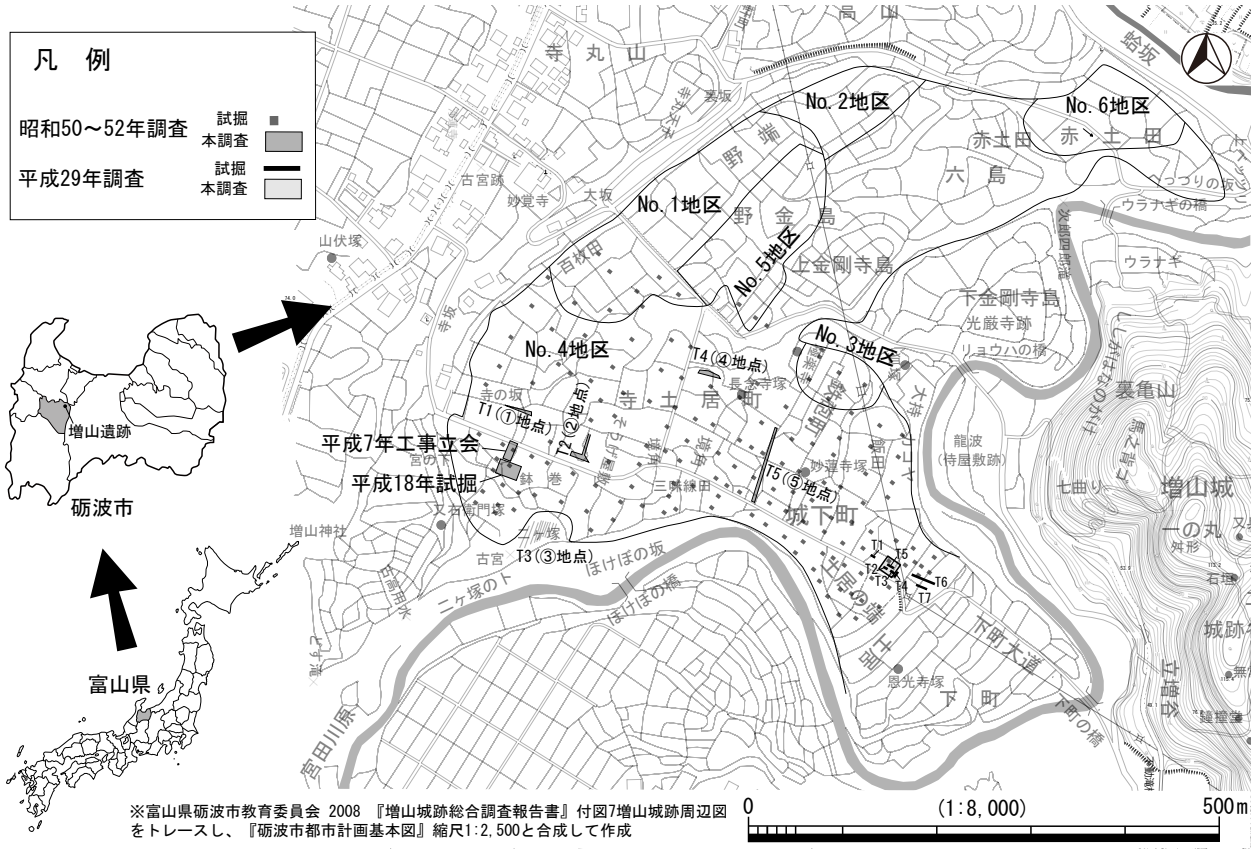


図１　過去の調査位置と今年度の調査位置図

(2) 今回の調査

北陸電力株式会社（以下、北電）は、平成 28 年 4 月 4 日に鉄塔建替を計画し、平成 28 年 5 月 13 日に増山遺跡内において鉄塔建替計画があることを砺波市教育委員会 (以下、市教委) に伝えた（図 2)。

これを受けて、市教委は富山県教育委員会（以下、県教委）に対して文化財保護法第 93 条申請を平成 28 年 5 月 16 日付で提出し、県教委は平成 28 年 5 月 19 日付で北電に通知した。

市教委は平成 28 年 6 月 13 日～ 15 日に試掘調査を行った。調査方法は、調査対象面積 1,339㎡の範囲内に試掘トレンチを 7 箇所 (T1 ～ T7) 設定した (図 2)。まずバックホウにより地山まで掘削し、人力により平面・断面の精査を行った後、堆積状況や遺構・遺物の有無を確認した。調査成果は以下のとおりである (図 3)。

T1　調査対象地の西側、本調査区外に位置する。

土層は耕作土 (Ⅰ層) と黒色層 (Ⅱ層) と地山 (Ⅳ層) からなる。遺物は黒色層から出土していることから、本調査のⅡ層に相当する。

遺構は土坑及び柱穴が 6 基検出された。

遺物は越中瀬戸内禿皿 1 点 (1)、土師器 1 点 (2) が出土した。

1 は越中瀬戸内禿皿の口縁部から底部の破片である。釉薬は鉄釉を口縁部から高台まで施釉されているが、一部高台内まで至る。高台接地面は露胎である。底部内面は釉薬を削り取り、磨かれたようになる。断面では胎土と鉄釉の間に白色の部分がみられる。高台は三角形に削り出され低い。その削り出しは体部中央まで施される。これにより体部中央に稜を持つ。口縁部は

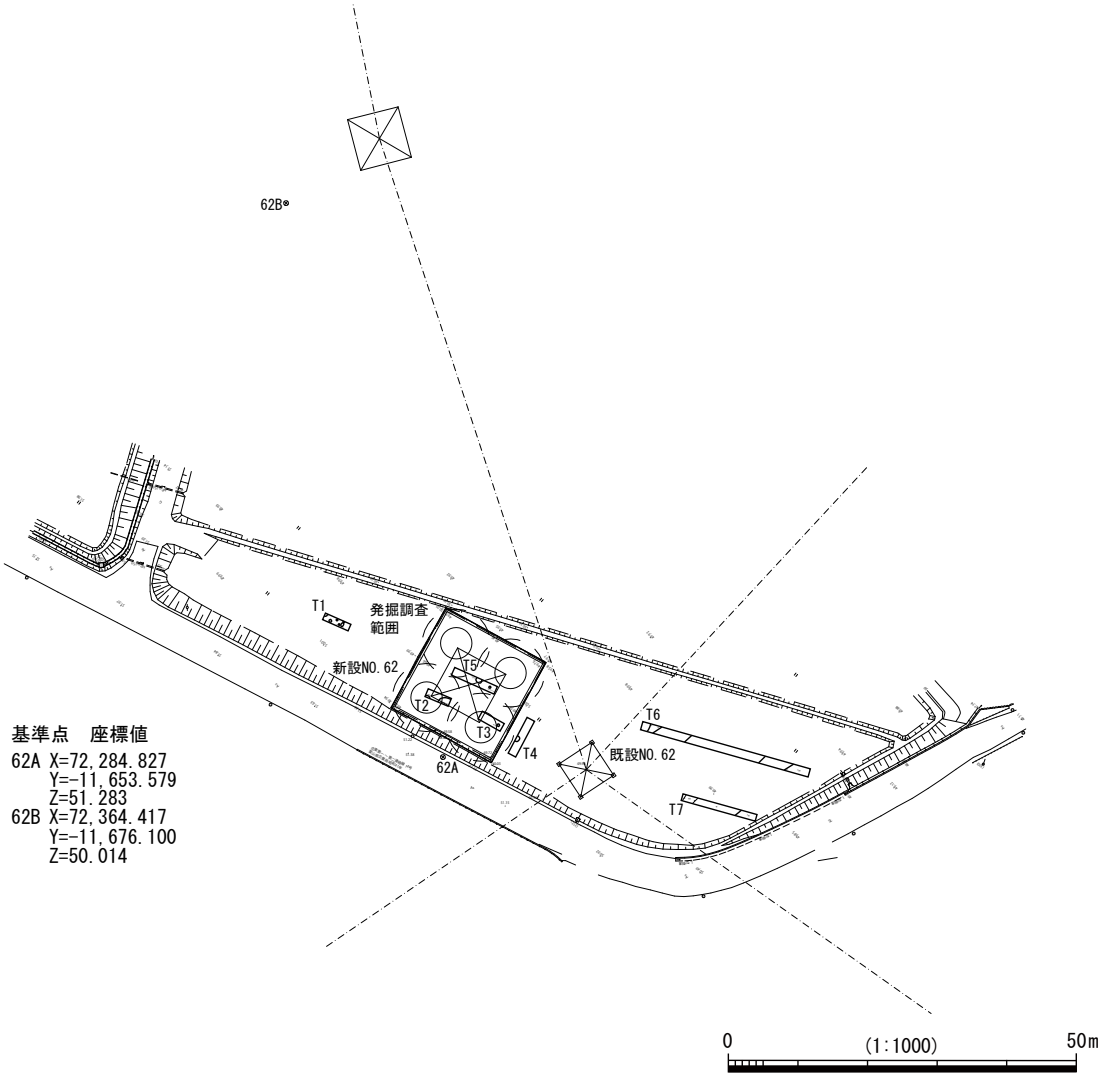
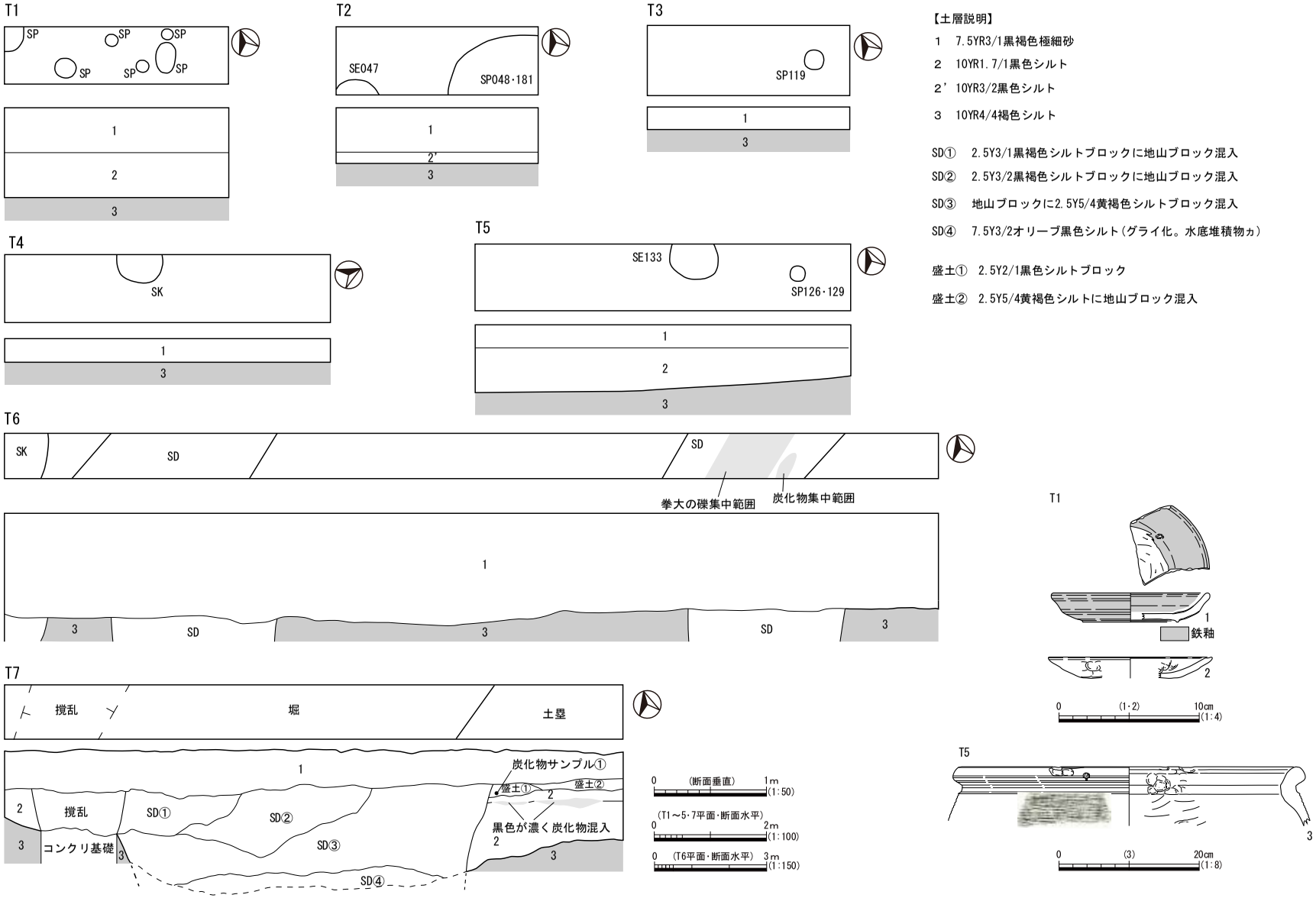


図２　鉄塔建替及び座標位置、試掘トレンチ位置図



【土層説明】

1　7.5YR3/1黒褐色極細砂

2　10YR1.7/1黒色シルト

2'　10YR3/2黒色シルト

3　10YR4/4褐色シルト

SD①　2.5Y3/1黒褐色シルトブロックに地山ブロック混入

SD②　2.5Y3/2黒褐色シルトブロックに地山ブロック混入

SD③　地山ブロックに2.5Y5/4黄褐色シルトブロック混入

SD④　7.5Y3/2オリーブ黒色シルト（グライ化。水底堆積物ヵ）

盛土①　2.5Y2/1黒色シルトブロック

盛土②　2.5Y5/4黄褐色シルトに地山ブロック混入

図３　試掘トレンチ　平面・断面図、出土遺物

外反し、端部は内外に稜を持ち三角形を呈する。時期は 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

２は灯明皿の口縁部から底部にかけての破片で、底部の大半は欠損している。口縁部から底部にかけて内湾する。成形は手づくねで、体部から底部は指押え後、口縁部に横ナデを施す。口縁部端部は上方へ弱く折り曲げ、内面に浅い溝が生じる。時期は 16 世紀後半と推定される。

T2　本調査区南西側に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と黒色層（Ⅲ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は出土遺物がないことから、本調査のⅢ層相当と考えられる。

遺構は２基検出され、本調査の SE047 と SP048･181 に相当する。

遺物は出土しなかった。

T3　本調査区南東側に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は１基検出され、本調査の SP119 に相当する。

遺物は出土しなかった。

T4　鉄塔と本調査区の間、本調査区外の東側に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は土坑または柱穴が１基検出された。

遺物は出土しなかった。

T5　本調査区の概ね中央に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と黒色層（Ⅱ・Ⅲ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は試掘調査時に分けていなかったが、本調査のⅡ層とⅢ層に相当する。

遺構は２基検出され、SE133 と SP129 または SP126 に相当する。

遺物は珠洲１点 ⑶ が出土した。

３は甕の口縁部から肩部の破片である。口縁部は隅丸方形を呈し、ヘラ状工具により整形される。口縁端部から口縁部内面にかけて指圧痕がみられ、これらの指圧痕は口縁部をくの字状に折り曲げる際の痕跡と考えられる。肩部には横方向の平行タタキを施し、頸部との間に稜ができる。頸部から肩部内面は横方向のナデを施す。口縁端部の丸い孔は焼成後のもので、用途は不明である。時期は 14 ～ 15 世紀と推定される。

その他、礫が出土しているが、SE133 のものと考えられる。

T6　本調査区外、鉄塔より北東側に位置する。約

土層は耕作土（Ⅰ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は確認されなかった。

遺構は溝２基と土坑または柱穴１基が検出された。溝は概ね平行し、幅も概ね同様である。二重の堀とも考えられ、土塁に伴う空堀の可能性もある。また、東側の溝は埋土内に拳大の礫が充填され、炭化物集中範囲も確認される。現存する土塁との位置関係や２条の溝の間に土塁の盛土層が認められないことから、土塁は２条の溝の東側に存在した可能性がある。

遺物は出土しなかった。

T7　本調査区外、鉄塔より南東側に位置する。

土層は耕作土（Ⅰ層）と黒色層（Ⅱ層）と地山（Ⅳ層）からなる。黒色層は部分的にみられ、当初は旧表土と考えていたが、不明である。

遺構は２基検出され、堀・土塁と推測される。堀の西端は撹乱を受けているため不明であるが、概ね撹乱の西端と一致すると考えられる。堀の埋土は１～３は斑土状で、短時間に人為的に埋めた可能性が高い。土塁の盛土は基底部のみ残存する。埋土１の中の炭化物について放射性炭素年代測定を行っている。詳細は第４章で説明する。結果は縄文中期と予想外であったが、周辺に縄文中期の遺跡が存在することを示唆する。

遺物は出土しなかった。

市教委は、試掘調査の結果、調査地において遺構・遺物が遺存していることを確認したので、本発掘調査が必要であることを北電に説明した。

北電はこれを受けて民間の調査会社を選定し、平成 29 年３月 10 日に株式会社上智（以下、上智）と契約を結ぶこととなった。

21 日、北電と市教委と上智の３者で協定を締結した。同日、市教委は文化財保護法第 99 条申請を３月 21 日付で富山県教育委員会教育長へ提出し、受理された。

また、同日、北電と上智で、地元関係者（自治会長・増山を守る会・耕作者等）への挨拶を行った。

発掘調査は４月３日から測量や準備等を行うこととなった。

2　調査・整理体制

試掘調査・発掘調査・整理作業・報告書作成期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次の通りである。

試掘調査

調査期間 : 平成 28 年（2016）6 月 13 ～ 15 日
調査対象面積 :1,339㎡
調査面積：74.88㎡
調査担当者 : 砺波市教育委員会　野原大輔

本発掘調査

調査期間 : 平成 29 年（2017）4 月 3 日～ 6 月 19 日
調査面積 :485.70㎡（1 面 :259.04㎡　2 面 :226.66㎡）
発注者 : 北陸電力株式会社富山支店
　　総務部用地チーム
担　当　者：泉野慎一（統括課長）
　　中田哲治（副課長）
監理者 : 砺波市教育委員会
監理担当者：野原大輔
受注者 : 株式会社上智
統括責任者：伊藤富男
調査担当者 : 片山博道
調査補助員 : 石川貴之
測　量　員：前田雅成、野村寿子
発掘作業員 : 伊藤恵美子、上坂清三、工藤勲
　　大田久美子、斉木和佳、常本啓文
　　得地登、得能薫、中田和雄
　　西村敏、松浦華織、湯浅とみこ
　　林達雄 (バックホウ運転手兼務)

整理作業・報告書作成・印刷・製本・発送

整理期間 : 平成 29 年 6 月 20 日
　　～平成 30 年 3 月 30 日
発注者 : 北陸電力株式会社富山支店
　　総務部用地チーム
担　当　者：泉野慎一（統括課長）
　　中田哲治（副課長）
監理者 : 砺波市教育委員会
監理担当者：野原大輔
受注者 : 株式会社上智
統括責任者：伊藤富男
整理担当者 : 片山博道
整理補助員 : 野村寿子
整理作業員 : 斉木和佳、片山陽子、松浦華織

3　調査・整理の方法と経過

(1) 発掘調査（表 1 ）

4 月 4 日、北電が送電線の用地測量と基準点測量、と鉄塔用地範囲 (調査区) の範囲測量を行った。

4 月 12 日にプレハブ・倉庫・仮設トイレ・資材・バックホウ・発掘道具等を搬入及び設置した。また、バリケード・調査看板の設置も行った。

現地打合せを行い、調査区範囲を確認した。打合せは概ね隔週ごとに行うこととなった。

発掘調査は 4 月 13 日～ 6 月 16 日にかけて行った。

4 月 13・14 日にバックホウ (0.25㎥相当、平爪、ゴムキャタ) を 1 台使用して表土掘削を行った。

表土掘削　ここでいう表土とは耕作土と床土を指す。表土厚は 15 ～ 20㎝程度と薄く、調査区南東部では黄褐色の地山を直に確認した。よって、表土掘削は表土のみの 15 ～ 20㎝で止めた。黄褐色の地山範囲は試掘調査で想定したとおり、調査区南東部で確認し、この他の範囲では黒色または斑土層を検出面とした。

表土が 15 ～ 20㎝と薄いこともあり、検出面では現

写真 1　基準点測量

代の耕作痕の影響を強く受けていた。特に調査区南側では現市道に沿う東西方向に大きく撹乱を受けていた。

13 日から作業員による人力掘削を開始した。新規入場者教育後、重機掘削が終わったところから調査区の壁面整形と断面観察・排水を兼ねた側溝を掘削した。

人力掘削　調査区壁面の整形及び撹乱等を剣スコップ・角スコップ等の大型道具、遺構を移植ゴテ等の小型道具を使用した。当初包含層と考えていたⅡ層は調査を進めていく中で、整地層と判断し、平面と断面を確認しつつ、層ごとにスコップやジョレンで薄くすきとりをを行った。遺構検出はジョレン及び両刃鎌（ガリ）による精査を行った（写真２・3）。

排　土　一輪車によって運搬し、調査区西側に仮置きした。

排水処理　雨水及び湧水を 100V2 吋水中ポンプによって近くの排水溝に排水し、その際濁水を直接溝へ排水せず、沈殿槽に一旦溜めた水を排水した。

4 月 15 日～ 24 日にかけて遺構検出を行った。検出面は耕作痕の影響を強く受けていることと、調査区北西部では整地層が検出面となること、また遺構が複数重複しているため、遺構検出が困難であった。24 日でも完全に遺構検出を終えなかったが、遺構を 2㎝程度段差下げし、遺構を確定していった。

段差下げ　撹乱が深くまで及んでいるため、撹乱を除去することとと、遺構のほとんどが柱穴と想定されることから、平面で柱痕を検出することを目的とする。

24 日以降は段差下げ、半裁、測量・計測、完掘を行った。

測量・計測　平面図・遺物の地点上げ・断面図のセクションポイントをトータルステーション、断面図を手測りで行った。調査区の断面図は 4 面すべて作成した（写真 4・5）。

遺構番号・遺物取り上げ番号　通し番号を付けた。なお、遺物取り上げ番号は頭に d を付け、トータルステーションで測量して座標を持たせて取り上げている。この場合の遺物は特に重要と考えられるものに限る。

遺構掘削は 30 日まで行った。31 日の午前中に掃除と片付けを行い、正午に空中写真撮影（以下、空撮）を行った。空撮はラジオコントロールヘリコプター（以下、RC ヘリ）を使用した。撮影後、発掘道具の後片付けを行った。

撮　影　遺構と遺物ともにデジタル一眼レフカメラ 2450 万画素（以下、デジカメ）を使用した。調査区の全景撮影は遺構の完掘後に行い、RC ヘリを使用し空撮（デジカメ 3600 万画素）を行った。

空撮後、調査スタッフ全員で増山城を登り、一の丸から調査区を撮影した。また、建物の柱を想定して柱穴のそばに作業員が立ち、撮影を行った。

下層調査は 6 月 2 日から開始し、黒色層の掘削を行った。黒色層は調査区中央から西側が最も深く、40 ～ 50㎝を測る。黒色層は厚いので、3 回に分けて掘削した。掘削途中で上層の遺構を検出した。

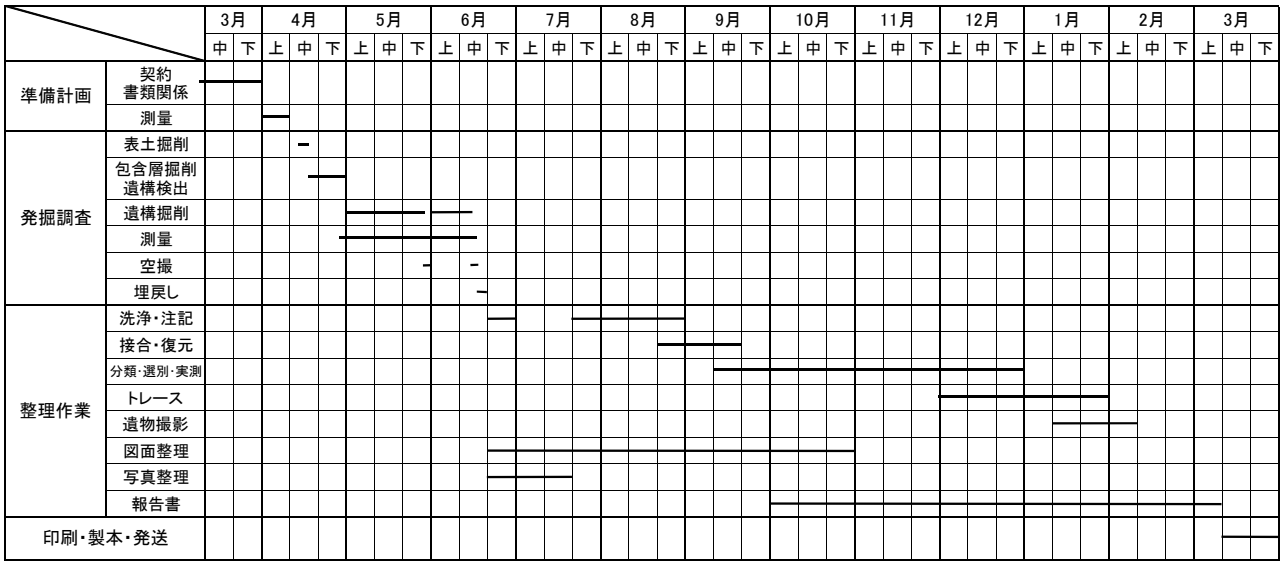
黒色層は古代または縄文時代の包含層と想定していたが、遺物は含まれていなかった。

9 日、黒色層を完掘した。12 日に地山面からは下層の遺構が検出されなかったが、樹木痕が調査区北西部と北東部の 2 箇所で重複して検出された。

写真２　包含層掘削・遺構検出

写真３　遺構掘削

表１　発掘調査及び整理作業の工程表



13 日、樹木痕の断ち割り調査を行い、断面の図面作成と撮影を行った。

14 日、3 者による現地掘削完了確認を行った。

15 日、午前中に掃除・片付けを行い、正午に空撮を行った。午後からはバックホウ (0.45㎥相当、平爪、ゴムキャタ)1 台を搬入し、埋戻しを行った。埋戻しは 16 日中に完了した。

16 日、プレハブ、倉庫、トイレ、資材、発掘道具等を搬出した。

19 日、市教委と北電による完了検査を行った。その後、市教委から北電に調査地の引き渡しが行われ、現地調査が完了した。

(2) 整理作業（表 1）

整理作業は平成 29 年 6 月 20 日～平成 30 年 3 月 30 日にかけて上智の本社及び富山支店（文化財整理室）で行った。

洗浄・注記　豚毛ブラシなどを使用し、遺物を傷つけないように行った。作業は発掘調査の雨天時と 6 月 30 日までに完了した。

注記はポスターカラー (白・黒) を使用し、注記後、ニスによって保護を行った。なお、注記は同じ袋に入っているもので接合できるものがある場合、各破片に注記せず、接合したものに 1 箇所の注記を行っている。作業は 7 月 18 日～ 28 日まで行った。

写真４　遺構礫平面計測

写真５　遺構断面計測

写真６　遺物検討 (越前)

写真７　遺物検討 (備前)

接合・復元　復元は石膏を使用し、実測可能な段階に留めた。作業は７月下旬～９月中旬まで行った。

分類・選別・実測　遺物を焼物、石製品、木製品、金属製品、骨の種類に分け、次に種類ごとに遺構内と遺構外、さらに遺構内は遺構毎に、遺構外は層位ごとに分類した。最後に遺物台帳を作成した。実測対象遺物を選別し、観察表を作成した。実測は手測りによって行った。分類・選別は９月中旬まで、実測は９月中旬～ 12 月下旬まで行った。

トレース　実測図をフォトショップ CS6(adobe) によってスキャニング・補正後、イラストレータ CS6(adobe) でデジタルトレースを行った。作業は 12 月下旬～ 1 月下旬まで行った。

図面・写真整理　平面図は発掘調査時にその都度 CAD ソフトで編集を行った。合わせて、遺構番号の整理を行い、遺構台帳を作成した。

断面図は手図面を整理し、図面台帳にまとめた。平面図と断面図で整合させ、修正を行った後、手図面をスキャンしデジタル化した。その後、フォトショップでデジタル画像を補正した。その後、イラストレータに変換し、トレースを行った。作業は 11 月末まで行った。

写真はデジタル画像を日付ごとにフォルダに分け、項目ごとにフォルダに再整理した。その後、写真台帳と写真アルバムを作成した。

遺物撮影　１月中旬～２月中旬に、上智富山支店において行った。

執筆・編集　報告書の編集は、インデザイン CS6(adobe) で行った。12 月中に前工程で作成した遺構図・遺物実測図・写真を編集し、遺構図版・写真図版を作成した。

報告書の編集と本文執筆は順次行っており、２月末までに校了とした。その間、北電・市教委と校正を３回程度行った。

印刷・製本・発送　３月から 300 部の印刷・製本を行い、３月 20 日に本書を発行した。300 部中 200 部を全国の関係機関へ発送した。

遺物検討　越中瀬戸と瀬戸美濃の判別のため、８月 17 日に三浦知徳氏 (上市町)、9 月 13 日に藤澤良祐氏 (愛知学院大学教授) よりご教示を頂いた。

越前については、10 月 11 日に木村孝一郎氏 (一乗谷朝倉氏遺跡資料館) よりご教示頂いた (写真 6)。また、木村氏から出土遺物の中に備前が 1 点含まれていることとご指摘を頂いた。

備前については、10 月 18 日に森内修造氏から石井啓氏 (備前市埋蔵文化財管理センター) を紹介して頂いた。石井氏から備前系窯 (加賀・作見窯、舞鶴・安久窯、豊岡・山本窯、丹波・大部谷窯、柳井・獄山地区) についてご教示頂き、北陸では加賀・作見窯の可能性についてご指摘を頂いた。

11 月 21 日、橋本正博氏 (小松市立博物館) のご協力の下、加賀・作見窯の資料を実見させて頂いた (写真 7)。

第２章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

増山遺跡は、富山県砺波市増山地内に所在し（図４）、芹谷野段丘上を北流する和田川左岸に立地する。標高は約 49.7m 前後である。

和田川は牛岳北麓の井栗谷と大瀬谷を水源として深くえぐり蛇行しながら北流する。両河川は丘陵から段丘に出た天狗山北麓の字芹谷・池原・頼成新付近で合流し、ここからは丘陵と段丘の境を大きく蛇行する。合流地点には延喜式内社に比定される藪波神社が位置する。本遺跡は、和田川が合流して段丘上を大きく蛇行して形成された舌状の先端部に立地する。

本遺跡の立地する段丘面は西側に段丘崖があり、段丘下は砺波平野が広がる。一方東側は和田川が形成した段丘崖があり、向い側の丘陵上には増山城が立地する。和田川は段丘と丘陵の境を大きく蛇行し、櫛田神社を横切って射水平野へ北流する。現在は大門大橋付近で庄川に合流して富山湾に注いでいるが、元来庄川は高新大橋付近から北西方向に流れ、小矢部川と合流して富山湾に注いでいたところを、明治期に高新大橋付近で北方向に流れを変えて現在に至っている。また、現在の富山新港は放生津潟を埋め立て、砂州を新湊大橋部分で分断しているため、現在は当時の風景と大きく異なっている。

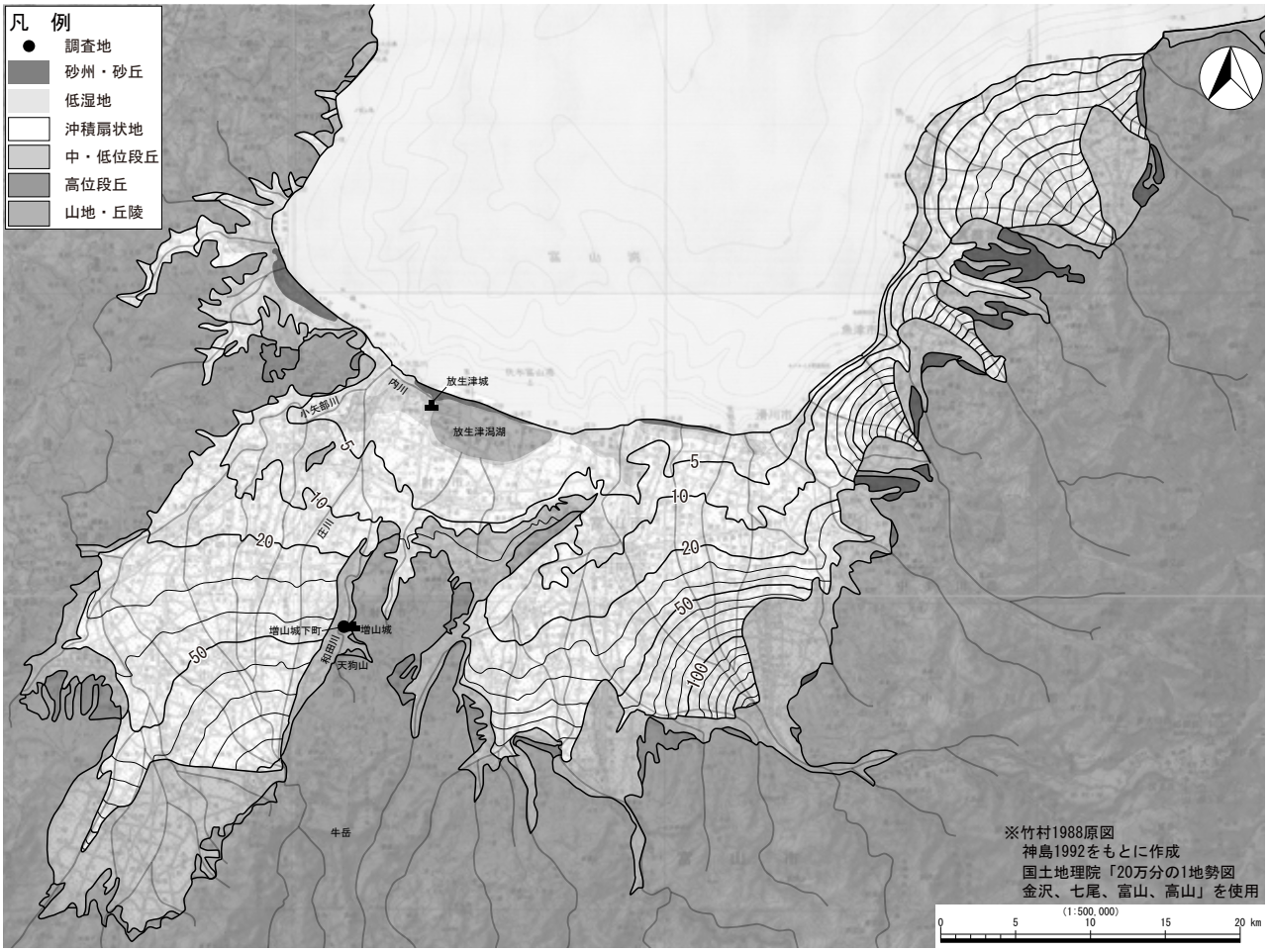


図４　地形・地質図

伝承では増山城麓の和田川に船着場があり、神保氏が和田川を増山城から放生津城との舟運としていたという[1]。当時の風景を復元すると、図５のとおりとなる。

以上から、増山城及び城下町は丘陵と段丘と段丘崖を利用した要害の地である。

本遺跡の立地する段丘は砂岩を基盤層とし、本調査区では１面の検出面から約 50㎝下がった地点までを砂質シルト、約 50 ～ 130㎝地点を粘質シルト、130㎝以下を堅緻なシルト (砂岩が風化した層ヵ)、間に砂礫層が堆積する。詳細は第３章において説明する。

表２　地形と時代別の遺跡数

時代	段丘	丘陵	扇状地
旧石器	1	4	0
縄文	19	12	8
弥生	0	1	1
古墳	2	0	2
古代	15	48	20
中世	15	15	30
近世	11	3	3

２　歴史的環境

増山遺跡は縄文時代・古代・中世・近世の複合遺跡として周知されている。縄文時代と古代については集落の存在が明らかにされていないが、古代では須恵器の窯跡が北西部の斜面と増山城のある丘陵に分布する。中世から近世については亀山城を含めた増山城に関連する遺跡である。今回の調査は城下町の一端を明らかにできた。

その中で、本節では芹谷野段丘、丘陵、庄川右岸扇状地の地形ごとの遺跡について旧石器時代から近世について概観し (図５・表２)、また、増山城及び城下町については歴史的背景 (表３) と合わせてみていくこととする。

図５は庄川右岸から丘陵までの遺跡分布図である。以下では旧石器時代から順に説明する。

旧石器時代　丘陵 (86･87･137) と段丘 (4) の４遺跡確認され、扇状地では現在のところ未確認である。

縄文時代　丘陵 12 遺跡、段丘 19 遺跡、扇状地８遺跡の全域に分布し、合計 39 遺跡確認されている。

弥生時代　丘陵 (2) と扇状地 (66) の２遺跡のみ確認され、丘陵では現在のところ未確認である。

古墳時代　段丘 (5･38) と扇状地 (56･57) の４遺跡のみ確認され、段丘では現在のところ未確認である。

古　代　遺跡の数は古代以降になると、大きく増加し、古代では 83 遺跡と最も多くなる。それには扇状地に荘園の出現と、それに伴って須恵器と鉄製品の窯跡が営まれたことと関係する。増山遺跡内には、亀田窯 (6) と妙覚寺坂窯 (8) が分布し、増山城域やその周辺において多数の須恵器窯が確認されている (増山支群)[2]。このことから、増山遺跡には窯を営んだ工人が存在した可能性も推察される。また、増山支群の南には、福山支群が分布する。安川天皇窯 (73)[3] と福山窯 (34)[4] は発掘調査が行われ、８世紀中葉と推定される。福山支群は概ね８世紀代、増山支群は概ね９世紀代であることから、福山支群から増山支群へ窯が移行したと推察される。このことは扇状地の集落が徳万遺跡 (57) と徳万頼成遺跡 (56) を境に南北に２分されることとも一致する。扇状地の集落は荘園の中心に当たり管理していたと考えられ、段丘と丘陵は工人集落や生産地となっていたのであろう。

中　世　遺跡数は合計 60 遺跡で、古代に比べると減少するが、扇状地において半数の遺跡が分布する。その中で、城 (2･135) と塚 (13･20･24･25･31･48･63･67･72) は室町から戦国期の遺跡として注目される。増山城及び城下町の歴史については表３にまとめた。表３では増山周辺が何度も戦場になっていることが分かり、その痕跡の一つが塚となって現在に残る。

表３では増山城及び城下町について主要な出来事を段階にまとめた。

1　㈲平凡社地方資料センター　1994 『富山県の地名』日本歴史地名大系第 16 巻 （株）平凡社

2　片山博道　2015 「越中における須恵器生産の研究」『大境』第 34 号　富山考古学会

3　砺波市教育委員会　2005 『安川天皇窯跡発掘調査報告』

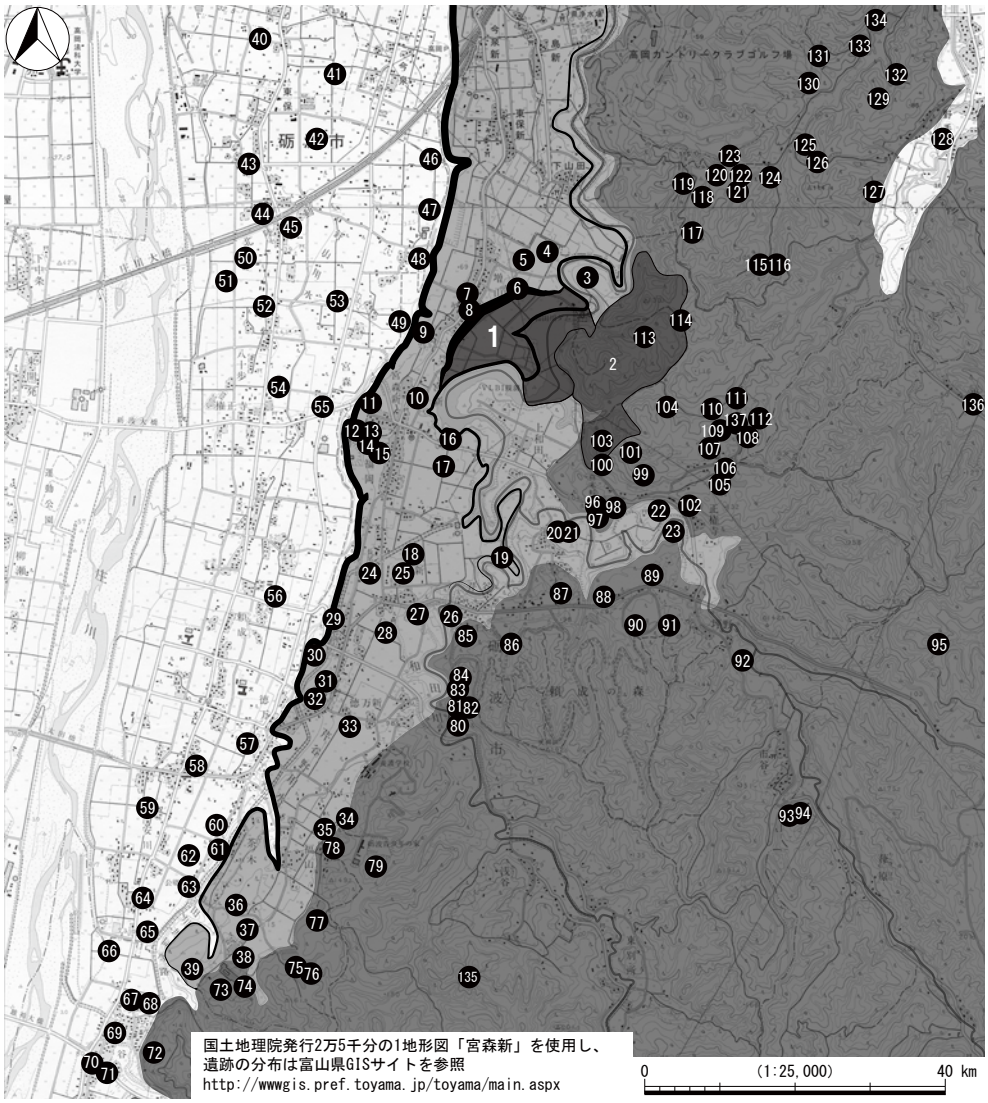
4　砺波市編纂委員会・砺波市文化財審議委員会　1962 『砺波市福山〈徳万赤坂〉須恵器窯発掘調査報告』

【段丘】

1　増山遺跡　縄前･中･後、奈、平、中、近
3　増山裏亀山遺跡　中
4　高沢島Ⅰ･Ⅱ遺跡　旧石、縄前･中、奈、近
5　高沢島Ⅲ遺跡　縄、古墳、奈、近
6　増山亀田窯跡　古代、近
7　増山西遺跡　古代、中、近
8　増山妙覚寺坂窯跡　古代
9　宮森新北島Ⅱ遺跡　縄、中
10　宮新遺跡　古代
11　宮森新北島Ⅰ遺跡　縄前･中･晩、奈、平、中、近
12　大谷島遺跡　縄中･晩、古代
13　光明真言塚　中
14　厳照寺遺跡　縄中、平安
15　厳照寺境内遺跡　中
16　上和田遺跡　縄中･晩、近
17　宮森新天池遺跡　縄
18　頼成新遺跡　縄
19　芹谷北稔寺　縄中
20　狐塚　中
21　狐塚遺跡　中
22　正権寺遺跡　古代
23　正権寺南遺跡 古代
24　長尾為景塚　中
25　長尾能景塚　中
26　芹谷下大門遺跡　中、近
27　栴檀野神社東遺跡　縄
28　三合新芹谷遺跡　縄、中、近
29　徳万新遺跡　古代
30　三合新遺跡　縄、近
31　庚申塚　近
32　三合遺跡　縄
33　三合宗九郎島遺跡　古代、中
35　福山遺跡　古代、中
36　安川天皇D遺跡　縄
37　安川天皇A遺跡　縄
38　安川天皇B遺跡　縄、古墳
39　安川天皇C遺跡　縄

【丘陵】

2　増山城跡　縄、弥終、古代、中、近
34　福山窯跡　古代
72　三谷鉾塚　中
73　安川天皇窯跡　奈良
74　安川天皇Ⅰ遺跡　古代
75　福山大堤窯跡　古代
76　福山大堤遺跡　縄
77　福山小堤窯跡　古代
78　福山No.1遺跡　縄
79　福山No.2遺跡　中
80　生玉明神遺跡　中
81　生玉明神北遺跡　中
82　金毘羅山遺跡　中
83　日宮南遺跡　中
84　日宮跡　中
85　千光寺遺跡　中、近
86　芹谷遺跡　旧石、縄、古代
87　池原遺跡　旧石、縄、古代
88　頼成A遺跡　縄
89　頼成B遺跡　縄、古代、中
90　頼成D遺跡 旧石
91　頼成C遺跡 縄
92　坪野遺跡　中
93　葎原丸山遺跡　平安
94　葎原丸山塚　室町
95　吉谷遺跡　縄晩、近
96　須蘇末峠A遺跡　平安
97　須蘇末峠遺跡　古代
98　池原向島遺跡　平安
99　金クソ山遺跡　古代
100　金クソ山西遺跡 古代
101　増山赤坂窯跡　古代
102　正権寺前山遺跡 古代
103　増山団子寺窯跡 古代
104　増山笹山窯跡　古代
105　正権寺後島窯跡 古代
106　正権寺後島遺跡 古代
107　増山十村山遺跡 縄、古代
108　小丸山窯跡群　平安
109　増山外貝喰山窯跡　古代
110　増山焼山遺跡　古代
111　増山外法蓮山窯跡　古代
112　東笹鎌野窯跡群 平安
113　増山池ノ平窯跡 古代
114　増山雀坂山遺跡 古代
115　西谷No.10遺跡　古代
116　西谷No.11遺跡　古代
117　西谷No.9遺跡　古代
118　西谷No.8遺跡　古代
119　西谷No.7遺跡　古代
120　西谷No.5遺跡　古代
121　西谷No.6遺跡　古代
122　西谷窯跡　平安
123　西谷No.4遺跡　古代
124　西谷No.3遺跡　古代
125　西谷A窯跡　古代
126　西谷No.2遺跡　古代
127　五官野遺跡　中
128　水上谷遺跡　縄中
129　立神A遺跡　古代
130　立神上堤C遺跡　古代
131　立神窯跡　古代
132　立神B遺跡　古代
133　立神上堤A遺跡　古代
134　立神上堤B遺跡　古代
135　安川城跡　中世
136　平等前田遺跡　奈、平、鎌倉、室町
137　増山外貝喰山遺跡　旧石



【扇状地】

40　東保北遺跡　縄、古代、中
41　東保田中遺跡　古代、中
42　東保田中遺跡　縄、古代、中
43　館の土居跡　中
44　東保高池遺跡　古代、中、近
45　東保遺跡　縄、平安、中、近
46　東保石坂遺跡　縄、古代、中
47　東保石坂南遺跡　古代
48　行者塚　中
49　宮森廃寺跡　古代、鎌倉、室町
50　東保般若堂跡　中
51　高坪遺跡　古代、中
52　八十歩遺跡　縄、中、近
53　宮森道川島遺跡 古代、中
54　宮森西島遺跡　古代、中
55　宮森遺跡　縄、中
56　徳万頼成遺跡
　縄、古墳、古代、中世
57　徳万遺跡
　縄、古墳、古代、中世
58　安川二目遺跡　中
59　安川宮村遺跡　古代、中
60　安川山下遺跡　古代
61　薬勝寺遺跡　古代、中
62　安川正守遺跡　古代、中
63　公卿九人塚　中
64　安川野武士遺跡　古代、中
65　安川野武士A遺跡　古代、中
66　三谷北遺跡　弥、古代、中
67　西行塚　中
68　三谷東遺跡　中
69　三谷遺跡　中
70　三谷上野塚　中
71　三谷上野遺跡　中

図５　調査地周辺の遺跡分布図

表３　増山城と城下町の歴史年表

段階	西暦	和暦	出来事	城主	城下町
1	1362	貞治元	和田合戦。越中守護桃井直常と幕府方斯波氏との3度にわたる合戦。斯波氏が桃井氏から和田城(亀山城ヵ)奪う。	斯波氏	
2	1506	永正三	神保長誠･慶宗、放生津城の支城として和田城を再構築。 芹谷合戦。神保慶宗、一向一揆方と敵対。この時、守護方を支援した越後守護代長尾能景討死。	神保氏	
	1520	永正十七	新庄城の戦い。神保慶宗、長尾為景に敗れ、自害。		
3				不明	
4	1543	天文十二	神保長職、神保氏を再興し、富山城を築城。 同じ頃、増山城は富山城の支城として築城。他に、守山城、火宮城築城。	神保氏	
	1559	永禄二	長尾景虎、神保長職の富山城を攻撃。 長職は富山城を捨て、増山城へ逃走。 景虎は増山城を攻撃し、長職は逃走。		
	1562	永禄五	景虎の越後勢は長職の呉福山城を攻撃し、長職が降伏。 長職、上杉方となり、増山城を本城とする。		
	1568	永禄十一	長職、一向一揆と敵対。		
5	1572	元亀三	長職没す。増山城は一向一揆方によって固められる。	一向宗	
6	1576	天正四	上杉謙信、一向一揆方の増山城を攻略。吉江宗信らが配置される。これより、上杉氏の支城となる。	上杉氏	
	1578	天正六	謙信没す。		
	1581	天正九	上杉方、増山城を焼き払い、退去。		
7	1583	天正十一	佐々成政、越中平定。増山城を整備･拡充。 孫次山砦等城郭最大。	佐々氏	土塁構築ヵ
8	1585	天正十三	成政、羽柴秀吉に降伏。 増山城、前田利家の娘婿中川光重が入城。	前田氏	城下町整備･拡充ヵ。 寺院･町屋
	1611	慶長十六	光重、退老。		
	1614	慶長十九	光重没す。増山城廃城ヵ。		城下町の寺院、富山城下町へ移転。
9	1615	元和元	一国一城令。増山城廃城。		増山城廃城後、増山城と城下町一帯は増山村となる。
10	1663	寛文三	芹谷野用水が開通。用水の両側に家が並ぶ。 増山村民は用水沿いへ移動。		水田
	1664	寛文四	芹谷野用水沿いの街道に増山新村が村立。		
	1968	昭和四三	和田川にダムと庄東第二発電所建設。 城下町の一部がダム湖底に沈む。		

※砺波市教育委員会　2009『新「砺波市」誕生5周年記念事業　増山城跡フォーラム　よみがえれ戦国増山城』

１～３段階は増山城と直接関係するか確たる根拠はなく、不明瞭な部分が多い時期である。

増山城は４段階以降明確となり、1543(天文十二)年、神保長職が富山城の支城として増山城を築城する。これ以降、４段階の城主は神保氏、５段階が一向宗、６段階が上杉氏、７段階が佐々氏、８段階が前田氏で、9･10期には廃城となる。このように、増山城は約50年間の短期間にめまぐるしく城主が入れ替わる。城下町がこの中で、いつ形成されたのかは不明である。

増山城の歴史は神保氏・一向宗・上杉氏・佐々氏・前田氏と深く関わっており、県内においても増山城と同様の歴史の中で動いており、それらをまとめると以下のとおりである。①地侍同士の戦い、②一向宗との戦い、③上杉氏との戦い、④佐々氏との戦い、⑤前田氏との戦いの構図は県内の大きな流れである。

近　世　段丘11遺跡、丘陵３遺跡、扇状地３遺跡の合計17遺跡と大幅に減少するが、近世は遺跡が現代につながっていることが多く、このため少なくなっていると考えられる。

増山城及び城下町では1615(元和元)年の一国一城令まで、前田氏の城として中川光重氏が居城していた。廃城後は増山村となり、1663(寛文3)年に芹谷野用水が貫通すると、増山村は用水沿いに移動し、増山新村が村立され、現在の風景となる。

第３章　調査の成果

1　調査区及びグリッドの設定

調査区は鉄塔建替予定地 259.04㎡と基準点の座標データを北電から提供を受け、このデータを基に調査区の設定を行った。調査区は基準点の 62A と 62B の 2 点を使用した (図 2)。これら 2 点の他に調査の際使用する仮 BM1 点を旧鉄塔の下に設置した。これは遺構の断面図を作成する際の水準点である。

グリッドは、増山遺跡全体に対して大・中・小グリッドをそれぞれ設定した（図 6)。座標は X･Y で、X 座標は南北方向に南から北へ、Y 座標は東西方向に西から東へ数値が大きくなる。

大グリッドは 100m 四方を 1 区画とした。中グリッドは大グリッドを 100 分割し、10m 四方を 1 区画とした。小グリッドは中グリッドを 4 分割し、5m 四方を 1 区画とした。

本調査では、小グリッドを使用し、X 軸をアルファベット、Y 軸を算用数字で表示した。グリッドの基準は北西端とし、X 軸は北から南へ A ～ F、Y 軸は西から東へ 1 ～ 6 とした。グリッドは X を優先し、XY で表示する (例 :A-1)。

本調査では、任意のグリッドを使用したが、今後の調査を想定し、大グリッドと中グリッドの設定を行った。また、増山城及び城下町の調査が進み、城下町域が明確になることを期待する。

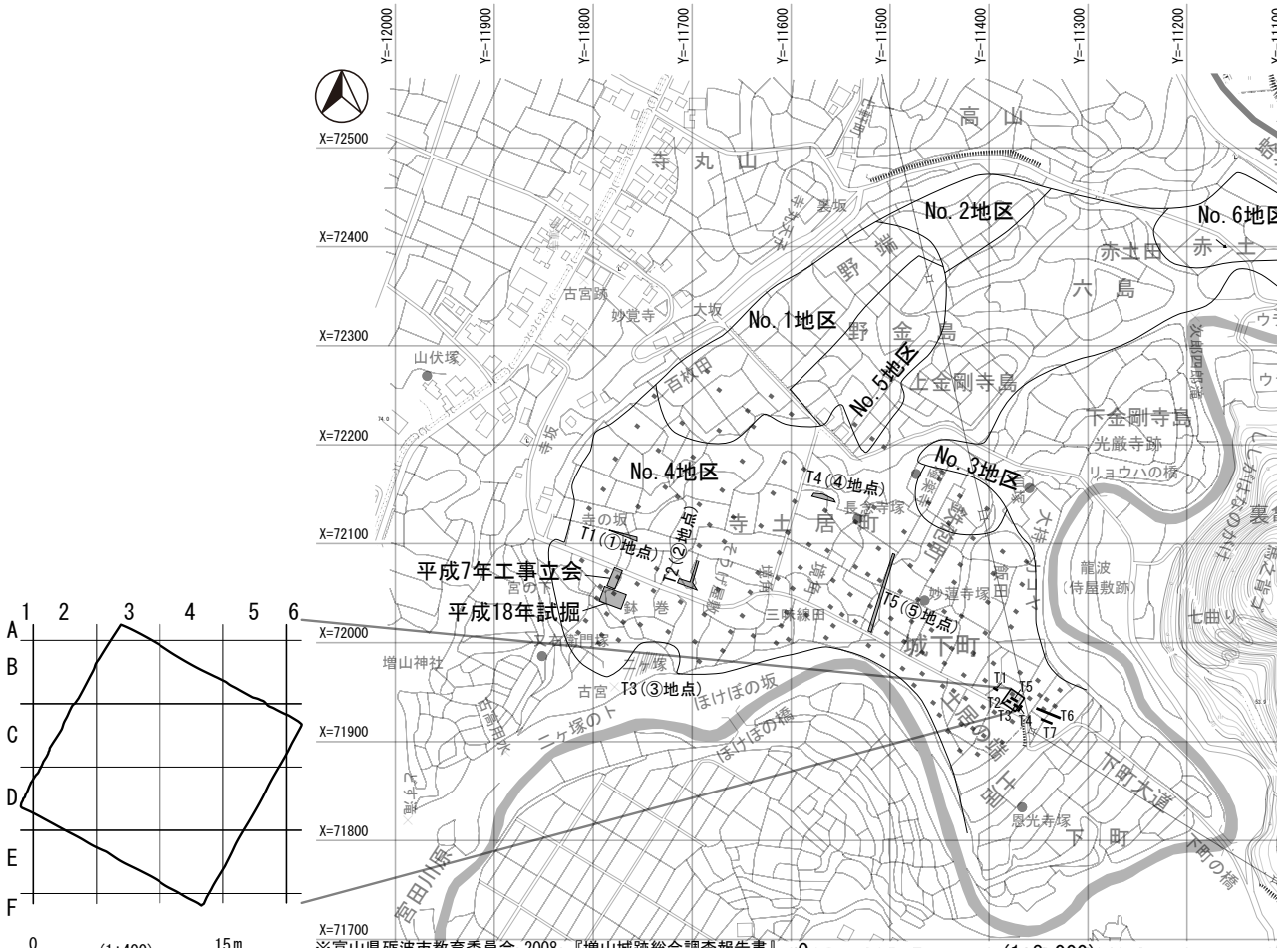


図６　調査区及びグリッド設定図

２　基本層序

基本層序は図７・８、写真図版３に示したとおり、大きく４層に分けることができる。図７には基本層序の概念図と土層説明を記した。土層説明は図８の調査区土層断面図に対応する。

Ⅰ層　昭和50年代の圃場整備以降の耕作土と床土。耕作土をⅠａ層、床土をⅠｂ層と細分できる。平均厚は、Ⅰａ層が15㎝、Ⅰｂ層が5cmである。

Ⅱ層　城下町に伴う整地層。Ⅱａ～Ⅱｌ層の12層に細分できる。黒褐色シルトを主体とし、粗粒砂・黄褐色粘質シルトブロック・炭化物粒・土器片等が多量混入する。整地層は場所によって異なり、併行関係を求めるのは困難を要するが、遺構の検出面を手掛かりとして４面確認でき、整地層を１～４の４つに分けた。

整地層１はⅡａ･Ⅱｂ層である。耕作の影響を強く受け、また圃場整備により削平を受けている。整地層上面からの遺構は確認できず、17世紀中葉以降に堆積したと推測される。

整地層２はⅡｃ･Ⅱｄ･Ⅱｌ層(検出面1)である。Ⅱｃ層は調査区北東側のみに確認できるが、Ⅱｄ層は調査区の整地範囲内には概ね均一に確認できる。遺構は調査区断面に少数確認でき、SP303では礎石が掘方より露出することを特徴とする。時期は概ね17世紀前葉と推測される。

整地層３はⅡｊ･Ⅱｈ層(検出面2)である。調査区西壁にのみ確認でき、部分的な整地層と考えられる。よって、整地層４との差もほとんどないと考えている。SP291の礎石は浅く掘削した底面に据えることを特徴とする。時期は16世紀末葉と推測される。

整地層４はⅡｆ･Ⅱｅ･Ⅱｋ･Ⅱｇ･Ⅱｉ(検出面3)である。Ⅱｅ層とⅡｋ層は部分的な整地層で、Ⅱｆ･Ⅱｇ･Ⅱｉ層が概ね均一に敷かれている。遺構は断面で確認できる範囲において礎石を確認できず、礎石を伴わない掘立柱を特徴とする。時期は16世紀後葉～末葉と推測される。

検出面４は整地層を敷かず、Ⅲ層またはⅣ層に直に掘り込まれた遺構群である。ただし、調査区南東側の整地層を確認できない部分は検討を要する。城下町形成初期の遺構と考えられ、時期は16世紀中葉と推測される。

次に、整地層を一部平面的に捉えることができたので、SX028と関連整地層について説明する。

【耕作土】
Ⅰa層 2.5Y4/2暗灰黄褐色極細砂

【床土】
Ⅰb層 5Y4/1灰色粘質シルト
（マンガン斑、粗粒砂を多量含む）

【整地層】
Ⅱa層 10YR4/1褐灰色シルト
（マンガン斑、粗粒砂を多量
φ3～5mmの土器片をやや多量含む）
Ⅱb層 10YR3/2黒褐色シルト
（粗粒砂多量含む）
Ⅱc層 10YR3/1黒褐色シルト
（粗粒砂を少量含む）
Ⅱd層 10YR3/1黒褐色シルト
（粗粒砂を多量、φ2～3mmの炭化物を少量
φ3～5mmの土器片をやや多量含む）
Ⅱe層 10YR3/1黒褐色シルト
（φ5～10cmの10YR6/6明黄褐色シルトブロックを極多量
φ3～5cmの10YR5/3にぶい黄褐色シルトブロックを少量
φ2～3cmの10YR5/1褐灰色シルト粒をやや多量
粗粒砂をやや多量、φ1～2mmの土器片を少量含む）
Ⅱf層 10YR4/2灰黄褐色シルト
（粗粒砂を多量、φ3～5mmの炭化物を少量
φ2～3mmの土器片を多量含む）
Ⅱg層 10YR3/3暗褐色シルト
（φ2～3cmのⅣa層粒をやや多量、粗粒砂を少量含む）
Ⅱh層 10YR4/1褐灰色シルト
（φ2～5cmの10YR5/3にぶい黄褐色ブロックをやや多量
粗粒砂を多量、φ3～5cmのⅢa層ブロックをやや多量含む）
Ⅱi層 10YR3/2黒褐色シルト
（φ1～2cmの10YR5/3にぶい黄褐色粒を少量
粗粒砂を少量含む）
Ⅱj層 10YR3/2黒褐色シルト
（φ3～5cmの10YR5/3にぶい黄褐色ブロックを多量
粗粒砂を多量含む）
Ⅱk層 10YR3/2黒褐色シルト
（粗粒砂をやや多量含む）
Ⅱl層 10YR3/1黒褐色シルト
（φ2～5cmの2.5Y8/3浅黄色シルトブロックをやや多量
粗粒砂をやや多量含む）

【堆積層】
Ⅲa層 10YR2/1黒色粘質シルト
Ⅲb層 10YR1.7/1黒色粘質シルト
Ⅲc層 10YR3/1黒褐色粘質シルト
Ⅲd層 10YR3/2黒褐色粘質シルト

【地山】
Ⅳa層 10YR7/4にぶい黄橙色シルト
Ⅳb層 7.5GY8/1明緑灰色粘質シルト
Ⅳc層 10YR4/2灰黄褐色砂礫
（φ2～5cmの礫を極多量含む）
Ⅳd層 2.5Y6/2灰黄色シルト
（φ2～3cmの礫を極多量含む）
Ⅳe層 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂
Ⅳf層 2.5Y4/2暗灰黄色砂礫
（φ3～5cmの礫を極多量含む）
Ⅳg層 10YR5/6黄褐色粗粒砂
Ⅳh層 7.5Y7/1灰白色細粒砂
（φ2～3cmの泥岩粒を少量含む）
Ⅳi層 2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂
（φ3～5cmの泥岩粒をやや多量
含む）
Ⅳj層 7.5GY8/1明緑灰色粘質シルト
（φ2～5cmの泥岩粒をやや多量
φ2～3cmの2.5Y5/2暗灰黄色粘
質シルト粒を多量含む）
Ⅳk層 7.5GY8/1明緑灰色砂質シルト
Ⅳl層 5B6/1青灰色砂質シルト
（しまり強い）
Ⅳm層 5B4/1暗青灰色砂質シルト
（しまり極強い）

極多量	70～100%
多量	40～69%
やや多量	20～39%
少量	10～19%
やや少量	5～9%
極少量	1～4%

図７　基本層序概念図

SX028 と関連整地層（図 9・写真図版 4）

調査区北西角において検出された。検出面はⅢ層上面で、上層には 10 ～ 15㎝程度の整地層があり、Ⅲ層まで掘削して、平面形が隅丸方形を呈する SX028 を確認した。調査当初には不明遺構としていたが、調査区壁断面を検討した結果、整地層の一部と判断した。SX028 のような整地層の掘り込みは、SX028 の西隣と調査区北東側に確認できる。このことから、整地層の落ち込みは概ね調査区北半に確認でき、またその範囲は概ねⅢ層の範囲と重なる。

SX028 西隣の落ち込みは基本層序Ⅱ f・Ⅱ g 層と対応する。SX028 は SD010 によって基本層序との対応はできない。調査区北壁を観察すると、SD010 の西と東で異なり、西にはⅡ f・Ⅱ g 層が堆積するが、東にはみられなくなる。SX028 はその境に位置し、Ⅱ f・Ⅱ g 層に対応すると考えられる。また、調査区西壁を観察すると、SP241・242 を境として、北と南へⅢ層を掘り込んでいる状況を確認できる。北側の落ち込みは SX028 西隣の落ち込みで、南側の落ち込みは別の落ち込みである。

Ⅲ層　主に黒色及び黒褐色粘質シルトで、4 層に細分できる。Ⅲ a ～ d 層へ色が薄くなるグラデーションを呈する。

Ⅲ層はⅣ層の凹んだ部分に堆積したもので、本調査区では調査区西壁で最も厚く堆積し、北と東ではやや薄くなる。また、本調査区の西側の試掘トレンチ (T1) ではⅢ層が厚く堆積する。このことから、Ⅳ層の凹みは東から西へ傾斜する浅い谷状を呈しており、Ⅲ層はこの浅い谷に堆積したものと考えられる。

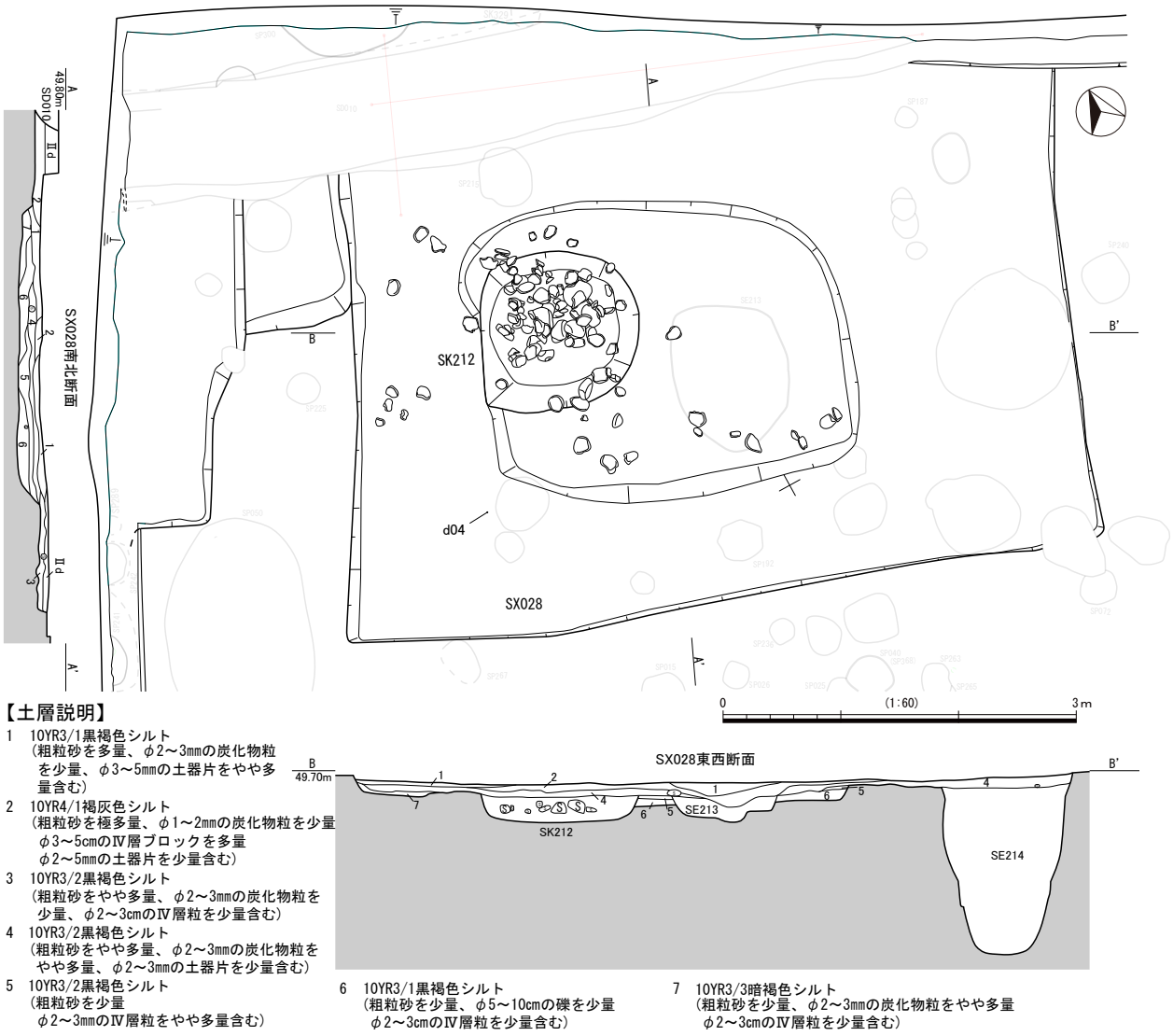


図９　SX028 平面・断面図

Ⅲ層にはほとんど含有物がなく、遺物は皆無であった。よって、考古学的手法ではⅢ層がいつどのように形成されたのか解明できないため、試掘トレンチ (T7) からその手掛かりとなる分析を第４章において行っている (第４章 1)。

T7 では土塁と堀が確認されており、分析試料は土塁底面の薄い黒色層から採取した炭化物である。分析結果の詳細は第４章１を参照されたいが、炭化物を放射性炭素年代測定を行った結果、縄文中期末葉といった結果が得られた。

この結果を考慮すると、土塁底面の黒色層はⅢ層と対応すると考えられ、Ⅲ層の形成時期が縄文中期末葉と推察される。また、浅い谷の底面には樹木痕が多数検出されたことから、Ⅲ層は樹木等の有機物が谷部に堆積し、土壌化したものと推察される。

Ⅳ層　芹谷野段丘を形成する土層である。シルト・粘質シルト・砂質シルト・細粒砂・粗粒砂・砂礫等が互層状に堆積する。本調査区ではⅣａ～Ⅳｍ層の 13 層に細分できる。

本調査区では井戸の底面が最深部となり、井戸側面の観察から、調査区中央付近の土層はⅣａ層、Ⅳｂ層、Ⅳｆ層、Ⅳｌ層、Ⅳｍ層と確認できる。和田川の段丘崖ではⅣｌ層またはⅣｍ層が露出しており、Ⅳｌ層ないしⅣｍ層は芹谷野段丘の基盤層と考えられる。以上から、図７の模式図のとおりまとめることができる。

本調査区では南西から北東方向の谷状地形のⅣ層が存在し、その谷の中にⅢ層が堆積した。本調査区では北半にⅢ層が堆積し、調査区西側中央付近で最も厚く堆積する。

整地層は調査区南半において薄く、北半において厚く堆積する。これは既述したとおり、Ⅱ層とⅢ層の堆積範囲・濃淡が概ね一致し、Ⅲ層はしまりが弱く軟弱地盤であったものと考えられる。よって、Ⅲ層部分では方形に浅く掘削し、地盤改良したと推察される。Ⅱａ層は薄く、また調査区壁面には確認できない遺構埋土もあることから、Ⅱａ層は削平を受け、その上層に１層以上あったと推察される。

図 10　Ⅱ層とⅢ層の分布と土層断面図

3　遺構と遺物

(1)　概　要

本節では本調査において検出した遺構と出土した遺物について説明する。

本調査では、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の遺構と遺物が確認された。この時期は神保氏、上杉氏、一向宗、佐々氏、前田氏が増山城に関わった時期で、城下町の形成から衰退、村落へと移行していく時期に相当する。本調査区は、南に城への道、東に御土居がある一角に位置する。

遺　構　遺構は、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の掘立柱建物 4 棟以上 (柱穴 338 基)・土坑 8 基・井戸 10 基の合計 356 基と整地層、時代不明の樹木痕 15 基、現代の暗渠 1 条が確認された (図 11、表 4 ～ 6)。

柱穴は単独のものもあるが、多くは 3 ～ 4 基重複し、少しずつ位置を変えているものと、ほとんど同じ場所につくっているものの 2 通り確認された。また、井戸は 2 ～ 3 基のまとまりを確認でき、整地層も多数確認されている。これらのことから、建物の建替えと整地を何度も行いながら生活していることが分かる。

当初の井戸は井戸として機能し、廃棄後の埋没過程の分類は 4 つに分かれる。①栗石状礫と礎石状礫、②白色粘質シルトと礫、③礫のみ、④礫なし。これについては礫の用途により異なるが、本報告では礫を井桁の基礎と考える。それには本調査区から検出された井戸の上部が浅くなっていることにある。しかし、①については柱穴の可能性も捨てきれない。

遺　物　各遺構や整地層からは 14 世紀から 17 世紀前葉の陶磁器 (碗・皿・擂鉢・壺・甕等)、土師質土器 (擂鉢)、土師器 (灯明皿)、石製品 (石臼・砥石等)、木製品 (漆器、箸、下駄、板、杭等)、鉄製品 (和釘・鉢等)、その他種子等、8 世紀から 9 世紀の須恵器 (杯) が確認された (表 7 ～ 11)。

ほとんどが破片であり、全体を復元できるものは少量だが、陶磁器の生産地は越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、珠洲、肥前、備前、中国と多くの生産地から本遺跡に搬入されている。各生産地の割合については第 5 章 1 で詳述する。

次に、本報告で使用する用語について説明する。

越中瀬戸焼の " 焼 " は省略する。以下すべての焼物も同様とする。

瀬戸美濃は瀬戸か美濃かどちらかについて消費地では判別困難なため、瀬戸美濃と呼称する。

越前は陶器のみでなく、越前を模倣した土師質の擂鉢がみられ、本報告の分類では土師質土器とした。越前を模倣した土師質擂鉢については木村孝一郎氏にご指導を頂いた。

肥前は陶器と磁器があり、生産地も広範囲にわたることから肥前系と呼称する。本遺跡では陶器のみで、所謂唐津である。

中国は青磁・白磁・青花がみられる。これらの総称として中国と呼称する。

備前は擂鉢片が 1 点出土している。この備前は現在の岡山県備前市周辺窯跡の製品ではなく、加賀市作見窯産[1]の擂鉢片の可能性が高いが、これについては石井啓氏と橋本正博氏のご指導を頂き、作見窯の資料は橋本氏と実見して比較した結果、概ね作見窯産と判断できるが、本報告では作見窯に言及せず、備前系と呼称する。

遺物の時期については第 5 章において編年を行っており、瀬戸美濃を軸として時期を推定している。ここでは各土器・陶磁器の時期について参考文献をあげておく[2]。

1　上野与一・宮下幸夫　1982 「作見窯について」『研究紀要』第 19 集　小松市立博物館

2　土器・陶磁器の編年の参考文献は以下のとおりである。

瀬戸美濃　愛知県　2007 『愛知県史　別冊　窯業 2　中世・近世　瀬戸系』

越中瀬戸　宮田進一　1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸 - 考古学が語る社会史 -』

珠　　洲　珠洲市立珠洲焼資料館　1989 『珠洲の名陶』

越　　前　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2016 『越前焼総合調査事業報告』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 6- 陶磁学会 10 周年記念 -』

土師器　宮田進一　1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸 - 考古学が語る社会史 -』

その他・時代不明　以前の調査や試掘調査では縄文時代と古代の遺物が確認されているが、今回の調査では古代の須恵器を確認したのみで、縄文時代・古代の遺構と縄文時代の遺物は確認できなかった。ただし、下層調査では浅い谷地形と樹木の痕跡を確認し、調査区周辺が森林であったと想像される。

以上から、本調査は戦国期から近世への移行期に形成・衰退・村落化した城下町の貴重な調査で、今回は狭い調査区であったものの、約 400 基近くの遺構が検出されたことはそのことをよく物語っており、その重要性が指摘される。

以下では、各遺構の調査成果を説明し、最後に遺構一覧表及び遺物観察表を掲載する。

図 12　建物配置図

(2)　上　層

上層はⅡ層及びⅢ層において検出された遺構で、掘立柱建物 (柱穴群)・井戸・土坑について説明する (図 12)。図 12 をみると、調査区北東側では柱穴の規模が大きく、多数重複する。これに対して、南西側では柱穴の規模が小さく、単独の柱穴が検出される傾向にある。このことは整地層の分布範囲 (図 10) とも一致しており、建物と整地層の関連性を窺い知ることができる。井戸は概ね 4 箇所にまとまり、次に説明する区画の中におさまる。なお、調査区南端の撹乱は現道路と概ね平行し、城下町から城への道跡とも考えられるが、ここでは耕作痕等の撹乱と伴にコンクリ片やタイル等近代以降のものが含まれていたこともあり、本調査では撹乱と判断したが、城下町から城への道跡の可能性は捨てきれないので、今後の調査成果を待ちたい。

(A) 掘立柱建物

建物の配置は、柱穴と井戸のまとまりによって 4 つに分かれる (図 12)。図 12 では調査区を 4 つの区画に分け、区画 1 ～ 4 とした。区画は柱穴のまとまりを示しており、必ずしも敷地を示していないことを断っておく。しかし、多少の誤差はあるものの、概ね一致していると想定している。よって、掘立柱建物の柱穴以外の柱穴から出土した遺物に関しても区画内出土遺物として区画の時期を知る参考遺物とする。

区画 1・SB380(図 13 、写真図版 5・17)

建物が 1 棟確認できる。SB380 は北辺 2 間、西辺 3 間、東辺 4 間、南辺 2 間で、主柱は各 4 隅と SP037・SP174・SP155、東柱は SP283・SP036・SP003・SP163・SP271 である。各四隅の主柱は北西隅 4 基、その他 2 基の重複が確認でき、2 ～ 4 回の建替えが推測される。

間取りは北と南に分かれ、北は束柱で支えていることから板間、南は土間と考えられる。土間には SP048・181 と SE047 が確認できる。SP048・181 は柱穴としているが、土間に設置された施設の可能性もある。SE047 は建物内井戸の可能性もあるが、建物との時期差が不明なため、可能性を指摘するに留める。

出土遺物は、SP020 から石製品 1 点 (4) である。

石製品　4 は砥石と考えらえる。表面は研磨痕が多数みられる。砥面は 3 面である。裏面は割れたままである。石は鉄分が多いためか赤褐色で、他の石より重い。

遺構の時期は、SP160 が SE175 に切られていることから、16 世紀後葉と推定される。

区画 2・SB381・382(図 14 、写真図版 6・17)

比較的大型の柱穴が多数重複し、SP050、SP200 の 1 群は 8 基、SP178 の 1 群は 8 基、SP030 の 1 群は 3 基、SP007 の 1 群は 5 群である。ここでの建物は東辺のみ確認できているにすぎず、全体は調査区西側にある。

建物は 2 棟以上が重複する。SB381 は SP050・SP200

の１群・SP178 の１群・SP030 の１群の３間、北辺は SP242 の１群、南辺は SP049 付近を通る。SP050 と SP049 は底面に礎石状の礫があり、堆積状況では明確にできなかったが、いくつかの柱穴が重複していると考えられることから柱穴と判断した。

ＳＢ３８２はＳＰ２００の１群・ＳＰ１７８の１群・SP017・SP005・SP007 の１群の４間、北辺は西壁面の SP290 (SP291)、南辺は SP292(SP180) の１間分確認できる。建物は、SB381 → SP382 の順となる。

出土遺物は、SP007・023 から瀬戸美濃１点 (5)、SP008 から肥前系１点 (6)、SP023・SP034・SP049・SP179 から土師器各１点 (8 ～ 11)、SP210 から越中瀬戸１点 (7)、SP050 から珠洲１点 (12) と中国１点 (13)、SP242 から木製品１点 (14) である。

越中瀬戸　７は折縁皿である。内面と体部外面上半に灰釉を施す。体部下半にロクロケズリを施す。

瀬戸美濃　５は志野丸碗である。両面に厚く長石釉を施し、表面は気泡が多数みられる。時期は大窯４段階である。

珠洲　12 は壺の胴部の細片のため、径を復元できない。両面にナデを施す。

肥前系　６は陶器丸皿である。内面と体部外面に灰釉を施す。体部下半は露胎で、胎土は鉄分が多いためか赤褐色である。高台はケズリ出しで、内部は頭巾状を呈する。

中国　13 は青花皿の細片のため、径を復元できない。口縁部内面に文様が描かれる。焼成はやや不良で、胎土はやや軟質になる。

土師器　８～ 11 は灯明皿である。すべての口縁部に油・煤が付着する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。口縁部の形状は 8・11 が丸、９は外面に稜を持つ三角形、10 は外面に稜を持ち外反する。

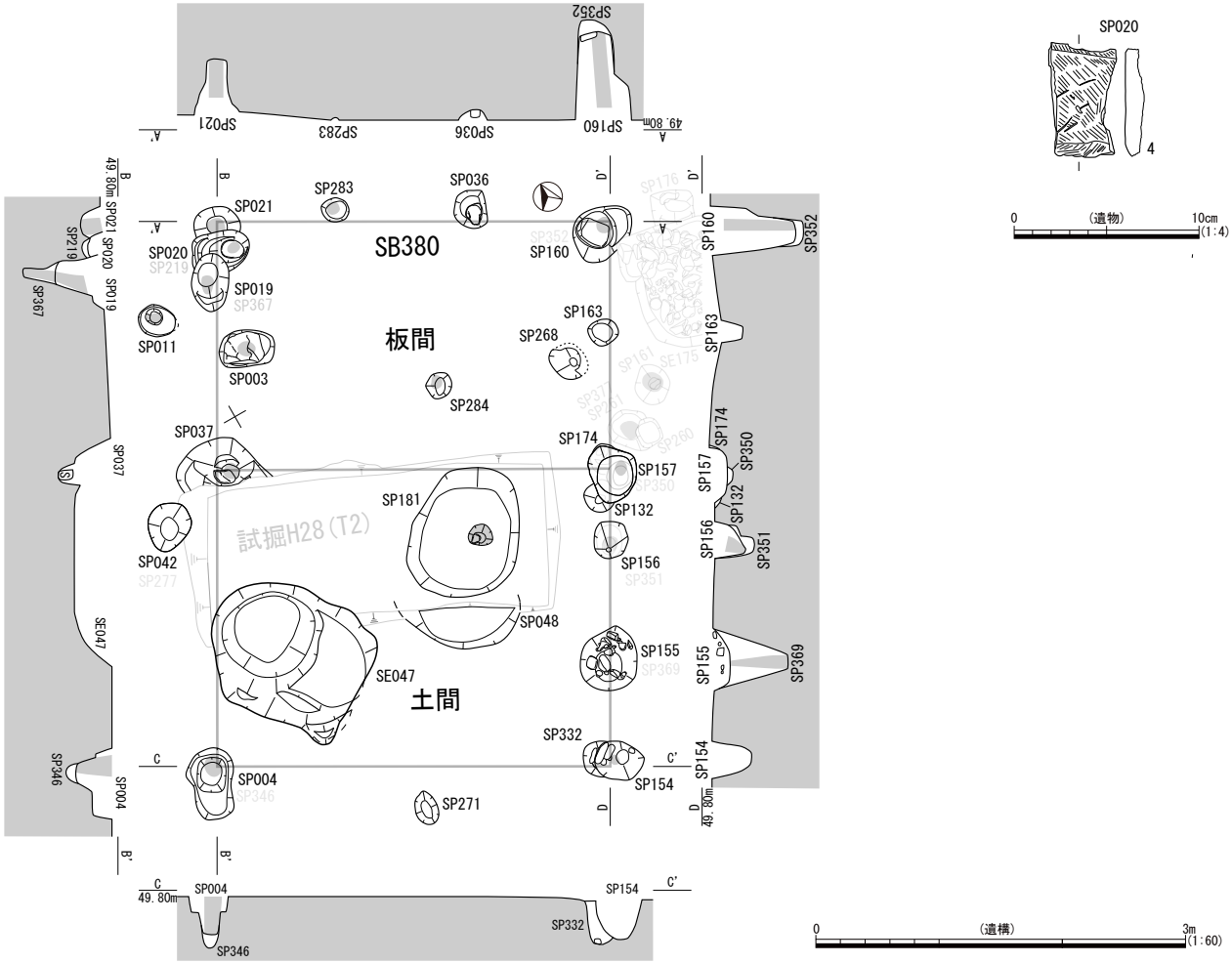


図 13　区画１（SB380）平面・断面図、出土遺物

11 は被熱を確認できるが、他は肉眼で確認できない。時期は 16 世紀後半と推定される。

木製品　14 は柱材の根である。底面は平らに加工され、側面はやや粗く加工される。上部は柱を抜き取る際に切断したと考えられる。

遺構の時期は、SP007･023 から志野丸碗が出土していることから、16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

区画 3･SB383(図 15・16 、写真図版 7・17)

建物は SB383 の 1 棟以上確認できる。SB383 は北辺 5 間以上、南辺 8 間以上、西辺は 2 間で、東辺は調査区外に続く。間取りは北西隅に土間、土間の南と東に廊下がつく。南の廊下は東端まで延びる。北東側に板間、北東隅に土間が確認できる。土間に相当する部分には SX028 のような掘り込み後に整地する。このことから区画 2 の北側にある掘り込み後の整地も土間の可能性

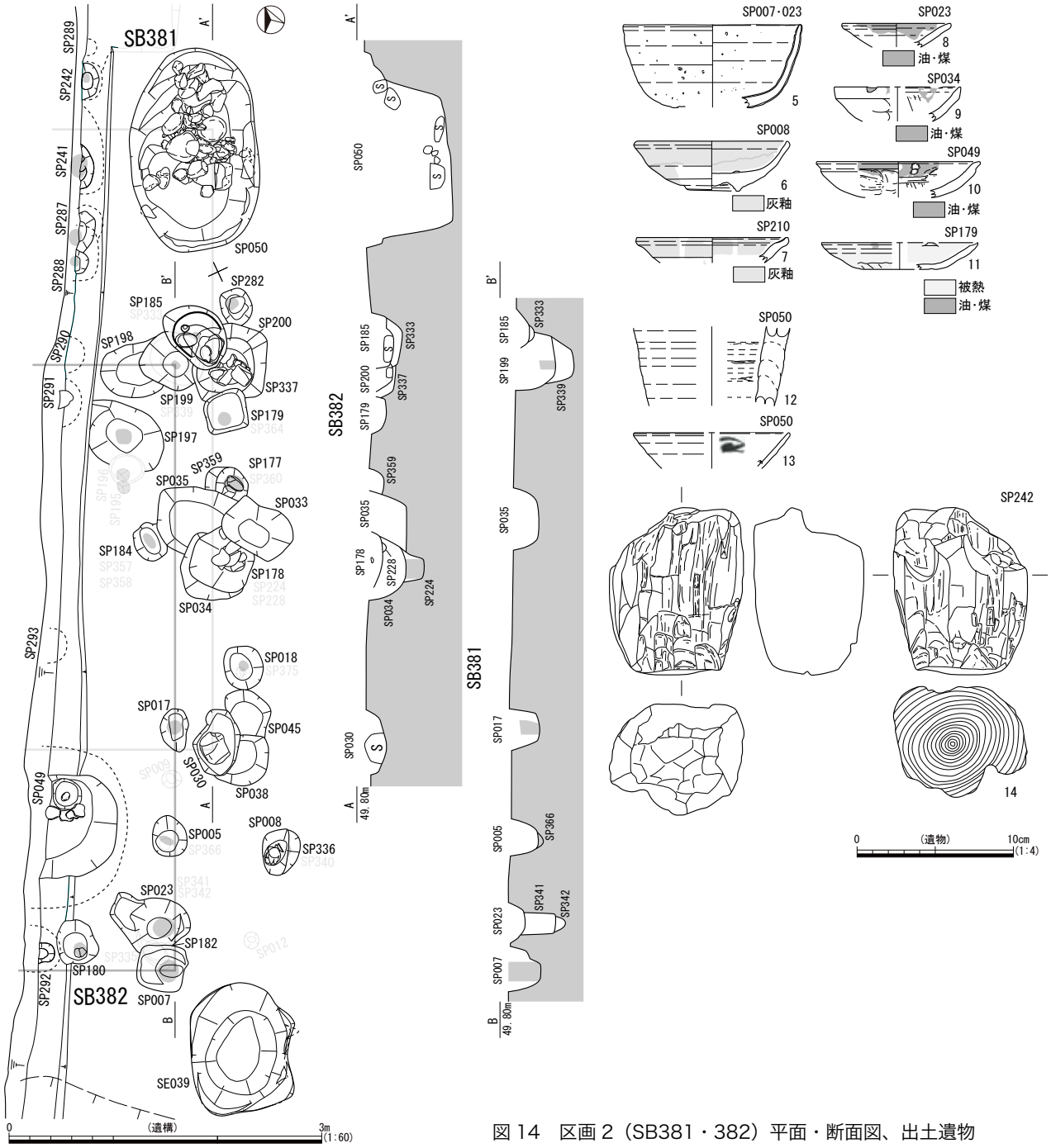


図 14　区画 2（SB381・382）平面・断面図、出土遺物

がある。

東と西の土間には井戸が各２基確認できる。SK212は土間に伴う施設の可能性が考えられる。

出土遺物はSP025から瀬戸美濃１点(15)、SP026・SP191から珠洲各１点(16・17)、土師器１点(18)、SP138から中国１点(20)、SP079から土師器１点(34)、SP027・SP043・SP044から金属製品各１点(21～23)、SP192から石製品１点(24)である。

瀬戸美濃　15は皿の底部である。全面に灰釉を施す。高台はケズリ出しで、低い三角形を呈する。高台内に窯道具の釉着がみられる。時期は大窯2・3段階(16世紀中葉～後葉)である。

珠洲　16・17は甕の胴部である。両者とも、外面に平行タタキ、内面に無文当具痕がみられる。16のタタキは綾杉文状で、内面の当具痕も明瞭に残る。全面に研磨による摩耗がみられ、後世に砥石として使用されていたと考えられる。

土師器　18・19は灯明皿である。18は口縁端部は丸くなる。口縁部に横ナデ、体部に指圧痕がみられる。

19は口縁部外面に稜を持ち、断面形は三角形を呈する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。

中国　20は青花皿である。高台は中央を粗くケズリ出される。文様は全面に描かれる。見込部には菊、体部と見込部の境に２重圏線、体部に唐草文ヵ、外面には口縁部に２重圏線とその間に波ヵ、体部に鋸歯文とその下に圏線を描く。

金属製品　21・22は椀状鉄滓である。上面が平らで、下部がやや丸くなる。表面には気泡が多数みられる。

23は和製鉄釘である。頭部は潰れ、先端は欠損する。断面は四角形を呈する。

石製品　24は砂質泥岩製の下臼で、受部が付く。上面と側面は研磨で丁寧に仕上げ、底面はノミ等の工具痕が残る。中央の穿孔はわずかに残り、四角形を呈する。残存は概ね２分の１程度で、欠損面は加工し、一部研磨で平らに仕上げており、再利用されたと考えられる。最終的に礎石に転用された。

遺構の時期は、井戸が付属することを前提とするが、SE213が16世紀後葉、SE214が16世紀後半、SE002・201が16世紀末葉から17世紀初頭で、西側の土間のほうがやや古い様相を示す。柱穴からは16世紀中葉から後葉の遺物が出土していることから、16世紀中葉から17世紀初頭と推定される。

また、SX028や建物の西側の柱穴から鉄滓、鉄製和釘、砥石、周辺整地層から坩堝、井戸からは曲物の一部と考えらえる細片、枝・竹をカットした細片が多量に出土していることから、何らかの作業場の可能性が指摘される。

区画4・SB384(図17、写真図版8・17)

ここでは、柱穴の規模が比較的小さく、小規模な小屋のような建物が想定される。SB384は北辺４間、西辺４間、東辺３間、南辺２間で、平面形は台形を呈し、不整形である。

出土遺物は、SP126から越中瀬戸１点(25)である。

越中瀬戸　25は皿である。見込部に菊花文を線刻する。体部と見込部の境には釉留めがみられ、釉は体部のみ、外面は高台まで灰釉を施す。高台はケズリ出しで、体部中央まで施される。このため、体部は稜を持つ。胎土は精緻で、焼成は磁器のように白く硬質である。時期は16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

遺構の時期は遺物から16世紀末葉から17世紀初頭と推定される。

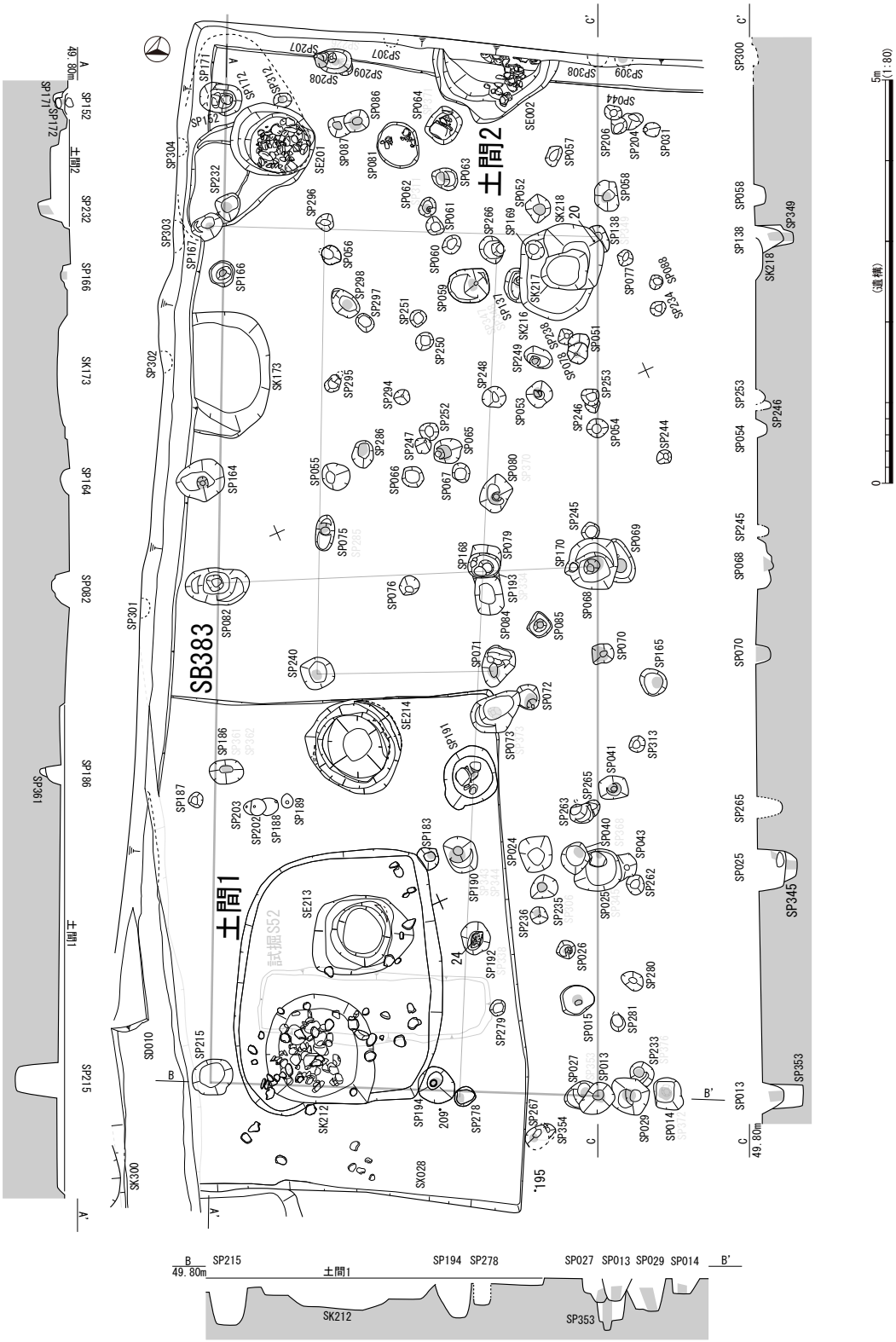


図 15　区画 3(SB383) 平面・断面図

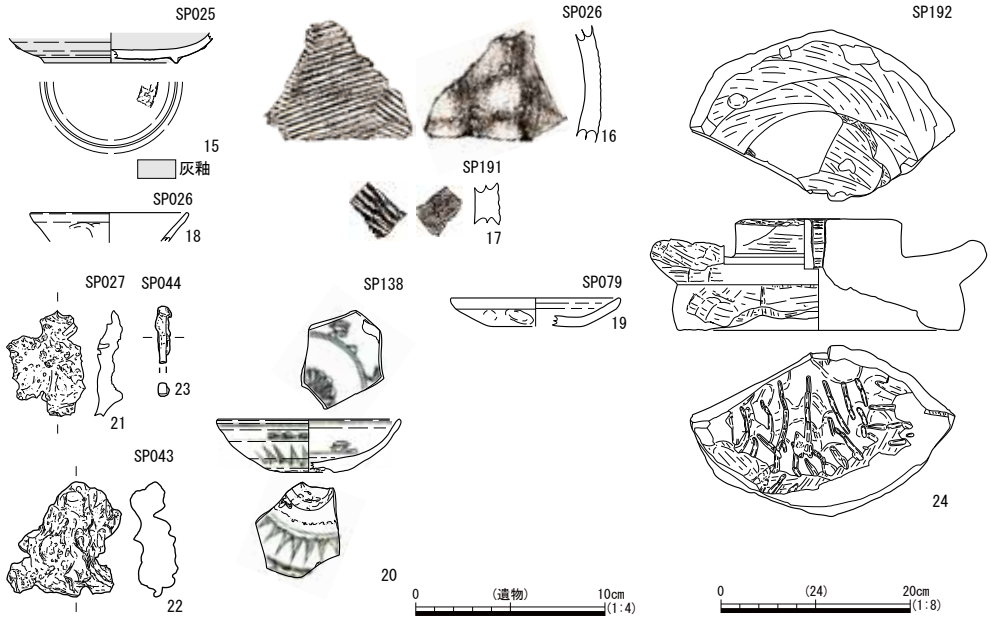


図 16　区画 3(SB383) 出土遺物

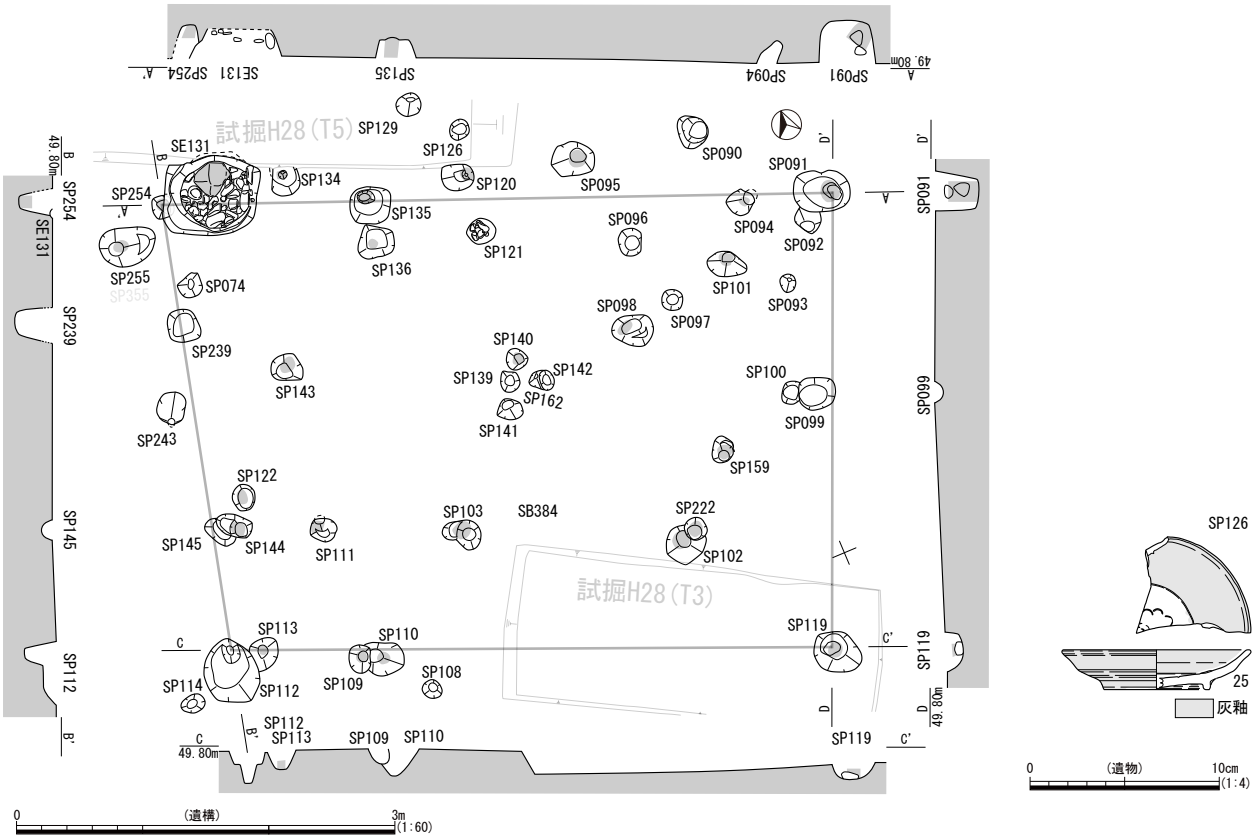


図 17　区画 4(SB384) 平面・断面図、出土遺物

(B) 井戸

井戸は計10基検出された。これら10基は概ね２～３基が隣接して分布する。調査区北西にSE213･214、調査区北東にSE002･201、調査区中央にSE175･131･133、調査区南西にSE039･046･047の４箇所に分かれる。また、前項で既述したとおり、井戸は埋没過程の分類により、① SE046･131、② SE039･047･133、③ SE002･175･201、④ SE213･214となる。これについて礫の用途は井桁の基礎であった石組みを井戸の中に廃棄したと推測している。ただし、上面に礎石状の礫を置くこと、上層に白色粘質シルトと礫で蓋をすること等、単なる地固めのためか、井戸を埋める際の風習なのか、いずれにせよ課題が多く残る。

ＳＥ００２（図 18 、写真図版 9･17）

C･D-5 グリッドに位置し、Ⅱ層中で検出された。平面形は不整円形を呈し、調査区内に概ね２分の１程度検出された。断面形は上部が浅い皿状で、いくつかのテラスがみられる。そこから下部はほぼ垂直である。浅い部分では礫が多量に出土した。礫は南側に集中し、北側には確認できなかった。礫は６層に切られる。礫は主に８層中において出土したが、図の破線より下部は湧水もあり、壁面が崩落したため、これ以上の調査は中止した。図 18 の下場はピンポールで地山を確認しながら記録した。底面が平坦なのは井戸の中心を通っていないためと推測される。

出土遺物は中国１点 (26) である。

中国　26 は青花碗の体部である。外面に植物文がみられ、両面に透明釉を施す。時期は 16 世紀代と推定される。

遺構の時期は遺物と層位から 16 世紀後葉から 17 世紀前葉と推定される。

ＳＥ０３９（図 19、写真図版 9･17）

D-2 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、SE002 と同様に、上部は浅く、テラスがみられる。これより下部はやや内傾して底面に至り、底面は丸くなる。

埋土は上層と下層で大きく異なる。上層は白色粘質シルトを主体とし、下層は灰色粘質シルトを主体とする。上層には礫がやや多量含まれ、少量の陶磁器も出土した。下層には有機物がやや多量含まれる。側面にはいくつか凹んだ部分がみられる。

出土遺物は、越中瀬戸１点 (27･28)、土師器２点 (29･30)、木製品４点 (31 ～ 34) が出土した。

越中瀬戸　27 は内禿皿である。釉は鉄釉を体部の両面に施し、見込部は釉をケズリ取り、磨いたような滑らかな仕上がりである。焼成が悪く、生焼けである。時期は大窯４段階併行と推定される。

28 は壺または甕の胴部である。釉は鉄錆釉を両面に施す。ロクロ成形後、外面下半にロクロケズリを施す。

土師器　29･30 は灯明皿である。部分的に被熱を受け、表面が剥離する。30 の口縁端部は内側に段を持ち、

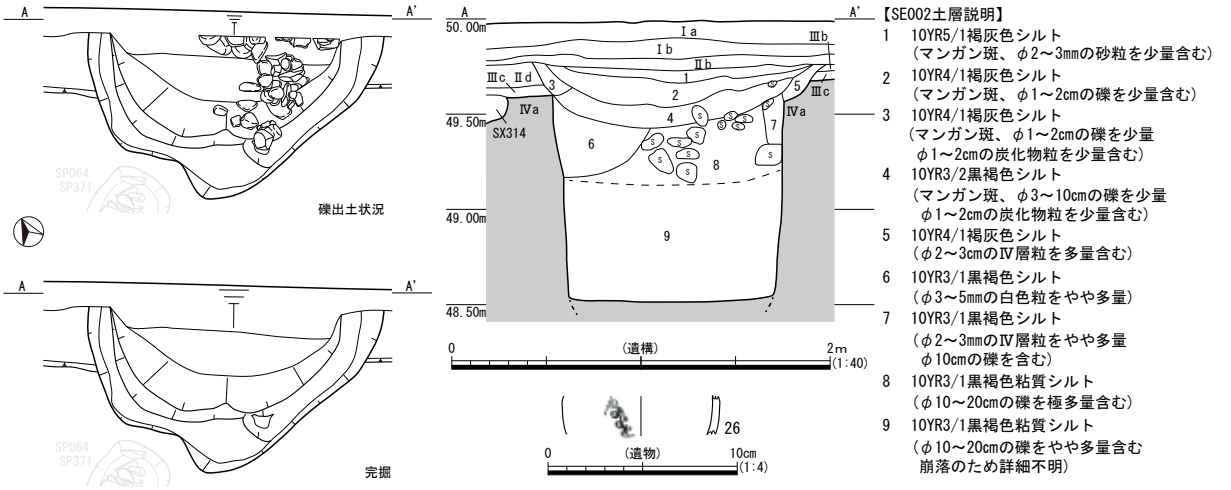


図 18　SE002 平面・断面図、出土遺物

29 は内面に弱い稜がみられる。30 の口縁端部には油・煤がみられる。成形は手づくねで、体部から底部には指押え、口縁部には横ナデを施す。時期は 16 世紀後半と推定される。

木製品　31 は曲物の一部で、厚さ 1㎜程度の薄い板で、横に何条かの筋がみられる。

32･33 は枝の一部をカットしたもので、32 は側面と先端、33 は縦半分にカットしている。

34 は竹の枝をカットしたもので、先端を斜めにカットし、節も取り除いている。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

ＳＥ０４６（図 20 、写真図版 9･17）

D-2 グリッドに位置し、撹乱の下からで、Ⅳ層上面で検出された。検出時には多量の礫が出土した。北側には扁平な礫がみられ、その下には拳大を主体とした礫が多量みられる。このような状況から、扁平な礫が礎石で、下の礫が根石と推測される。礫は井戸の底面まで確認でき、下層へいくほど礫が少なくなり、大きくなる傾向がみられる。側面には凹凸がみられ、底面はやや丸くなる。

遺物は上面において肥前系陶器 1 点 (35) が礫の間から出土した。下層において、SE002･039 のように有機物はみられず、礫が目立っていた。

肥前系　37 は丸皿である。釉は灰釉で、内面と外面の

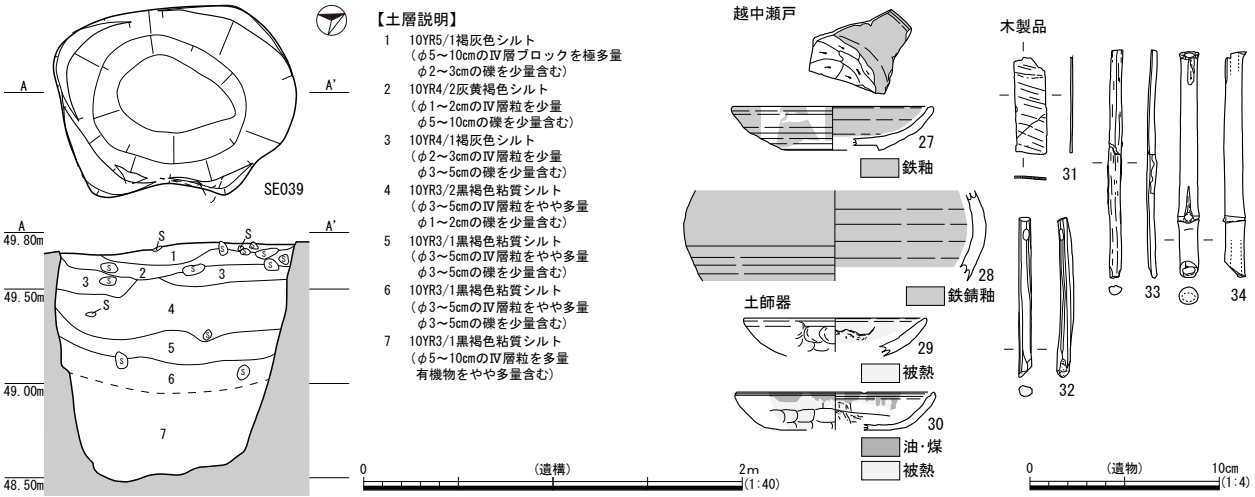


図 19　SE039 平面・断面図、出土遺物

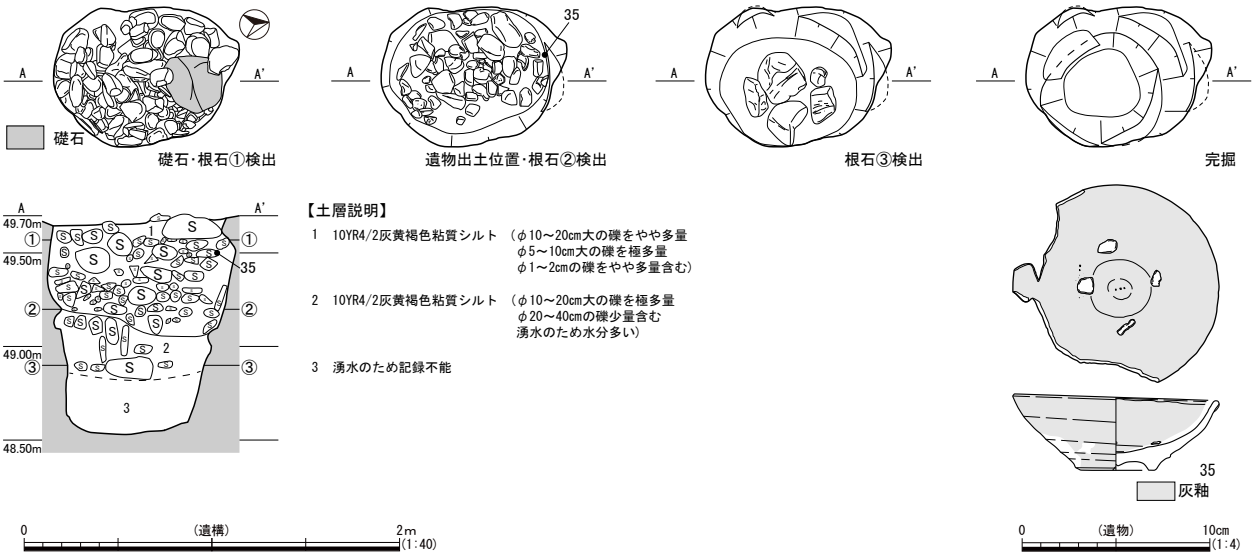


図 20　SE046 平面・断面図、出土遺物

体部から底部に施される。見込部には４箇所胎土目がみられる。高台はケズリ出しで、中央に頭巾がみられる。時期は大橋Ⅰ -2 期 (16 世紀末葉から 17 世紀初頭) と推定される。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

ＳＥ０４７（図 21、写真図版 10･17）

D-2･3 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。試掘トレンチ T2 に遺構の一部が当たっており、北半の約 20㎝程度が削平されている。平面形は不整楕円形で、断面は有段である。検出時には上面において礫が多量に出土し、礎石とその下に根石が確認された。根石は白色粘質シルトで間を埋める。根石を取り除いた最下面において石臼 (36) が出土した。白色粘質シルトは 1 ～ 10 層まで確認でき、6 ～ 10 層では互層状に堆積する。11･12 層は灰色粘質シルトで、有機物が多量に含まれる。11 層を取り除くと段差が生じ、12 層の部分は径が約半分になる。段差は東側半分にあり、西側に円形の落ち込みが確認できる。検出面から段差までは約 1m、段差から底面までは約 50㎝を測る。遺構の南側には小さなテラスと側面に凹凸がみられる。これらは掘削時の昇降の際に使用したと推測され、他の側面の凹凸も同様と考えられる。

出土遺物は、石製品 2 点 (36・37)、木製品 13 点 (38 ～ 50) である。

石製品　36 は砂岩製上臼である。中心には方形の孔を穿ち、側面に加工痕が残る。前面に加工痕と研磨した痕跡がみられる。元は円形であるが、破損して半分になり、破損面も加工・研磨していることから再利用された可能性がある。断面形は左下が大きく欠損しているが、この部分にも再加工痕がみられる。最終的に栗石状礫として再々利用されたか、廃棄されたと推察される。

37 は縁辺に 2 次加工ある礫である。右側縁は両面剥離、下側縁は表面剥離である。右側縁は刃部状を呈する。

木製品　38･39 は箸である。側面を縦方向にケズリ、整形する。38 は完形で、上部と下部は加工が細かく、細く整形し、中央は大きく加工し、太く整形する。

40 ～ 43 は部材の一部と考えられる。40 は両面とも同様の加工で、上部と下部は尖り、右側縁は U 字状に抉る。表面は「×」、裏面「－」を線刻する。43 は板材で、枝の節がみられる。41･42 は樹皮を板材に差し込み、接合したものと推察される。41 は表面に漆を塗布した薄い板で、曲物のようなものと考えられる。

44 ～ 49 は曲物の一部で、50 は薄い板を作る際に生じたものと推測される。これらは製作に関連するものか、破損したものを破棄したものかと考えられるが、50 はケズリ片と考えられるので、近くで曲物を製作していた可能性も推察される。

遺構の時期は時期判別可能な遺物が出土していないため、不明であるが、箸や薄い板は他の井戸においても出土していることから、16 世紀後葉から 17 世紀前葉と推定される。

ＳＥ１３１（図 22 、写真図版 10･11･18）

D-4 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は試掘トレンチ T5 により上場を欠損するが、南側は隅丸方形を呈する。断面形は寸胴状で、底面はやや丸くなる。

埋土は 1 ～ 3 層、4 層、5 層、6 層の大きく 4 つに分かれる。1 ～ 3 層は主に白色粘質シルトで、小型の礫をやや多量含んでいる。4 層は 20 ～ 30㎝大の礫を極多量含んでいる。北側には礎石状礫が栗石状礫の上に置かれ、この状況は SE046 と同様である。5 層は井戸の径とほぼ同じ礫が 4 層直下にみられ、同じ所から石臼 (63) が出土した。大きな礫の下にも拳大の礫が多量に含まれ、その間隙にもう 1 つの石臼 (62) が出土した。6 層は拳大の礫を主体として、人頭大の礫も少量含まれる。

重複関係は SP254 を切る。

出土遺物は、越中瀬戸 2 点 (51･52)、瀬戸美濃 1 点 (53)、珠洲 1 点 (54)、越前 6 点 (55 ～ 60)、土師器 1 点 (61)、石製品 5 点 (62 ～ 66)、木製品 (67) である。

越中瀬戸　51 は丸碗の腰部である。両面に灰釉を施す。

52 は擂鉢の体部下半である。内面には体部と底部の一部に擂目がみられるが、使用痕により大部分が擂り減っている。

時期は 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

瀬戸美濃　53 は丸皿である。体部の両面に灰釉を施す。高台はケズリ出しで、低い三角形を呈する。時期は大窯 3 段階 (16 世紀後葉) と推定される。

珠洲　54 は甕胴部である。外面に平行タタキ、内面に当具痕がみられる。平行タタキのタタキ目は幅が大きく粗い。時期は吉岡Ⅴ・Ⅵ期 (15 世紀) と推定される。

越前　55 ～ 57 は擂鉢である。55 は内面に 9 条 1 単位の擂目をやや密に右回りに施す。ロクロ成形で、外面に斜め方向のナデを施す。口縁部の内側に面を持つ。56 は体部下半である。内面に 8 条 1 単位の擂目を

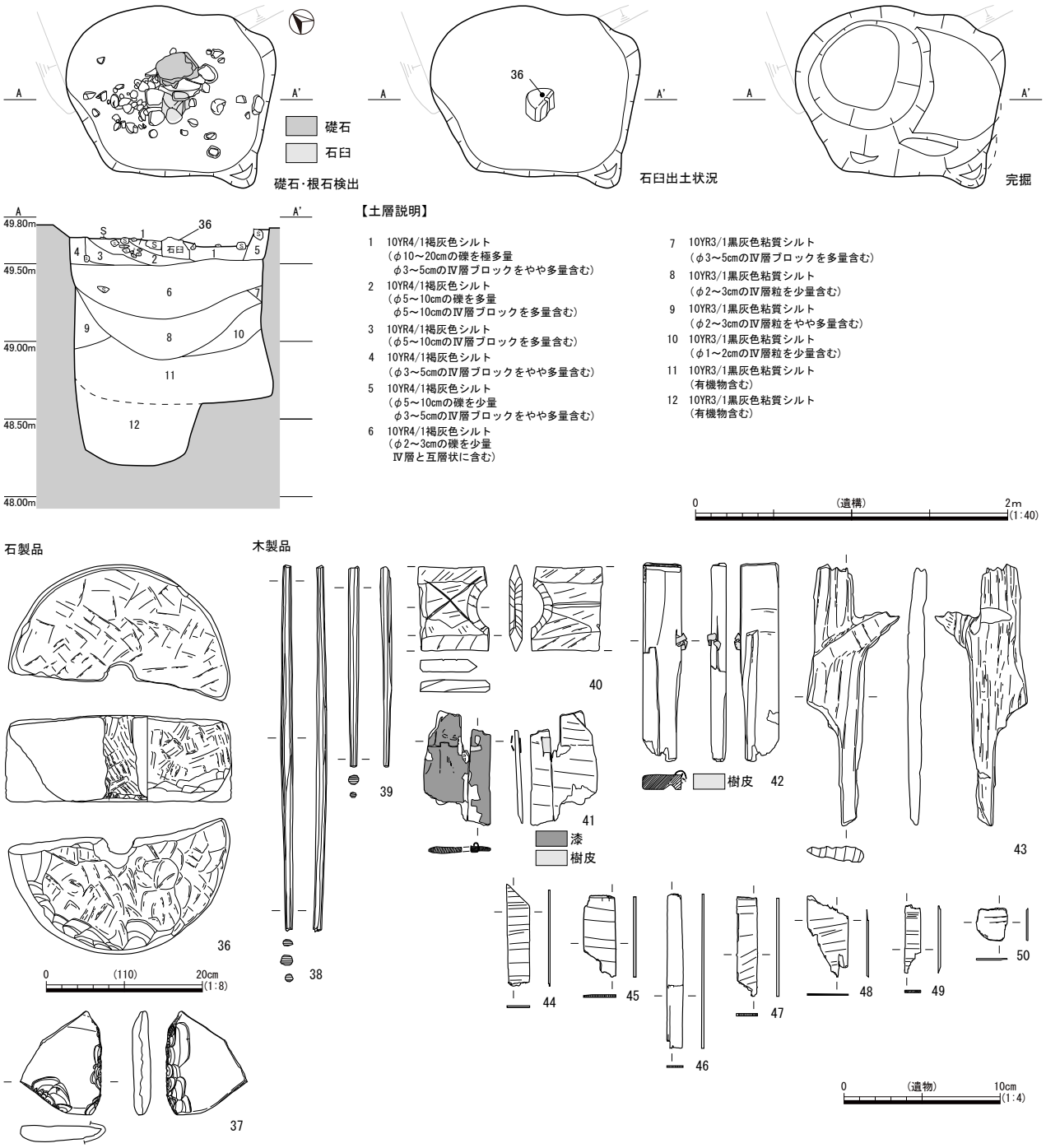


図 21　SE047 平面・断面図、出土遺物

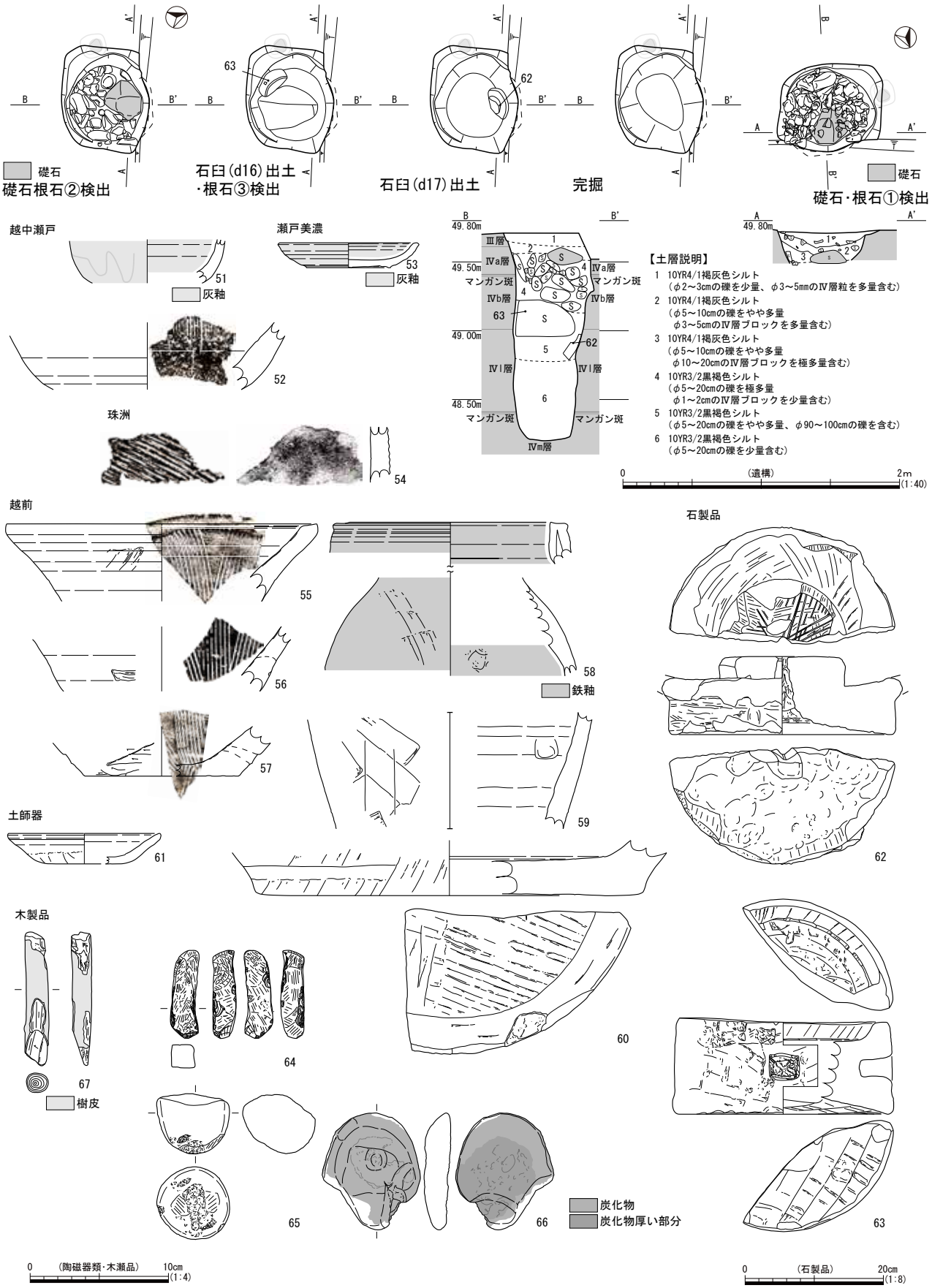


図 22　SE131 平面・断面図、出土遺物

左回りに施す。57 は底面である。焼成は硬質である。内面に 8 条 1 単位の擂目を右回りに施す。体部下半には工具痕などがみられる。

58 ～ 60 は甕である。58 は接合しないが、同一と考えられる。両面に鉄釉を施す。口縁部は上端に面を持ち、胎土内では火ぶくれがみられる。胴は内面に指圧痕、外面に斜めナデ上げを施す。59 は胴部で、概ね 58 と同様の成形である。施釉はない。60 は底部である。胴部外面は斜めナデ上げ、底部外面には縁辺にケズリを施し、中央に圧痕が残る。時期は 16 世紀後半と推定される。

土師器　61 は灯明皿である。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕、ナデ上げを施す。時期は 16 世紀後半と推定される。

石製品　62・63 は石臼である。63 は砂岩製上臼、62 は礫岩製の受部を有する下臼である。63 は全体の 4 分の 1 程度で、欠損部分は再加工される。全面に加工痕・研磨痕がみられる。側面には把手棒を差し込むための方形の孔が 1 箇所穿たれている。62 は全体の 2 分の 1 程度で、欠損部分は再加工される。擂り面には擂目がわずかに残る。中央には孔が底まで穿たれる。底面と孔には加工痕が明瞭に残る。

64 は砥石である。側面 4 面を砥面とする。剥離痕もみられることから、砥面を加工しながら使用していると考えられる。

65 は叩き石である。割れ石を利用し、敲打痕は丸い部分にみられることから、割れた部分を手で持ち使用していたと推測される。

66 は扁平な円礫で、全面に煤が付着し、礫自体も熱を受けている。礫の中央はやや凹む。煮炊き等の台石か、火災等により熱を受けた礫かと推察される。

木製品　67 は枝の先端を斜めカットしたもの、またはカットされた枝である。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

ＳＥ１３３（図 23 、写真図版 11・18）

C-4 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。試掘トレンチ T5 に切られ、上面はほとんど確認できない。確認できる範囲では概ね円形を呈するが、SE131 と同様の平面形とも考えられる。断面形は寸胴状で、底面はやや丸くなる。

埋土は、1・2 層が白色粘質シルト、3 層が礫、4 ～ 6 層が灰色粘質シルトの大きく 3 つに分かれる。白色粘質シルトは固く締まる。礫は南側に確認でき、北側の一部には確認できない。礫の間には陶器椀 1 点 (69) が出土した。礫を含まない部分は 4 層で何もみられない。5・6 層は有機物を含んでいる。

出土遺物は、瀬戸美濃 2 点 (68・69)、土師器 1 点 (70)、木製品 1 点 (71) である。

瀬戸美濃　68 は天目茶碗の口縁部である。口縁部は弱く外反する。

69 は丸碗である。SE201 と接合する。高台はケズリ出しで、方形を呈する。釉は内面と外面の口縁部から高台の一部に施される。時期は大窯 4 段階である。

土師器　70 は灯明皿である。口縁部と底部を欠損する。体部は両面とも不定方向のナデを施し、内面には油・

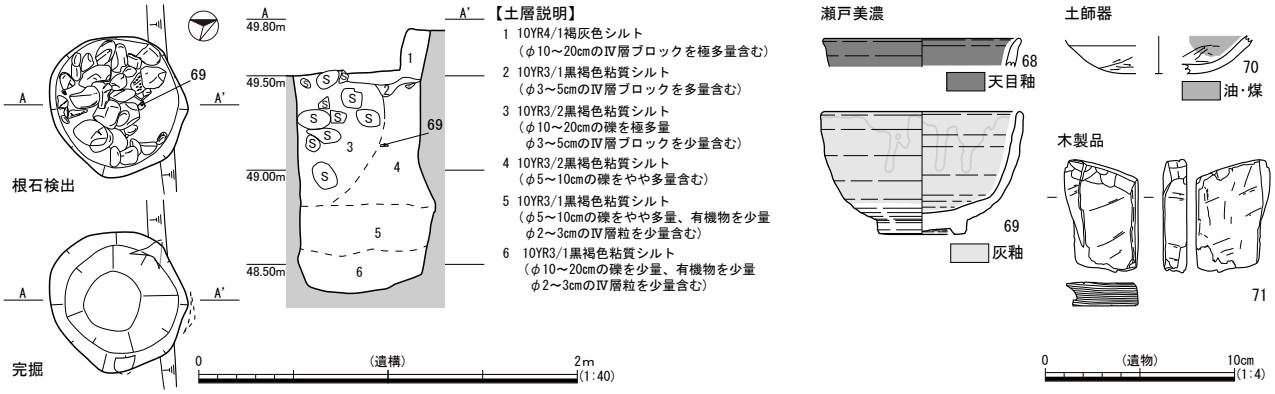


図 23　SE133 平面・断面図、出土遺物

煤が付着する。時期は 16 世紀代と推定される。

木製品　71 は加工痕のある木材で、何らかの部材の一部と考えられる。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

ＳＥ１７５（図 24 、写真図版 12･18）

C･D-3 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。平面形は概ね隅丸方形を呈するが、北西隅と南西隅に飛び出た部分がみられる。また、南側以外には２～３段の小さなテラスがみられる。

埋土は 1 層が白色粘質シルト、2 層が礫、3･4 層が黒褐色粘質シルトの大きく３つに分かれる。白色粘質シルトはは小型の礫をやや多量含み、SE131 と類似する。この部分にテラスが生じる。礫は拳大の礫を主体として、人頭大の礫もやや多量含まれる。灰色粘質シルトは３層と 4 層の２層に分かれ、3 層は拳大から人頭大の礫をやや多量含み､陶器擂鉢 1 点 (72) が出土した。4 層は礫がほとんどみられず、有機物を多量に含んでいる。

重複関係は SP160･175 を切る。

出土遺物は、越中瀬戸 1 点 (72)、珠洲 1 点 (73)、越前 2 点 (74･75)、土師質土器 1 点 (76)、須恵器 1 点 (77)、木製品 8 点 (78 ～ 85) である。

越中瀬戸　72 は擂鉢の底部である。内面に 14 条 1 単位の擂目が密に施される。内面には使用痕がみれ、擂目の一部は使用痕で薄くなる。底部外面は糸切痕がわずかに残る。体部外面にはロクロナデを施し、底部との境付近に指圧痕が残る。時期は 16 世紀末葉から 17 世紀前葉と推定される。内外面の鉄錆釉は摩耗によりほとんどみられない。

珠洲　73 は甕の肩部である。外面に平行タタキ、内面に横ナデを施す。時期は吉岡編年Ⅳ～Ⅴ期 (14 ～ 15 世紀) と推定される。

越前　74･75 は甕の胴部である。両者とも径は復元できない。74 は内面にケズリを施し、上部に屈曲する部分がみられることから肩部付近と考えられる。外面は降灰のため不明である。75 は内面に横ナデ、外面は斜めのナデ上げが施される。両者とも内面に煤が付着する。

土師質土器　76 は越前を模倣した擂鉢である。擂目は８条 1 単位である。口縁部は内傾する面を持ち、その下に凹線が 1 条みられる。口縁部は横ナデ、外面の体部下半は斜めナデ上げを施す。時期は 16 世紀代と推定される。

須恵器　77 は甕胴部である。外面に平行タタキ、内面に同心円文当具がみられる。全面に研磨痕がみられ、後世に砥石として転用されたと考えられる。

木製品　78 は角材をケズリ出した容器と考えられる。内面は粗いケズリの痕跡が残り、外面は丁寧にケズリ整形される。

79 は曲物の一部である。

80･81 はケズリ片で、81 は何らかの付着物がみられる。

82 は部材の一部である。縦方向に孔を穿つ。

83 ～ 85 は枝や節をカットした自然木である。。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀前葉と推定される。

ＳＥ２０１（図 25･26 、写真図版 12･19）

C-5 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は、整地層の浅い凹みの中で確認でき、この整地層は SX028 と同様と考えられる。整地層上では確認が困難であったので、Ⅲ層まで掘削したレベルで明確に検出することができた。検出時には整地層内に礫を含んでおり、井戸との関連は不明である。1 ～ 3 層は別遺構としてとらえていたが、整地層の堆積の中で、堆積したものと判断した。井戸は整地層が堆積している中である時期に埋没したと考えられる。

平面形は楕円形で、南から西縁辺に礫が並ぶが、上面のみである。断面形は上部が有段で、下部が寸胴状である。

埋土は 1 ～ 10 層、11 層、12 層の３つに分かれる。10 層までは褐灰色シルト、11 層は礫、12 層は礫と有機物である。遺物は礫直下から陶器小杯 (86)、木製品鍬 (96) は有機物の中に含まれていた。

重複関係は SP312 を切る。

出土遺物は、越中瀬戸 1 点 (86)、瀬戸美濃 1 点 (87)、土師器 1 点 (89)、土師質土器 1 点 (88)、土製品 1 点 (90)、石製品 4 点 (91 ～ 94)、木製品 12 点 (95 ～ 106) である。

越中瀬戸　86 は小杯である。内面と体部外面上半に鉄釉を施す。体部中央よりやや上から底部にかけてロクロケズリを施し、低い方形の高台をケズリ出す。時期は 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

瀬戸美濃　87 は皿の口縁部である。体部中央より下にロクロケズリを施すことにより稜が生じる。両面に鉄釉を施す。時期は大窯 4 段階と推定される。

土師器　89 は灯明皿である。口縁部は摩耗により不明瞭であるが、両面に横ナデを施す。時期は 16 世紀後半と推定される。

土師質土器　88 は越前模倣の擂鉢である。7 ～ 8 条 1 単位の擂目を施し、1 単位はやや間隔をあける。口縁部は内傾した面を持ち、その下に凹線がみられる。体部外面は斜めナデ上げを施す。時期は 16 世紀代と推定

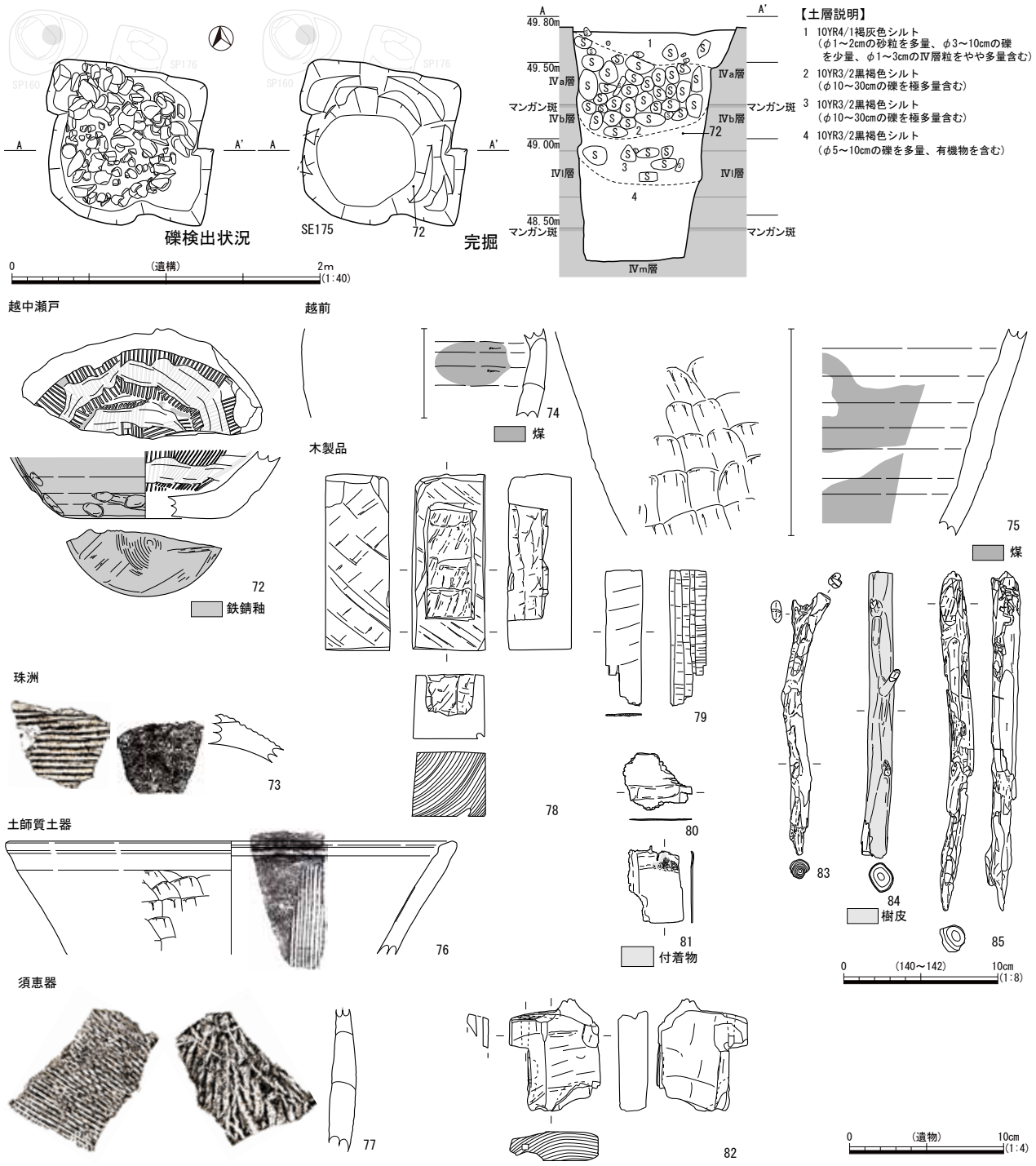


図 24　SE175 平面・断面図、出土遺物

される。

土製品　90 は手づくねのるつぼである。口縁部の上端に面を持つ。体部には指圧痕がみられ、口縁部は横ナデを施す。

石製品　91 は叩台である。上面は平らに、下面は舟底状に加工・整形する。上面には敲打痕が多数みられる。

92 は円盤状石製品である。円盤状に加工し、粗く研磨して整形する。用途は不明である。

93 は泥岩製の砥石である。目は細かい。全面が砥面である。

94 は砂岩製の砥石である。目はやや粗い。表面は研磨痕が多数みられ、裏面は板状に整形する際の工具痕が残る。

木製品　95 は漆器椀の口縁部である。両面に漆を塗布する。

96 は鍬である。両面はやや粗く加工痕が残る。頭部は何かで叩いた痕跡がみられ、柄に装着した際の調整のための痕跡と推測される。柄の装着部は方形を呈する。使用部分は耕作のために欠損している。

97 は加工材である。左右をカットし、中央よりやや下に横方向の穿孔がみられる。

98 は容器の一部と考えられる。両面を薄くケズリ出す。

99･100 は曲物の一部と考えられる。99 は孔を穿つ。

101 は先端を斜めにカットした枝である。

105 はケズリ細片である。

102･103･106 は竹を薄くケズリ取ったものである。105 も含めて何らかの加工がこの周辺で行われていたことを示唆する。

遺構の時期は遺物から 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

ＳＥ２１３（図 27･28 、写真図版 13･19）

B-3･4 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は、整地層 (SX028) に覆われ、SE213 部分にお

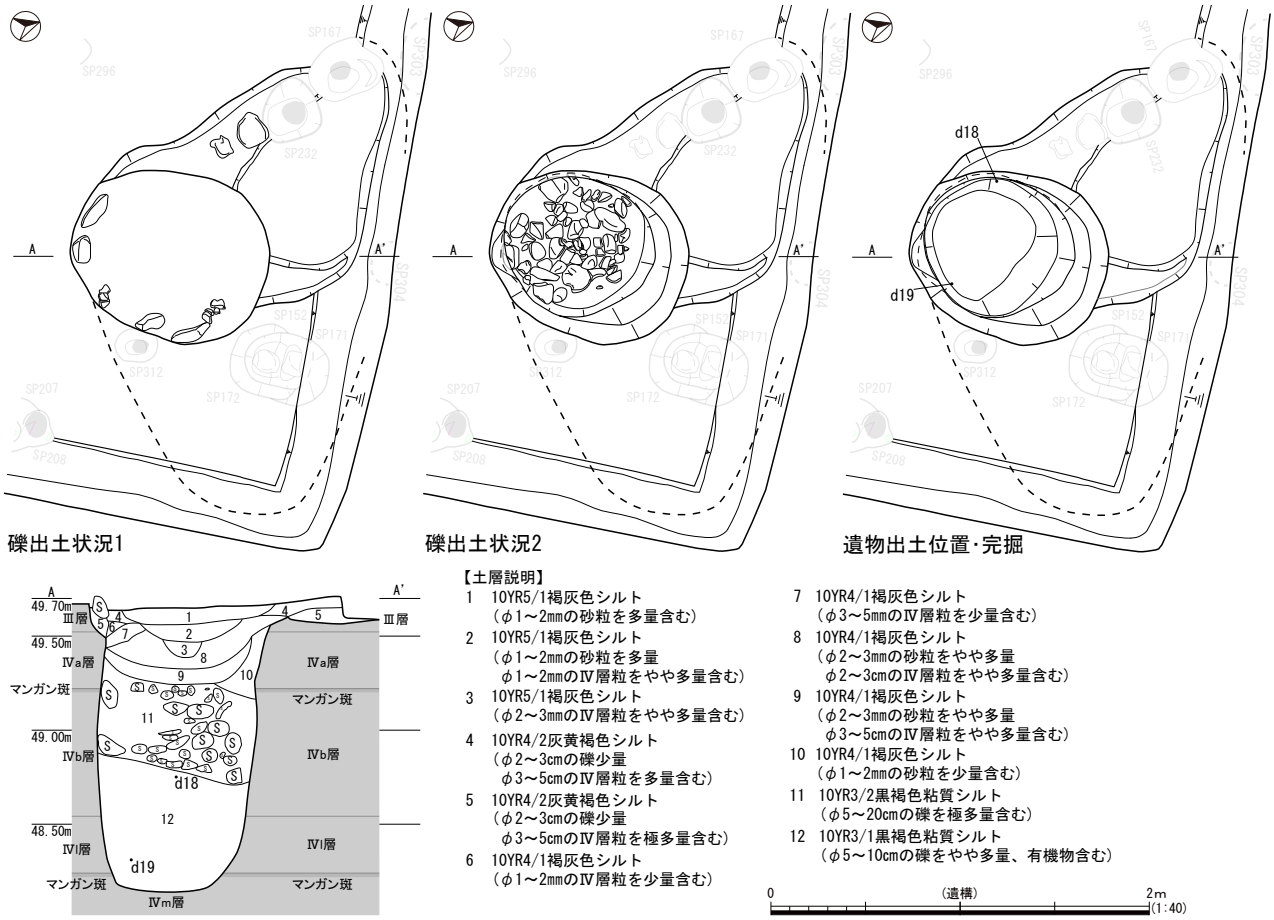


図 25　SE201 平面・断面図

いて整地層が落ち込む。その状況は整地層の砂層において明瞭に確認される。調査時はこの落ち込みを遺構と考えていたが、井戸上 (SE201･SE214) には同様の落ち込みが確認されることから、整地層が井戸埋没途中の穴に堆積したと判断した。

平面形は楕円形で、断面形は上部にテラスを持ち、下部は寸胴状を呈する。側壁はいくつか凹凸がみられる。

埋土は 1 ～ 6 層、7 ～ 12 層、13 ～ 16 層の 3 つに大きく分かれる。1 ～ 6 層まではテラス部分で、整地層の堆積が含まれる。7 ～ 12 層までは 12 層底面において炭焼木炭 (117) と人頭大の礫が出土した。13 ～ 16 層は有機物が多量に含まれ、種子、自然木等、魚骨もここから出土した。第 4 章では魚骨と 13 ～ 16 層から土壌サンプルを採取し、分析を行っている。

出土遺物は、土師器 2 点 (107･108)、土製品 1 点 (109)、石製品 3 点 (110 ～ 112)、木製品 34 点 (113 ～ 146) である。

土師器　107･108 は灯明皿である。107 は両面に油・煤が付着する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。口縁端部は両面をつまむことにより尖る。時期は 16 世紀後半と推定される。

土製品　109 は被熱した土壁である。胎土内にはスサや砂粒が混入する。正面はケズリが施され平坦である。建物の壁、カマド等の壁かは不明である。

石製品　110 は扁平な円礫で、全面に研磨痕がみられる。

111 は加工後研磨される。側面は剥離痕を残す。

112 は泥岩製の仕上げ砥石である。全面が砥面として使用されている。

木製品　113 ～ 116･119 は付け木と考えられる。いずれも先端が炭化する。113 は加工材を使用し、その他は自然木を使用する。115･116 は先端をカットした

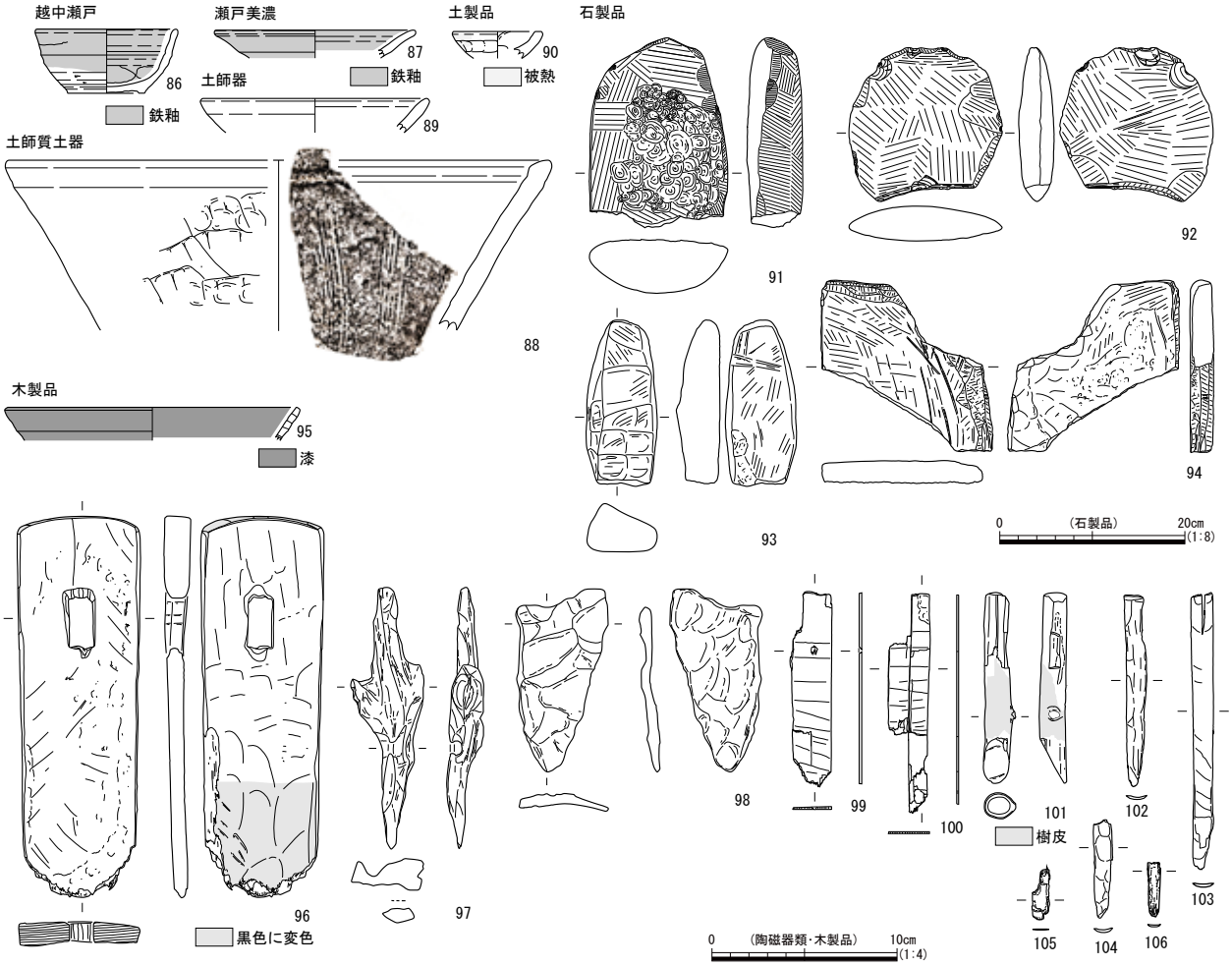


図 26　SE201 出土遺物

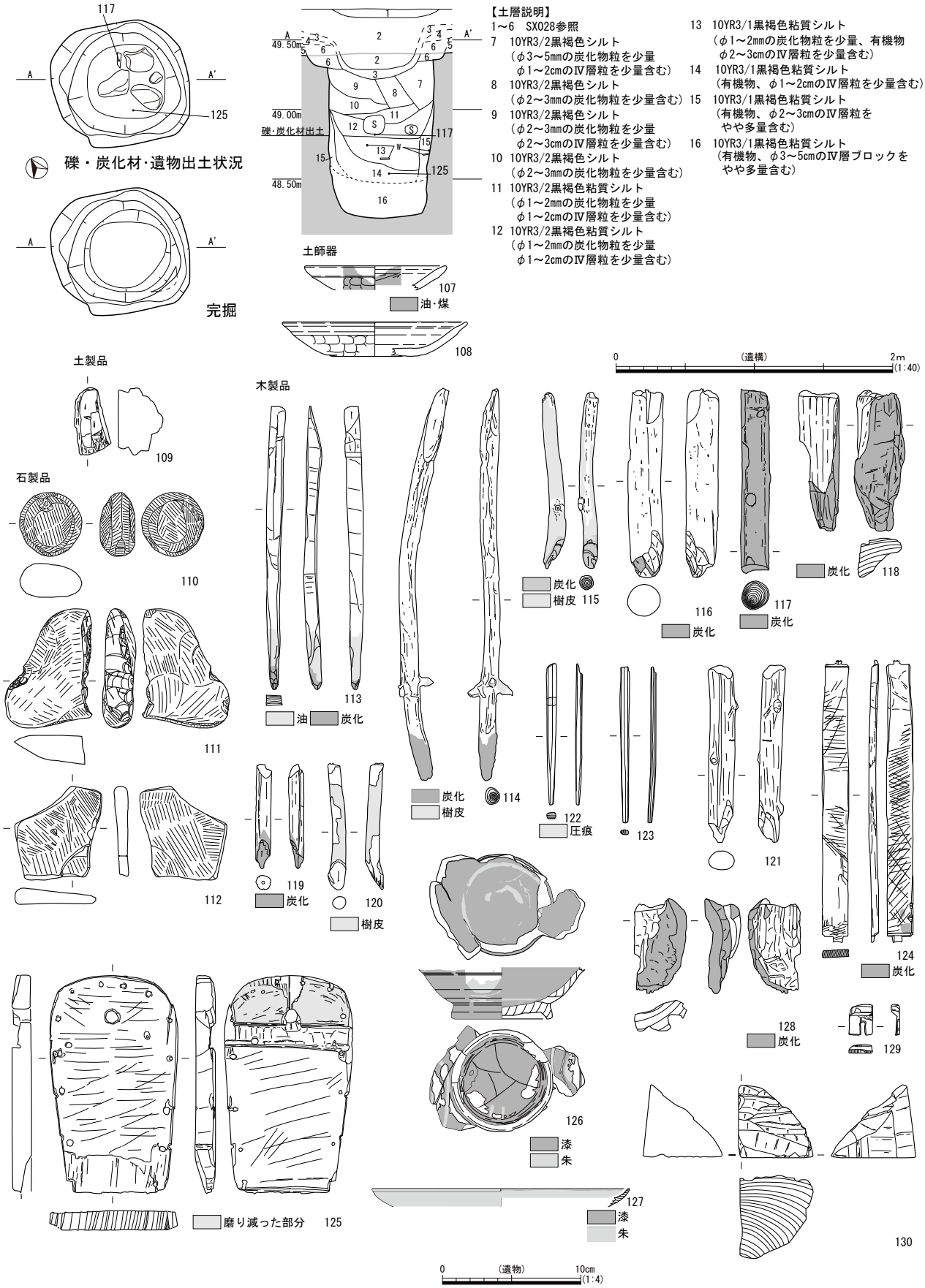


図 27　SE213 平面・断面図、出土遺物 (1)

部分が炭化する。

117 は炭焼きの木炭である。硬質に焼成され、手に角の粉が付かない。

118 は角材の杭であったと考えられる。側面の一部が炭化する。先端はカットする。

120･121 は枝の先端をカットしたもの、またはカットされた枝である。

122･123 は箸である。122 は何らかの圧痕がみられる。

124 は細長い板材である。両端をカットする。両面ともケズリ痕の筋が多数明瞭に残る。

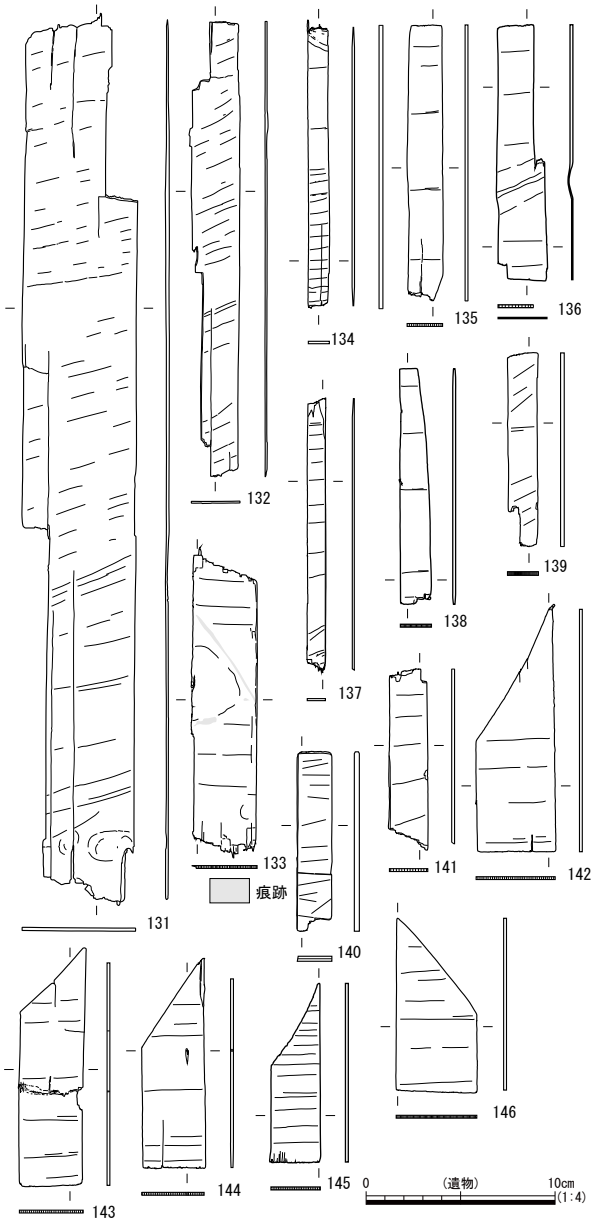


図 28　SE213 出土遺物 (2)

125 は陰卯下駄で、かかと部分を欠損する。全面に丁寧なケズリ整形が施される。指部分に円形の孔と縁辺に小さな孔が穿たれる。裏面には歯を留めるほぞがみられる。

126 は漆器椀で、口縁部を欠損する。高台はややハの字状を呈し、器厚は概ね同様である。全面に黒漆を塗布し､体部外面・見込み・高台内に文様を朱書きする。時期は 16 世紀 と推定される。

127 は漆器皿で、口縁部のみである。全面に朱を塗布し、口縁部外面の沈線部分と端部は漆のままである。

128 は容器の一部と考えられる。表面の一部は炭化する。内面は丁寧にケズリ整形され、外面はやや粗くケズリ整形される。外面には高台がケズリ出される。

129 は小型の部材と考えられる。全面に丁寧なケズリ整形が施され、U 字状の抉りがみられ、何かを接合するための部材とも考えられる。

130 は楔と考えられる。三角形の面が 4 面あり、粗いケズリ痕が残る。

131 ～ 141 は曲物の一部である。142 ～ 146 は一端を斜めにカットする。

遺構の時期は、SX028 が最終的に SE213 を覆っているので、本遺跡における初期の遺構とも考えられ、また遺物から 16 世紀後葉と推定される。

ＳＥ２１４（図 29 、写真図版 14･20）

B･C-4 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は SE213 と同様である。平面形は楕円形で、断面形は上面の幅が広く、下方へ狭くなる。側面にテラスや凹凸がみられる。

埋土は 2 ～ 5 層、6 ～ 11 層、12･13 層の大きく 3 つに分かれる。2 ～ 5 層は褐灰色シルト。6 ～ 11 層は 6 層が炭化物層で、平面的に捉えることができる。12･13 層は黒褐色粘質シルトで、有機物を多く含んでおり、遺物では下駄 (163)、蓋 (162)、蓋・棒・杭 (164 ～ 166・168) 等が出土した。164 ～ 166・168 は蓋を側面に立て掛けて杭と棒で抑えている状況で出土した。

出土遺物は、瀬戸美濃 1 点 (147)、中国 1 点 (148)、土師器 3 点 (149 ～ 151)、金属製品 1 点 (152)、木製品 18 点 (153 ～ 170) である。

瀬戸美濃　147 は天目茶碗の体部である。体部外面

の釉下端に釉溜りがみられる。

中国　148 は白磁の皿である。口縁部は大きく外湾する。

土師器　149 ～ 151 は灯明皿である。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。

金属製品　152 は鉄製和釘である。頭部は潰れて形状は J 字状に曲がる。

木製品　150･155 は付け木と考えられる。150 は自然木で､先端が炭化する｡155 は丸木を半切したもので、先端を斜めにカットする。カットした部分に煤が付着する。

154 は部材の一部である。全面に漆を塗布するが、重なっていた部分は漆がみられない。角は丁寧に削られている。木釘が 5 箇所にみられ、何かに接合していたものと推測される。

156 ～ 158 は箸である。156 は先端の加工を細かくする。157 は指圧痕がみられる。157 は太く、158 は細くなる。

159 は先端を斜めにカットした枝である。

160 は加工材である。細かく削られる。

161 は桶の把手である。両面とも平らにケズリ整形が施される。両側面とも加工が施され、何らかの部材の一部と考えられる。

162 は蓋と考えられる。表裏は丁寧にケズリ整形され､薄く仕上げられる｡角は丸くなり､原形は円形であった可能性がある。

163 は連歯下駄である。丸木から歯をケズリ出し、孔を穿つ。孔は前に 1 つ、後ろに 2 つみられる。前の孔から先端が欠損しており、前の形状は不明である。前の孔から前の歯を貫通する孔が穿たれる。裏側はやや粗くケズリ出されているが、表側は遺存状態が悪く、加工状況は不明瞭となる。

164 は松明と考えられる。上部は欠損し、下半分には樹皮が一部残存することから自然木の可能性が高い。また、下部には 2 次焼成を受けて炭化していることから、松明の可能性が考えられる。

165 は擂粉木である。側面は丸く整形され、下部は細かくやや丸く整形される。上部は粗く加工痕が残る。

166 は丸木を加工した杭と考えられる。上部は紐を結びつけるような抉りを加工する。下部は欠損後に、2 次焼成を受け炭化する。

167 は板材である。両面とも平らにケズリ整形が施される。

168 は円形の蓋と考えられる。元は板材を円形に加工しており、不足分を別の板材で補っている。別々の板材を接合するため、接合面に 2 箇所の孔をお互いの板材に穿ち、小さな接合部材をそれぞれの板材の孔を通して接合する。表面は平らにケズリ整形を施すが、裏面は加工痕が明瞭に残る。

169･170 は曲物の一部、またはケズリ片と考えられる。

遺構の時期は、遺物から 16 世紀後半と推定され、17 世紀には入らないと考えられる。

(C) 土坑

土坑は、SK001･173･212･216･217･218･300･329 の 8 基検出された。特徴として、SK001･212 は埋土内に礫を多数出土していることをあげることができる。また、共通点として、平面形が楕円形で、大きく、浅い。出土遺物に乏しく、時期を明確にすることは困難である。機能や用途も不明瞭であり、第 5 章において考察したい。

以下では、SK001･173･212･216･217･218･300 の 7 基を説明し、SK329 は壁面のみなので、ここでは省略する。

ＳＫ００１（図 30 、写真図版 15･20）

D･E-5 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。検出状況は調査区内に約 3 分の 2 程度で、調査区東壁の外に約 3 分の 1 程度続くと推定される。遺構内西端を SP117 に切られ、SK001 との関連は不明である。

平面形は不整形である。遺構縁辺が浅く、約 10 ～ 20㎝のテラスを有し、中央では浅い椀状を呈する。調査区東壁ではオーバーハングする。

埋土は 7 層に分層でき、主に黒褐色シルトである。埋土内には礫が多数確認でき、上層より底面付近に多数確認された。これらの礫は人為的に並んでおらず、礫の大きさも適当であることから、機能時よりも廃棄時に混入されたと推察される。

出土遺物は、土師質土器 1 点 (171) である。

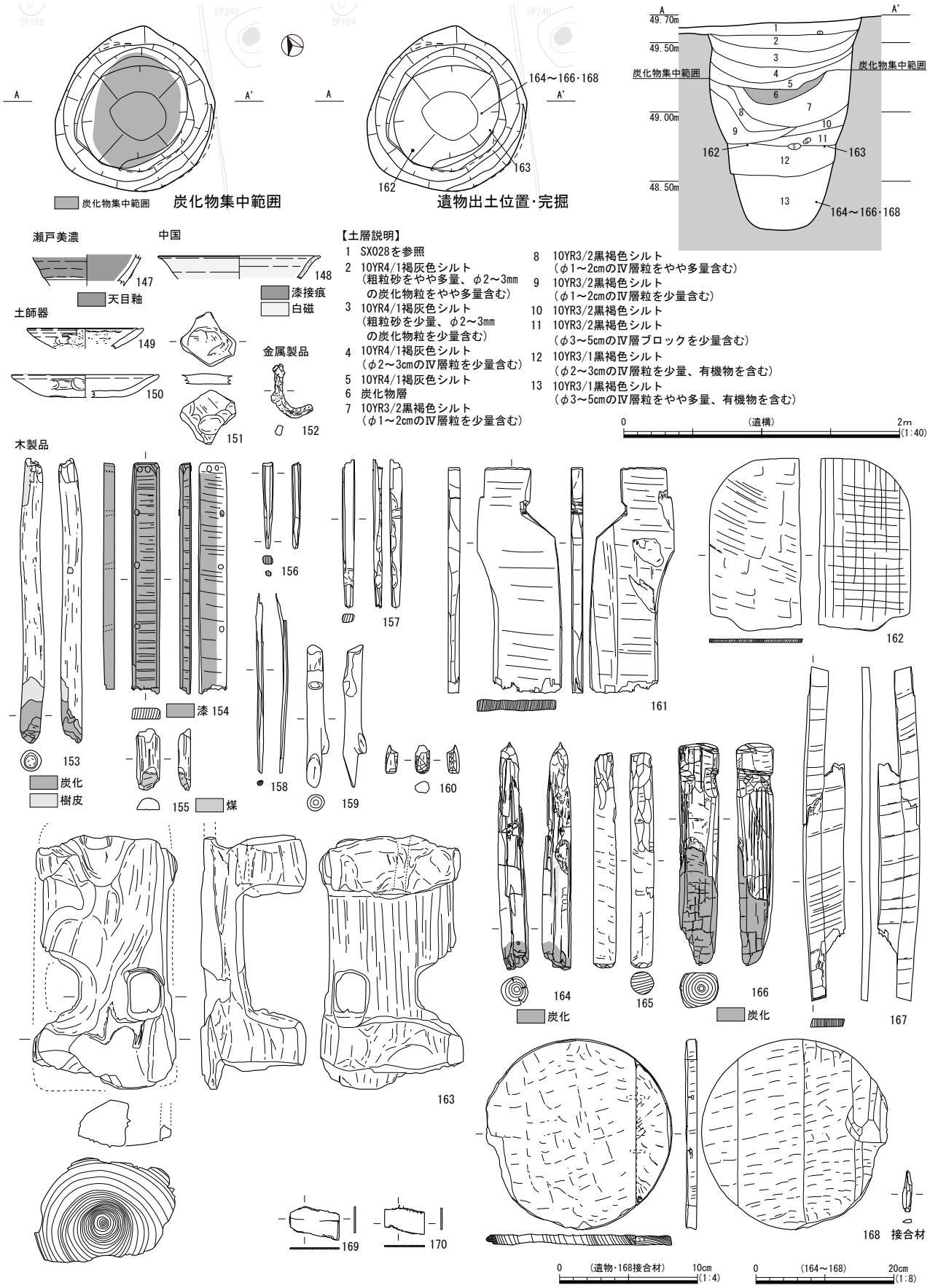


図 29　SE214 平面・断面図、出土遺物

171 は越前模倣の土師質擂鉢の体部である。表面は剥離し凹凸が目立つ。これらの凹凸剥離から被熱を受けた可能性も考えられる。よって、調整等は不明瞭であるが、内面に 6 条の擂目をわずかに確認できる。時期は 16 世紀後半と推定される。

遺構の時期は遺物から 16 世紀後半と推定される。

ＳＫ１７３（図 30 、写真図版 15･20）

B･C-5 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。Ⅱ層上面及びⅡ層中では明確に検出できなかったので、Ⅲ層上面で検出した。遺構は北側溝により切られ、調査区北壁に確認できないことから、遺構は調査区内におさまる。

平面形は楕円形を呈する。遺構の北西側では 1 段テラスを有し、他は浅い椀状を呈する。

埋土は 3 層に分層でき、主に黒褐色シルトである。

出土遺物は土師器 1 点 (172) である。

172 は灯明皿である。口縁部は外面に稜を有する三角形を呈する。口縁部は横ナデで、体部は指圧痕がみられる。口縁部と体部の境の稜線はこの指圧痕によるもので、指押えによる成形痕である。時期は 16 世紀後半と推定される。

遺構の時期は遺物から 16 世紀後半と推定される。

ＳＫ２１２（図 31 、写真図版 15･20）

B-3 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。遺構は SX028 とした整地内の 2 段目の西端を同じくして検出された。断面では SX028 埋土中に掘方を確認できる。SX028 内では SK212 を中心として礫が散乱していた。検出状況から、SX028 内の礫は SK212 に帰属すると考えられる。

平面形は概ね円形を呈し、西側はやや直線的である。断面形は浅い椀状を呈する。

埋土は 1 層に分層でき、主に黒褐色シルトである。埋土内には拳大の礫が多数検出され、礫は周辺にも散乱する。

出土遺物は、土師器 1 点 (173) である。

173 は灯明皿である。他の灯明皿とは胎土等が異なり、φ 1㎜未満の砂粒がやや多量含み、器面の色調も赤みが強く、被熱を受けていると考えられる。器面は摩耗により調整等は不明である。口縁部から体部は内湾し、口縁端部は丸く収まる。時期は 16 世紀後半と推

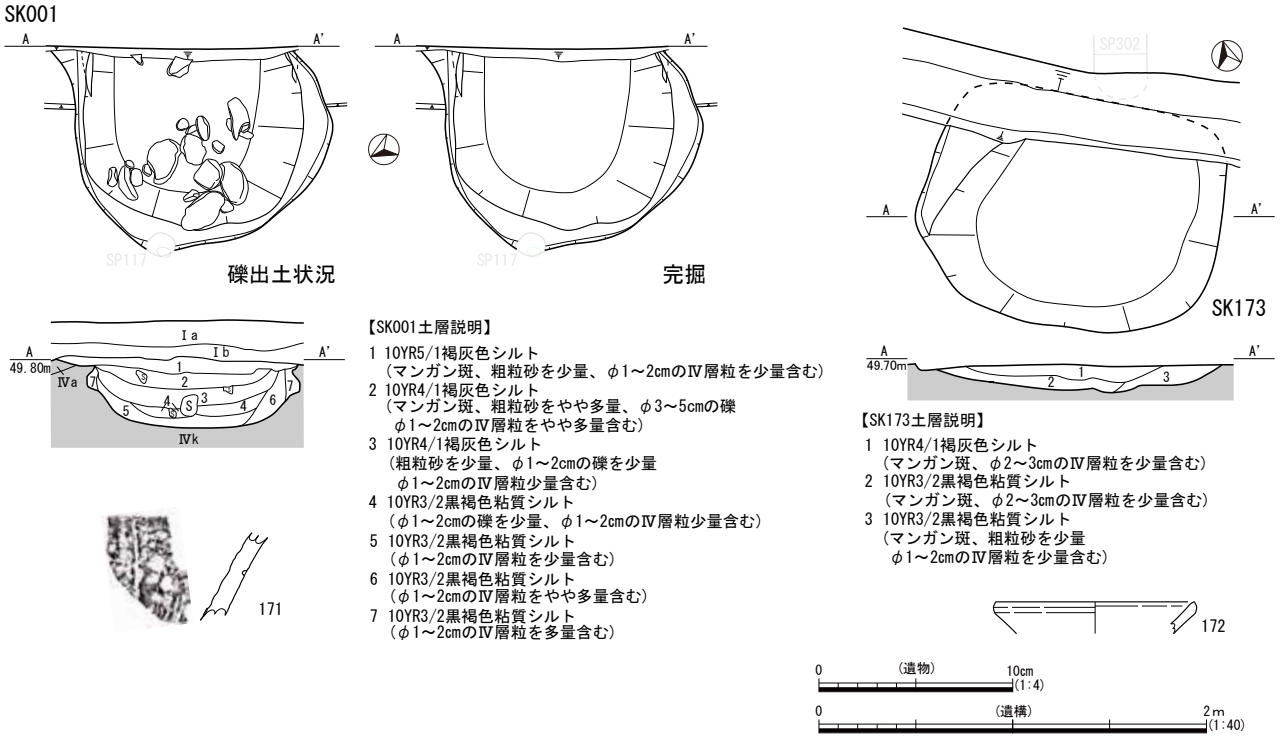


図 30　SK001･173 平面・断面図、出土遺物

定される。

遺構の時期は遺物から 16 世紀後半と推定される。

ＳＫ２１６・２１７・２１８（図 32 、写真図版 15）

C-5 グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出された。検出状況は SK216･217･218 の 3 基が重複しており、古い順に、SK216 → SK218 → SK217 である。その他の重複遺構は、SK216 が SP137･SP169 を切り、SK218 が SP138 を切る。

平面形はいずれも楕円形で、断面形は皿状を呈する。

埋土はいずれも 1 層に分層でき、概ね黒褐色シルトである。

出土遺物はなく、遺構の時期は単独では不明である。しかし、SP138 が 16 世紀後半と推定されることから、16 世紀後半以降と推定される。

ＳＫ３００（図 32 ）

A-3 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。調査区北壁土層断面では掘方がⅡｆ層から掘り込まれていることを確認できる。遺構の大半は調査区外にあるので、井戸の可能性も考えられる。また、東隣には SK329 があり、これは SD010 に切られ、残りは調査区外にある。

平面形は円形または楕円形と推測される。

埋土は 2 層に分層でき、主に黒褐色シルトである。

出土遺物はなく、遺構の時期は基本層序から検出面 3 の遺構であり、16 世紀後葉から末葉と推定される。

(3)　下　層

下層調査は、調査区北半のⅢ層掘削後に、Ⅳ層上面において遺構検出を行った。Ⅲ層からは遺物が出土せず、当初Ⅲ層を遺物包含層と想定していたが、本調査区では遺物包含層と判断する根拠がなく、自然堆積層と判断する。ここでは、下層調査として遺構検出を行った結果を記述する。

遺構検出の結果、遺構は確認されなかったが、樹木痕が 15 基検出された。調査は、主だった樹木痕を選別し、トレンチによる断面観察を行った。以下、樹木痕

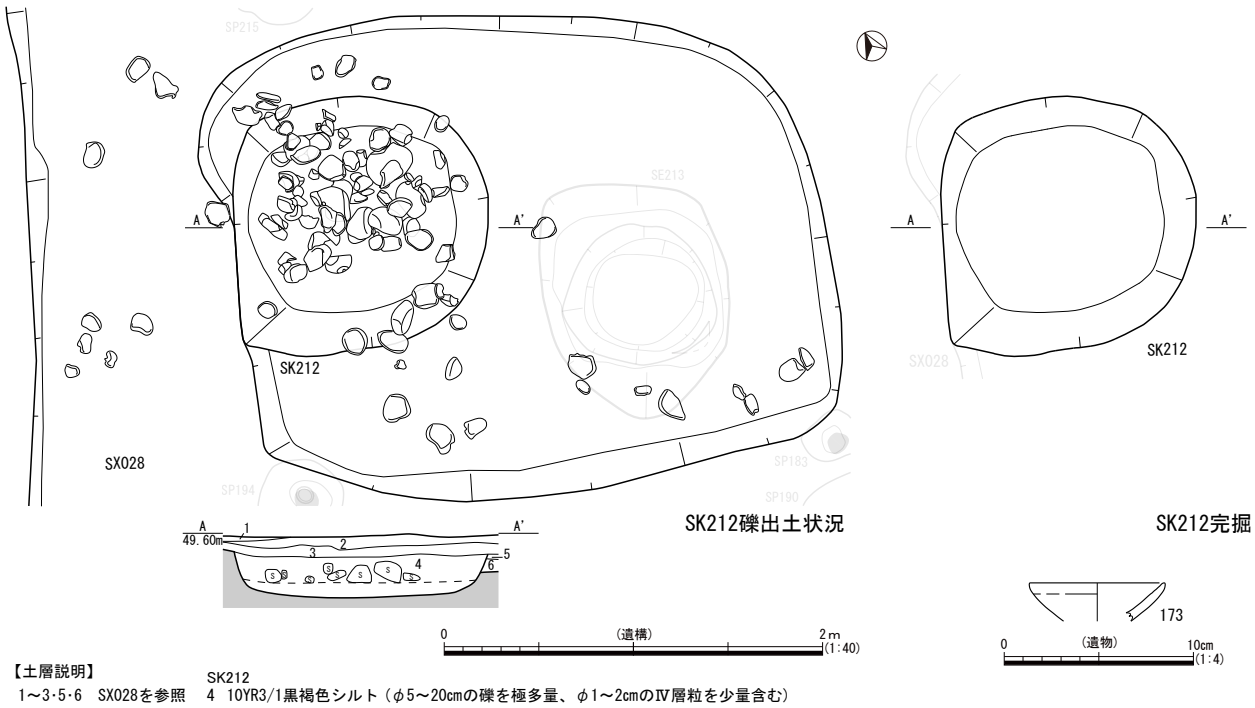


図 31　SK212 平面・断面図、出土遺物

について記述する。

樹木痕（図 33 、写真図版 16）

B-2 ～ 4、C-4 ～ 6 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。SX323 ～ 328･374、SX321･322、SX314 ～ 320 がそれぞれ重複する。新旧関係は古い順に、SX323～328がSX323→SX374→SX327→SX328→SX326→SX324→SX325、SX321･322がSX322→SX321、SX314 ～ 320 が SX314･317 → SX316 → SX315、SX317･320 → SX318 → SX319 である。

トレンチ観察は、SX324 ～ 326･328、SX319、SX321、SX314、SX315 の 5 箇所で行い、図 33 に掲載した。

また、SX324･325･374･321･314･315 は図 33 の北・西・東壁土層断面図に掲載した。SX324 ～ 328 と SX315･320･321 の平面は黄褐色で、中央がやや盛り上がり、周囲が黒色の典型的な倒木痕である。断面では、黒色が黄褐色を抱きかかえているような状態である。これに対して、SX314 は、黒色が浅く、底が波打っているような状態で、倒木ではなく、立ち枯れたか、もしくは樹種が異なるのか、どちらかであろう。

時期は、Ⅲ層中に遺物が出土していないので不明である。樹木痕の分布が調査区の北半にあり、北へ広がっていると推察される。しかし、調査区の南半の高い所にないのはなぜか、樹木痕とⅢ層、谷とⅢ層の関係についても課題である。

（４）暗渠ＳＤ０１０（図 34 、写真図版 16）

A-3、B-3･4 グリッドに位置し、Ⅰ層直下で検出された。Ⅰｂ層から掘り込まれているようにもみえるが、耕作の際、Ⅰｂ層と撹拌されているので判別不可能である。

北西 - 南東方向に走る溝で、幅 1.04m、検出長 8.83m、深さ 1.06m を測る。

埋土は大きく上層と下層に分かれる。上層は白色粘質シルトと黒褐色粘質シルトの混じる層で固く締まっている。中に人頭大の角礫が混入する。下層は灰色粘質シルトで締まりがなく、下へいくほど湿気が高くなる。埋土から遺物は出土しなかったが、底面において、杉の丸太半材（樹皮有）･ 枝・葉等が溝の方向に沿って並んで敷かれているような状態で出土した。底面では湧水が多く、いつも木材が隠れるくらいの約 20㎝は溜まる。また、水が木材等の間を流れる様子も観察できた。上層が固く締まり、底面に木材を敷き並べていることから、調査時、下層は暗渠で、上層は塀のような構造物があったと考えた。

時期はこのような上層と下層の埋土構造は井戸にもみられるので、同じ時期だと推測していたが、時期判別可能な遺物がなかったので、木材の放射性炭素年代測定を行った。その結果は第 5 章に詳述しているが、木材は 1950 年代または 1990 年代であった。

分析結果から、この溝は戦後以降に伐採された杉材を底面に敷き並べた暗渠であると推察される。しかし、埋土の状況が他の遺構と類似していることに違和感を

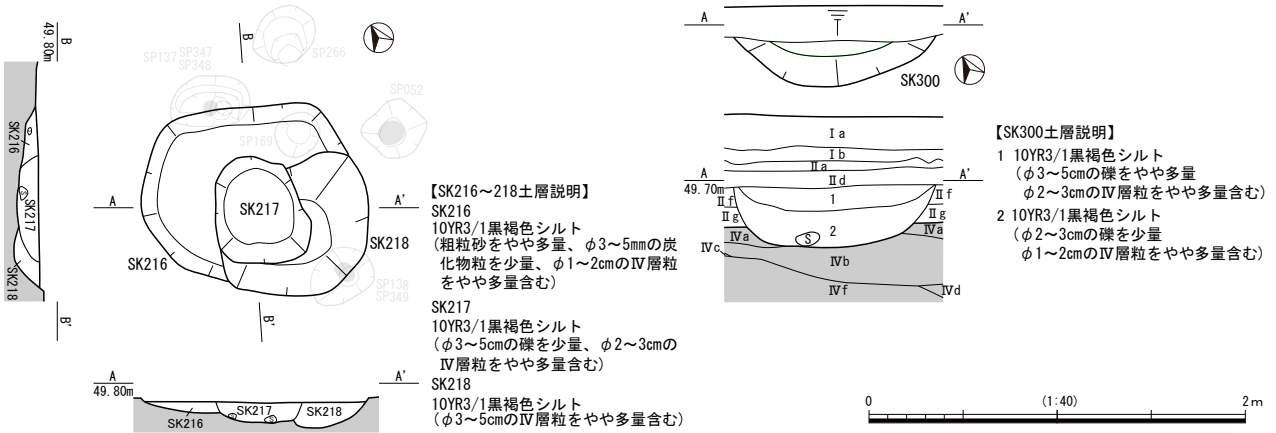


図 32　SK216･217･218、SK300 平面・断面図

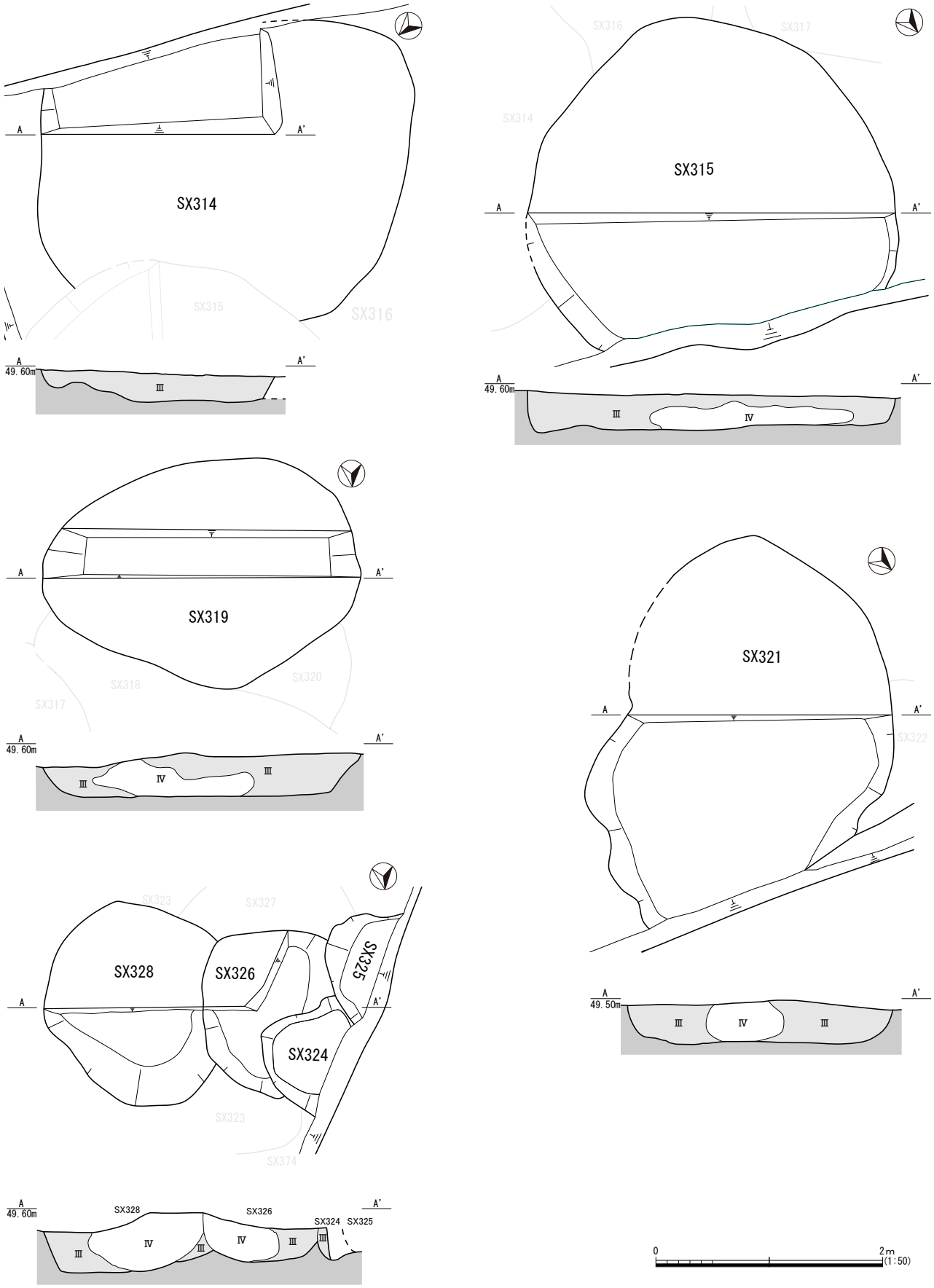


図 33　樹木痕平面・断面図

覚える。

(5)　遺構外出土遺物（図 35 、写真図版 20）

出土遺物は、越中瀬戸 12 点 (174 ～ 185)、瀬戸美濃 5 点 (186 ～ 190)、越前 3 点 (191 ～ 193)、珠洲 1 点 (194)、肥前系 1 点 (195)、備前系 1 点 (196)、中国 5 点 (197 ～ 201)、土師器 5 点 (202 ～ 206)、土製品 2 点 (207･208)、石製品 1 点 (209)、金属製品 2 点 (210･211)、須恵器 1 点 (212) である。

越中瀬戸　174･176 ～ 178 は丸皿である。174 は鉄釉、176 ～ 178 は灰釉を施す。177･178 は見込部に釉止めがみられる。178 は焼成不良である。177 の見込部には菊花文が線刻される。177･178 の高台はケズリ出しで、他も同様と考えられる。

175･179･180 は内禿皿である。175 は低い高台を貼り付け、179･180 はケズリ出し高台である。180 は高台中央をケズリ出す。175 は鉄釉、179･180 は灰釉を施す。180 の見込部には釉止めがみられる。

185 は筒形香炉である。口縁部上面に面を持ち、体部は蛇行する。ロクロ成形で、全面に鉄釉を施す。

181 ～ 184 は擂鉢である。すべてに鉄錆釉を施しているが、183･184 は摩耗によりわずかにみられる程度である。183･184 は内面に擂目がみられ、183 は 8 条 1 単位、184 は 10 条程度 1 単位である。底部には糸切り後、縁辺にケズリを施す。181 の口縁部は内傾した面をもつ。182 は端部を上方と下方につまみ出し、やや外傾した面を持つ。

時期は 16 世紀末葉から 17 世紀前葉と推定される。

瀬戸美濃　188 ～ 190 は皿である。188 は丸皿で、内面と体部外面上半に灰釉を施す。189 は高台からのケズリが体部中央までおよび稜を持つ。両面に灰釉を施す。190 は見込部縁辺に釉止めがみられ、中央は露胎である。高台は中央をケズリ込む。

186･187 は天目茶碗である。186 は小天目で、腰部に鉄錆釉を施す。時期は大窯 1 段階と推定される。187 は腰部が露胎である。釉は口縁部で褐色、下方へ濃くなり、釉端では釉溜まりが生じる。

越前　191 は擂鉢である。内面に 6 条以上 1 単位の擂目がみられる。

192･193 は甕胴部の細片のため、径を復元できない。

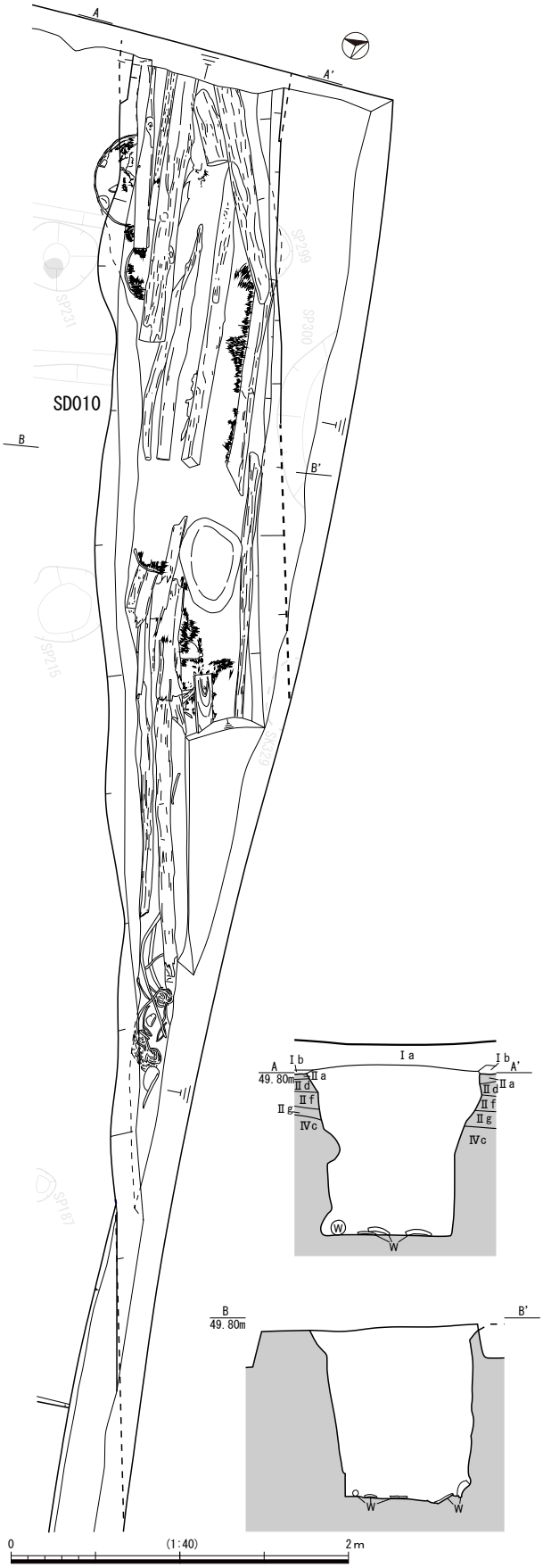


図 34　暗渠平面・断面図

両者とも外面に斜めのナデ上げ、内面に斜め上方への指圧痕がみられる。193 の内外面に鉄釉が施される。両者とも断面に漆接の痕跡が残る。また、内面には研磨痕がみられ、内面の凹凸を砥石として使用していたと考えられる。

珠洲　194 は甕胴部である。外面に平行タタキ、内面に無文当具痕がみられる。

肥前系　195 は陶器筒形碗である。見込部に鳥ヵの鉄絵を描く。内面と体部外面に灰釉を薄く施す。高台はケズリ出しで、中央が頭巾状に残る。

備前系　196 は擂鉢である。胎土等から加賀作見窯産と推定される。内面に 3 条以上の擂目がみられる。両面にロクロ目が明瞭に残る。時期は 16 世紀末葉から 17 世紀初頭と推定される。

中国　197 は青花碗の口縁部の細片のため、径は復元できない。口縁部内面に 1 条の圏線がみられる。

198 は青磁碗の腰部である。

199 ～ 201 は白磁である。口縁部は大きく外反する。199 は見込部に釉止めがみられ、見込部は露胎である。また、断面には漆接の痕跡がみられる。

土師器　202 ～ 206 は灯明皿である。口縁部内面は 202･204 ～ 206 で共通し、凹線が巡る。203 は外面に稜をもつ三角形を呈する。口縁部は横ナデ、体部から底部は指圧痕がみられる。202 は口縁部に、204 は口縁部から底部の一部に油・煤が付着する。204 の口縁部外面には段を持つ。

土製品　207･208 は坩堝である。てづくね成形である。207 の口縁部には気泡がみられる。

石製品　209 は板状砥石である。全面砥面として使用される。やや粗い砂岩製である。

金属製品　210 は鉄製和釘である。頭部は潰れている。断面形は平らな板状である。

211 は銅製鉢と考えられる。口縁部の上面に面を持ち、内側に伸びる。体部はやや内湾する。

須恵器　212 は杯の細片であるため、径は復元できない。体部はやや外傾する。器種は杯 A または杯 B 身である。時期は 8 世紀から 9 世紀と推定される。

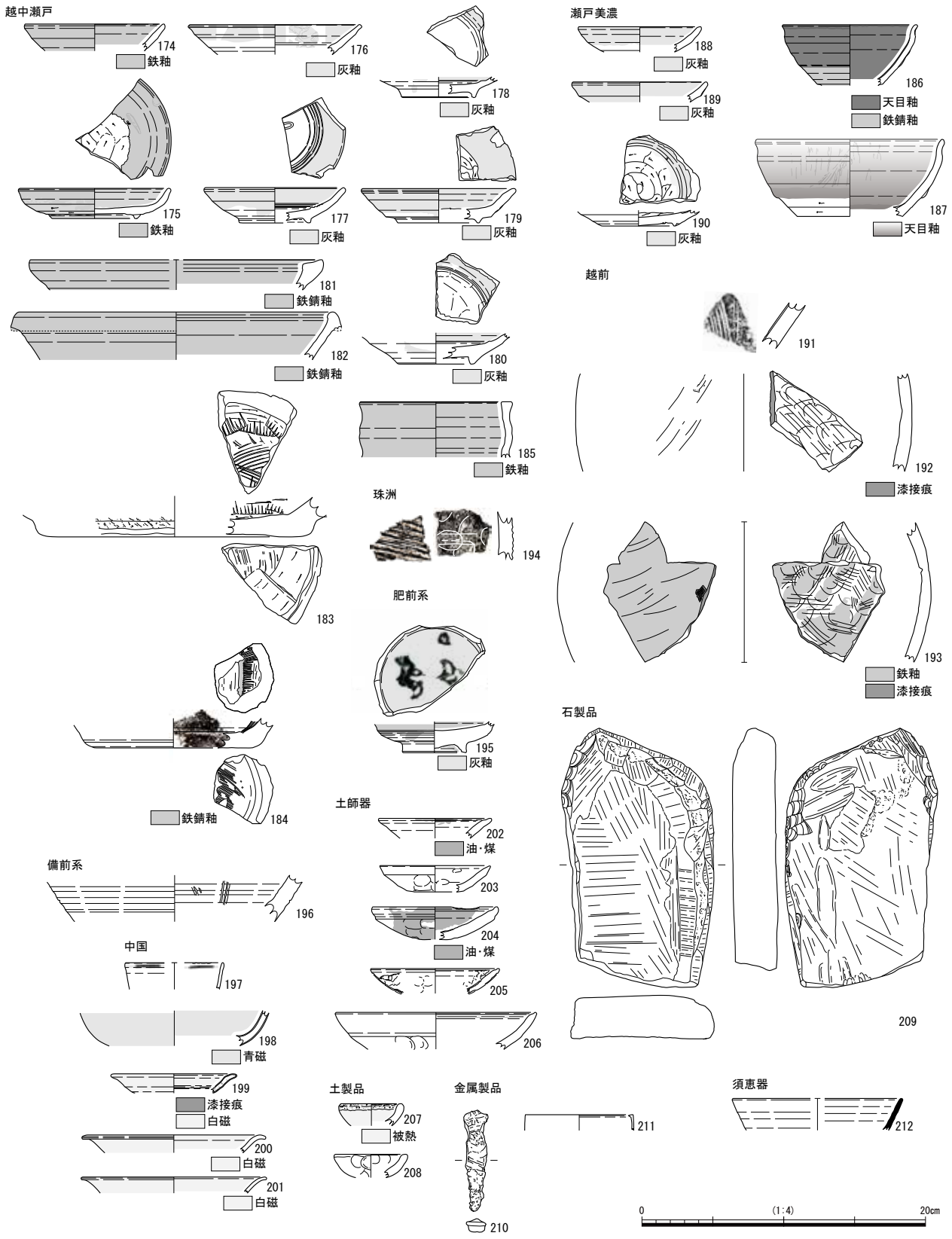

越中瀬戸
174
鉄釉
176
灰釉
178
灰釉
175
鉄釉
177
灰釉
179
灰釉
181
鉄錆釉
182
鉄錆釉
180
灰釉
185
鉄釉
183
184
鉄錆釉
備前系
196
中国
197
198
青磁
199
漆接痕
白磁
200
白磁
201
白磁
瀬戸美濃
188
灰釉
189
灰釉
186
天目釉
鉄錆釉
190
灰釉
187
天目釉
越前
191
192
漆接痕
193
鉄釉
漆接痕
珠洲
194
肥前系
195
灰釉
土師器
202
油・煤
203
204
油・煤
205
206
石製品
209
土製品
207
被熱
208
金属製品
210
211
須恵器
212
0
(1:4)
20cm

図 35　遺構外出土遺物

表４　遺構一覧表 (1)

井戸

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SE 002	C･D-5	1.56	0.99	1.26	陶	
SE 039	D-2	1.29	0.93	1.28	陶、木	
SE 046	D-2	0.98	0.72	1.16	陶	
SE 047	D-2･3	1.29	1.09	1.55	石、木	
SE 131	D-4	0.73	0.62	1.51	陶、石	
SE 133	C-4	0.74	0.72	1.40	陶、木	
SE 175	D-3	1.04	1.02	1.53	陶、石、木	
SE 201	C-5	1.04	0.87	1.53	陶、石、木	
SE 213	B-3･4	1.12	0.98	1.18	陶、石、木	
SE 214	B･C-4	1.19	1.09	1.51	陶、金、木	

土坑

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SK 001	D･E-5	1.27	1.03	0.35	陶	
SK 173	B･C-5	1.52	0.94	0.15	陶	
SK 212	B-3	1.33	1.33	0.15	陶	
SK 216	C-5	1.09	0.90	0.09	―	
SK 217	C-5	0.56	0.50	0.13	―	
SK 218	C-5	0.76	0.75	0.16	―	
SK 300	A-3	1.08	0.43	0.34	―	
SK 329	A-3	0.56	―	0.15	―	

樹木痕

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SX 314	C-5･6	3.25	2.67	0.29	―	
SX 315	B･C-5	3.27	2.99	0.37	―	
SX 316	C-5	2.53	1.97	―	―	
SX 317	C-4･5	3.36	2.51	―	―	
SX 318	C-4	3.34	1.71	―	―	
SX 319	C-4	2.80	2.01	0.39	―	
SX 320	C-4	0.72	0.98	―	―	
SX 321	B-4	3.37	2.34	0.37	―	
SX 322	B-4	1.38	1.34	―	―	
SX 323	B-3	3.51	3.00	―	―	
SX 324	B-3	0.97	0.39	0.36	―	
SX 325	B-2･3	1.12	0.62	0.33	―	
SX 326	B-3	1.47	1.17	0.43	―	
SX 327	B-3	1.57	0.63	―	―	
SX 328	B-3	1.78	1.42	0.56	―	
SX 374	B-3	1.17	1.05	―	―	

暗渠

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SD 010	A･B-3,B4	8.83	1.04	1.06	―	1950年以降

掘立柱建物

遺構名	グリッド	規模（m）			備考
		長軸	短軸	柱間	
SB 380	C～E-2･3	4.90	3.25	0.85～2.60	区画1
SB 381	B･C-2･3	5.90	(1.35)	1.90～2.15	区画2
SB 382	C-2･3 D～2	5.90	(1.90)	1.15～1.90	区画2
SB 383	B-3･4 C-3～5 D-4･5	(13.00)	5.30	0.70～3.80	区画3
SB 384	D-3～5 E-3･4	5.45	3.45	0.90～3.20	区画4

柱穴（１）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 003	C-3	0.45	0.29	0.35	―	柱･礎石
SP 004	D-2	0.57	0.38	0.29	―	柱
SP 005	C-2	0.39	0.32	0.28	―	柱
SP 007	D-2	0.45	0.42	0.32	陶	柱
SP 008	D-2	0.44	0.24	0.14	陶	
SP 009	C-2	0.19	0.16	0.23	―	
SP 011	C-2	0.30	0.25	0.25	―	柱
SP 012	D-2	0.15	0.14	0.06	―	
SP 013	C-3	0.45	0.32	0.30	―	柱

柱穴（２）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 014	C-3	0.39	0.33	0.21	―	
SP 015	C-3	0.41	0.37	0.14	―	柱
SP 017	C-2	0.41	0.27	0.28	―	柱
SP 018	C-2	0.42	0.37	0.40	―	柱
SP 019	C-3	0.46	0.30	0.39	―	柱
SP 020	C-3	0.46	0.33	0.17	石	柱･礎石
SP 021	C-3	0.37	0.20	0.46	―	柱
SP 023	D-2	0.77	0.55	0.28	陶	柱
SP 024	C-3･4	0.43	0.39	0.14	―	
SP 025	C-3	0.59	0.51	0.36	陶	柱･礎石
SP 026	C-3	0.22	0.21	0.22	陶	柱
SP 027	C-3	0.41	0.30	0.33	金	柱
SP 029	C-3	0.46	0.43	0.39	―	柱
SP 030	C-2	0.19	0.17	0.19	―	礎石
SP 031	D-5	0.19	0.19	0.11	―	
SP 033	C-2	0.65	0.47	0.24	陶	
SP 034	C-2	0.62	0.57	0.36	陶	
SP 035	C-2	0.65	0.65	0.36	―	
SP 036	C-3	0.31	0.26	0.12	―	礎石
SP 037	D-2	0.60	0.56	0.30	―	柱
SP 038	C-2	0.49	0.46	0.15	―	
SP 040	C-3	0.40	0.34	0.32	―	柱
SP 041	C-4	0.35	0.29	0.46	―	柱
SP 042	D-2	0.40	0.33	0.20	―	
SP 043	C-3	0.28	0.20	0.28	―	
SP 044	D-5	0.21	0.17	0.18	―	
SP 045	C-2	0.46	0.40	0.12	―	
SP 048	D-3	0.92	0.33	0.25	―	
SP 049	C-2	1.56	0.83	0.67	陶	
SP 050	B-2･3	1.94	1.22	0.84	陶	
SP 051	C-5	0.26	0.15	0.22	―	
SP 052	C-5	0.29	0.28	0.16	―	柱
SP 053	C-5	0.22	0.20	0.18	―	柱
SP 054	C-4	0.26	0.23	0.14	―	
SP 055	C-5	0.35	0.31	0.10	―	
SP 056	C-5	0.25	0.22	0.33	―	
SP 057	C･D-5	0.26	0.16	0.09	―	
SP 058	D-5	0.38	0.28	0.32	陶	柱
SP 059	C-5	0.51	0.41	0.40	―	柱
SP 060	C-5	0.25	0.20	0.09	―	
SP 061	C-5	0.22	0.20	0.11	―	
SP 062	C-5	0.23	0.20	0.21	―	柱
SP 063	C-5	0.33	0.28	0.15	―	柱
SP 064	C-5	0.44	0.39	0.16	―	礎石
SP 065	C-4･5	0.35	0.30	0.21	―	
SP 066	C-4･5	0.26	0.25	0.14	―	
SP 067	C-4	0.24	0.22	0.18	―	
SP 068	C-4	0.62	0.60	0.24	陶	柱
SP 069	C-4	0.55	0.33	0.36	―	杭
SP 070	C-4	0.27	0.23	0.22	―	柱
SP 071	C-4	0.50	0.39	0.59	―	柱
SP 072	C-4	0.31	0.26	0.24	―	
SP 073	C-4	0.68	0.47	0.22	―	
SP 074	D-4	0.19	0.19	0.20	―	
SP 075	C-4	0.44	0.23	0.24	―	
SP 076	C-4	0.25	0.22	0.36	―	
SP 077	D-5	0.20	0.20	0.10	―	
SP 078	C-5	0.26	0.25	0.16	―	
SP 079	C-4	0.38	0.38	0.25	陶	柱
SP 080	C-4	0.43	0.34	0.29	―	柱
SP 081	C-5	0.57	0.51	0.10	―	
SP 082	B-4	0.79	0.46	0.22	―	
SP 083	D-5	0.36	0.28	0.25	陶	柱
SP 084	C-4	0.46	0.34	0.22	―	
SP 085	C-4	0.26	0.27	0.16	―	柱
SP 086	C-5	0.31	0.26	0.27	―	柱
SP 087	C-5	0.25	0.20	0.24	―	柱
SP 088	D-5	0.18	0.16	0.12	―	
SP 089	D-5	0.32	0.30	0.39	―	
SP 090	D-5	0.23	0.26	0.48	―	
SP 091	D-5	0.44	0.32	0.34	―	柱
SP 092	D-5	0.20	0.18	0.14	―	
SP 093	D-5	0.14	0.12	0.07	―	
SP 094	D-5	0.19	0.19	0.18	―	柱

表５　遺構一覧表 (2)

柱穴（３）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 095	D-4	0.33	0.29	0.25	—	柱
SP 096	D-4	0.21	0.18	0.25	—	
SP 097	D-4	0.16	0.16	0.12	—	
SP 098	D-4	0.32	0.25	0.20	—	柱
SP 099	D-5	0.29	0.25	0.12	—	
SP 100	D-5	0.18	0.12	0.35	—	
SP 101	D-4･5	0.31	0.20	0.33	—	柱
SP 102	D-4	0.31	0.30	0.26	—	柱
SP 103	D-4	0.30	0.23	0.29	—	柱
SP 104	E-4	0.19	0.16	0.12	—	
SP 105	E-4	0.19	0.19	0.10	—	
SP 106	E-4	0.22	0.21	0.21	—	
SP 107	E-4	0.29	0.24	0.09	—	
SP 108	D-4	0.15	0.14	0.11	—	
SP 109	D-4	0.22	0.16	0.20	—	柱
SP 110	D-4	0.33	0.25	0.22	陶	柱
SP 111	D-4	0.20	0.18	0.12	—	柱
SP 112	D-3･4	0.53	0.41	0.12	—	
SP 113	D-4	0.28	0.22	0.15	—	柱
SP 114	D-4	0.19	0.14	0.07	—	
SP 115	D･E-4	0.21	0.16	0.10	—	
SP 116	D-3	0.34	0.28	0.31	—	柱
SP 117	E-5	0.15	0.12	0.17	—	
SP 118	D-5	0.16	0.13	0.06	—	
SP 119	E-4	0.40	0.32	0.10	—	柱･礎石
SP 120	D-4	0.25	0.20	0.26	—	柱
SP 121	D-4	0.21	0.20	0.24	—	柱･根石
SP 122	D-4	0.20	0.18	0.19	—	柱
SP 123	E-3	0.31	0.23	0.07	—	
SP 124	E-3	0.16	0.12	0.08	—	
SP 125	E-3	0.21	0.18	0.12	—	
SP 126	D-4	0.17	0.15	0.26	陶	
SP 127	D-3	0.23	0.22	0.10	—	
SP 128	D-3	0.22	0.11	0.09	—	
SP 129	D-4	0.19	0.19	0.12	—	
SP 130	E-3	0.41	0.36	0.12	—	
SP 132	D-3	0.26	0.24	0.22	—	
SP 134	D-4	0.22	0.22	0.13	—	柱
SP 135	D-4	0.32	0.29	0.18	—	柱
SP 136	D-4	0.29	0.27	0.17	陶	柱
SP 137	C-5	0.41	0.26	0.45	—	柱･杭
SP 138	C･D-5	0.35	0.27	0.34	陶	柱
SP 139	D-4	0.17	0.16	0.08	—	
SP 140	D-4	0.17	0.17	0.18	—	柱
SP 141	D-4	0.19	0.16	0.26	—	
SP 142	D-4	0.15	0.10	0.09	—	
SP 143	D-4	0.26	0.21	0.21	—	柱
SP 144	D-4	0.29	0.16	0.17	—	柱
SP 145	D-4	0.26	0.13	0.12	—	
SP 146	D-3	0.26	0.23	0.22	—	
SP 147	D-3	0.27	0.24	0.22	—	
SP 148	D-3	0.29	0.23	0.11	—	
SP 149	E-3	0.25	0.20	0.08	—	
SP 150	D･E-3	0.23	0.23	0.11	—	
SP 151	D-3	0.25	0.21	0.14	—	
SP 152	C-6	0.34	0.28	0.14	—	礎石
SP 153	D-3	0.32	0.29	0.16	—	柱
SP 154	D-3	0.48	0.29	0.35	—	柱
SP 155	D-3	0.52	0.45	0.30	—	根石
SP 156	D-3	0.29	0.27	0.25	—	
SP 157	D-3	0.27	0.20	0.14	—	
SP 158	D-3	0.32	0.27	0.23	—	柱
SP 159	D-4	0.21	0.16	0.22	—	柱
SP 160	C･D-3	0.52	0.39	0.69	—	
SP 161	D-3	0.31	0.27	0.20	—	柱
SP 162	D-4	0.14	0.12	0.09	—	
SP 163	D-3	0.23	0.20	0.18	—	
SP 164	B-5	0.59	0.51	0.38	陶	柱
SP 165	C-4	0.35	0.31	0.24	陶	
SP 166	C-5	0.32	0.31	0.12	—	柱
SP 167	C-5	0.40	0.29	0.21	—	柱
SP 168	C-4	0.40	0.30	0.18	—	根石
SP 169	C-5	0.23	0.23	0.14	—	
SP 170	C-4	0.23	0.17	0.26	—	

柱穴（４）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 171	C-6	0.36	0.26	0.23	—	柱
SP 172	C-6	0.38	0.36	0.16	—	柱･礎石
SP 174	D-3	0.23	0.17	0.30	—	
SP 176	D-3	0.33	0.26	0.40	—	
SP 177	C-2	0.32	0.30	0.20	—	柱･礎石
SP 178	C-2	0.58	0.58	0.20	—	根石
SP 179	C-2	0.40	0.38	0.13	陶	柱
SP 180	D-2	0.41	0.36	0.24	—	柱･礎石
SP 181	D-3	1.06	0.87	0.38	—	柱
SP 182	D-2	0.41	0.30	0.21	—	
SP 183	C-4	0.28	0.24	0.11	—	柱
SP 184	C-2	0.35	0.26	0.25	—	柱
SP 185	C-2	0.68	0.49	0.43	—	根石
SP 186	B-4	0.42	0.30	0.22	—	
SP 187	B-4	0.18	0.17	0.18	—	
SP 188	B-4	0.21	0.21	0.18	—	杭
SP 189	B-4	0.17	0.14	0.09	—	杭
SP 190	C-4	0.46	0.37	0.10	—	柱
SP 191	C-4	0.81	0.68	0.77	陶	柱･根石
SP 192	C-3	0.38	0.34	0.24	石	柱･礎石
SP 193	C-4	0.41	0.31	0.18	—	柱
SP 194	B-3	0.47	0.42	0.49	—	柱
SP 195	C-2	0.13	0.11	0.20	—	杭
SP 196	C-2	0.34	0.28	0.19	—	杭
SP 197	C-2	0.86	0.60	0.42	—	柱
SP 198	C-2	0.55	0.51	0.35	—	
SP 199	C-2	0.57	0.45	0.41	—	
SP 200	C-2	0.54	0.52	0.27	—	根石
SP 202	B-4	0.20	0.18	0.19	—	杭
SP 203	B-4	0.17	0.09	0.19	—	杭
SP 204	D-5	0.25	0.19	0.23	—	
SP 205	E-4	0.54	0.31	0.78	—	
SP 206	D-5	0.22	0.21	0.12	—	
SP 207	C-6	0.20	0.19	0.36	—	柱･杭
SP 208	C-5･6	0.37	0.30	0.40	—	柱･杭
SP 209	C-5･6	0.18	0.17	0.57	—	柱
SP 210	C-3	0.50	0.31	0.11	陶	
SP 211	C-3	0.61	0.58	0.11	—	
SP 215	B-3	0.49	0.43	0.52	—	
SP 219	C-3	0.39	0.25	0.26	—	柱
SP 220	C-3	0.41	0.31	0.29	—	
SP 221	C-3	0.29	0.27	0.26	—	柱
SP 222	D-4	0.17	0.17	0.23	—	
SP 223	C-3	0.35	0.29	0.12	—	
SP 224	C-2	0.41	0.32	0.22	—	柱
SP 225	B-3	0.28	0.26	0.16	—	柱
SP 226	C-5･6	0.25	0.24	0.26	—	柱･杭
SP 227	E-3	0.58	0.34	0.39	—	柱
SP 228	C-2	0.39	0.31	0.30	—	柱
SP 229	B-3	0.23	0.19	0.16	—	柱
SP 230	B-3	0.22	0.18	0.10	—	柱
SP 231	B-3	0.44	0.39	0.30	—	柱
SP 232	C-5	0.31	0.31	0.30	—	柱
SP 233	C-3	0.31	0.25	0.16	—	柱
SP 234	D-5	0.20	0.17	0.10	—	
SP 235	C-3	0.33	0.31	0.14	—	柱
SP 236	C-3	0.22	0.21	0.28	—	柱
SP 237	C-3	0.20	0.17	0.11	—	
SP 238	C-5	0.18	0.16	0.12	—	
SP 239	D-4	0.26	0.23	0.22	—	
SP 240	B-4	0.39	0.37	0.17	陶	柱
SP 241	B-2	0.74	—	0.42	—	柱
SP 242	B-2	0.37	—	0.58	木	柱材
SP 243	D-4	0.25	0.21	0.18	—	
SP 244	C-4	0.19	0.18	0.14	—	
SP 245	C-4	0.23	0.20	0.09	—	
SP 246	C-4	0.18	0.14	0.13	—	
SP 247	C-5	0.19	0.19	0.40	—	
SP 248	C-5	0.29	0.27	0.09	—	

表６　遺構一覧表 (3)

柱穴（５）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 249	C-5	0.36	0.23	0.16	—	柱
SP 250	C-5	0.24	0.20	0.12	—	
SP 251	C-5	0.20	0.19	0.08	—	
SP 252	C-5	0.23	0.21	0.10	—	
SP 253	C-4･5	0.22	0.21	0.12	—	
SP 254	D-4	0.18	0.16	0.10	—	柱
SP 255	D-4	0.44	0.31	0.32	—	柱
SP 256	D-4	0.18	0.18	0.08	—	
SP 257	D-3･4	0.20	0.19	0.10	—	
SP 258	D-3	0.21	0.15	0.14	—	
SP 259	D-3	0.16	0.15	0.22	—	
SP 260	D-3	0.18	—	0.20	—	
SP 261	D-3	0.20	—	0.22	—	柱
SP 262	C-3	0.24	0.21	0.13	—	
SP 263	C-3	0.28	0.22	0.28	—	
SP 264	D-3	0.27	0.24	0.19	—	柱
SP 265	C-3	0.19	0.18	0.06	—	
SP 266	C-5	0.35	0.29	0.22	—	
SP 267	C-3	0.38	0.23	0.20	—	柱
SP 268	D-3	0.20	—	0.33	—	
SP 269	D-3	0.21	0.21	0.08	—	
SP 270	D-2	0.17	0.17	0.09	—	
SP 271	D-2･3	0.27	0.18	0.10	—	
SP 272	D-2	0.29	0.25	0.07	—	
SP 273	D-2	0.25	0.18	0.07	—	
SP 274	D-2	0.27	0.17	0.09	—	
SP 275	D-2	0.21	0.21	0.11	—	
SP 276	D-2	0.18	0.15	0.13	—	
SP 277	D-2	0.34	0.25	0.34	—	
SP 278	B-3	0.26	0.23	0.08	—	柱
SP 279	C-3	0.20	0.18	0.09	—	
SP 280	C-3	0.29	0.20	0.16	—	
SP 281	C-3	0.20	0.17	0.14	—	
SP 282	C-2･3	0.35	0.29	0.16	—	柱･礎石
SP 283	C-3	0.22	0.19	0.10	—	
SP 284	D-3	0.21	0.21	0.13	—	柱
SP 285	C-4	0.40	0.19	0.20	—	柱
SP 286	C-4	0.34	0.26	0.16	—	
SP 287	B-2	0.35	—	0.41	—	柱
SP 288	B-2	0.58	—	0.62	—	柱
SP 289	B-2	0.15	—	0.19	—	
SP 290	B-2	0.34	—	0.19	—	
SP 291	C-2	0.46	—	0.22	—	礎石
SP 292	D-2	0.45	0.29	0.39	—	
SP 293	C-2	0.34	—	0.20	—	
SP 294	C-4	0.19	0.18	0.22	—	
SP 295	C-4	0.23	0.17	0.14	—	
SP 296	C-5	0.21	0.20	0.08	—	
SP 297	C-5	0.23	0.19	0.11	—	
SP 298	C-5	0.41	0.28	0.17	—	柱
SP 299	A-3	0.32	0.13	0.18	—	
SP 301	B-4･5	0.24	—	0.24	—	
SP 302	B-5	0.26	—	0.34	—	
SP 303	C-5	0.40	—	0.17	—	礎石
SP 304	C-5	0.22	—	0.10	—	
SP 305	C-3	0.19	0.18	0.09	—	
SP 306	C-3	0.19	0.17	0.20	—	柱
SP 307	C-5	0.18	—	0.19	—	
SP 308	D-5	0.27	—	0.09	—	
SP 309	D-5	0.22	—	0.17	—	
SP 310	D-5	0.15	—	0.31	—	
SP 311	C-5	0.20	0.17	0.14	—	
SP 312	C-5	0.22	0.17	0.17	—	柱
SP 313	C-4	0.20	0.18	0.07	—	

柱穴（６）

遺構名	グリッド	規模（m）			出土遺物 陶:陶磁器･土器 石:石製品 金:金属製品、木:木製品	備考
		長軸	短軸	深さ		
SP 330	E-4	0.62	—	0.26	—	
SP 331	E-2･3	0.31	0.14	0.40	—	柱
SP 332	D-3	0.28	0.19	0.37	—	柱･礎石
SP 333	C-2	0.51	0.42	0.21	—	柱
SP 334	C-4	0.28	0.27	0.25	—	柱
SP 335	D-2	0.26	0.18	0.22	—	
SP 336	D-2	0.40	0.34	0.35	—	柱
SP 337	C-2	0.71	0.71	0.27	—	柱
SP 338	C-3	0.25	0.16	0.18	—	
SP 339	C-2	0.51	0.42	0.40	—	
SP 340	D-2	0.38	0.30	0.36	—	柱
SP 341	D-2	0.33	0.29	0.26	—	柱
SP 342	D-2	0.29	0.22	0.21	—	
SP 343	C-4	0.27	0.21	0.17	—	柱･礎石
SP 344	C-4	0.19	0.18	0.18	—	柱
SP 345	C-3	0.37	0.37	0.16	—	柱
SP 346	D-2	0.19	0.17	0.16	—	
SP 347	C-4	0.07	0.07	0.14	—	柱･杭
SP 348	C-4	0.10	0.06	0.45	—	柱･杭
SP 349	D-5	0.25	0.21	0.42	—	柱
SP 350	D-3	0.22	0.20	0.05	—	
SP 351	D-3	0.32	0.21	0.22	—	
SP 352	C･D-3	0.34	0.31	0.42	—	
SP 353	C-3	0.36	0.31	0.50	—	柱
SP 354	C-3	0.24	0.19	0.28	—	
SP 355	D-4	0.28	0.24	0.30	—	
SP 356	C-3	0.12	0.11	0.18	—	柱
SP 357	C-2	0.28	0.22	0.18	—	柱
SP 358	C-2	0.21	0.18	0.26	—	
SP 359	C-2	0.24	0.17	0.28	—	
SP 360	C-2	0.28	0.25	0.17	—	
SP 361	B-4	0.28	0.20	0.24	—	柱
SP 362	B-4	0.20	0.17	0.28	—	
SP 363	D-3	0.15	0.13	0.18	—	柱
SP 364	C-2	0.19	0.15	0.18	—	柱
SP 365	D-3	0.04	0.04	0.18	—	柱
SP 366	C-2	0.21	0.19	0.11	—	
SP 367	C-3	0.19	0.15	0.27	—	柱
SP 368	C-3	0.13	0.11	0.14	—	柱
SP 369	D-3	0.48	0.42	1.20	—	柱
SP 370	C-4	0.13	0.11	0.19	—	柱
SP 371	C-5	0.32	0.31	0.16	—	柱
SP 372	C-3	0.14	0.12	0.22	—	
SP 373	C-4	0.17	0.13	0.20	—	
SP 375	C-2	0.10	0.09	0.15	—	
SP 376	C-3	0.09	0.08	0.14	—	柱
SP 377	D-3	0.20	—	0.18	—	
SP 378	D-1	0.44	—	0.21	—	

表７　遺物観察表（1）

土器･陶磁器類（１）

報告番号	グリッド	基本層序	遺構名 層　位	種類 器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	釉薬	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
1	T1	—	—	陶 皿	口径:(10.7)、器高:(2.05)、底径:(6.2)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	鉄	やや粗 石英	良好 やや軟	口～底	越中瀬戸	
2	T1	—	—	土 灯明皿	口径:(11.7)、器高:1.5、底径:(6.8)	内･外:横ナデ、指圧痕		密	良好	口～底		
3	T5	—	—	陶 甕	口径:(50.3)、器高:(8.45)、底径:-	内:ナデ、指圧痕 外:平行タタキ		粗 石英 雲母	良好	口～肩	珠洲	
5	D-2	—	SP007 SP023	陶 碗	口径:11.5、 器高:5.3、 底径:-	内･外:ロクロナデ	長石	密	良好 軟質	口～体	瀬戸美濃 志野	
6	D-2	—	SP008	陶 皿	口径:10.0、 器高:3.2、 底径:3.4	内･外:ロクロナデ 外:削出し	灰	密	良好	口～底	肥前系	
7	C-3	—	SP210 1層	陶 皿	口径:(9.8)、器高:(1.5)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	やや密	良好 やや硬	口～体	越中瀬戸	
8	D-2	—	SP023	土 灯明皿	口径:(7.0)、 器高:(1.5)、 底径:-	内･外:横ナデ、油･煤		密	良好	口～体		
9	C-2	—	SP034 一括	土 灯明皿	口径:-、 器高:(2.2)、 底径:-	内･外:横ナデ、指圧痕 油･煤		密	良好	口～体		
10	C-2	—	SP049	土 灯明皿	口径:(10.5)、器高:(2.3)、底径:-	内:横ナデ、剥離 外:ロ:横ナデ、指圧痕		密	良好	口～体		
11	C-2	—	SP179	土 灯明皿	口径:-、器高:(1.7)、底径:-	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密	良好	口～底		
12	B-3	—	SP050	陶 壺	口径:-、器高:(5.1)、底径:-	内･外:ロクロナデ 粘土紐痕		密	良好 還元	胴	珠洲	
13	B-3	—	SP050	青花 皿	口径:-、 器高:(2.2)、 底径:-	内･外:ロクロナデ、染付	透明	密	不良 軟	口	中国	
15	C-3	—	SP025	陶 皿	口径:-、 器高:(1.6)、 底径:(7.0)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	密 石英	良好	底	瀬戸美濃	
16	C-3	—	SP026	陶 壺･甕	口径:-、 器高:(6.2)、 底径:-	内:平行タタキ 外:無文当具痕 研磨		密	良好	胴	珠洲	砥石転用
17	C-4	—	SP191	陶 甕	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:ナデ 外:平行タタキ		密 石英	良好 還元	胴	珠洲	
18	C-3	—	SP026	土 灯明皿	口径:(8.4)、 器高:(1.6)、 底径:-	内･外:横ナデ		密	良好	口		
19	C-4	—	SP079	土 灯明皿	口径:(9.0)、器高:(1.5)、底径:(4.6)	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密 雲母	良好	口～底		
20	D-5	—	SP138	青花 皿	口径:(9.8)、器高:(2.8)、底径:(2.7)	内:ロクロナデ、染付 外:ロクロナデ	透明	密	良好	口～底		
25	D-4	—	SP126 1層	陶 皿	口径:(10.0)、器高:(2.1)、底径:(5.6)	内:ロクロナデ、菊花文 釉止め 外:ロクロナデ、削り	灰	密 石英	良好 硬	口～底	越中瀬戸	
26	D-5	—	SE002	青花 碗	口径:-、 器高:(2.0)、 底径:-	内･外:ロクロナデ 外:染付	透明	密	良好	体	中国	
27	D-2	—	SE039 上層	陶 皿	口径:(10.9)、器高:(2.3)、底径:(2.8)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	鉄	やや密 石英	良好 やや硬	口～底	越中瀬戸	
28	D-2	—	SE039 上層	陶 壺	口径:-、胴最大径:(16.0)、器高:(4.8) 底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	鉄錆	やや粗 石英	良好 やや軟	口～体	越中瀬戸	
29	D-2	—	SE039 上層	土 灯明皿	口径:(9.7)、器高:(1.8)、底径:-	内:横ナデ、剥離、被熱 外:横ナデ、指圧痕		密 雲母	良好	口～体		
30	D-2	—	SE039 上層	土 灯明皿	口径:(10.4)、 器高:2.0、 底径:(6.0)	内･外:横ナデ、指圧痕 油･煤		密	良好	口～底		
35	D-2	—	SE046 上層	陶 皿	口径:11.0、器高:3.7～4.1、底径:4.3	内･外:ロクロナデ 外:削り出し	灰	やや粗	良好	口～底	肥前系	
51	D-4	—	SE131 下層	陶 碗	口径:-、器高:(3.3)、 底径:-	内･外:ロクロナデ、灰釉	灰	緻密	良好	腰	越中瀬戸	
52	D-4	—	SE131 下層	陶 擂鉢	口径:-、器高:(4.85)、底径:-	内:擂目、ロクロナデ 鉄錆釉 外:ロクロナデ、鉄錆釉	鉄錆	やや粗　石 英	良好 やや軟 質	体	越中瀬戸	
53	D-4	—	SE131 下層	陶 皿	口径:(10.2)、器高:(1.8)、底径:(6.3)	内:ロクロナデ、灰釉 外:ロクロナデ 体下～底:削り、体:灰釉	灰	密	やや良好 軟	口～底	瀬戸美濃	
54	D-4	—	SE131 上層	陶 甕	口径:-、器高:(4.05)、底径:-	内:無文当具（凹凸浅） 外:平行タタキ		やや密 石英	還元	胴	珠洲	
55	D-4	—	SE131 上層	陶 擂鉢	口径:(22.4)、 器高:(5.6)、 底径:-	内:擂目、ロクロナデ 外:ロクロナデ、縦ナデ		密	良好 やや硬	口～体	越前	
56	D-4	—	SE131 上層	陶 擂鉢	口径:-、器高:(4.9)、 底径:-	内:擂目、鉄錆釉 外:ロクロナデ、工具痕	鉄錆	密	良好 硬質	体	越前	
57	D-4	—	SE131 上層	陶 擂鉢	口径:-、 器高:(3.6)、 底径:-	内:擂目、ロクロナデ 外:ロクロナデ、工具痕	(鉄錆)	密	良好	底	越前	
58	D-4	—	SE131 上層	陶 壺	口径:(19.4)、器高:(3.0)、底径:-	内･外:ロクロナデ、鉄釉	鉄	やや粗 石英	良好	口	越前	
59	D-4	—	SE131 上層	陶 甕	口径:-、 器高:(8.4)、底径:-	内:横ナデ 外:斜め板ナデ		雲母 やや粗	良好 硬質	胴	越前	断面 漆接ぎ
60	D-4	—	SE131 下層	陶 甕	口径:-、器高:(4.0)、底径:(28.0)	内:横ナデ、降灰 外:縦･斜めナデ、板ナデ		密	良好 硬	底	越前	
61	D-4	—	SE131 上層	土 灯明皿	口径:(9.0)、器高:(2.2)、底径:(6.0)	内:横ナデ 外:横ナデ、不定方向ナデ		密 雲母	良好	口～底		
68	C-4	—	SE133	陶 天目茶碗	口径:(10.5)、器高:(2.5)、底径:-	内外:ロクロナデ 鉄釉	鉄	やや密	良好 やや硬	口	瀬戸美濃	

表８　遺物観察表（2）

土器･陶磁器類（２）

報告番号	グリッド	基本層序	遺構名 層　位	種類 器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	釉薬	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
69	C-4	—	SE133 SE201	陶 丸碗	口径:(10.4)、器高:6.55、 底径:4.8	内:ロクロナデ 外:削り	灰	密	良好 やや軟	口～体	瀬戸美濃	
70	C-4	—	SE133	土 灯明皿	口径:-、器高:(2.2)、底径:-	内:煤 、不定方向ナデ 外:不定方向ナデ		密 雲母	良好	口		
72	D-3	—	SE175 上層	陶 甕	口径:-、器高:(4.35)、 底径:(11.0)	内:擂目、ロクロナデ 外:ロクロナデ、指圧痕 底;糸切り	鉄錆	粗 石英 長石	良好 軟	体～底	越中瀬戸	
73	D-3	—	SE175 上層	陶 甕	口径:-、器高:3.15、 底径:-	内:当具→ナデ 外:平行タタキ		密 石英	還元	肩	珠洲	
74	D-4	—	SE175	陶 甕	口径:-、 器高:5.8、 底径:-	内:横板ナデ、炭化物付着 外:ナデ、降灰		やや密	良好 硬	肩	越前	
75	D-4	—	SE175	陶 擂鉢	口径:-、器高:13.4、底径:-	内:横ナデ、煤付着 外:板ナデ	(鉄錆)	やや密	良好 やや硬	胴	越前	
76	D-4	—	SE175	陶 擂鉢	口径:29.3、器高:7.35、 底径:-	内:ロクロナデ、擂目 口:横凹線 外:ロクロナデ		やや粗 石英 雲母	不良 軟	口～体	越前	
77	D-4	—	SE175	須 甕	口径:-、 器高:9.25、 底径:-	内:同心円文当具、擦痕 外:平行タタキ、擦痕		密	還元 良好	胴		砥石転用
86	C-5	—	SE201	陶 小杯	口径:7.7、 器高:3.45、 底径:4.2	内･外:ロクロナデ 外:削出し	鉄	緻密	良好	口～底	越中瀬戸	
87	C-5	—	SE201 上層	陶 皿	口径:(10.9)、器高:(1.5)、底径:-	内･外:ロクロナデ	鉄	やや密	良好 やや軟	口	瀬戸美濃	
88	C-5	—	SE201 下層	陶 擂鉢	口径:-、器高:18.4、底径:-	内:ロクロナデ、擂目 口;横凹線 外:ロクロナデ、板ナデ 指圧痕		やや粗 石英	不良 軟	口～体	越前	
89	C-5	—	SE201 上層	土 灯明皿	口径:(12.8)、器高:(1.85)、底径:-	内･外:横ナデ（摩耗）		密	良好	口		
90	C-5	—	SE201 下層	土 坩堝	口径:(4.9)、器高:(1.45)、底径:-	内･外:指圧痕、手づくね		やや粗	良好	口		
107	B-3	—	SE213 下層	土 灯明皿	口径:(10.4)、器高:1.75、底径:-	内:横ナデ、斜めナデ 外:横ナデ、:指圧痕		密 雲母	良好	口		
108	B-3	—	SE213 下層	土 灯明皿	口径:(12.4)、器高:(2.5)、底径:(7.0)	内:横ナデ 外:横ナデ、指圧痕		密 石英	良好	口～底		
109	B-4	—	SE213	土 土壁ヵ	口径:長(4.9)、器高:幅(2.4) 底径:厚(3.2)	削り		やや密 雲母 石英、スサ				
147	C-4	—	SE214	陶 天目茶碗	口径:-、器高:(2.3)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	天目	やや密	良好 やや軟	体	瀬戸美濃	
148	C-4	—	SE214	白 皿	口径:(11.8)、器高:(1.7)、底径:-	内･外:ロクロナデ	白	密	良好	口	中国	断面漆接ぎ
149	C-4	—	SE214	土 灯明皿	口径:(8.30)、器高:(8.50)、底径:-	内･外:横ナデ、指圧痕		密	良好	口～体		
150	C-4	—	SE214	土 灯明皿	口径:(10.7)、器高:(1.65)、底径:(6.9)	内･外:横ナデ、指圧痕		密	良好	口～体		
151	C-4	—	SE214	土 灯明皿	口径:-、器高:(0.75)、底径:-	内･外:横ナデ、指圧痕 油･煤		密 雲母	良好	底		
171	E-5	—	SK001	陶 擂鉢	口径:-、 器高:(4.5)、 底径:-	内･外:ロクロナデ、擂目		やや密	不良 軟質	体	越前	
172	C-5	—	SK173 1層	土 灯明皿	口径:(10.1)、器高:1.65、底径:-	内外:横ナデ		密 雲母	良好	口		
173	B-3	—	SK212 1層	土 灯明皿	口径:(7.2)、器高:2.0、底径:-	内外:ナデ（摩耗）		やや粗 石英 雲母	良好	口		
174	B-4	—	SX028	陶 皿	口径:(9.9)、器高:(1.9)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	鉄	密	良好 硬	口	越中瀬戸	
175	C-4	Ⅱ	—	陶 皿	口径:(10.8)、器高:(2.1)、底径:(6.0)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	鉄	やや密	不良 やや軟	口～底	越中瀬戸	
176	B-3	—	SX028 1層	陶 皿	口径:(12.3)、 器高:(2.1)、 底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	鉄	密	不良	口	越中瀬戸	
177	B-4	—	SX028 1層	陶 皿	口径:(10.8)、 器高:2.5、 底径:(2.9)	内:ロクロナデ、菊花文、釉止め、削り取り 外:ロクロナデ、削り	灰	密	良好 やや硬	口～底	越中瀬戸	
178	C-4	Ⅱ	—	陶 碗･皿	口径:-、 器高:(1.45)、 底径:(5.2)	内･外:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	やや粗	やや良 好　硬	底	越中瀬戸	
179	C-3	Ⅱ	—	陶 皿	口径:(10.9)、器高:(2.4)、底径:(5.8)	内･外:ロクロナデ、削り	灰	密	良好 やや硬	口～体	越中瀬戸	
180	B-2	Ⅱ	—	陶 皿	口径:-、器高:(2.15)、底径:(5.6)	内:釉止め、削り取り 外:削り	灰	やや密 石英	良好 やや軟	口～底	越中瀬戸	
181	D-2	Ⅱ	—	陶 擂鉢	口径:(20.8)、器高:(2.1)、底径:-	内･外:ロクロナデ	鉄錆	やや密	良好 やや軟	胴	越中瀬戸	
182	B-3	—	SX028 1層	陶 擂鉢	口径:(22.1)、 器高:(3.4)、 底径:-	内･外:ロクロナデ	鉄錆	密 石英	良好	口	越中瀬戸	
183	C-4	Ⅱ	—	陶 擂鉢	口径:-、器高:(2.9)、底径:(19.2)	内:擂目、使用痕、ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸切り	鉄錆	やや粗 石英	やや良 やや軟	底	越中瀬戸	
184	—	Ⅰ	—	陶 擂鉢	口径:-、器高:(2.1)、底径:(13.8)	内:擂目、使用痕 外:ロクロナデ 底:糸切り	鉄錆	やや粗 石英	良好 やや軟	底	越中瀬戸	
185	C-4	Ⅱ	—	陶 香炉	口径:(10.8)、器高:(3.9)、底径:-	内･外:ロクロナデ	鉄	やや密 石英	良好	口	越中瀬戸	

表９　遺物観察表（3）

土器･陶磁器類（３）

報告番号	グリッド	基本層序	遺構名 層　位	種類 器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	釉薬	胎土	焼成	残存部位	産地	備考
186	C-3	Ⅱ	—	陶 天目茶碗	口径:(9.4)、器高:(4.3)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	天目 鉄錆	密	良好 やや硬	口～体	瀬戸美濃	
187	C-3	Ⅱ	—	陶 天目茶碗	口径:(11.7)、器高:(5.4)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	天目	やや密	良好 やや軟	口～体	瀬戸美濃	断面漆接ぎ
188	C-2･3	Ⅱ	—	陶 皿	口径:(8.7)、器高:(1.8)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	密	良好 やや軟	口～底	瀬戸美濃	
189	B-3	—	SX028 1層	陶 碗･皿	口径:(9.4)、器高:(1.4)、底径:-	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、削り	灰	やや密	良好 やや軟	体	瀬戸美濃	
190	C-4	Ⅱ	—	陶 皿	口径:-、器高:(1.1)、底径:(2.3)	内:ロクロナデ、削り取り 外:ロクロナデ、削り	灰	やや密	良好 やや軟	口～底	瀬戸美濃	
191	B-4	—	SX028 1層	陶 擂鉢	口径:-、 器高:(3.05)、 底径:-	内･外:ロクロナデ		やや密	不良 軟質	体	越前	
192	C-2	Ⅱ	—	陶 甕	口径:-、器高:(6.9)、底径:-	内:指圧痕、擦痕 砥石転用 外:斜めナデ上げ	鉄	やや密 石英	不良 やや軟	胴	越前ヵ	断面漆接ぎ
193	C-2	Ⅱ	—	陶 甕	口径:-、器高:(9.9)、底径:-	内:指圧痕、擦痕 砥石転用 外:斜めナデ上げ	鉄	密	不良 やや軟 生焼	胴	越前ヵ	断面漆接ぎ
194	D-2	Ⅱ	—	陶 甕	口径:-、器高:(3.4)、底径:-	内:指圧痕、横ナデ 外:平行タタキ		やや粗 石英 雲母	良好 還元	胴	珠洲	
195	B-3	Ⅱ	—	陶 筒形碗	口径:-、器高:(2.2)、底径:(5.0)	内:ロクロナデ、鉄絵 外:削り	灰	密	良好 硬	底	肥前系	
196	B-2	Ⅱ	—	陶 擂鉢	口径:-、器高:(3.3)、底径:-	内:ロクロナデ、擂目 外:ロクロナデ		密	良好 硬	胴	備前系	
197	B-3	—	SX028 1層	青花 碗	口径:-、 器高:(1.8)、 底径:-	内･外:ロクロナデ 染付	透明	密	良好	口	中国	
198	B-3	Ⅱ	—	青 碗	口径:-、器高:2.45、底径:-	内･外:ロクロナデ	青	密	良好	体	中国	
199	B-3	Ⅱ	—	白 皿	口径:(8.9)、器高:(1.35)、底径:-	内:ロクロナデ、釉止め 外:ロクロナデ	白	密	良好	口	中国	断面漆接ぎ
200	C-4	Ⅱ	—	白 碗	口径:(13.0)、器高:1.25、底径:-	内･外:ロクロナデ	白	密	良好	口	中国	
201	B-3	Ⅱ	—	白 皿	口径:(13.1)、器高:1.15、底径:-	内･外:ロクロナデ	白	密	良好	口	中国	
202	B-2	Ⅰ	—	土 灯明皿	口径:(10.0)、器高:(1.9)、底径:-	内･外:横ナデ		密 石英 雲母	良好	口		
203	B-4	—	SX028	土 灯明皿	口径:(7.8)、器高:(1.85)、底径:(4.1)	内･外:横ナデ　指圧痕		密	良好	口～体		
204	B-5	Ⅰ	—	土 灯明皿	口径:(8.8)、器高:(2.3)、底径:(2.4)	内･外:横ナデ		密	良好	口～底		
205	C-5	Ⅱ	—	土 灯明皿	口径:(9.10)、器高:(1.70)、底径:-	内･外:横ナデ、指圧痕		密	良好	口～底		
206	B-4	—	SX028	土 灯明皿	口径:(14.4)、器高:2.6、底径:-	内:横ナデ、被熱 外:横ナデ、指圧痕		やや密	良好 やや軟	口～体		
207	D-4	Ⅱ	—	土 坩堝	口径:(4.6)、器高:(1.55)、底径:-	内･外:ナデ、被熱		やや粗	良好	口～体		
208	C-4	Ⅱ	—	土 坩堝	口径:(5.2)、器高:(1.65)、底径:-	内･外:ナデ 、指圧痕 被熱		やや密	良好 やや軟	口～体		
212	C-3	Ⅱ	—	須 杯	口径:-、器高:2.25、底径:-	内･外:ロクロナデ		密	やや良好 還元	口		

石製品(1)

報告番号	グリッド	遺構名 層　位	石材 器種	法量(cm) ( ):推定値	調整
4	C-3	SP020 1層	不明 砥石	長さ:(6.20) 幅:(3.70)、厚さ:(1.00)	研磨痕 鉄分の多い
24	C-3	SP192 礎石	砂質泥岩 石臼	長さ:(17.60、35.60) 幅:(11.80)、厚さ:(30.00)	ノミ
36	D-2	SE047	砂岩 石臼	長さ:(28.80)、幅:(11.10) 厚さ:(28.00)	ノミ
37	D-2	SP047 底	泥岩 削器ヵ	長さ:6.6、幅:5.2 厚さ:1.1	2次加工 刃部ヵ
62	D-4	SE131 下層	礫岩 石臼	長さ:(18.30)、幅:(11.30) 厚さ:(32.90)	ノミ
63	D-4	SE131 下層	砂岩 石臼	長さ:(30.00)、厚さ:(32.00) 幅:(13.30～13.90)	ノミ 把手孔
64	D-4	SE131 下層	頁岩 砥石	長さ:12.7 幅:3.9、厚さ:3.4	研磨
65	D-4	SE131 下層	安山岩 叩石	長さ:(8.7)、幅:(10.5) 厚さ:(10.5)	敲打 研磨
66	D-4	SE131 下層	不明	長さ:16.9 幅:14.2、厚さ:3.8	被熱 炭付着
91	C-5	SE201	安山岩 叩台	長さ:(20.00) 幅:(15.05)、厚さ:(6.05)	敲打 研磨

石製品(2)

報告番号	グリッド	遺構名 層　位	石材 器種	法量(cm) ( ):推定値	調整
92	C-5	SE201	安山岩 円盤状	長さ:(15.40) 幅:(17.60)、厚さ:(3.75)	剥離 研磨
93	C-5	SE201	泥岩 砥石	長さ:17.7 幅:7.6、厚さ:5.2	砥磨
94	C-5	SE201	砂岩 砥石	長さ:(18.6) 幅:17.4、厚さ:2.4	研磨
110	B-4	SE213	安山岩 不明	長さ:(4.6)、幅:(4.5) 厚さ:(2.5)	擦痕
111	B-4	SE213	泥岩 不明	長さ:(7.8)、幅:(6.1) 厚さ:(2.0)	擦痕
112	B-3	SE213 下層	泥岩 砥石	長さ:(6.5)、幅:(5.9) 厚さ:(1.2)	研磨
209	B-3	SX028 1層	砂岩 砥石	長さ:(18.3)、幅:(10.35) 厚さ:3.0	研磨

表 10　遺物観察表（4）

金属製品

報告番号	グリッド	基本層序	遺構名 層　位	種類 器種	法量(cm) ( ):推定値
21	C-3	―	SP027	鉄滓 椀状	長さ:5.6、幅:3.9、厚さ:1.2
22	C-3	―	SP043 底	鉄滓 椀状	長さ:5.1、幅:5.6、厚さ:2.1
23	C-3	―	SP044	鉄 和釘	長さ:(3.0)、幅:(0.45)、厚さ:(0.6)
152	C-4	―	SE214	鉄 和釘	長さ:(5.65)、幅:(0.4)、厚さ:(0.7)
210	C-4	Ⅱ	―	鉄 和釘	長さ:(7.1)、幅:(1.4)、厚さ:(0.3)
211	C-4	Ⅱ	―	銅 鉢ヵ	長さ:(7.6)、幅:(1.1)、厚さ:0.15

木製品（1）

報告番号	グリッド	遺構名 層　位	器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	木目
14	B-3・4	SP242	柱材	長さ:10.7 幅:8.55、厚さ:7.1	削り	芯持
31	D-2	SE039 下層	薄板	長さ:(5.15) 幅:(1.65)、厚さ:0.1	削り	板目
32	D-2	SE039 下層	加工材	長さ:(8.5) 幅:0.7、厚さ:0.6	削り	不明
33	D-2	SE039 下層	半切材	長さ:(12.15) 幅:0.8、厚さ:0.5	半切	不明
34	D-2	SE039 下層	竹片	長さ:12、幅:1.1 厚さ:0.9	節カット 上下カット	板目
38	D-2	SE047	箸	長さ:(23.3) 幅:0.8、厚さ:0.6	削り	板目
39	D-2	SE047	箸	長さ:(12.85) 幅:0.65、厚さ:0.6	削り	板目
40	D-2	SE047	不明	長さ:(5.4) 幅:4.45、厚さ:0.8	削り 線刻「ー」「×」	板目
41	D-2	SE047 底面	部材	長さ:(7.35) 幅:(4.25)、厚さ:0.4	削り、樹皮紐、漆	芯持
42	D-2	SE047 底面	部材	長さ:(12.7) 幅:2.6、厚さ:1	樹皮紐、切断痕 削り	柾目
43	D-2	SE047	木片	長さ:(16.8) 幅:(5.4)、厚さ:1.05	削り	柾目
44	D-2	SE047	薄板	長さ:(6.4) 幅:(1.5)、厚さ:0.1	削り	柾目
45	D-2	SE047	薄板	長さ:(5.2) 幅:(2.0)、厚さ:0.2	削り	柾目
46	D-2	SE047	薄板	長さ:(9.95) 幅:(1.05)、厚さ:0.15	削り	板目
47	D-2	SE047	薄板	長さ:(5.8) 幅:(1.3)、厚さ:0.15	削り	板目
48	D-2	SE047	薄板	長さ:(4.4) 幅:(2.6)、厚さ:0.15	削り	板目
49	D-2	SE047	薄板	長さ:(3.8) 幅:(1.05)、厚さ:0.15	削り	板目
50	D-2	SE047	削片	長さ:(2.1) 幅:(2.0)、厚さ:0.1	削り	板目
67	B-3・4	SE131	加工材	長さ:(9.65) 幅:1.7、厚さ:1.5	枝カット、樹皮	板目
71	D-4	SE133	木片	長さ:(5.95) 幅:(3.9)、厚さ:(1.25)	削り	板目
78	C・D-3	SE175	容器	長さ:11.4,厚さ:0.7～2 幅:4.7、高さ:4.2	チョウナ痕	柾目
79	C・D-3	SE175	薄板	長さ:(8.8) 幅:(2.45)、厚さ:0.2	削り	板目
80	C・D-3	SE175	削片	長さ:3.7、幅:4.05 厚さ:0.1	削り	不明
81	C・D-3	SE175	削片	長さ:4.7、幅:3.45 厚さ:0.1	削り	不明
82	C・D-3	SE175	部材	長さ:(7.3) 幅:(5.95)、厚さ:1.9	縦に四角孔 4箇所穴、削り	柾目
83	C・D-3	SE175	加工材	長さ:(34.2) 幅:2.55、厚さ:2.5	枝カット	芯持
84	C・D-3	SE175	加工材	長さ:(37.15) 幅:3.8、厚さ:3.05	枝カット	芯持
85	C・D-3	SE175	加工材	長さ:(44.1) 幅:3.5、厚さ:3.5	部分的に削り	芯持
95	C-5	SE201	漆器椀	口径:(8)、器高:(1.8) 厚さ:0.35	両面漆	柾目
96	C-5	SE201	鍬	長さ:(20.55) 幅:6.65、厚さ:1.4	削り、長方形孔 上面：敲打痕	柾目
97	C-5	SE201	加工材	長さ:(14.15) 幅:(3.9)、厚さ:(1.7)	枝カット 孔	不明

木製品（2）

報告番号	グリッド	遺構名 層　位	器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	木目
98	C-5	SE201	器ヵ	長さ:(10.0) 幅:(4.8)、厚さ:(0.7)	樹皮　削り	不明
99	B・C-4	SE201	加工材	長さ:(10.55) 幅:2.25、厚さ:0.15	削り	芯持
100	B・C-4	SE201	薄板	長さ:(12) 幅:(2)、厚さ:0.1	削り	板目
101	C-5	SE201	加工材	長さ:(10.3) 幅:1.4、厚さ:1.4	斜めカット、樹皮	芯持
102	C-5	SE201	竹片	長さ:10.35 幅:1.1、厚さ:0.15	削り	―
103	C-5	SE201	竹片	長さ:15 幅:1、厚さ:0.15	削り	―
104	C-5	SE201	竹片	長さ:5.3 幅:1、厚さ:0.15	削り	―
105	C-5	SE201	薄板片	長さ:(2.65) 幅:(0.9)、厚さ:0.05	削り	板目
106	C-5	SE201	竹片	長さ:2.95 幅:0.7、厚さ:0.1	削り	―
113	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:20.6 幅:1.15、厚さ:0.75	削り	板目
114	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:28.2 幅:1.35、厚さ:1.2	先端炭化、カット 一部樹皮残存	芯持
115	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:(12.8) 幅:1、厚さ:0.95	先端カット、炭化	芯持
116	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:(13.7) 幅:2.45、厚さ:2.3	先端削り	芯持
117	B-4	SE213	木炭	長さ:(13.3) 幅:2、厚さ:2	削り、炭焼	芯持
118	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:(10.1) 幅:(3.45)、厚さ:(2.8)	炭化 先端カット	柾目
119	B-3・4	SE213	付け木ヵ	長さ:(7.6) 幅:1.1、厚さ:1.1	尖端カット 炭化	芯持
120	B-3・4	SE213	加工木	長さ:(9.2) 幅:1.05、厚さ:0.95	カット	芯持
121	B-3・4	SE213	加工木	長さ:(12.9) 幅:1.4、厚さ:1.35	先端削り 節カット	芯持
122	B-3・4	SE213	箸	長さ:(10.3) 幅:0.75、厚さ:0.45	削り　圧痕	板目
123	B-3・4	SE213	箸	長さ:(11.3) 幅:0.8、厚さ:0.35	削り	板目
124	B-3・4	SE213	板材	長さ:(15.5) 幅:6、厚さ:(1.9)	表・裏面に刀傷状 痕多数、両端カット	柾目
125	B-3・4	SE213	下駄	長さ:15.8 幅:(9.2)、厚さ:1.4	削り、チョウナ痕 歯のホゾ孔	柾目
126	B-3・4	SE213	漆器椀	口径:-、器高:(3.7) 底径:7.3	全面:漆、絵:朱 削り	柾目
127	B-3・4	SE213	漆器皿	口径:(18.6) 器高:(1.3)、底径:-	口端:漆 その他:朱	柾目
128	B-3・4	SE213	器ヵ	長さ:(6.85) 幅:(3.75)、厚さ:(2.2)	底に高台ヵ チョウナ痕	柾目
129	B-3・4	SE213	加工品	長さ:2.2、幅:1.9 厚さ:0.3～0.6	削り　U字　孔	板目
130	B-3・4	SE213	楔ヵ	長さ:5.25 幅:5.3、厚さ:6.7	削り	柾目
131	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(36.75)、幅:(4.5) 厚さ:0.1～0.15	削り	板目
132	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(24.1) 幅:(2.6)、厚さ:0.1	削り	板目
133	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(16.4) 幅:(3.6)、厚さ:0.2	削り	板目
134	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(14.75) 幅:(1.1) 、厚さ:0.15	削り	板目
135	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(14.6) 幅:(1.9)、厚さ:0.15	削り	板目
136	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(13.6) 幅:(2.6)、厚さ:0.15	削り	板目
137	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(14.4) 幅:(1.0)、厚さ:0.1	削り	板目
138	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(12.5) 幅:(1.6)、厚さ:0.2	削り	板目
139	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(10.25) 幅:(1.65)、厚さ:0.2	削り	板目
140	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(9.5) 幅:(1.85)、厚さ:0.25	削り	板目
141	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(9.6) 幅:(2.05)、厚さ:0.15	削り	板目
142	B-3・4	SE213	薄板	長さ:(13.1) 幅:(4.1)、厚さ:0.15	削り	板目

表 11　遺物観察表（5）

木製品（３）

実測番号	グリッド	遺構名 層　位	器種	法量(cm) ( ):推定値	調整	木目
143	B-3･4	SE213	薄板	長さ:(12.6) 幅:(3.4)、厚さ:0.15	削り	板目
144	B-3･4	SE213	薄板	長さ:(11) 幅:(3.3)、厚さ:0.2	削り	板目
145	B-3･4	SE213	薄板	長さ:(9.5) 幅:(2.7)、厚さ:0.15	削り	板目
146	B-3･4	SE213	薄板	長さ:(9)、幅:(4.3) 厚さ:0.15	削り	板目
153	B･C-4	SE214	付け木ヵ	長さ:(20.75) 幅:1.45、厚さ:1.5	削り、先端炭化 樹皮	芯持
154	B-4	SE214 下層	部材	長さ:(16.9) 幅:2、厚さ:0.8	削り　5ヶ所木釘 漆	柾目
155	B-4	SE214 下層	加工材	長さ:(4.5) 幅:1.7、厚さ:0.85	削り	芯持
156	B-4	SE214 下層	箸	長さ:(6.3) 幅:0.75、厚さ:0.6	削り	柾目
157	B･C-4	SE214	箸	長さ:(10.85) 幅:0.95、厚さ:0.6	圧痕　削り	柾目
158	B･C-4	SE214	箸	長さ:(13.05) 幅:0.45、厚さ:0.35	削り	板目
159	B･C-4	SE214	加工材	長さ:(10.4) 幅:1.25、厚さ:1.1	枝カット	芯持
160	B-4	SE214 下層	加工材	長さ:(2.1) 幅:2、厚さ:0.88	削り	不明
161	B-4	SE214 下層	把手	長さ:15.35 幅:5.75、厚さ:0.85	削り	柾目
162	B･C-4	SE214	蓋ヵ	長さ:(12.2) 幅:(6.65)、厚さ:0.25	削り	柾目
163	B･C-4	SE214	下駄	長さ:(18.4)､幅:(10.35) 高さ:7.6、歯高:4.6	削り、3箇所穿孔 前歯を縦断穿孔	芯持
164	B･C-4	SE214	加工材	長さ:(33) 幅:3.8、厚さ:4.25	炭化、樹皮、松明ヵ	芯持
165	B･C-4	SE214	擂粉木	長さ:(31.25) 幅:3.3、厚さ:3.3	削り、下端:捏痕ヵ	柾目
166	B･C-4	SE214	加工材	長さ:(32.3) 幅:5.55、厚さ:5.1	炭化、削り 上部:3箇所抉り	芯持
167	B･C-4	SE214	板材	長さ:(24.15) 幅:(2.95)、厚さ:0.6	削り	柾目
168	B･C-4	SE214	蓋ヵ	長さ:27.7 幅:27、厚さ:1.55	削り、2枚の板を接合､2箇所の孔､接合材により接合	柾目
169	B-4	SE214 下層	薄板片	長さ:(1.9) 幅:(3.6)、厚さ:0.1	削り	板目
170	B-4	SE214 下層	薄板片	長さ:(1.6) 幅:(2.9)、厚さ:0.1	削り	板目

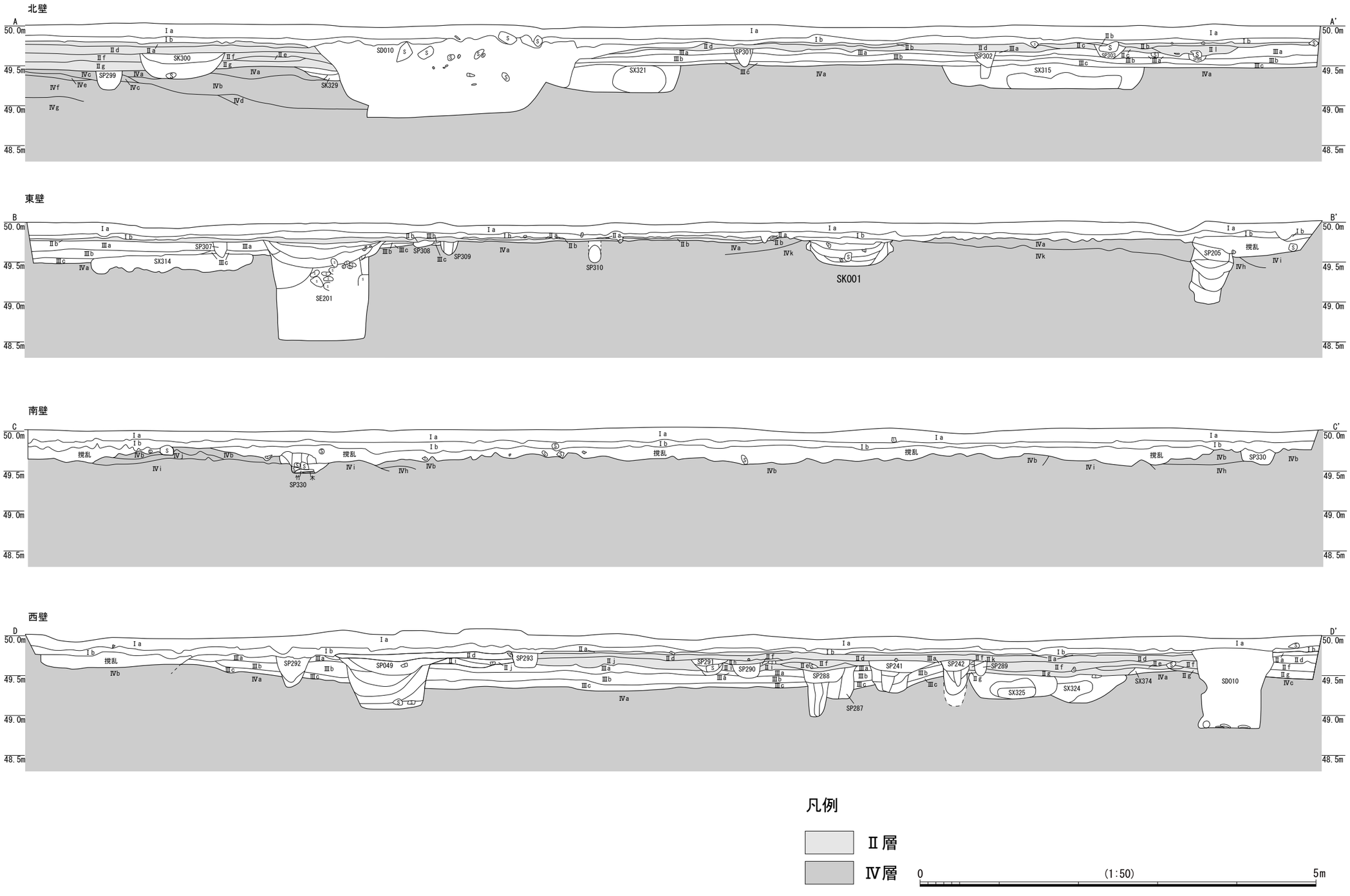
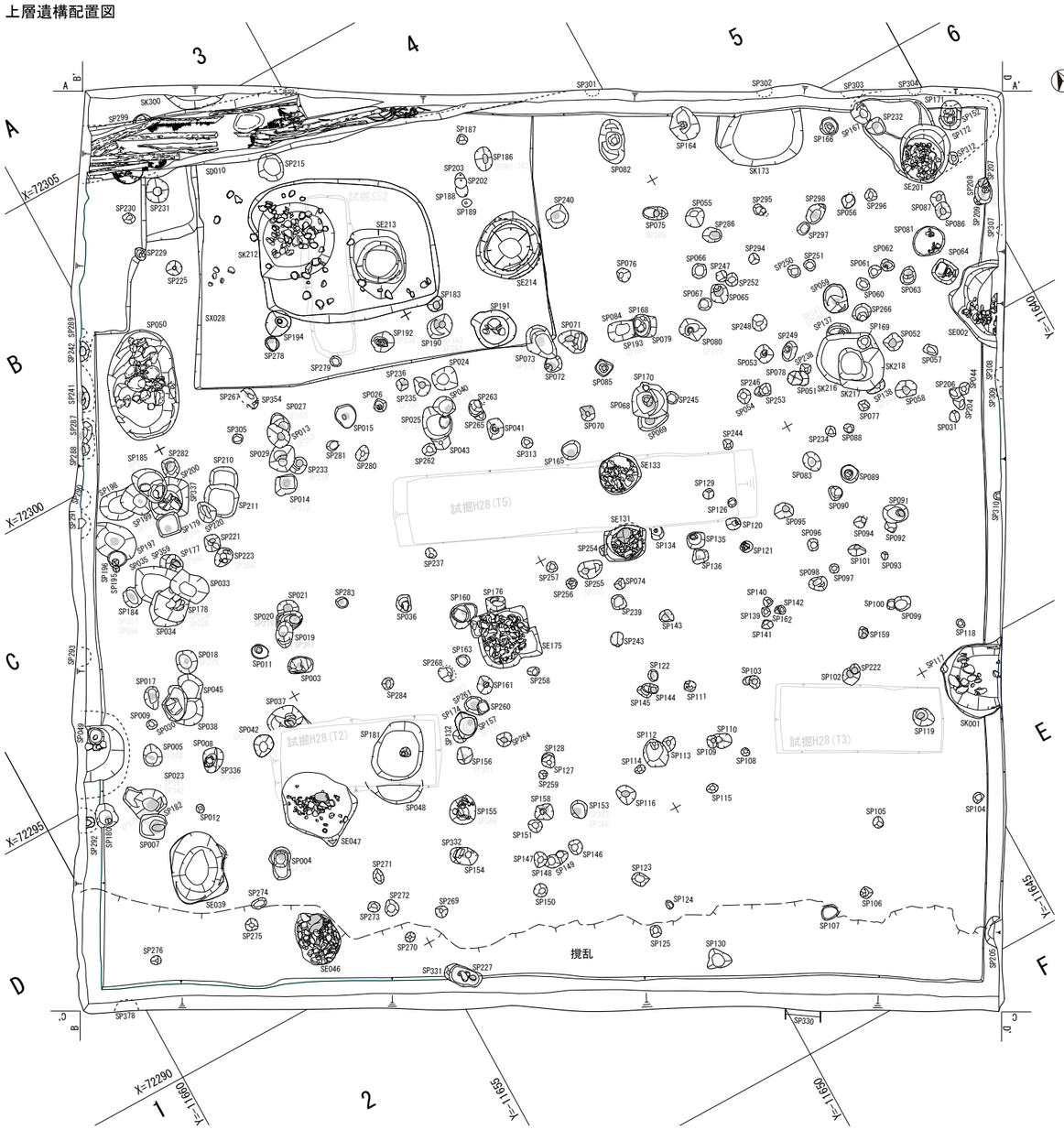

北壁
A
A'
50.0m
49.5m
49.0m
48.5m
SK300
SP299
SD010
SK329
SX321
SP301
SP302
SX315
SP303
東壁
B
B'
SP307
SX314
SE201
SP308
SP309
SP310
SK001
SP205
南壁
C
C'
撹乱
竹本
SP330
西壁
D
D'
SP292
SP049
SP293
SP291
SP290
SP288
SP287
SP241
SP242
SP289
SX325
SX324
SX374
SD010
凡例
Ⅱ層
Ⅳ層
0
(1:50)
5m

図８　調査区土層断面図

上層遺構配置図



下層遺構配置図

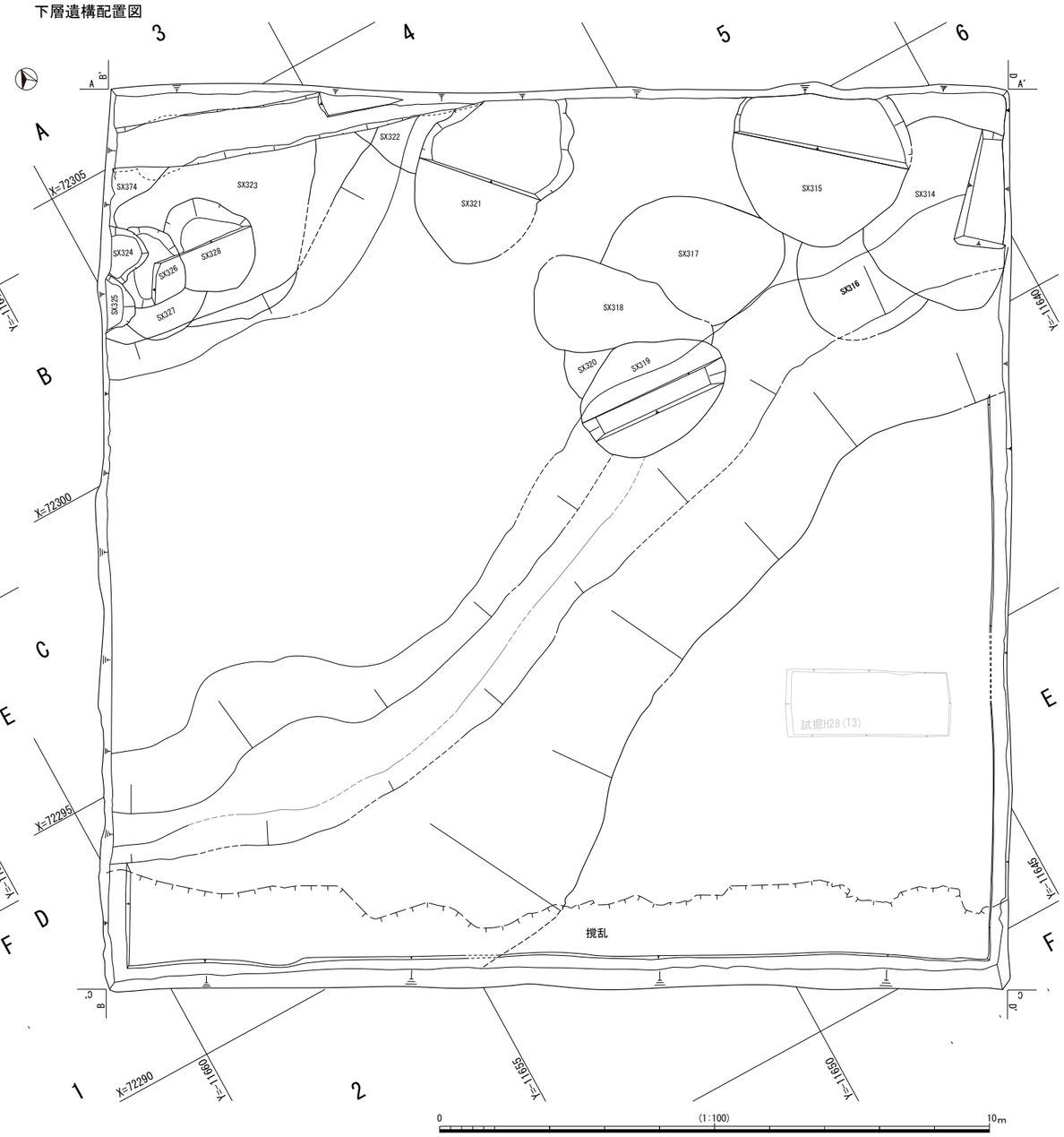


図 11　遺構配置図

第４章　自然科学分析

1　試掘調査 (T7) 出土炭化材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・中村賢太郎

(1)　はじめに

増山城城下町遺跡は富山県砺波市増山に位置する。今回増山城城下町遺跡内において鉄塔の建替え工事が行われることとなり、砺波市ではこれに先立ち試掘調査を行われた。試掘調査の結果、T7 において土塁跡が検出された。ここでは、土塁が構築された年代を明らかにするために、土塁跡を構成する盛土層から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2)　試料と方法

試料は T7 において土塁跡（盛土最下層、深度 35cm）から出土した炭化材 1 点である。試料は現地において周囲の土ごと採取し、室内で炭化材のみを選別した。測定試料の情報、調製データは表 12 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3)　結果

表 13 には同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 36 には暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際に、この年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

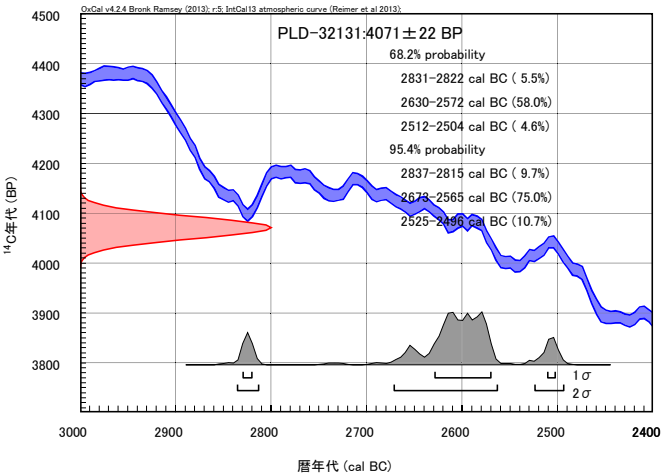


図 36　暦年較正結果

表 12　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32131	調査区：7T 遺構：城下町土塁跡 層位：盛土最下層 深度：35cm	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表 13　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-32131	-27.24±0.19	4071±22	4070±20	2831-2822 cal BC (5.5%) 2630-2572 cal BC (58.0%) 2512-2504 cal BC (4.6%)	2837-2815 cal BC (9.7%) 2673-2565 cal BC (75.0%) 2525-2496 cal BC (10.7%)

表 14　富山県小矢部市桜町遺跡における串田新式系土器に伴う ^{14}C 年代
（狩野 2008 表 1 を引用改変）

土器型式	測定試料	測定コード	^{14}C年代
串田新Ⅱ	土器付着炭化物	Beta-166316	4330±40 ^{14}C BP
串田新Ⅱ	土器付着炭化物	Beta-166317	4150±40 ^{14}C BP
前田・岩峅野	土器付着炭化物	Beta-166318	3960±40 ^{14}C BP
中津式系	土器付着炭化物	Beta-166319	4480±40 ^{14}C BP

表 15　縄文時代中期後半～後期前葉の土器型式と
^{14}C 年代との対応関係（工藤 2012 表 10-1 より引用改変）

大別		土器型式	^{14}C年代	測定例のある遺跡
中期	後半	加曽利E1	4400～4300 ^{14}C BP前後か	TNT No.520遺跡、三矢田遺跡、仲内遺跡
		加曽利E2	4400～4300 ^{14}C BP前後か	仲内遺跡、慶応SFC遺跡、油壷遺跡
		加曽利E3	4300～4100 ^{14}C BP前後か	大橋遺跡、西ヶ原貝塚
		加曽利E4	4100～4000 ^{14}C BP前後か	油壷遺跡、二の丸遺跡、伊勢山遺跡、中小前田遺跡
後期	初頭	称名寺1	4000～3900 ^{14}C BP前後か	陣馬場遺跡、道前久保遺跡
		称名寺2	3900～3800 ^{14}C BP前後か	下宅部遺跡
	前葉	堀之内1新	3800～3700 ^{14}C BP前後か	下宅部遺跡、三輪野山遺跡、高山遺跡、TNT No.243遺跡
		堀之内2新	3700～3500 ^{14}C BP前後か	下宅部遺跡、分谷地A遺跡

表 16　縄文時代中期後半～後期前葉における
土器型式と暦年較正年代との対応関係
（小林 2008 より引用改変）

大別		土器型式	暦年較正年代
中期	後半	加曽利E1	2950～2860 cal BCころ
		加曽利E2古	2860～2800 cal BCころ
		加曽利E2新	2800～2760 cal BCころ
		加曽利E3	2760～2570 cal BCころ
		加曽利E4	2570～2470 cal BCころ
後期	初頭	称名寺	2470～2300 cal BCころ
	前葉	堀之内1	2290～2030 cal BCころ
		堀之内2	2030～1870 cal BCころ

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4)　考察

土塁跡の盛土最下層出土の炭化材は、^{14}C 年代が 4070 ± 20 ^{14}C BP、2 σ暦年代範囲（確率 95.4％）が 2837-2815 cal BC (9.7%)、2673-2565 cal BC (75.0%)、2525-2496 cal BC (10.7%) であった。この年代は、狩野（2008）が示した縄文時代中期後半の串田新式系土器に伴う ^{14}C 年代（表 14）、工藤（2012）が示した縄文土器型式と ^{14}C 年代との対応関係（表 15）、及び小林（2008）が示した縄文土器型式と暦年代との対応関係（表 16）を参照すると、縄文時代中期末ころに相当する。

増山城が機能した中世～近世の年代に対して、縄文時代中期は明らかに古過ぎ、土塁の構築年代とは考えにくい。よって、土塁跡出土の炭化材は、縄文時代中期末ころの層を掘削した際に土に含まれていたものが、土塁跡の最下層に土と共に盛られた可能性が考えられる。あるいは、土塁最下層としていた層が縄文時代中期末頃の層で、その上に土塁が構築された可能性が考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360

狩野睦 2008「串田新式・大杉谷式土器」『総覧縄文土器』480-485 アム・プロモーション

小林謙一 2008「縄文時代の暦年代」『縄文時代の考古学 2- 歴史のものさし -』257-269 同成社

工藤雄一郎 2012「後氷期の考古編年と ^{14}C 年代」『旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代測定と考古学』212-229 新泉社.

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20 日本第四紀学会

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon,J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP.」『Radiocarbon』55(4) 1869-1887.

2 暗渠（SD010）出土木材の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・中村賢太郎

(1)　はじめに

富山県砺波市に位置する増山遺跡の溝跡より検出された木材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2)　試料と方法

試料は、戦国時代の層を切る溝跡から出土した木材である。溝跡の覆土下部から加工された木材が複数本並んだ状態で出土した。これらの木材のうち、樹皮の残る 1 本を選び、樹皮直下の最終形成年輪を採取して試料とした（PLD-34353）。測定試料の情報、調製データは表 17 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3)　結果

表 18 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、

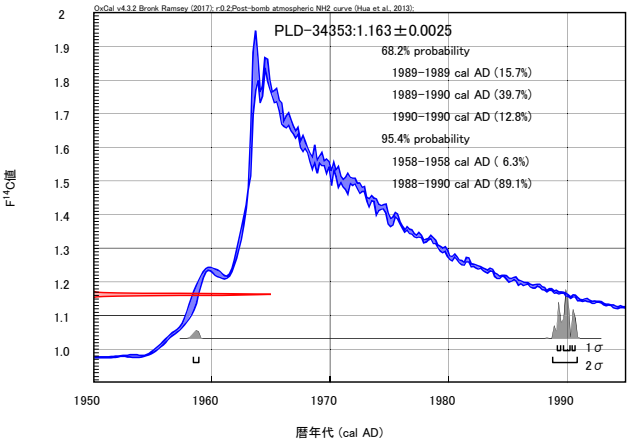


図 37　暦年較正結果

1950 年の大気の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す F^{14}C 値、暦年較正結果を、図 37 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出するこ

表 17　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34353	遺構：溝跡 器種：加工木、溝構築材？ 年輪数：28年	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪(1-5年輪目) 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表 18　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-34353	-24.86±0.24	-1213±17 F14:1.1630±0.0025	-1215±15	Post-bomb NH2 2013: 1989-1989 cal AD (15.7%) 1989-1990 cal AD (39.7%) 1990-1990 cal AD (12.8%)	Post-bomb NH2 2013: 1958-1958 cal AD (6.3%) 1988-1990 cal AD (89.1%)

とである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：Post-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4)　考察

溝跡から出土した木材は、2 σ暦年代範囲が 1958-1958 cal AD (6.3%) および 1988-1990 cal AD (89.1%) であった。この結果は、木材が伐採された（枯死した）年代が、現代であることを示している。溝跡から出土した木材が地下に設置された暗渠の部材であれば、溝跡（暗渠）の構築年代は 1958 年以降と考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Barbetti, M. Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. Radiocarbon, 55(4), 1-14.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

3　井戸 (SE213) 出土種子の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・小林克也・中村賢太郎

(1)　はじめに

富山県砺波市に位置する増山遺跡の井戸跡 SE213 より検出された種子について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、測定試料については、種実同定も行われている（種実同定の項参照）。

(2)　試料と方法

試料は、戦国時代の井戸跡 SE213 内を埋める堆積物より検出されたヒョウタン仲間種子 1 点（PLD-35360）である。測定試料の情報、調製データは表 19 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ･ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3)　結果

表 20 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 38 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

表 19　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-35360	遺構：SE213	種類：生の種実（ヒョウタン仲間） 試料の性状：種子 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表 20　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-35360	-26.73±0.22	345±19	345±20	1490-1522 cal AD (27.5%) 1573-1603 cal AD (24.8%) 1609-1630 cal AD (16.0%)	1468-1530 cal AD (38.0%) 1542-1635 cal AD (57.4%)

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

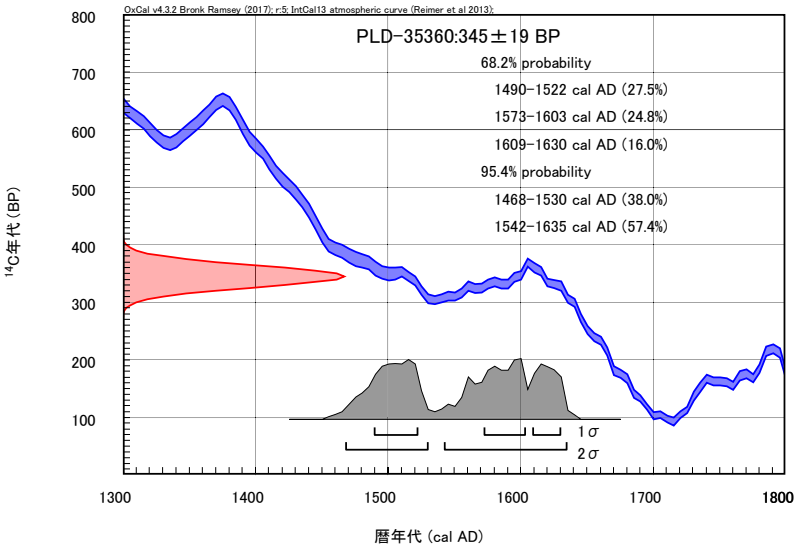


図 38　暦年較正結果

(4)　考察

井戸跡 SE213 内を埋める堆積物より検出されたヒョウタン仲間種子（PLD-35360）は、2 σ 暦年代範囲が 1468-1530 cal AD (38.0%) および 1542-1635 cal AD (57.4%) であった。この暦年代範囲は、15 世紀後半～17 世紀前半で、戦国時代～江戸時代の初めに相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1) 337-360.

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』3-20　日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP」『Radiocarbon』55(4) 1869-1887

4　井戸 (SE213) の花粉分析

森雅志 (パレオ・ラボ)

(1)　はじめに

富山県砺波市増山に所在する増山遺跡において、古植生を検討するために土壌試料が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、考察を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている。

(2)　試料と方法

分析試料は、SE213 から採取された黒褐色（10YR2/2）の植物遺体混じり有機質シルト 1 点である。この試料について、以下の方法で花粉分析を実施した。

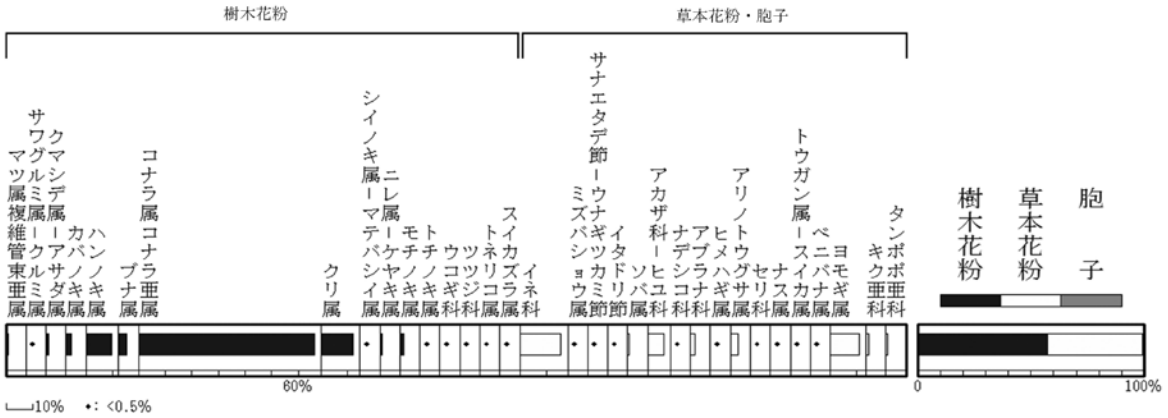
試料（湿重量約 3g）を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.2325 ～ 2335）を作製し、写真 8 に載せた。

(3)　結果

分析試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 16、草本花粉 17 の総計 33 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 21 に、花粉分布図を図 39 に示した。花粉分布図では、樹木花粉の産出率は樹木

表 21　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	
樹木		
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2
Pterocarya－*Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	1
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	3
Betula	カバノキ属	5
Alnus	ハンノキ属	25
Fagus	ブナ属	8
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	169
Castanea	クリ属	31
Castanopsis－*Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	1
Ulmus－*Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	2
Ilex	モチノキ属	4
Aesculus	トチノキ属	1
Araliaceae	ウコギ科	1
Ericaceae	ツツジ科	1
Fraxinus	トネリコ属	1
Lonicera	スイカズラ属	1
草本		
Gramineae	イネ科	69
Lysichiton	ミズバショウ属	1
Polygonum sect. *Persicaria*－*Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	1
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	2
Fagopyrum	ソバ属	3
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	27
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1
Brassicaceae	アブラナ科	7
Polygala	ヒメハギ属	1
Haloragis	アリノトウグサ属	13
Apiaceae	セリ科	1
Solanum	ナス属	1
Benincasa-Citrullus	トウガン属－スイカ属	1
Carthamus	ベニバナ属	1
Artemisia	ヨモギ属	48
Tubuliflorae	キク亜科	6
Liguliflorae	タンポポ亜科	3
Arboreal pollen	樹木花粉	256
Nonarboreal pollen	草本花粉	186
Spores	シダ植物胞子	－
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	442
unknown	不明	4



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。

図 39　SE213 における花粉分布図

花粉総数を、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属の産出が突出しており、66% の産出率を示す。次いでクリ属が 12%、ハンノキ属が 10% の産出率を示す。草本花粉では、イネ科やアカザ科 - ヒユ科、ヨモギ属の産出が目立つ。さらに、ソバ属やトウガン属 - スイカ属、ベニバナ属、アブラナ科など、栽培植物を含む分類群が産出している。

(4)　考察

検鏡の結果、分析試料にはコナラ属コナラ亜属が多く含まれ、クリ属を伴っていた。コナラ属コナラ亜属やクリ属は二次林要素の陽樹を含む分類群として知られているため、戦国時代当時の増山遺跡とその周辺にはナラ類やクリなどからなる二次林が広がっていたと思われる。また、近辺の日の当たる明るい場所には、イネ科やアカザ科 - ヒユ科、ヨモギ属といった草本類が分布を広げていたと思われる。さらに、湿地林要素であるハンノキ属の産出も確認できるため、増山遺跡周辺の一部には湿地的環境の場所があり、そうした場所にハンノキ属が生育していたのであろう。草本花粉で産出したミズバショウ属なども湿地的環境の場所に生育していた可能性があり、湿った日の当たる場所にはアリノトウグサ属なども生育していたと考えられる。

また、ソバ属をはじめ、ベニバナ属やトウガン属 - スイカ属、アブラナ科、ナス属など、栽培植物を含む分類群の産出も確認できた。大型植物遺体分析ではソバやナスが産出しており、ソバ属やナス属とした花粉は、ソバやナスからもたらされた可能性が考えられる。ベニバナ属やトウガン属 - スイカ属、アブラナ科の花粉の形態で種を特定するのは難しいが、これらの花粉を供給した植物としては、ベニバナや冬瓜、スイカ、大根、蕪などの栽培植物が挙げられる。さらに、イネ科花粉については、周辺に生育していた野生種のイネ科植物からもたらされた他に、大型植物遺体分析で多産しているイネの籾殻に付着していたイネ花粉が検出されている状況も考えられる。こうした栽培植物を含む分類群の花粉は、井戸周辺に存在していた耕作地からもたらされた可能性の他に、廃棄された井戸に栽培植物遺体等を破棄したために得られた可能性なども考えられる。

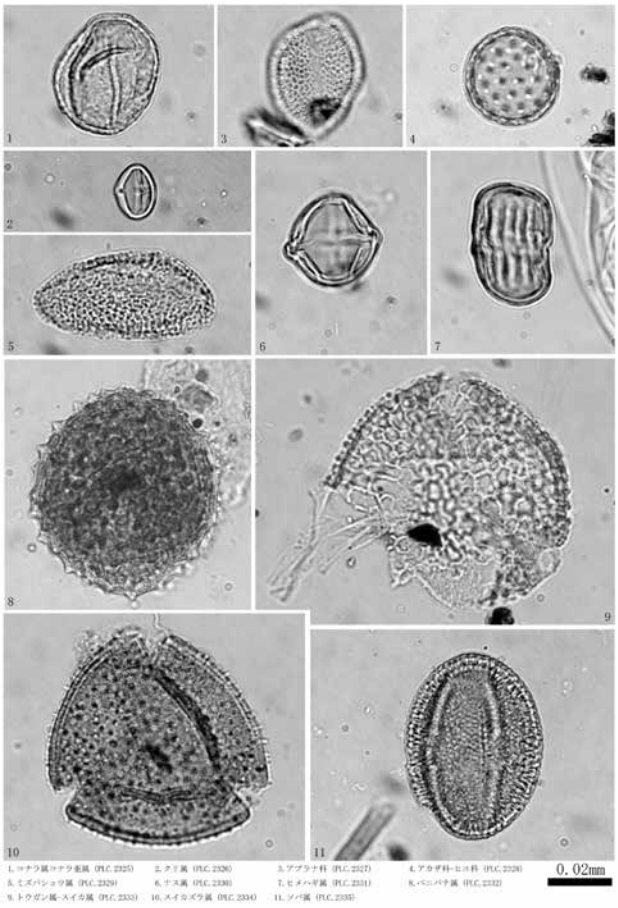


写真８　SE213 から産出した花粉化石

5　井戸 (SE213) から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン・佐々木由香 (パレオ・ラボ)

(1)　はじめに

富山県砺波市に所在する増山遺跡は、河岸段丘上に立地する戦国時代から江戸時代初めにかけての城下町である。ここでは井戸跡から出土した大型植物遺体を同定し、食用などとして利用された植物や、遺跡周辺における栽培状況および植生について検討する。なお、同じ遺構の試料を用いて花粉分析と放射性炭素年代測定も行われている（第４章３参照）。

(2)　試料と方法

試料は、SE213 から採取された堆積物である。なお、ヒョウタン仲間種子の放射性炭素年代測定の結果、1468-1530 cal AD (38.0%) 及び 1542-1635 cal AD (57.4%) の暦年較正年代が得られている。発掘調査現場での試料採取は、株式会社上智によって行われた。

水洗は、200cc の堆積物を対象に最小 0.5mm 目の篩で行った。試料の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、おおよその産出数を記号（+）で表記した。試料は、砺波市教育委員会に保管されている。

(3)　結果

同定した結果、木本植物の針葉樹ではアカマツ葉の 1 分類群、広葉樹ではコナラ未熟殻斗とヒサカキ属種子、キブシ種子、エゴノキ核の 4 分類群、草本植物ではオモダカ属果実とホタルイ属果実、メヒシバ属有ふ果、ヒエ属有ふ果・炭化有ふ果、イネ炭化籾・籾殻・炭化籾殻、エノコログサ属有ふ果、スズメノヒエ属有ふ果、キケマン属種子、アリノトウグサ属種子、アサ核、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間果実・種子、ソバ果実、イヌタデ果実、ウシハコベ種子、アカザ属種子、ナス種子、ナス属種子、シソ属果実の 19 分類群、シダ植物のワラビ炭化裂片 1 分類群の、計 25 分類群が見いだされた。このほかに不明の芽が得られ、一括した。大型植物遺体以外には、炭化した子嚢菌が得られた。また、昆虫遺体も得られた（表 22）。

表 22　産出花粉胞子一覧表

分類群	遺構名 / 時期 / 水洗量(cc)	SE213 / 戦国時代 / 200
アカマツ	葉	(2)
コナラ	未熟殻斗	(1)
ヒサカキ属	種子	5
キブシ	種子	(1)
エゴノキ	核	(3)
オモダカ属	果実	1
ホタルイ属	果実	3
メヒシバ属	有ふ果	3
ヒエ属	有ふ果	9 (9)
	炭化有ふ果	1
イネ	炭化籾	1
	籾殻	97
	炭化籾殻	1
エノコログサ属	有ふ果	1
スズメノヒエ属	有ふ果	1
キケマン属	種子	39 (3)
アリノトウグサ属	種子	2
アサ	核	(3)
メロン仲間	種子	1
ヒョウタン仲間	果実	(++)
	種子	19 (8)
ソバ	果実	(2)
イヌタデ	果実	1 (1)
ウシハコベ	種子	2
アカザ属	種子	16 (1)
ナス	種子	2 (1)
ナス属	種子	4 (2)
シソ属	果実	3 (2)
不明	芽	(1)
ワラビ	炭化裂片	(7)
子嚢菌	炭化子嚢	48
昆虫		(++)

+：1-9、++：10-49
（括弧内は破片数）

SE213 から得られた種実ではイネが多く、ヒエ属とキケマン属、ヒョウタン仲間、アカザ属が少量、ヒサカキ属とナス属、シソ属、ワラビがわずかに得られた。それ以外の分類群は、産出数が 3 点以下であった。産出数が 3 点以下の種実のうち、栽培植物は、アサとメロン仲間、ソバ、ナスであった。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真 9 に示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) ヒエ属　Echinochloa spp.　有ふ果・炭化有ふ果

イネ科

暗褐色で、紡錘形。基部と先端はやや尖る。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。内頴は膨らまず、外頴は中央部が最も膨らむ。長さ 2.8mm、幅 2.0mm。

（2）イネ　Oryza sativa L.　炭化籾・籾殻・炭化籾殻　イネ科

炭化籾の側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な 2 条の稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ 6.5mm、幅 4.0mm。籾殻は長さ 7.0mm、残存幅 1.4mm。

（3）エノコログサ属　Setaria sp.　有ふ果　イネ科

茶褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形で先端がやや突出する。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ 1.7mm、幅 0.9mm。

（4）アサ　Cannabis sativa L.　核　アサ科

褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ 4.2mm、残存幅 3.7mm。

（5）メロン仲間　Cucumis melo L.　種子　ウリ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下（1984）は、種子の大きさからおおむね次の 3 群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下の雑草メロン型、長さ 6.1 ～ 8.0mm のマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上のモモルディカメロン型である。増山遺跡の SE213 の種子は、長さ 8.4mm、幅 3.7mm の 1 点のみで、モモルディカメロン型の大きさであった。また細長く、扁平のため、栽培種のキュウリである可能性もある。

（6）ヒョウタン仲間　Lagenaria siceraria (Molina) Standl.　果実・種子　ウリ科

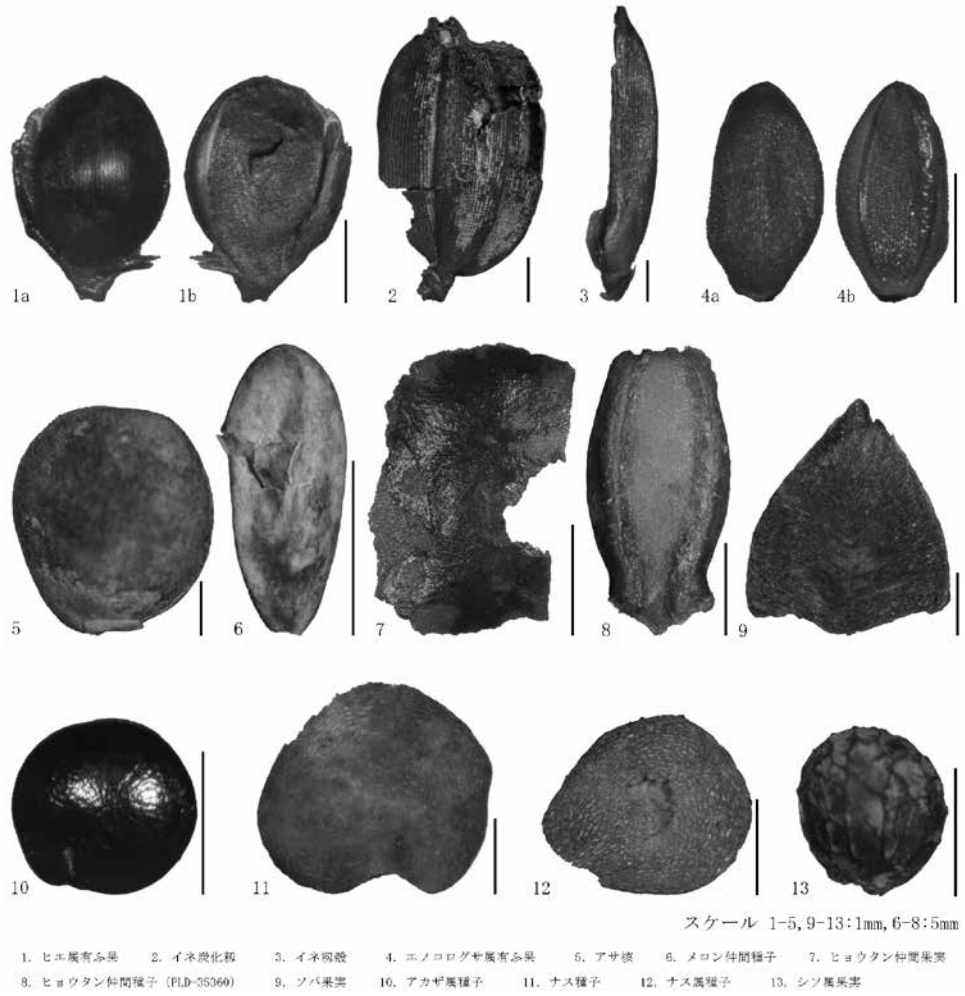


写真 9　増山遺跡の井戸 (SE213) から産出した花粉化石

果実は暗赤茶色で、破片のため全体形は不明。表面は平滑で、やや光沢がある。最大の破片で、残存長13.7mm、残存幅 7.5mm、残存厚 0.6mm。種子はやや淡黄褐色～褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象。先端は W 字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が 2 本走る。壁はややスポンジ質。長さ 16.0mm、幅 7.9mm。

(7) ソバ　Fagopyrum esculentum Moench　果実　タデ科

暗褐色で、完形ならば上面観は三稜形、側面観は先端がやや尖る紡錘形。残存長 3.8mm、残存幅 3.2mm。

(8) アカザ属　Chenopodium spp.　種子　ヒユ科

黒色で、上面観はやや扁平、側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突出し、中心部方向にむかって浅い溝がある。長さ 1.2mm、幅 1.3mm。

(9) ナス　Solanum melongena L.　種子　ナス科

淡褐色で、上面観は長楕円形、側面観はいびつな円形。着点は明瞭に窪む。種皮細胞の細胞壁が屈曲し、それが網目状隆線を構成する。長さ 2.7mm、幅 3.1mm。

(10) ナス属　Solanum spp.　種子　ナス科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ網目状隆線がある。長さ 1.9mm、幅 2.1mm。

(11) シソ属　Perilla spp.　果実　シソ科

暗赤褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ 1.3mm、幅 1.1mm。

(4)　考察

SE213 から抽出した大型植物遺体を同定した結果、栽培種ではイネとアサ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、ソバ、ナスが得られた。量的にはイネの籾殻が多く、籾摺り後の籾殻が使われなくなった井戸に廃棄された可能性や、周辺にあった籾殻が入り込んで自然堆積した可能性などが考えられる。畑作作物の産出数は少ないが、種類数は多かった。メロン仲間は 1 点のみのため、詳細な検討ができなかったが、栽培植物のモモルディカメロンかキュウリの可能性がある。このほかに、アカザ属も種類によっては利用可能である。また、キブシは黒色の染料に用いられるが、これらの植物が増山遺跡で実際に利用されていたかどうかは不明である。

次に、井戸周辺の古植生について検討する。木本植物では、針葉樹のアカマツや落葉広葉樹のコナラ、キブシ、エゴノキ、常緑広葉樹のヒサカキ属がわずかずつ産出している。これらの木本植物は井戸周辺に生育していたと考えられるが、産出数も種類数も少ないため、林分は少なかったと推定される。草本植物では、井戸周辺の道端や荒れ地、畑地にキケマン属やメヒシバ属、イヌタデ、ウシハコベ、ナス属、シソ属など、やや湿った道端や田の畔などにはアリノトウグサ属などが生育していたと考えられる。また井戸内にはオモダカ属やホタルイ属などの抽水植物が生育していた可能性がある。

また、堆積物からは昆虫遺体が多く得られており、合わせて分析を行えば、当時の環境や人間活動との関わりがより詳しく検討できるようになると考えられる。

参考文献

米倉浩司・梶田忠 2003『BG Plants 和名－学名インデックス（YList）』http://ylist.info

藤下典之 1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学―総括報告書』638-654 同朋舎

6 井戸 (SE213) 出土の魚類遺体

吉永亜紀子 (日本動物考古学会員)

井戸 SE213 の 16 層から水に浸かった状態で魚類椎骨が 1 点出土した (以下当資料)。図 40・41 に当報告で用いる魚類骨格名称、図 42 に当資料、計測箇所および計測値を示した。計測にはデジタルノギス (NTD12P-15PMX,Mitutoyo) を用いた。被熱により若干収縮しているため、被熱前は計測値よりも数㎜程大きい椎骨であったと考えられる。被熱のため全体が白色を呈し、神経棘および横突起、椎体部尾側の一部が欠損していたが、著しい変形や収縮がなく形態の観察が可能であったため、現生標本群と比較検討を行った結果、タイ科 (Sparidae gen. et sp. Indet.) 腹椎と考えられた。タイ科にはマダイをはじめ数種が含まれ、現代の富山湾においても主にマダイ・チダイ・キダイ・クロダイの漁獲がある (武野 1993・富山県水産試験場編 1998)。しかし、タイ科椎骨の形態は非常に似通っていることから、属以下の同定は行わず科までの同定にとどめた。

被熱による収縮も考慮のうえ多々良ほか (1962) を参照した体長復元では、当資料はおよそ体長 40 ～ 50㎝のタイ科個体に由来したと推定される。体長の異なるタイ科現生標本群と当資料の形態およびサイズの比較からは、同様の体長に由来する第 6 ～ 8 腹椎のいずれかであると考えられる (図 43)。遺跡出土のタイ科頭骨や腹椎には、解体・調理に伴うカットマークが観察されることが知られているが、当資料では見られなかった。被熱した魚類遺体は、近隣の近世遺跡では金沢城跡遺跡 (河北門 2011・堂形 2012) 等からも出土例がある。

(1)　海産魚の消費・食文化

各地の中世都市遺跡出土魚類遺体の分析からは、マダイへの明確な嗜好が捉えられており、この時期にマダイを好む食文化の一般化が窺えるという。近世に入り、漁業技術の発展に伴って出土魚種が増加傾向の中にあっても、江戸遺跡を中心に出土が最も目立つのはマダイである (樋泉 2008)。大阪や江戸ではクロダイ属の出土も見られるが、中世以降西日本では「赤い鯛」であるマダイ、キダイの出土が特徴的であり、選択的に消費されていたことが指摘されている (久保 1999・丸山 2013)。北陸の中近世食文化については、文献資料を中心に指摘が行われてきたが、近年になって金沢・富山と江戸の出土動物遺体の集成および未報告資料の再検討が試みられており (畑山編 2015・東京大学埋蔵文化財調査室編 2017)、また 2000 年以降継続的に実施されている富山城および富山城下町の発掘調査では、近世の食料残滓である動物遺体が出土している (納屋内 2010 等)。その成果から、富山城下町においても江戸時代を通してマダイを含むタイ科魚類の利用が特徴的に認められることが分かってきた (納屋内 2014a・b)。また、江戸時代中期の料理書『黒白精味集』に記されている魚の格付け「上魚・中魚・下魚」との比較からは、祝宴等「ハレ」の場の食料残滓とは限定できないものの、マダイを中心として「上魚」に格付けされている魚類が多く出土する傾向も指摘されている (納屋内 2017)。越中魚津猟業図絵 (図 45) では、赤く彩色されたタイが散見され、各種網漁や延縄漁の主要漁獲対象であったことが窺える。魚津に限らず富山湾沿岸部一帯でこのような各種網漁や延縄漁が想定され、タイが漁獲されていたと考え得る点と出土魚類遺体分析結果は調和的である。

増山城跡では、2002 年安室屋敷北郭 (L 郭) トレンチ発掘調査から出土した炭化遺体が DNA 分析によりイネと同定され、16 世紀中葉～後半の植物質食料の一端を明らかにする成果が報告されているが (利波・野原編 2003)、海産資源利用や食文化の様相は、動物遺体がこれまで確認されていなかったこともあり不明であった。近年の動物考古学的成果を鑑みるならば、これまで中近世都市遺跡や金沢城・富山城および城下町の出土魚類遺体分析において指摘されてきた海産魚の消費・食文化と同様の様相を背景として、より内陸に位置する増山城下町へも当資料が持ち込まれた可能性が示唆される。また、金沢城・富山城および城下町出土魚類遺体は 17 ～ 19 世紀遺構出土資料であり、16 世紀末～ 17 世紀初頭とされる層位から出土した当資料は、北陸における中近世の海産魚の消費・流通・食文化を考察する上でやや古い時期に位置付けられる資料である。

(2)　海産魚の流通

15 世紀後半～ 16 世紀初頭、神保氏が増山城を支

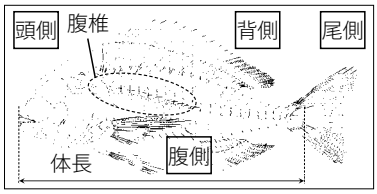


図 40　マダイ骨格図と名称
（落合編 1994 を改変）

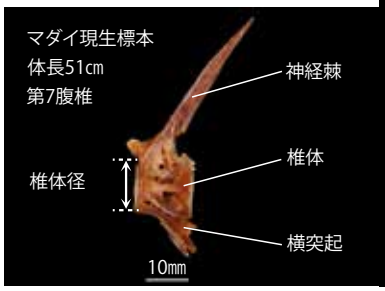


図 41　腹椎左側と名称

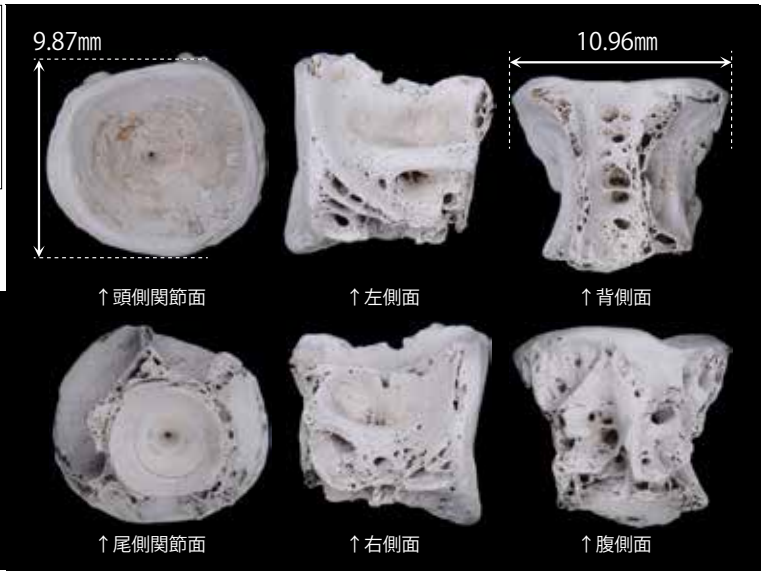


図 42　出土魚類遺体と計測箇所および計測値

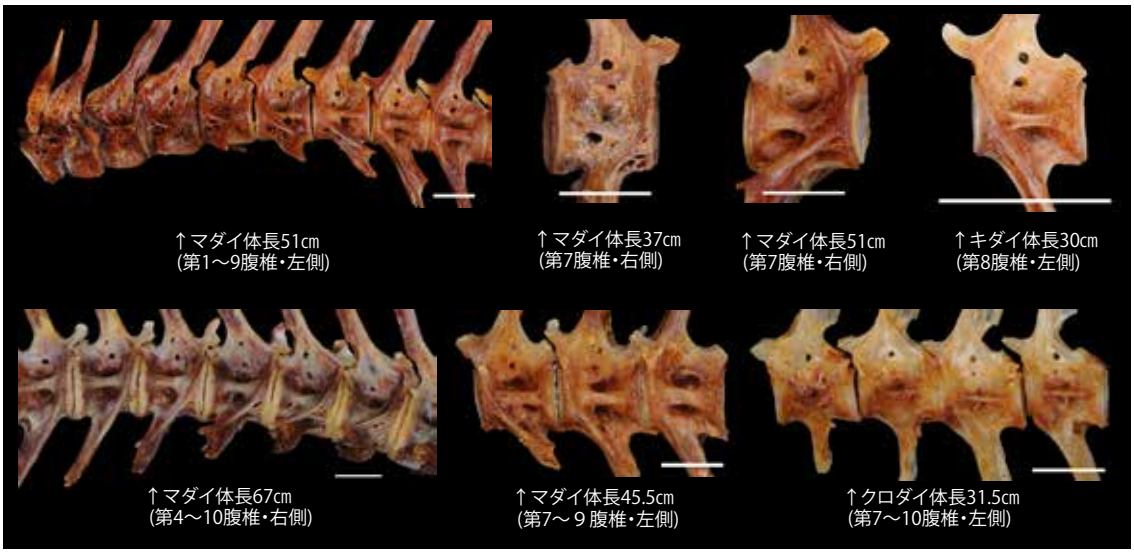


図 43　タイ科現生標本群腹椎の形態とサイズ(スケールはすべて 10mm・慶應大学民族学考古学研究室所蔵)

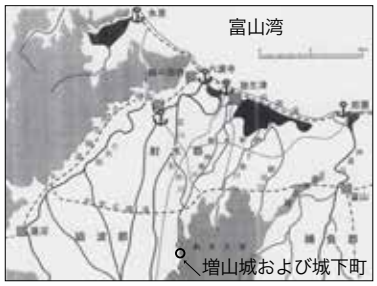


図 44　中世の越中西部(仁木・綿貫編 2015 に加筆)

図 45　越中魚津猟業図絵 (天明 5 年)

城とした理由の一つに、和田川を通じ放生津と結ばれていたという点が指摘されている (図 44・佐伯・野原編 2008)。和田川を含む複数の中小河川と陸上の街道は、放生津を中心として交通網を形成し、16 世紀以降政治的拠点としての機能を失って以降も、放生津は漁業・廻船業を中心とした拠点的港町に発展する (仁木・綿貫編 2015)。増山城下町における和田川の水運も、時代を通してその重要性は変わらなかったと考えられ、増山裏亀山遺跡では近世初頭における居住空間の存在とともに和田川を利用した荷揚げ場に該当する可能性が指摘されている (野原編 2004)。文献資料からは、16 世紀中頃～ 17 世紀の越飛交易において、越中から当遺跡よ

り更に内陸部である飛騨へ鯛を含む様々な魚貝類が運ばれ、魚商人の往来があったことや、加賀藩領内で捕れた上魚は金沢へ集約することが御定であった一方で、遠路により痛魚となるため適宜富山・飛騨・越後へ売捌かれていたこと、放生津に末魚問屋があったこと等海産物流通の様相が明らかとなっている（高瀬 1990）。このような当時の海産物流通の様相を鑑みるならば、当遺跡は現在の富山湾から 20㎞程内陸に位置するが、和田川の水運や周辺の街道を通じて当資料が持ち込まれた可能性が示唆される。

(3)　まとめ

当資料 1 点をもってして考察を行うことは慎むべきであるが、当遺跡における海産魚の消費・流通・食文化について示唆に富む資料であることから、北陸における近年の動物考古学的成果とこれまでの増山城下町に関する調査、文献史学からの指摘を鑑み若干の考察を行った。動物遺体は有機物であるため一般的に遺存し難い考古資料であるが、当資料のように湧水に浸かった状態など一定の環境下では出土が見込まれる。増山城下町の大部分は水田およびダム下となっており、今後も発掘調査に際し動物遺体が出土する可能性が期待される。

謝辞

本報告を行うにあたり、佐藤孝雄先生（慶應義塾大学）、納屋内高史氏（富山市教育委員会埋蔵文化センター）から貴重なご助言を頂戴し、慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室には所蔵現生魚類標本の使用を許可して頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

引用参考文献

「越中魚津猟業図絵（天明 5 年）」石川県立図書館所蔵
落合明編 1994『魚類解剖大図鑑』緑書房
久保和士 1999『動物と人間の考古学』真陽社
黒澤一男 2008「金沢城跡本丸附段 2004-1(2003-8) 地点の動物遺体の同定」『金沢城跡埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』石川県金沢城調査研究所
佐伯安一・野原大輔編 2008『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会
高岡徹編 1991『富山県指定史跡増山城調査報告』砺波市教育委員会・砺波郷土資料館
高瀬保 1990『加賀藩流通史の研究』桂書房
高橋敦・松本美由紀・金井慎司 2012「樹種同定・微細物分析」『金沢城跡 2 － 堂形（第 3・4 次調査）』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
武野泰之 1993「富山湾におけるマダイの年齢と成長」『日本海ブロック試験研究集録 29 号』水産庁日本海区水産研究所
多々良薫・山口義昭・林和夫 1962「「脊椎骨椎体長による体長体重複原のための研究」『内海区水産研究所研究報告』
樋泉岳二 2008「漁撈活動の変遷」『人と動物の日本史 1 動物の考古学』吉川弘文館
東京大学埋蔵文化財調査室編 2017『東京大学埋蔵文化調査室 調査研究プロジェクト 3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 － 動物考古学の研究成果から － 』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
利波匡裕・野原大輔編 2003「平成 14 年度増山城跡総合調査概報 増山城跡Ⅵ」砺波市教育委員会
富山県水産試験場編 1998『富山湾の魚たちは今』桂書房
納屋内高史 2010「富山城下町（町人地）出土の動物遺体」『富山市考古資料館報 No.47』富山市考古資料館
納屋内高史 2012「近世富山城下町出土の動物遺存体 － 2006 年度、2008 年度調査出土資料の紹介 － 」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報第 13 号』富山市教育委員会埋蔵文化財センター
納屋内高史 2014a「動物遺存体同定」『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書 － 西町南地区市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 － 』富山市教育委員会埋蔵文化財センター
納屋内高史 2014b「動物遺存体分析について」『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書 － 一番町共同ビル（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 － 』富山市教育委員会埋蔵文化財センター
納屋内高史 2017「出土動物遺体から見た近世富山城下町の食生活」『東京大学埋蔵文化調査室 調査研究プロジェクト 3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 － 動物考古学の研究成果から － 』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
仁木宏・綿貫友子編 2015『中世日本海の流通と港町』清文堂出版株式会社
野原大輔編 2004「 － 林道増山城趾線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書 － 増山裏亀山遺跡発掘報告」砺波市教育委員会
畑山智史・山川文子 2014「貝・骨分析」『金沢市金沢城下町（丸の内 7 番地点）Ⅰ』石川県教育委員会
畑山智史編 2015『近世金沢の食文化 － 遺跡に眠る動物たち － 』
畑山智史 2017「溶姫の生きた 19 世紀、金沢の食生活」『東京大学埋蔵文化調査室 調査研究プロジェクト 3 江戸藩邸と国元・金沢の食生活 － 動物考古学の研究成果から － 』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会
パレオ・ラボ 2011「出土した動物遺存体」『金沢城跡 - 河北門 -』石川県金沢城跡調査研究所
丸山真史 2013「近世、京都の魚食文化の特徴 － 近世三都の魚貝類の比較を通じて － 」『動物考古学第 30 号』動物考古学研究会

7　木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

(1)　はじめに

富山県砺波市の増山遺跡から出土した木製品や木材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については塗膜分析も行われている（第４章７参照）。

(2)　試料と方法

試料は、SE039、SE047、SE175、SE201、SE213、SE214、SE242 の７基から出土した生の木製品及び木材計 25 点である。いずれも、戦国時代の井戸跡と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行なった。

(3)　結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維管束亜属とスギ、ヒノキ、サワラの４分類群、広葉樹ではモクレン属とエノキ属、クリ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、ハンノキ属、アサダ、モチノキ属の９分類群、さらに単子葉のマダケかハチク１分類群の、計 14 分類群がみられた。ヒノキが６点で最も多く、スギが４点、マツ属複維管束亜属が３点、サワラとモクレン属、エノキ属、クリ、スダジイ、アカガシ亜属、コナラ節、ハンノキ属、アサダ、モチノキ属、マダケかハチクが各１点であった。なお、試料 No.139-2 の漆器椀は、柾目面しか切片が採取できなかったため、広葉樹の同定にとどまった。同定結果を表 23 に、一覧を表 24 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真 10 に光学顕微鏡写真及び試料の写真を示す。

表 23　樹種同定結果

樹種/器種	楔？	付け木？	鍬？	下駄	下駄？	漆器椀	箱？	曲物蓋？	箸	柱	薄板	杭	加工品	不明	竹	合計
マツ属複維管束亜属		1			1		1									3
スギ			1					2	1							4
ヒノキ		1		1					2		1		1			6
サワラ														1		1
モクレン属		1														1
エノキ属		1														1
クリ												1				1
スダジイ												1				1
コナラ属アカガシ亜属												1				1
コナラ属コナラ節										1						1
ハンノキ属						1										1
アサダ	1															1
モチノキ属														1		1
広葉樹						1										1
マダケかハチク															1	1
合計	1	4	1	1	1	2	1	2	3	1	1	3	1	2	1	25

(1) マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon マツ科　写真 10　1a-1c(No.121)

仮道管と垂直及び水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(2) スギ　Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don　ヒノキ科 写真 10　2a-2c(No.126)、3a-3c(No.146)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～ 15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) ヒノキ　Chamaecyparis obtusa (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　写真 10　4a-4c(No.135)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ１～ 15 列である。　分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(4) サワラ　Chamaecyparis pisifera (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　写真 10　5a-5c(No.111)

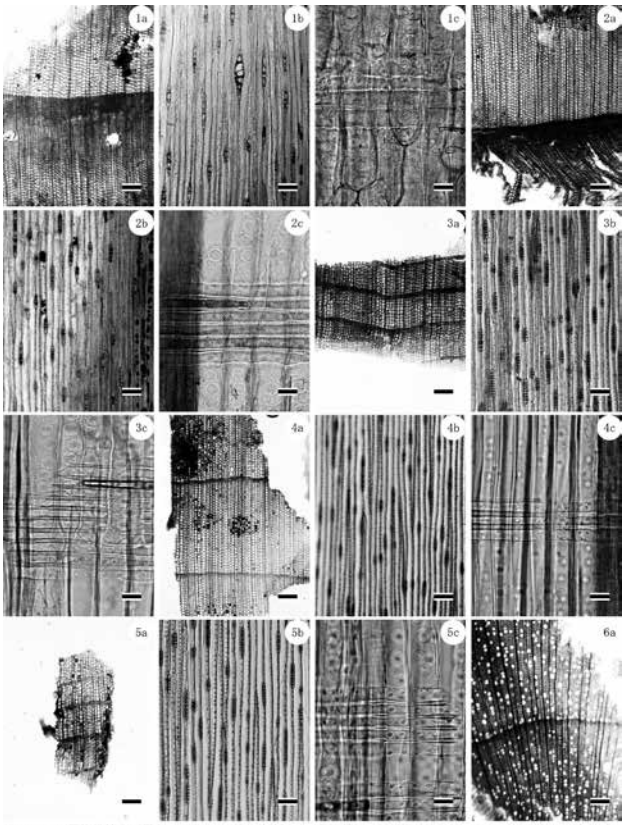
仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は同性で、1 ～ 6 細胞高となる。分野壁孔はやや開いて斜めを向いたヒノキ型となり、1 分野に 2 個みられる。

サワラは岩手県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は軽軟で加工しやすく、水湿によく耐える。

(5) モクレン属　Magnolia　モクレン科　写真 10・11　6a-6c(No.148)

小型の道管が単独ないし 2 ～ 3 個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管交互壁孔は階段状となる。放射組織は上下端 1 列が直立する異性で、幅 1 ～ 2 列となる。

モクレン属にはホオノキ、コブシなどがある。代表的なホオノキは、山間の肥沃なところに散生する落葉高木の広葉樹で、材は軽軟で硬くなく、切削その他の加工は極めて容易である。



1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No. 121)、2a-2c. スギ (No. 126)、3a-3c. スギ (No. 146)、4a-4c. ヒノキ (No. 135)、5a-5c. サワラ (No. 111)、6a. モクレン属 (No. 148)
a：横断面（スケール=250 μm）、b：接線断面（スケール=100 μm）、c：放射断面（スケール=25 μm）

写真 10　木製品及び木材の光学顕微鏡写真（1）

(6) エノキ属　Celtis　アサ科　写真 11　7a-7c(No.142-3)

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合して斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が方形となる異性で、幅 1 ～ 5 列となる。放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬い。まとまって生育することはなく、現在では薪炭材などに利用される程度である。

(7) クリ　Castanea crenata Siebold. et Zucc.　ブナ科　写真 11　8a-8c(No.152-2)

年輪のはじめに大型の道管が 1 ～ 3 列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(8) スダジイ　Castanopsis sieboldii (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　写真 11　9a-9c(No.152-1)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　写真 11　10a-10c(No.152-3)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射

孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強靭で、耐水性があり、切削加工は困難である。

(10) コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科

写真 11・12　11a-11c(No.154)

年輪のはじめに大型の道管が１～２列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

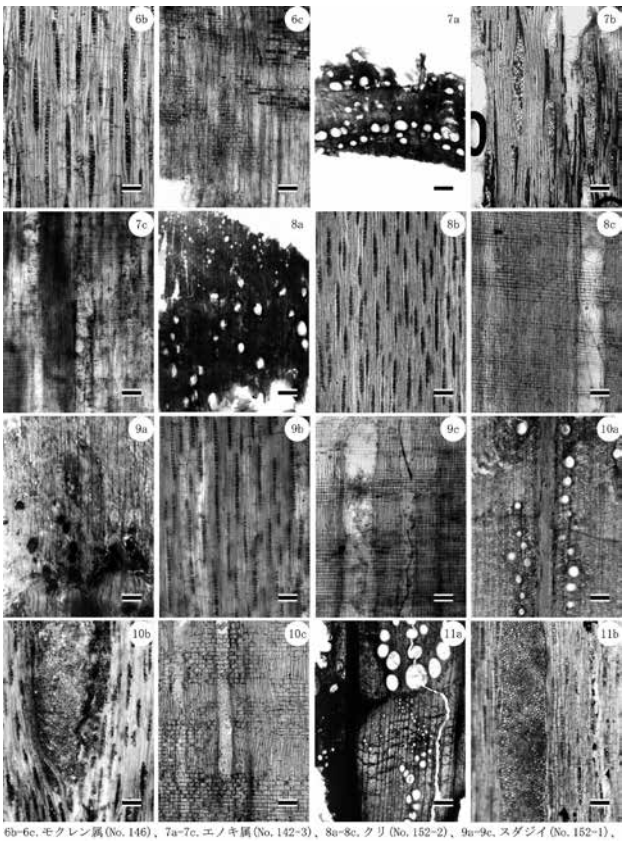
コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靭で、切削加工はやや難しい。

(11) ハンノキ属　Alnus　カバノキ科　写真 12

12a-12c(No.139-1)

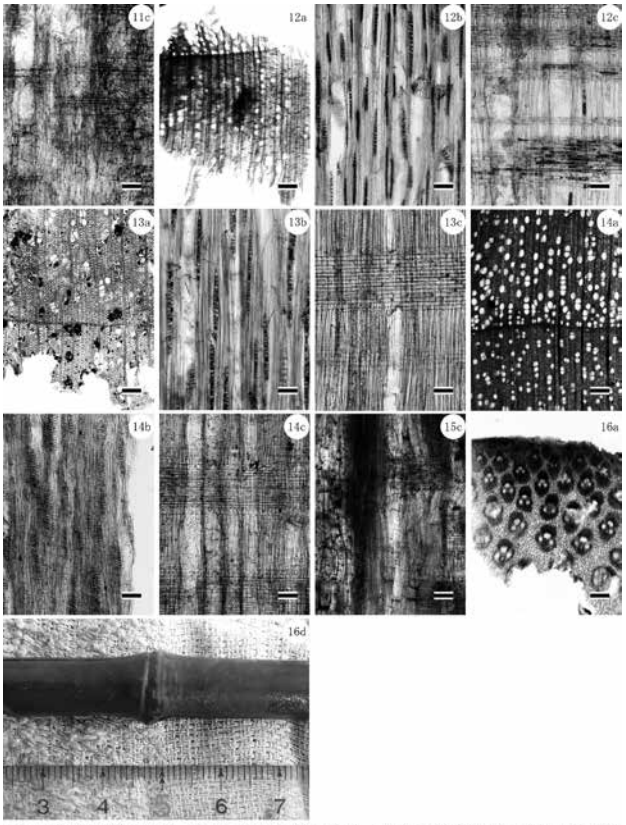
小型の道管が単独ないし２～３個複合して密に散在する散孔材である。道管は 10 ～ 20 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は同性で単列となるが、試料が小さかったために集合放射組織の有無が確認できなかった。したがって、ハンノキ亜属とヤシャブシ亜属の識別ができず、ハンノキ属とした。

ハンノキ属にはハンノキ亜属とヤシャブシ亜属がある。ハンノキ亜属の代表種であるハンノキは平地の湿地や河川などの湿潤地に多い落葉高木の広葉樹で、ヤシャブシ亜属の代表種であるヤシャブシは本州、北海道などの温帯から亜寒帯にかけて分布する落葉小高木の広葉樹である。



6b-6c. モクレン属(No. 146)、7a-7c. エノキ属(No. 142-3)、8a-8c. クリ(No. 152-2)、9a-9c. スダジイ(No. 152-1)、10a-10c. コナラ属アカガシ亜属(No. 152-3)、11a-11b. コナラ属コナラ節(No. 154)
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)

写真 11　木製品及び木材の光学顕微鏡写真（２）



11c. コナラ属コナラ節(No. 154)、12a-12c. ハンノキ属(No. 139-1)、13a-13c. アサダ(No. 133)、14a-14c. モチノキ属(No. 140)、15c. 広葉樹(No. 139-2)、16a・16d. マダケかハチク(No. 155)
a:横断面(スケール=250 μm)、b:接線断面(スケール=100 μm)、c:放射断面(スケール=100 μm)、d:同定試料写真

写真 12　木製品及び木材の光学顕微鏡写真（３）

(12) アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科

写真 12　13a-13c(No.133)

小型の道管が単独ないし 2 ～ 7 個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1 ～ 4 列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帯上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(13) モチノキ属　Ilex　モチノキ科　写真 12

14a-14c(No.140)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。道管は 20 ～ 40 段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性で、幅 1 ～ 5 列となる。

モチノキ属にはモチノキやクロガネモチなどがあり、一般的なモチノキは宮城県、山形県以南の本州、四国、九州などの暖帯の沿海地に多く分布する常緑高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工は中庸である。

(14) 広葉樹　Broadleaf-wood　写真 12　15c(No.139-2)

試料は漆器椀で、木口面および板目面の切片採取が行えず、柾目面のみ切片を採取した。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端 1 ～ 3 列が直立する異性である。

(15) マダケかハチク　Phyllostachys reticulata (Rupr.) K.Koch or Phyllostachys nigra (Lodd. ex Loud.) Munro var. henonis (Bean ex Mitford) Stapf ex Rendle　写真 12

16a・16d(No.155)

向軸側の原生木部、その左右の 2 個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。肉眼観察では、節が二重に廻るのが確認できる。

マダケは青森県、岩手県の中部以南に分布し、ハチクは北海道以南に分布する。共に屈曲性、弾力性、剥離性、加工性、耐久性などに優れており、様々な用途に利用されている。

表 24　樹種同定結果一覧表

試料No.	報告No.	遺構名	器種	樹種	木取り
111	40	SE047	不明	サワラ	柾目
114	38	SE047	箸	スギ	芯去削出
121	78	SE175	容器	マツ属複維管束亜属	芯去削出
126	96	SE201	鍬	スギ	板目
133	130	SE213	楔ヵ	アサダ	芯去削出
134	125	SE213	下駄ヵ	マツ属複維管束亜属	柾目
135	142	SE213	薄板	ヒノキ	柾目
138	122	SE213	箸	ヒノキ	芯去削出
139-1	126	SE213	漆器椀	ハンノキ属	横木取り
139-2	127	SE213	漆器皿	広葉樹	横木取り
140	128	SE213	器ヵ	モチノキ属	芯去削出
142-1	121	SE213	付け木ヵ	マツ属複維管束亜属	芯持丸木
142-2	122	SE213	付け木ヵ	ヒノキ	芯去削出
142-3	123	SE213	付け木ヵ	エノキ属	芯持丸木
144	129	SE213	加工品	ヒノキ	追柾目
146	162	SE214	蓋ヵ	スギ	柾目
147	158	SE214	箸	ヒノキ	芯去削出
148	153	SE214	付け木ヵ	モクレン属	芯持丸木
151	163	SE214	下駄	ヒノキ	板目
152-1	164	SE214	加工材	スダジイ	芯持丸木
152-2	166	SE214	加工材	クリ	芯持丸木
152-3	165	SE214	捏ね棒ヵ	コナラ属アカガシ亜属	芯去削出
152-4	168	SE214	曲物蓋ヵ	スギ	板目
154	14	SE242	柱	コナラ属コナラ節	芯持丸木
155	188	SE039	竹	マタケまたはハチク	

(4)　考察

楔ヵはアサダであった。アサダは堅硬で割れにくい樹種であり（伊東ほか，2011）、楔に適した樹種と考えられる。富山県の戦国時代の木製品集成では、楔ヵにマツ属複維管束亜属とヒノキ属が確認されている（伊東・山田編，2012）。

付け木ヵは、マツ属複維管束亜属とヒノキ、モクレン属、エノキ属であった。マツ属複維管束亜属は油分が多くて燃焼性が高い樹種であり、ヒノキも着火性が良い。またモクレン属とエノキ属は、薪炭材としても利用される樹種である（伊東ほか，2011）。北陸地方の中世以降の付け木では、マツ属複維管束亜属とスギ、ヒノキ、アスナロといった針葉樹が利用されている（伊東・山田編，2012）。

鍬は、スギであった。スギは木理通直で真っすぐに生育し、加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。富山県で出土している戦国時代の鍬としては、梅原胡摩堂遺跡でクリの鍬が 1 点みつかっている。

下駄は、マツ属複維管束亜属とヒノキであった。両樹種はスギと同様の材質で、加工性が良い（伊東ほか，2011）。富山県で出土している戦国時代の下駄では、マツ属複維管束亜属やヒノキ以外にも、スギなどの針葉樹のほか、多様な広葉樹も利用されている（伊東・山田編，2012）。

漆器椀は、ハンノキ属と広葉樹であった。ハンノキ

属は軽軟で加工性が良いという材質を持つ（伊東ほか，2011）。富山県で出土している戦国時代の漆器椀では、ケヤキやブナ属、トチノキが多くみられるが、ハンノキ属ハンノキ亜属もわずかながら確認されている（伊東・山田編，2012）。

容器はマツ属複維管束亜属、曲物蓋？はスギ、箸はスギとヒノキであった。加工性の良い樹種が利用されていたと考えられる。富山県で出土している戦国時代の曲物にはスギやヒノキ属の樹種が、箸にはスギとヒノキが利用されている（伊東・山田編，2012）。

柱は、コナラ節であった。コナラ節は堅硬な樹種であり（伊東ほか，2011）、柱材として選択的に利用されていた可能性がある。なお、富山県で出土している戦国時代の柱では、コナラ節のほかにクリやトネリコ属シオジ節といった硬い樹種が多くみられる（伊東・山田編，2012）。

杭は、クリとスダジイ、アカガシ亜属であった。クリとスダジイ、アカガシ亜属はいずれも堅硬な樹種であり（伊東ほか，2011）、杭として堅硬な樹種が選択的に利用されていたと考えられる。なお、富山県で出土している戦国時代の杭では、マツ属複維管束亜属やアスナロ属といった針葉樹や、クリやハンノキ属といった多様な広葉樹が利用されている（伊東・山田編，2012）。

薄板と**加工品**はヒノキ、不明はサワラとモチノキ属、竹はマダケかハチクであった。ヒノキとサワラは加工性の良い樹種であり（伊東ほか，2011）、モチノキ属は比較的堅硬な樹種である（平井，1996）。用途によって堅硬な樹種、加工性の良い樹種を使い分けていた可能性がある。

参考文献

平井信二 1996『木の大百科－解説編－』642p，朝倉書房.

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』238p　海青社

伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学―出土木製品用材データベース―』449p　海青社

8　漆器椀の塗膜分析

竹原弘展・藤根久・米田恭子・小林克（パレオ・ラボ）

(1)　はじめに

砺波市増山に所在する増山遺跡より出土した戦国時代の漆器椀について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

(2)　試料と方法

分析対象は、戦国時代の井戸 SE213 より出土した漆器椀 1 点である（表 25、写真 13-1）。なお、胎部は横木取りのハンノキ属製である（詳細は樹種同定の項参照）。塗膜片を少量採取し、分析試料とした。分析にあたっては、小林が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X 線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察及び X 線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて黒色塗膜表面から薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光（株）製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16 を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定し、生漆の吸収スペクトルと比較・検討した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約 50μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像観察を行った。さらに、赤色塗膜層を対象として、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（#1000）を用いて厚さ約 20μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

表 25　分析対象一覧表

試料No.	出土遺構	時期	器種	樹種	木取り	採取部位
139-1	SE213	戦国時代	椀	ハンノキ属	横木取り	外面黒色+赤彩文様部

表 26　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

表 27　赤色塗膜層の X 線分析結果 (massz%)

塗膜層	C	SO_3	HgO
c2層	73.00	7.64	19.35

表 28　塗膜分析結果

試料No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層	
139-1	椀	外面黒色塗膜+赤文様	炭粉渋下地	2層	透明漆層、赤色漆層（水銀朱）

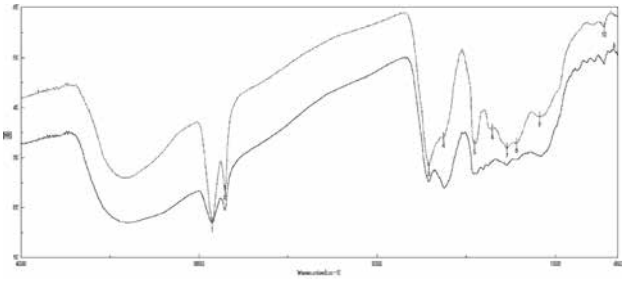
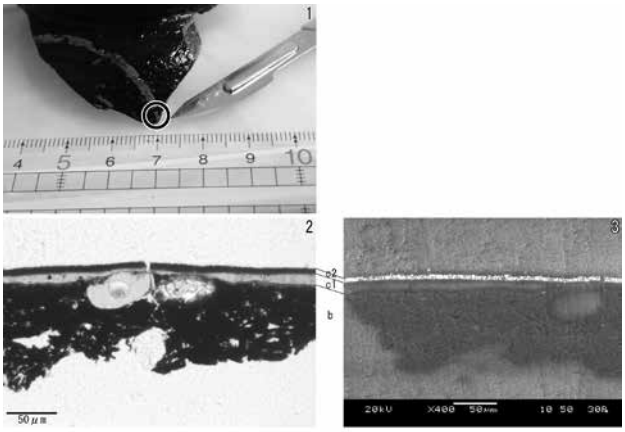


図 46　塗膜層の赤外分光スペクトル (実線 : 塗膜層
点線 : 生漆、数字 : 生漆の赤外吸収位置)



1. 試料採取位置（試料 No. 139-1 椀外面黒色塗膜＋赤文様）　2. 断面生物顕微鏡写真　3. 断面反射電子像

写真 13　漆器塗膜構造

(3)　結果及び考察

写真 13 に、塗膜薄片の生物顕微鏡写真と、走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。図 46 に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率（%R)、横軸は波数（Wavenumber (cm-1)；カイザー）である。スペクトルはノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（表 26)。また、表 27 に赤色塗膜層の X 線分析結果を示す。

塗膜薄片では、炭粉と柿渋からなる下地 b 層、透明漆層 c1 層、赤色漆層 c2 層が観察された（写真 13)。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No.6 ～ 8）が明瞭に認められるほか、ウルシオールの吸収以外の吸収も一致し、漆と同定された（図 46)。赤色漆層 c2 層からは、X 線分析で水銀（HgO)、硫黄（SO3）が検出され（表 27)、水銀朱の使用が確認された。塗膜の特徴を表 28 に示す。

(4)　おわりに

増山遺跡の戦国時代の井戸から出土した漆器椀について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、炭粉渋下地の上に透明漆が 1 層塗られる構造と考えられた。さらに、赤色の文様部は水銀朱を用いた赤色漆層が 1 層塗られていた。

9　井戸（SE046・131）出土礫の石材同定

藤根　久（パレオ・ラボ）

(1)　はじめに

増山遺跡は、富山県砺波市増山に位置する。調査では、戦国時代から江戸時代初頭の井戸から円礫が多量に出土した。ここでは、井戸から出土した円礫について、肉眼観察による石材同定を行った。

(2)　試料と方法

試料は、増山遺跡の２基の集石土坑から出土した円礫である（表 29）。ハンマーを用いて採取した岩石チップを分析試料とした。

石材の同定は、主に肉眼及び実体顕微鏡による組織・構成鉱物等の観察を行った。なお、実体顕微鏡を用いて代表的な石材の表面組織を撮影した。

(3)　結果

２基の集石土坑から同定された岩石種は、1）砂岩、2）泥岩、3）凝灰岩、4）流紋岩、5）安山岩、6）花崗岩、7）玉髄、8）石英の８種類であった（表 30）。

両集石土坑に共通して検出された岩石種は、砂岩、凝灰岩、流紋岩、安山岩、花崗岩、石英の６種類であった。

最も多く検出された岩石は流紋岩であり、分析 No.1（SE046）で 114 個（80.3%）、分析 No.2（SE131）で 72 個（60.5%）であった。次いで安山岩であり、分析 No.1（SE046）で 16 個（11.3%）、分析 No.2（SE131）で 26 個（21.8%）であった。

両井戸の礫には、礫種において大きな違いはないが、流紋岩と安山岩の出現頻度に違いが見られた。

以下に、同定した岩石のうち、典型的な岩石の特徴について記載した。岩石の記載は、色調や構成鉱物、および岩石組織の特徴等について行った。

表 29　分析試料とその詳細

分析No.	遺構	試料	試料数	時期	分析
1	SE046	礫（円礫）	142	中世から近世初頭	肉眼・実体顕微鏡による石材同定
2	SE131	礫（円礫）	119		

1）砂岩（写真 14-1）

白色～灰色～黄白色～黒灰色の細粒砂からなる岩石である。

2）泥岩（写真 14-2）

黒灰色の泥質粒子からなる岩石である。

3）凝灰岩（写真 14-3）

灰白色～黄色～赤褐色の軽石混じりの岩石である。一部はやや軟質岩石からなる。

4）流紋岩（写真 14-4）

白色～灰白色～黄色～赤褐色～暗緑灰色～オリーブ黒色などの斑状組織を呈する岩石である。一部の岩石では流理構造を示す。

5）安山岩（写真 14-5）

黒色～黒灰色の斑晶質の岩石である。

6）花崗岩（写真 14-6）

石英、長石、輝石類で構成される等粒状組織を示す岩石である。

7）玉髄（写真 14-7）

赤褐色の均質なガラス質鉱物である。

8）石英（写真 14-8）

透明の鉱物である。

(4)　考察

遺跡は、射水丘陵の西端、第四紀更新世の中位段丘・隆起扇状地堆積物の上に立地する（図 47）。丘陵の西側には、主に小矢部川と庄川が運搬して堆積させた扇状地が広がる。これら両河川の流域には、共通して第三紀中新世の泥岩（図 47 の凡例 Om や Hbm、Km など）、砂岩（図 47 の凡例 Os や Ts など）、凝灰質泥岩（図 47 の凡例 Tm）、安山岩質溶岩（図 47 の凡例 Ia）、流紋岩質溶岩（図 47 の凡例 Kr）のほか、白亜紀～古第三紀の流紋岩類、飛騨古期深成岩類の花崗岩類が分布する。

遺跡が立地する中位段丘・隆起扇状地堆積物は、主に庄川によって運ばれてきた岩石が堆積すると考えられる。遺跡の東側には庄川の支流である和田川が流下するが、中位段丘・隆起扇状地堆積物を含めて、中新世堆積層分布域に流域をもつ。なお、中新世堆積物は、火山岩類以外は比較的軟質な岩石であり分解するため、礫種としては反映されていない可能性が高い。

和田川は、中位段丘・隆起扇状地堆積物内を流域と

する河川であり、河床礫は庄川によって運ばれた段丘礫と同じと考えられる。

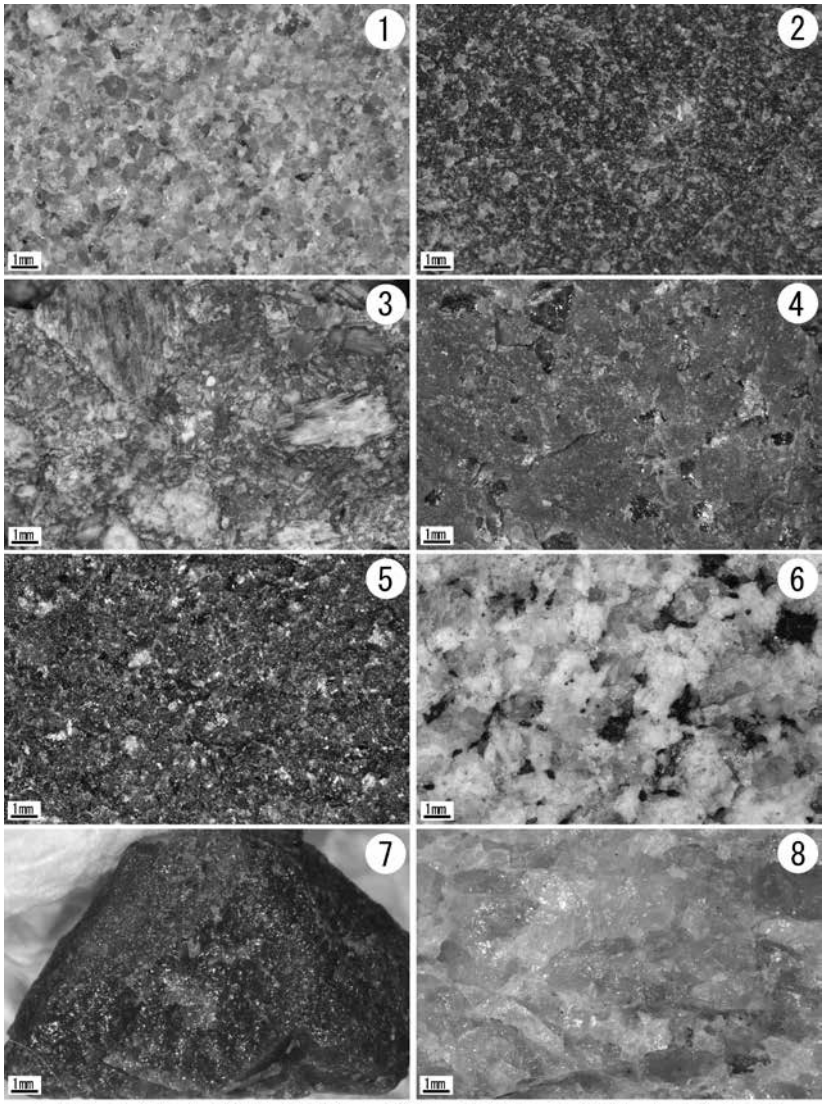
よって、井戸の礫は、庄川あるいは和田川のいずれの河川礫を用いたかについては、区別できないと考えられる。

参考文献

藤井昭二・相馬恒雄・後藤道治・神島利夫・清水正之・金子一夫 1992『10 万分の 1 富山県地質図および説明書』内外地図株式会社　201p

表 30　各遺構の礫の岩石種

大分類	中分類	岩石名		分析No. 1（SE046）		分析No. 2（SE131）	
				個数	個数%	個数	個数%
堆積岩類	砕屑岩	1	砂岩	2	1. 4	5	4. 2
		2	泥岩		0. 0	1	0. 8
火成岩類	火山砕屑岩	3	凝灰質	4	2. 8	7	5. 9
	火山岩	4	流紋岩	114	80. 3	72	60. 5
		5	安山岩	16	11. 3	26	21. 8
	深成岩	6	花崗岩	4	2. 8	3	2. 5
鉱物類		7	玉髄		0. 0	1	0. 8
		8	石英	2	1. 4	4	3. 4
総　計				142	100. 0	119	100. 0



1. 砂岩　2. 泥岩　3. 凝灰岩（軽石質）　4. 流紋岩　5. 安山岩　6. 花崗岩　7. 玉髄　8. 石英

写真 14　石材の実体顕微鏡写真

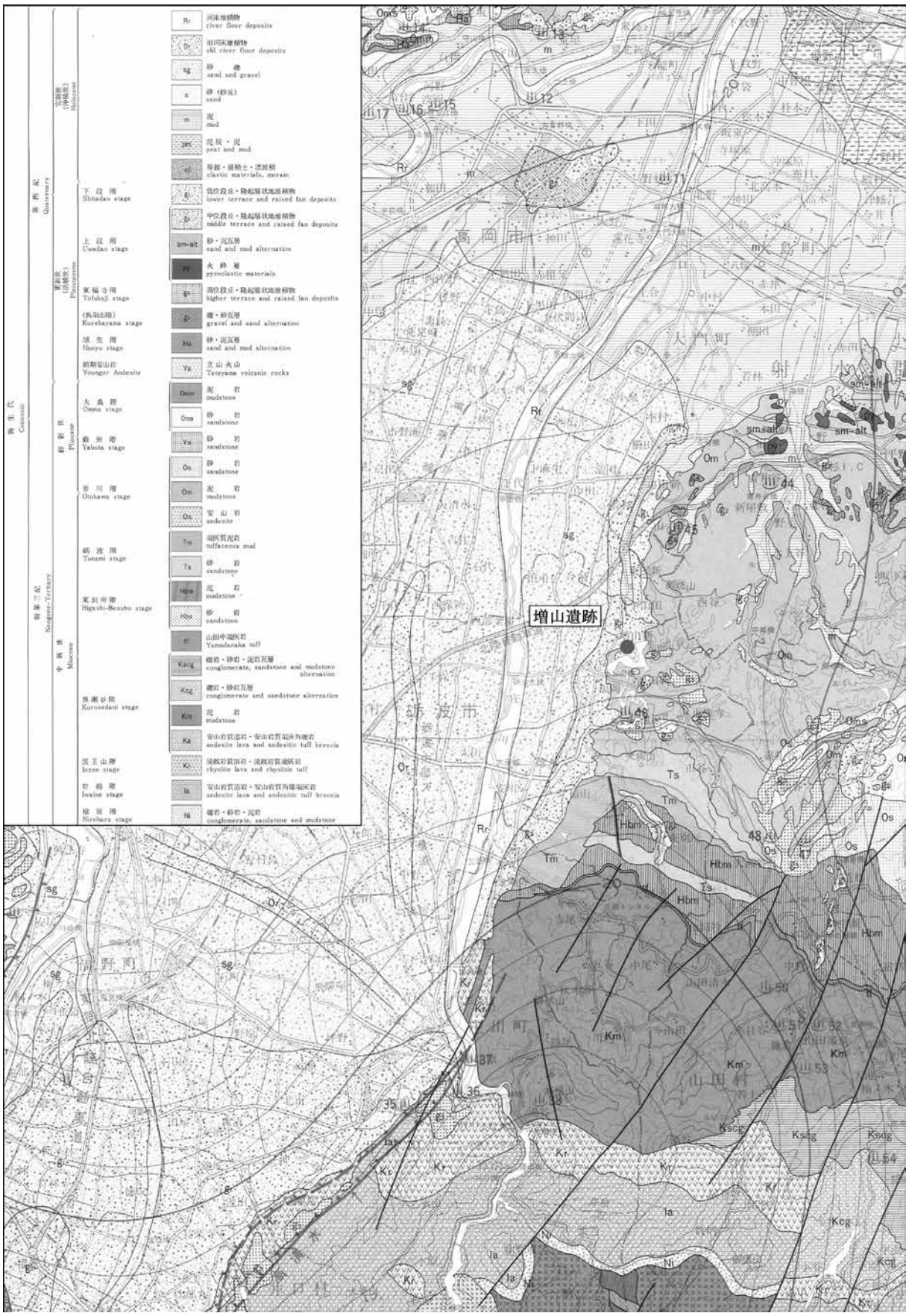


図 47　遺跡とその周辺の地質図 (藤井ほか［1992］を編集)

第５章　総　括

1　遺物の様相

本調査の遺物は、土器・陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品が出土している。土器・陶磁器は越中瀬戸・瀬戸美濃・珠洲・越前・肥前系・備前系・中国・土師質土器・土師器、土製品は坩堝・土壁、金属製品は鉄製和釘・銅製鉢、木製品は下駄・蓋・箸・漆器・擂粉木・加工材・部材等がみられる。ここでは、増山城下町から出土した遺物について、器種構成、器種の特徴、編年についてまとめる。

(1) 器種構成

ここでは土器・陶磁器を中心とした各器種及びその構成についてみていく。図 48 は、器種と生産地についての割合を求めグラフ化したものである。

既述したとおり、土器・陶磁器は多様な生産地から本城下町にもたらされていることが分かる。本調査における産地別の割合は、瀬戸美濃が３割、越中瀬戸が２割とこの２つの産地で５割を占める。続いて、土師器が２割、越前が１割、珠洲・肥前系・備前系・土師質土器・中国は各１割未満である。このことから、越中瀬戸・越前・珠洲の地元周辺からもたらされたものが中心となり、肥前系・備前系・中国で補完している。瀬戸美濃が越中瀬戸を上回っているのは、当時瀬戸美濃が流行していたこと、越中瀬戸が流通する以前から城下町が形成され、瀬戸美濃が越中瀬戸より長期間使用されていたこと等が考えられ、越中瀬戸と瀬戸美濃について多くの疑問が残る。

次に、各器種とその構成についてみていく。本調査で確認できる器種は碗 (小杯・天目茶碗・丸碗等を含める)・皿 (丸皿・内禿皿・折縁皿等を含める)、擂鉢、灯明皿、壺・甕、その他 (筒形香炉等を含める) である。以下、器種と生産地との関係についてまとめる。

器種

碗・皿 (供膳具)　越中瀬戸２割と瀬戸美濃５割が主体で、肥前系１割未満と中国２割が補完する。主体の

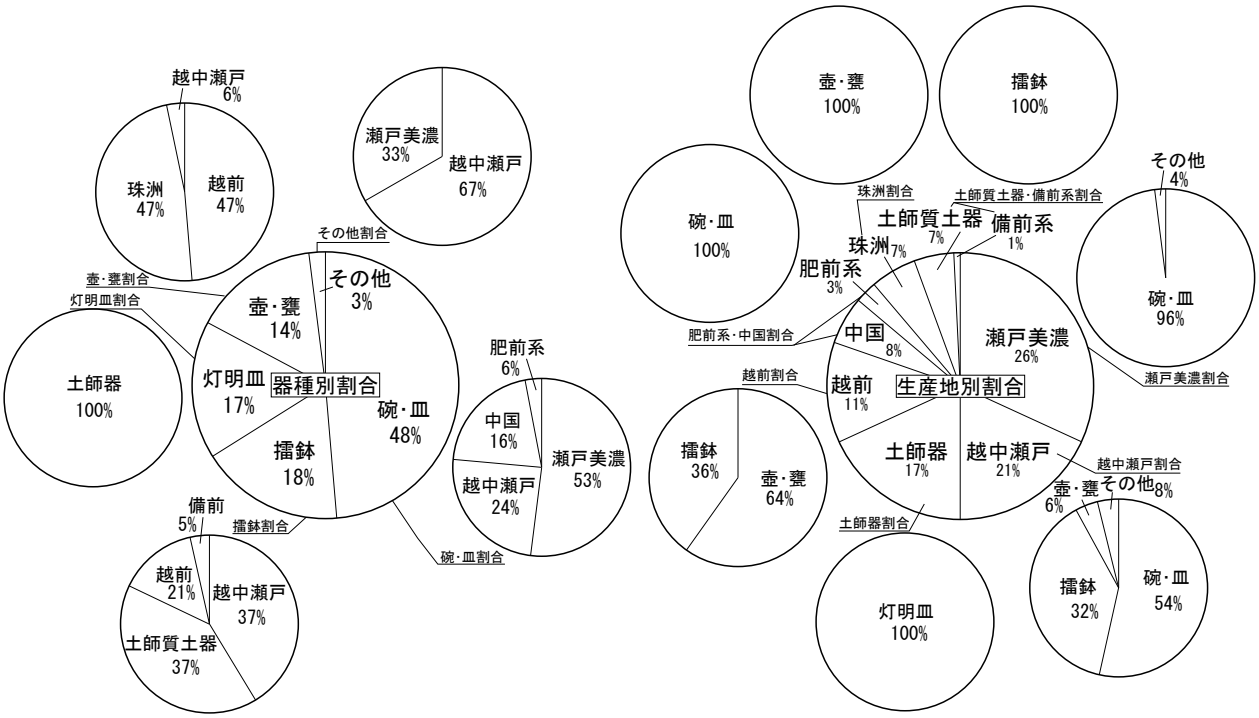


図 48　器種と生産地の構成図

越中瀬戸と瀬戸美濃は当時の消費地において区別されていたのか疑問である。

擂鉢（調理具）　越中瀬戸４割と土師質土器４割と越前２割が主体で、備前系１割未満が補完する。

灯明皿（灯明具）　土師器のみ。

壺・甕（貯蔵具）　珠洲５割と越前５割が主体で、越中瀬戸１割未満が補完する。珠洲は砥石に転用されていることが多く、貯蔵具として使用されていたのかは疑問である。

その他　越中瀬戸６割と瀬戸美濃４割。

生産地

越中瀬戸　碗・皿５割、擂鉢３割、壺・甕とその他各１割。

瀬戸美濃・肥前系・中国　碗・皿のみ。

越前　擂鉢４割、壺・甕６割である。

珠洲　壺・甕のみ。器種と同様。

土師質土器・備前系　擂鉢のみ。

土師器　灯明皿のみ。

以上の結果、器種と生産地との間には関連性を窺い知ることができる。

（2）編年

本調査では、土器・陶磁器の中で越中瀬戸と瀬戸美濃が主体を占め、編年が整理されている瀬戸美濃を軸とする。また、第２章の表３で掲載した増山城と城下町の歴史年表と図49を対比して編年を考えたい。また、各土器・陶磁器の編年対応表を表31に掲載した。以下、土器・陶磁器の第Ⅰ期から第Ⅴ期について説明する。

第Ⅰ期

16世紀前葉までを第Ⅰ期とし、大窯１段階までである。表３では、1362(貞治元)年から16世紀前葉の神保長職氏が富山城を築城する以前に相当する。第Ⅰ期は、歴史的事項においても増山城と直接関係しているのか不明瞭な時期でもある。本調査では珠洲の壺・甕が出土し、14～16世紀と推定されるが、いずれも小破片のため城下町に伴うものかは不明で、砥石に転用されているものが多く、破片として城下町に持ち込まれた可能性も考えられる。また、本調査では大窯１段階天目茶碗(186)が整地層から出土している。しかし、この時期に相当する遺物は１点のみで、生産地での編年は大窯１段階であるが、城下町で使用されたのはもう少し後になってからで、伝世品と考えるのが妥当であろう。

第Ⅱ期

16世紀中葉から後葉を第Ⅱ期とし、大窯２～３段階である。表３では、1543(天文二)年から1581(天正九)年に相当する。

本調査では、丸皿(53)、灰釉皿(15)、内禿皿(190)が出土し、15は大窯２～３段階、53･190は大窯３段階と推定され、出土量は極少量である。越前・土師質土器・中国・土師器は概ね16世紀後半と推定され、図49では幅をもたせて表示した。

当時は神保長職氏が増山城を富山城の支城としていた時期で、増山城が神保氏の本城としての役割を果たすのは1562年(永禄五)からである。このことから、本調査での遺物の希薄化は史実と連動する可能性があり、増山城は詰城として有事の際に一時的に使用される城に過ぎず、恒常的に居住することは少なかったと考えられる。上杉氏や一向一揆方による動乱の中にあった時点では、城下町は未発達だったと推察される。

第Ⅲ期

16世紀後葉から17世紀初頭を第Ⅲ期とし、概ね大窯４段階である。表３では、1583(天正十一)年から1615(元和元)年に相当する。

第Ⅲ期に入ると、本調査において遺物量が増加する。出土遺物の大半が第Ⅲ期に含まれる。肥前系と備前系は第Ⅲ期で、越前・土師質土器・中国・土師器は生産地の編年も考慮しているので、第Ⅱ期から幅をもたせているが、その他の状況から第Ⅲ期の可能性が高い。

1583年に佐々成政氏が越中を平定してようやく落ち着くが、まもなくして佐々氏が羽柴氏に反旗を翻し、1585(天正十三)年に降伏するまで動乱に逆戻りする。同年に前田氏が増山城に入って以降安定していたと考えられる。出土遺物と歴史的事項から、佐々氏と前田氏が増山城に入って以降に、城下町が形成されていっ

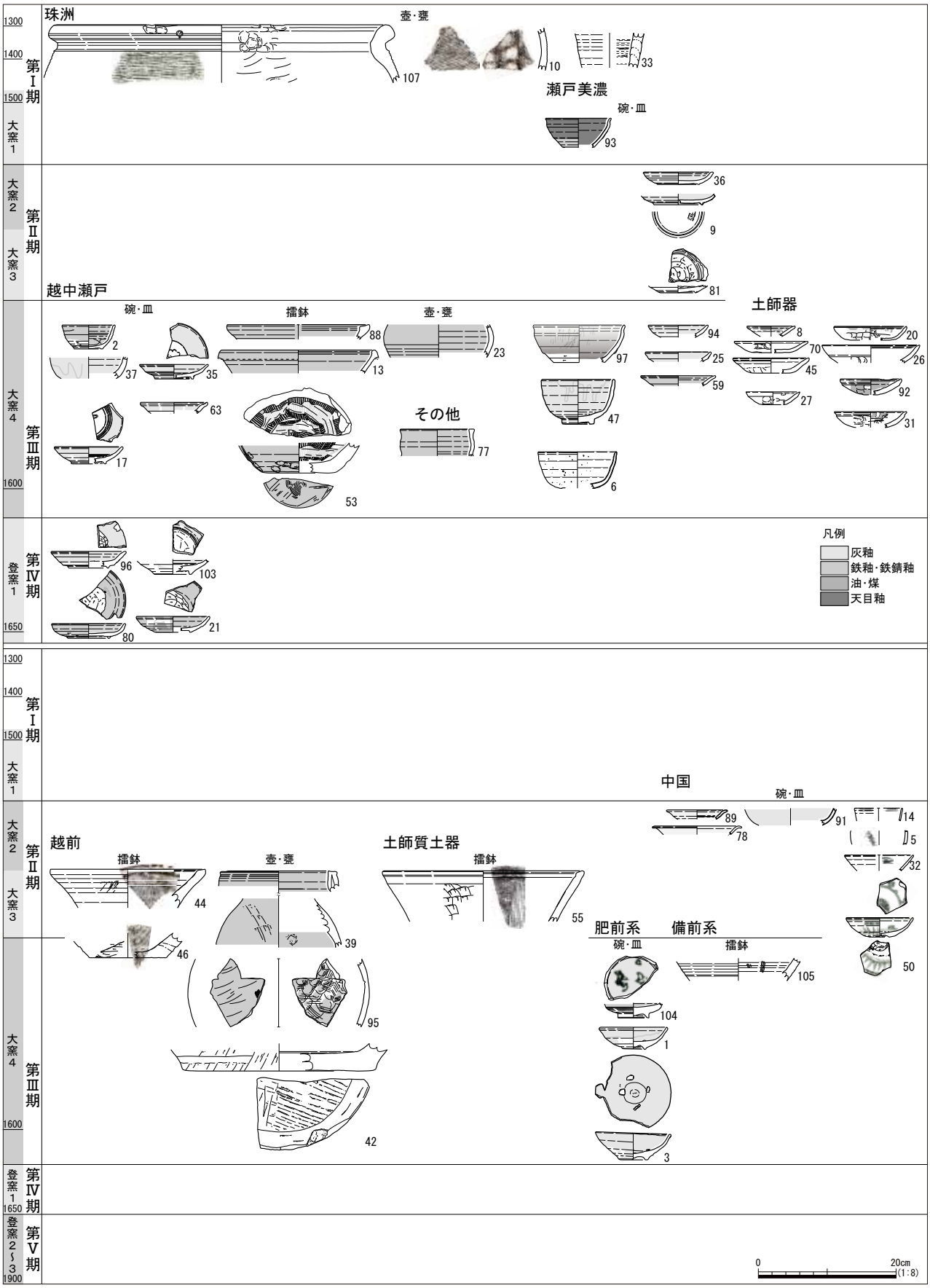

1300
1400
1500
1600
1650
1900
第Ⅰ期
第Ⅱ期
第Ⅲ期
第Ⅳ期
第Ⅴ期
大窯1
大窯2
大窯3
大窯4
登窯1
登窯2～3
珠洲
壺・甕
瀬戸美濃
碗・皿
越中瀬戸
土師器
擂鉢
その他
凡例
灰釉
鉄釉・鉄錆釉
油・煤
天目釉
中国
越前
土師質土器
肥前系
備前系
0
20cm
(1:8)

図 49　城下町の編年図

たと推察される。第Ⅲ期が大きな画期に位置付けられる。

第Ⅳ期

17 世紀前葉から中葉を第Ⅳ期とし、登窯 1 段階である。表 3 では 1615(元和元) 年から 1663(寛文三) 年に相当する。

本調査では、越中瀬戸のみ少量確認でき、その他はみられない。越中瀬戸は内禿皿 (27･175･179･180) で、175 は付高台、180 は三角高台にケズリ出す。180 は釉止めを持つが、その他は釉止めがみられない。第Ⅲ期は比較的焼成が良好で、25 は胎土が磁器のような白色であったが、第Ⅳ期のものは焼成が不良で、生焼け状態である。

資料的な制限はあるものの、このことは増山城下町から増山村に変化した可能性を示唆している。

第Ⅴ期

本調査ではみられなかったが、次に説明する昭和 50-52 年調査において出土した 17 世紀後半以降の遺物である。ここでは増山村が用水沿いに移動する 17 世紀後半以降を第Ⅴ期として設定しておく。

小結

最後に、過去の増山遺跡の出土遺物との比較検討を行い、増山遺跡出土遺物のまとめとしたい。

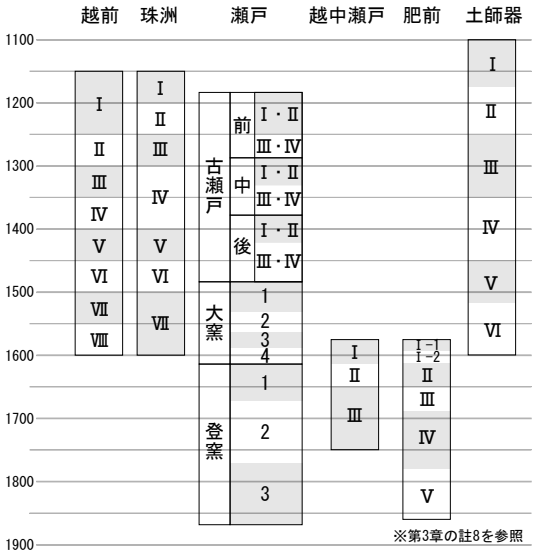
昭和 50-52 年調査では、越中瀬戸・瀬戸美濃・珠洲・越前・肥前系陶磁器・中国 (青花・白磁)・土師器・土師質土器、煙管、石臼等が出土している。土器・陶磁器では越中瀬戸が主体である。

越中瀬戸　碗・皿・向付・擂鉢・徳利・火入等がみられる。本調査と器種が若干異なっており、時期も概ね第Ⅳ期に相当する。

瀬戸美濃　碗・皿・擂鉢・茶入等がみられる。瀬戸美濃の割合は越中瀬戸に対して少ない。時期は概ね第Ⅱ・Ⅲ期に相当する。

珠洲・越前・土師質土器・中国・土師器　本調査と概ね同様で、珠洲は第Ⅰ期、越前・土師質土器・土師器は第Ⅲ期、中国は第Ⅱ・Ⅲ期に相当する。土師器は灯明皿と考えられる。

表 31　土器・陶磁器編年対応表



肥前系陶磁器　本調査では陶器のみで第Ⅲ期に相当するが、昭和 52 年調査では磁器がみられ、第Ⅲ・Ⅳ期に相当する。また、磁器では 17 世紀後半から 19 世紀にかけてのものもみられるが、遺構に伴うかどうか確認できないので、今後の課題である。増山村の一部が用水沿いの新しい村に移動せず、残っていた可能性も考えられ、現在も増山遺跡の西端に宅地が 1 軒確認できるのもその名残りであろうか。

煙管・石臼　石臼は本調査においても出土しているが、煙管は出土していない。18 世紀前半の煙管と推定されている。

以上から、器種構成は本調査と概ね一致し、越中瀬戸 (碗・皿・向付、徳利、擂鉢、壺・甕、香炉、火入等)、瀬戸美濃 (碗・皿、茶入)・珠洲 (壺・甕)・越前 (擂鉢、壺・甕)・肥前系陶器 (碗・皿、甕)・中国系青花・青磁・白磁 (碗・皿)、土師器 (灯明皿)・土師質土器 (擂鉢)、石製品 (石臼・砥石)、金属製品 (和釘・鉢・煙管)、木製品 (漆器椀・皿、箸、蓋、下駄、各種部材等) が増山城下町の器種構成とまとめることができる。

本調査との相違点　昭和 50-52 年調査は第Ⅲ期が少量で、第Ⅳ期が主体となり、加えて、本調査ではみられなかった 17 世紀後半以降の遺物が出土している点である。このことは、本調査が城下町の範囲内の東端で増山城に近く、昭和 52 年調査が城下町内の西端で増山城から遠いことと関係しているのであろうか。

(片山博道)

2　土塁の復元と城下の形成過程

これまで増山城下町は昭和 50-52 年の試掘調査の成果などをもとに、小地名調査の成果や従前図を援用しつつ解明が試みられて来た[1]。このたび実に 39 年振りに本発掘調査を行い、多くの情報を得る事が出来た。新知見もあれば、既存の解釈を追認する結果もある。本節では主な成果についての総括を行う。

(1)　土塁の復元試案

増山城下町の大きな特徴の一つが土塁の存在である。富山県内の城下町で唯一残る土塁として知られる。今回、この土塁の北側を試掘調査する機会を得た。またとない好機である。詳細は第 1 章に譲り、ここで土塁の復元作業を試みたいと思う。

現存する土塁は、和田川に突き出る舌状台地の先端を横断するように存在し、城下町の主要道路「下町大道」の南側にある。既往の小地名調査[2]とほ場整備前の地形図によって、現存の土塁の北にかつて片割れが存在した事が指摘されていたが、これまで城に注目が集まり土塁はその稀少性に比べて積極的に論じられる事は少なかった。昭和 50-52 年の試掘調査では、土塁にトレンチが掘られ、簡易な断面図が作られた (図 50)。土塁の断面規模を知り得る唯一の手掛かりである。これによると、規模は東側の比高差 4.0m、西側の比高差 2.0m。

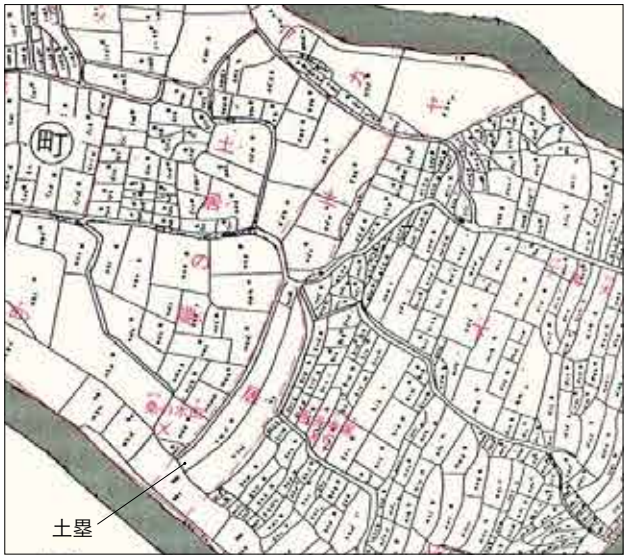


図 51　土塁周辺の小地名図
(砺波市教育委員会 2008『増山城跡総合調査報告書』より転載)

土塁盛土と空堀　試掘調査では T6・T7 で 2 条の溝を確認した。水底堆積物が無いことから、機能時は流水がなかったと考えられる。埋土の堆積状況から短期間のうちに人為的に埋められたとも推察され、この溝は断面形状から 2 本合わせて 1 つの空堀と捉えたい。また、T7 東側で土塁の盛土層が確認された。以上の状況証拠から、溝は空堀、そして空堀の東側に土塁が存在した可能性が高いことが判明した。

1　高岡　徹 2008「城下町の形成」『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会、野原大輔 2014「増山城下町の構造と景観復元」『守護所シンポジウム 2@ 清須　新・清須会議資料集』など

2　佐伯安一 1991「付論三　増山の小地名調査」『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』砺波市教育委員会他

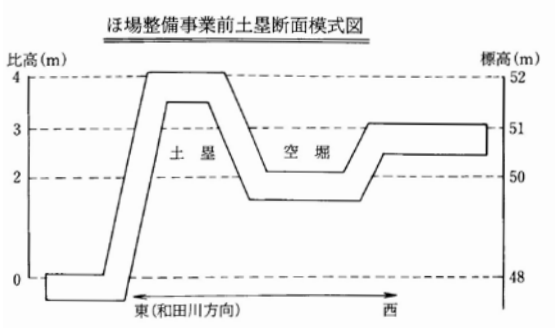


図 50　ほ場整備事業前土塁断面模式図
(砺波市教育委員会 1969『砺波市の文化財』より転載)

表 32　土塁規模の諸元

単位 (m)

遺　構　名	延　長	比高差 **	比高差 ***	最大幅 (下端)	最小幅 (下端)	最大幅 (上端)	最小幅 (上端)
土塁 (現存)	84.4	4.0	2.0	10.0	3.9	5,5	1.1
土塁 (復元)	58.3*	—	—	—	—	—	—
土塁 (現存＋復元)	154.0*	—	—	—	—	—	—

* は推定値　** 東側 (和田川側) の比高差　*** 西側 (寺土居町側) の比高差

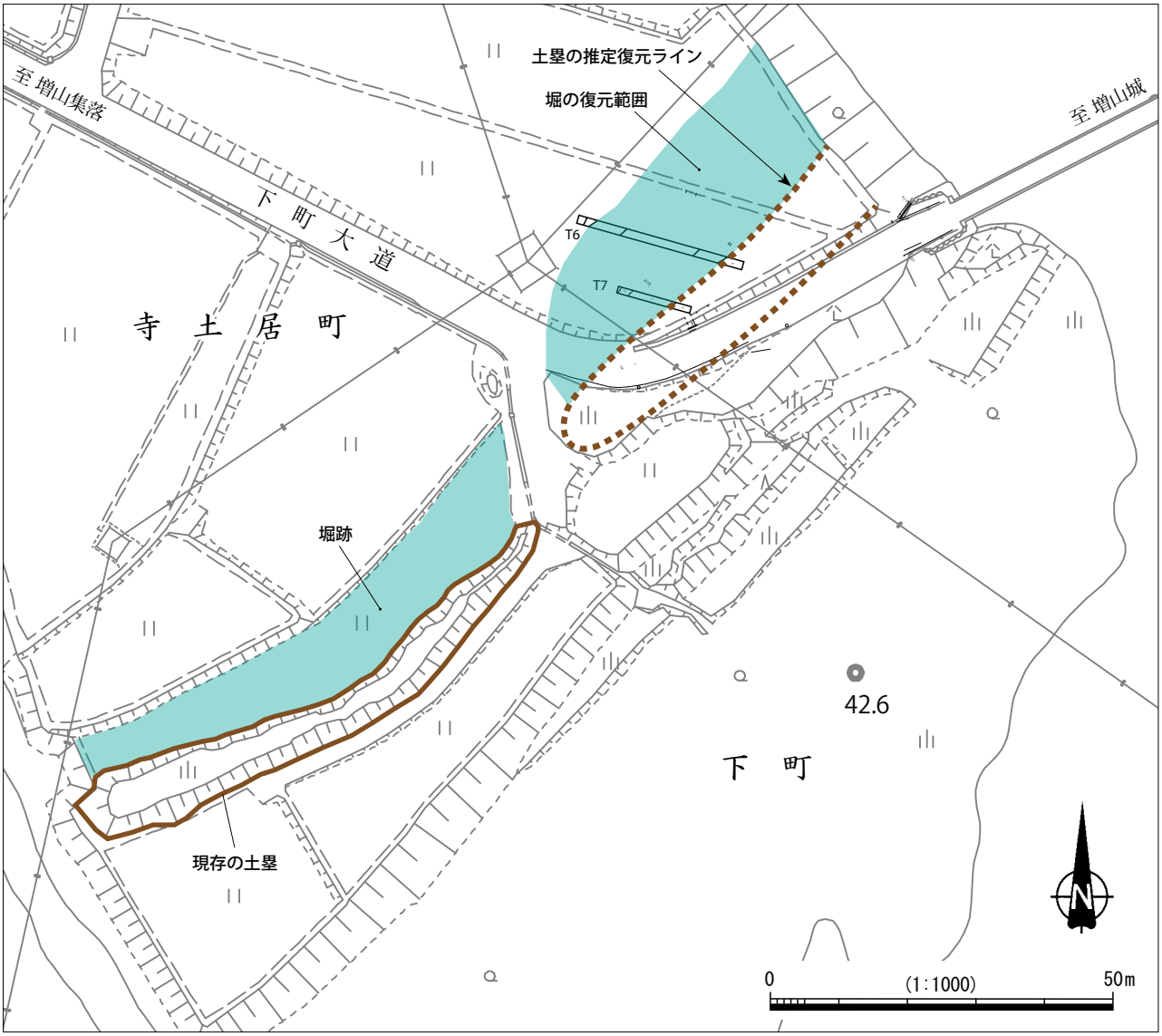


図 52　土塁の復元図　S=1:1,000

肝心なのは、その年代である。盛土層中の炭化物で放射性炭素年代測定を試みたが、年代値は縄文中期を示した。戦国期から大きく乖離する年代値だが、縄文中期の地層が自然堆積する層位でない事は明らかで、逆に盛土層である蓋然性が高まった。

以上の結果を踏まえて、土塁を図上復元したのが図 52 である。土塁の規模に関する数値は表 32 の通り。

現存の空堀の幅（上端）は、水田の形状から約 5 ～ 12m と推定される。復元の空堀は、試掘データを元に推定すると最大幅（上端）が約 16m となる。

喰違虎口　２本の土塁を復元すると位置関係は直線的に並ぶのではなく、やや喰い違い状となる。地形図では下町大道がここで S 字状にクランクしており、土塁の間は「喰違虎口」であった可能性がある。

土塁の役割　土塁は、西側に堀を持つ。つまり、西からの防御を意識して構築されており、下町と城を守る役割がある。併せて下町側との比高差が寺土居町側の倍もあり、東側の防御性も十分にある。空堀に視点を置くと、土塁は増山城の防御線の最外郭、つまり総構（惣構）の役割が思い浮かぶ。下町側との比高差に視点を置くと、城下町の「町曲輪」的機能が看取される。

上城戸・下城戸　これは全くの予見に過ぎないが、土塁は城下の東西２箇所に存在したのではないか。越前一乗谷朝倉氏遺跡では城下に上城戸と下城戸があり、谷が最も狭くなる箇所に取り付く。増山の場合、現存の土塁を上城戸と仮定すると、八兵衛谷の頂部近くに土塁と思しき旧地形があり、下町大道も若干クランクしている。ここに下城戸の可能性を見出したい。

表 33　歴史年表

西暦	和暦	出来事
1590	天正十八	小田原攻め
1591	〃　十九	御土居構築
1595	文禄四	小丸山城の総構完成
1599	慶長四	金沢城内惣構構築
1610	〃　十五	金沢城外惣構構築

構築時期　今のところ、不明といわざるを得ない。試掘で盛土層を確認出来たが、放射性炭素年代測定は土塁構築年代の判断材料となり得なかった。

高岡徹氏は「増山城下町の変遷模式図」で、土居（土塁）の構築を 16 世紀後半、佐々成政期に置いた[3]。時期に異論はないが、瀬戸美濃を軸とする遺物の編年観（第 5 章 1）を俯瞰すると土塁は第Ⅲ期に造成され、その構築者は佐々氏よりも前田氏とみた方が蓋然性が高いように思われる。今後、土塁の発掘やその他史料の出現を待って構築時期を見定めたい。

3　高岡 徹 2008「4　城下町の形成」『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会

(2)　調査成果のまとめ

このたび城下町の中心部分を掘る、稀有な機会を得た。調査面積が狭小なので、淡い期待を抱きつつ調査を進めたが、処理し切れない程の情報を得ることが出来た。ここで改めて調査成果をまとめておきたい。

考古学的成果　試掘調査では、土塁の盛土層と土塁に伴う空堀を確認した。２本の土塁が対になり、喰い違い状に配置される可能性を見出した。残念ながら構築時期を知り得ることは出来なかったが、遺構・遺物の年代と軌を一にすると解釈される。ここでは、前田氏が構築した可能性を指摘しておく。

遺　構　16 世紀後葉から 17 世紀前葉の遺構を確認した。掘立柱建物 4 棟以上（柱穴 338 基）、土坑 8 基、井戸 10 基、計 356 基の遺構である。狭い調査区に高い密度で遺構が分布する状況で、時期は極めて短期間である。特徴として柱穴の重複、井戸２～３基のまと

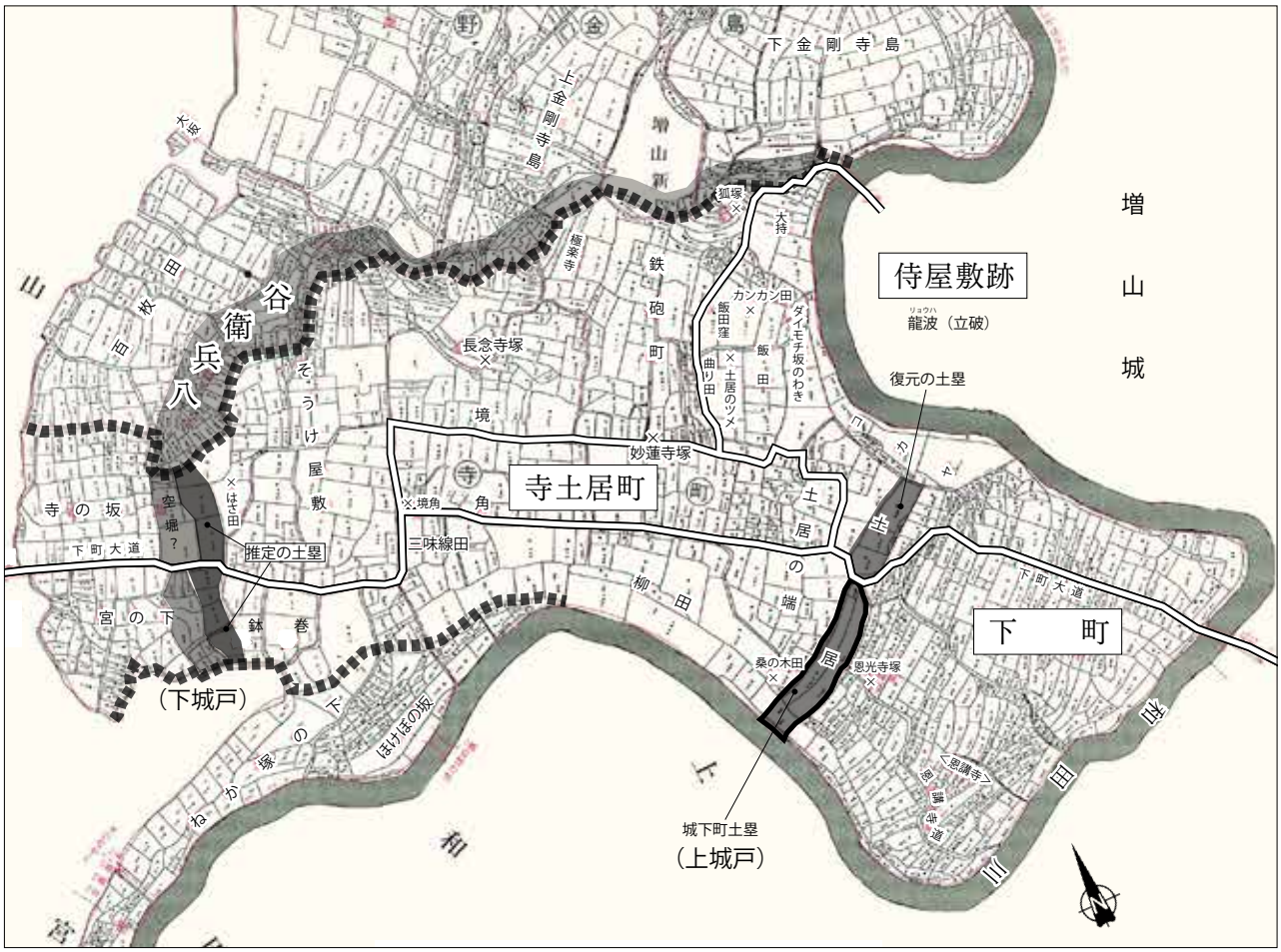


図 53　城下町の復元図

表 34　瀬戸美濃を軸とした増山城下町編年表

編年	年代観	遺物量	出土遺物	城主･城代
第Ⅰ期	～ 16 世紀前葉（1363 ～ 1542）	極少量	珠洲	神保
第Ⅱ期	16 世紀中葉～後葉（1543 ～ 1581）	極少量	瀬戸美濃	神保 上杉 一向一揆
第Ⅲ期	16 世紀後葉 ～ 17 世紀前葉（1583 ～ 1615）	多量	瀬戸美濃 越中瀬戸 越前・中国 土師器等	佐々 前田
第Ⅳ期	17 世紀前葉～中葉（1615 ～ 1663）	少量	越中瀬戸	－
第Ⅴ期	17 世紀後半以降（1664 ～　）	少量	－	－

まり、整地層が多数あることが挙げられ、建物の建て替えと整地を何度も行った様子が窺える。

遺　物　調査面積に比べて瀬戸美濃の出土量が多く、当初は越中瀬戸との判別が難しかったが、藤澤良祐氏の鑑定によりその多くが瀬戸美濃と判明した。おかげで、瀬戸美濃を軸とした城下町の編年を組むことが出来た。大枠はこれまでの遺跡消長と大差ないが、編年が確立した瀬戸美濃を基にすることで、細かな年代を与えることが出来た (表 34)。ただし、これは生産地の編年を適用したもので、搬入や伝世を考えると時期は少し下る可能性がある。

自然科学分析の成果　放射性炭素年代測定では、土塁の盛土最下層の炭化材が縄文時代中期末頃、暗渠 (SD010) 出土木材が 1958 年以降、井戸 (SE213) 出土のヒョウタン仲間種子が 15 世紀後半～ 17 世紀前半との年代値を得た。

城下町機能時の古環境を復元するため、花粉分析・種子分析を行った。井戸 (SE213) の花粉分析では、コナラ属コナラ亜属が多く、クリを伴う状況から周囲に二次林が広がることが推定された。また、イネ科やアカザ科の花粉から周囲に草本類が広がることや、ハンノキ属・ミズバショウ属・アリノトウグザ属の花粉から、湿地的環境が存在することが推定される。栽培植物としてはソバ属・ベニバナ属・トウガン属・アブラナ科・ナス属の花粉が産出され、イネの栽培のほかに冬瓜、スイカ、大根、蕪などの栽培が推定される。井戸 (SE213) 出土の大型植物遺体分析では、イネ・ヒエ属・キケマン属・ヒョウタン仲間・アカザ属・ヒサカキ属・ナス属・シソ属・ワラビの種子が産出され、栽培植物としてアサ・メロン仲間・ソバ・ナスがあり、量的にイネの籾殻が多く、籾摺りの後の籾殻が井戸に廃棄または井戸に流入したものと思われる。畑作作物の産出数は少ないが、種類数が多い。また、昆虫遺体の分析を進めれば、当時の環境をさらに復元できるという。

ほかに魚骨が 1 点出土した。被熱により収縮しており、体長 40-50cm のタイ科腹椎と推定される。

井戸出土の木製品 25 点の樹種同定を行い、ヒノキ・スギ・マツ属複維管束亜属などが確認された。木製品の種類による分析では、楔ｶは堅硬な樹種であるアサダ、付け木ｶはマツ属複維管束亜属・ヒノキ・モクレン属・エノキ属で油分が多く燃焼性が高い樹種を用いている。ヒノキは着火性高い。鍬はスギで、加工性の良い樹種を使っている。梅原胡摩堂遺跡でクリの鍬が 1 点出土している。下駄はマツ属複維管束亜属とヒノキ。漆器椀はハンノキ属と広葉樹。ハンノキ属は軽軟で加工性が高い。そのほかに柱はコナラ節で堅硬な樹種を選んでいる。

漆器椀の塗膜分析では、炭粉渋下地の上に透明漆が 1 層塗られる構造と推測する。赤色の文様部は水銀朱を用いた赤色漆層が 1 層塗布されていた。

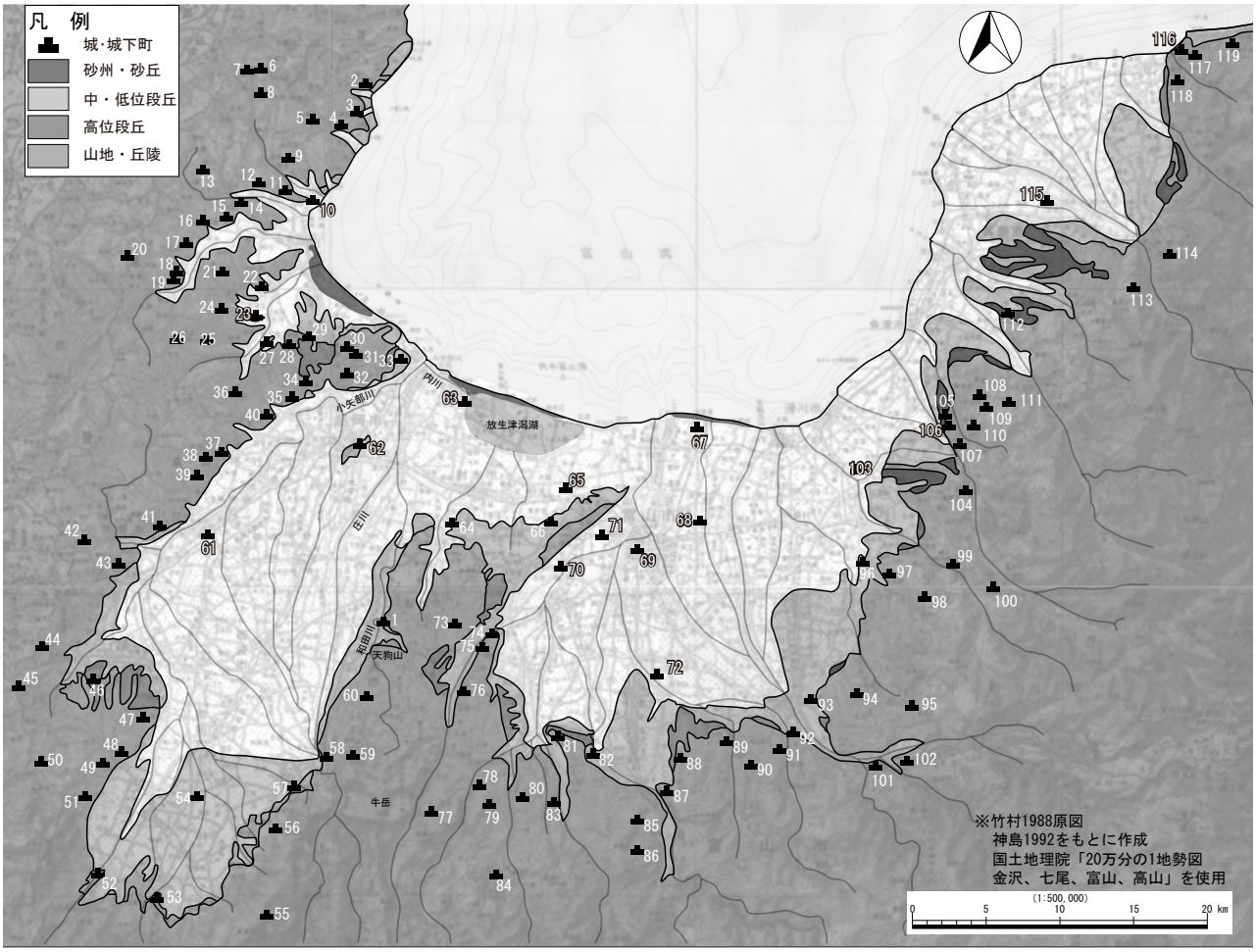
井戸 (SE046・131) 出土の石材同定では、流紋岩や安山岩が多数を占め、他に凝灰岩・花崗岩・砂岩・石英が確認され、庄川や和田川の運搬物と推定される。

(3)　城下町の形成過程

面的調査で明らかとなった遺構の濃密な分布は、高い集住性を意味するのだろう。疎集とは程遠い状況である。

城下町の都市機能　城下町は戦国時代から江戸時代にかけて成立した都市形態であり[4]、戦国城下町では家臣団の集住や市町の吸収が一部では進んだが、全家臣が集住した訳ではなく、商工業者の多くが在地に居住したままだった。画期となったのは織豊政権で、「織田信長が 1576 年 (天正 4) 建設を始めた安土では、家臣団

4　宮崎勝美 2007「城下町」『歴史考古学辞典』吉川弘文館



1 増山城跡	16 新保城跡	31 二上山城跡	46 名畑城跡	61 木舟城跡	76 高山城跡	91 文殊寺城跡	106 升方南城跡
2 一夜城跡	17 小窪城跡	32 守山城跡	47 安居城跡	62 高岡城跡	77 大道城跡	92 湯端城跡	107 水尾城跡
3 姿城跡	18 小浦城跡	33 古国府城跡	48 西勝寺城跡	63 放生津城跡	78 高尾城跡	93 新宮山城跡	108 北山城跡
4 宇波城跡	19 久目城跡	34 頭川城跡	49 桑山城跡	64 日の宮城跡	79 高峰城跡	94 池田城跡	109 小菅沼城跡
5 白河城跡	20 棚懸城ケ峯城跡	35 柴野城ヶ平城跡	50 御峰城跡	65 願海寺城跡	80 茗荷原城跡	95 礼拝殿山城跡	110 松倉城跡
6 石場山城跡	21 千久里城跡	36 二ツ城跡	51 広瀬城跡	66 白鳥城跡	81 井田主馬ヶ城跡	96 弓庄城跡	111 坪野城跡
7 荒山城跡	22 島崎城跡	37 浅井城跡	52 才川城跡	67 大村城跡	82 城生城跡	97 柿沢城跡	112 天神山城跡
8 森寺城跡	23 久津呂城跡	38 赤丸城跡	53 上見城跡	68 新庄城跡	83 掛畑城跡	98 茗荷谷山城跡	113 鉞ヶ岳城跡
9 阿尾城跡	24 高松城跡	39 鴨城跡	54 宗守城跡	69 富山城跡	84 尾畑城跡	99 稲村城跡	114 明日山城跡
10 稲積城跡	25 鞍骨城ケ峰城跡	40 柴野高の宮城跡	55 小屋場平城跡	70 安田城跡	85 大乗悟山城跡	100 千石山城跡	115 若栗城跡
11 海老瀬城跡	26 鞍骨山城跡	41 田川城跡	56 井波丸山城跡	71 大峪城跡	86 楡原山城跡	101 中地山城跡	116 元屋敷城跡
12 一刎城跡	27 飯久保城跡	42 道坪野城跡	57 井波城跡	72 上熊野城跡	87 猿倉城跡	102 論田山城跡	117 宮崎城跡
13 水谷城跡	28 神代城跡	43 今石動城跡	58 隠尾城跡	73 長沢城跡	88 栂尾城跡	103 堀江城跡	118 横尾城跡
14 中村城跡	29 堀田城跡	44 一乗寺城跡	59 千代ヶ様城跡	74 富崎城跡	89 日尾城跡	104 箕輪城跡	119 明石城跡
15 飛滝城跡	30 摩頂山城跡	45 松根城跡	60 安川城跡	75 茶臼山城跡	90 樫ノ木城跡	105 升方城跡	

図 54　富山県における城と城下町の分布図

集住の徹底が図られるとともに、楽市・楽座や免税政策により商工業者の誘致が進められ、武家屋敷と町屋を一体化させた城下町が整備され」、「豊臣秀吉もこれに続いて大坂・伏見などを統一政権の中心にふさわしい城下町として整備し、近世城下町の基礎をつくりあげた」という。増山城下町はどの段階に位置付けられるのだろうか。

城下町のプラン　増山の場合、家臣団の屋敷は城下の下町、城内の御所山屋敷～池ノ平等屋敷にかけての区域が候補に挙がる。侍屋敷(龍波)という地名があるが、位置的に考えて城主居館の可能性がある。

市に関わる地名や痕跡が見当たらないので、近在の市(中田・柳瀬)が吸収されることなく存続したのであろう。商工業関係では、鉄砲町という地名や桧物師の存在から窺えるように、ある程度の集住は進んでいたものと思われるが、大工・鍛治・染物などの手工業者の気配がない。城下町の中心はあくまで寺土居町(＝城戸の内)で、いわば寺町である。通常、城下町では寺町を都市域防衛のため外縁部に配置される事例が多く[5]、寺

5　前傾註　宮崎 2007

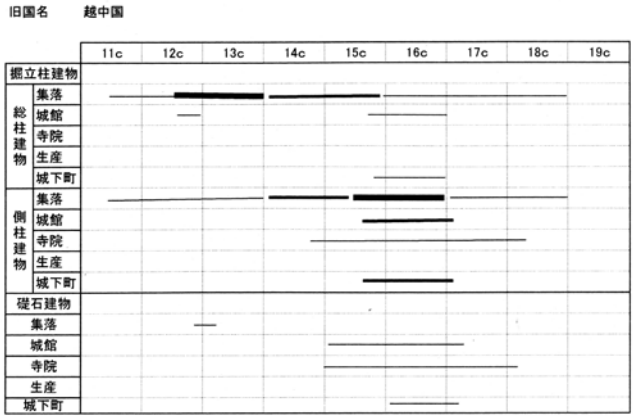


図 55　越中国の中近世建物
（北陸中世考古学研究会 2004『掘立柱建物から礎石建物へ』配布資料を転載）

土居町に寺を集めたのも同様の理由ではなかろうか。

概観すると、増山城下町は寺町や土塁など計画的秩序性[6]が一部で窺えるものの、市の吸収や商工業者の集住が未発達であるため、中世から近世に至る過渡的な様態であったと捉えたい。

城下町の隆盛と衰退　遺物から導かれた年代は 16 世紀後葉から 17 世紀前葉であり、織豊政権期を中心に町の形成が進んだと理解できる。この時期に突発的に町作りが始まった訳ではなく、16 世紀中葉から後葉にわずかに遺物が出土するので、何らかの萌芽的な動きがあったのだろう。ただし、この時期に町が隆盛を迎えるのは、大きな動きが背景にあったと考えたい。佐々成政が増山城を拠点化したこと、前田氏が砺波郡を領有後に増山城・木舟城の二城体制を敷いたことである。

いずれにしろ城下は廃城とともに終焉を迎え、農村化した。その後、1663 年 (寛文三) に段丘上に芹谷野用水が開鑿され、翌年に増山新村が村立てされて移住が進み、幕末までには現在のように段丘上に街村が形成された[7]。今回の調査区は、まさに城下の形成から衰退、農村化した時期にあたる。

その過程で、建物の複数回の建て替えや何度も行われた整地をどう解釈すればいいのだろうか。一般に掘立柱建物の耐用年数は 20-30 年といわれるので、多く見積もっても２回程度で十分である。増山城特有の事情として為政者の交替が多くなされたが、仮にこのことを反映しているとすると遺物の編年と若干ズレが生じる。

城下町の形成過程の中で、町の近在には人の手で管理された二次林があり、近くに草本類が繁る土地や湿地帯があり、イネやソバなどの多くの種類の植物が栽培された。加えて、タイ科という嗜好性の高い魚が内陸の城下町にもたらされ、豊かな食生活を送っていたことがわかった。城下町の人々が住む環境の一端を知ることができ、妙に親近感が感じられる。

さて、県内の城下町に目を転じると、調査事例は驚くほど少ない。木舟城の城下町である開酵大滝遺跡（高岡市）は、存続年代が 16 世紀中頃～末と極めて短く[8]、増山に似る。調査地点は鋳物師や鍛冶師が住む町の可能性が指摘され、建物を 54 棟を復元している。平野部の城下町であるがほぼ同時期に存在したことと前田氏が関わった町という共通点もあり、今後詳細に比較検討すべき対象である。今回の調査を端緒に、越中国での中世山城と城下の在り方が解明されることを望む。

今後の課題　今回の発掘により、城下町の様相の一端が明らかとなったが、城下寺院の創建時期と考古学的年代にズレがある。考古学的には 16 世紀後葉から 17 世紀前葉までの 30 ～ 40 年程しか存続しないが、寺院の創建時期はさらに年代が遡るのはなぜか。

他方、建物群の性格の解明、土塁の構築時期と機能の解明、昆虫遺体の分析を通しての古環境復元の補足など残された課題はあるが、一歩ずつ研究を進めて中世城下町の実像に迫りたい。

（野原大輔）

6　矢守一彦 1988「一　近世城下町プランの基調」『城下町のかたち』筑摩書房

7　安カ川恵子 2008「2 増山村と増山新村」『増山城跡総合調査報告書』砺波市教育委員会

8　(財) 富山県文化振興財団 2000『開酵大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』

＜参考文献＞

河合久則　1990「付二　増山城下の寺院」『砺波市史資料編 1』
久々忠義　1991「10　増山城下町遺跡の発掘調査（昭和 52 年）から」『富山県指定史跡 増山城跡調査報告書』砺波市教育委員会他
佐伯哲也　2013「77. 増山城」『越中中世城郭図面集』桂書房
高岡　徹　1990「増山城と中世の城館」『砺波市史資料編 1 』
高梨清志 2004「越中 (富山県) の様相」『掘立柱建物から礎石建物へ』北陸中世考古学研究会
野原大輔　2010「越中の争乱と増山城－現状と課題 2010 －」『富

写真図版１　調査地遠景

増山城と城下町１（南から）

増山城と城下町２（北から）

写真図版２　調査地近景

１面城下町近景（南から）

２面近景（西から）

調査区北壁土層断面（南から）

調査区西壁土層断面（東から）

調査区南壁土層断面（北から）

調査区東壁土層断面（西から）

Ⅲ層土層断面（東から）

北壁土層断面西端（南から）

西壁土層断面中央（東から）

東壁土層断面南端（西から）

写真図版４　整地層 (SX028)

SX028 検出状況（南から）

西壁土層断面中央（東から）

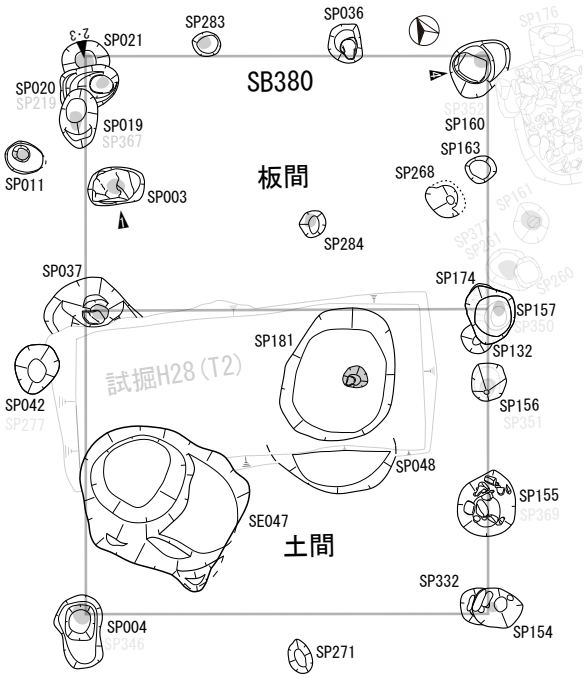
西壁土層断面中央（東から）

1.SP003 礎石検出（南から）

2.SP020 断面（北から）

3.SP219 断面（北から）

4.SP160 断面（西から）



写真図版 6　区画 2(SB381・382)

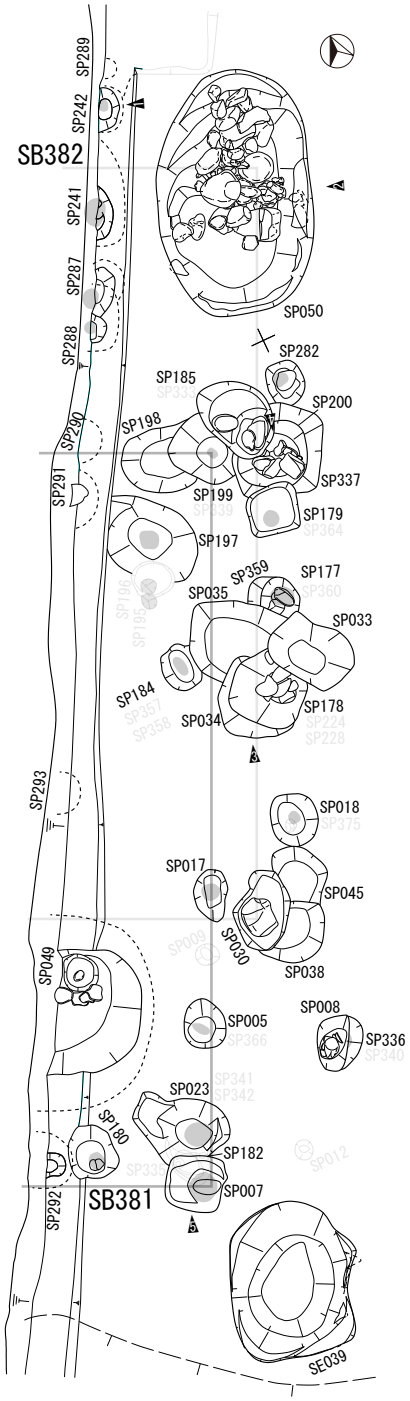
1.SP242 断面・柱材検出（東から）

2.SP050 断面（東から）

3.SP034・178・228 断面（南から）

4.SP200 断面（北から）

5.SP007 断面（南から）

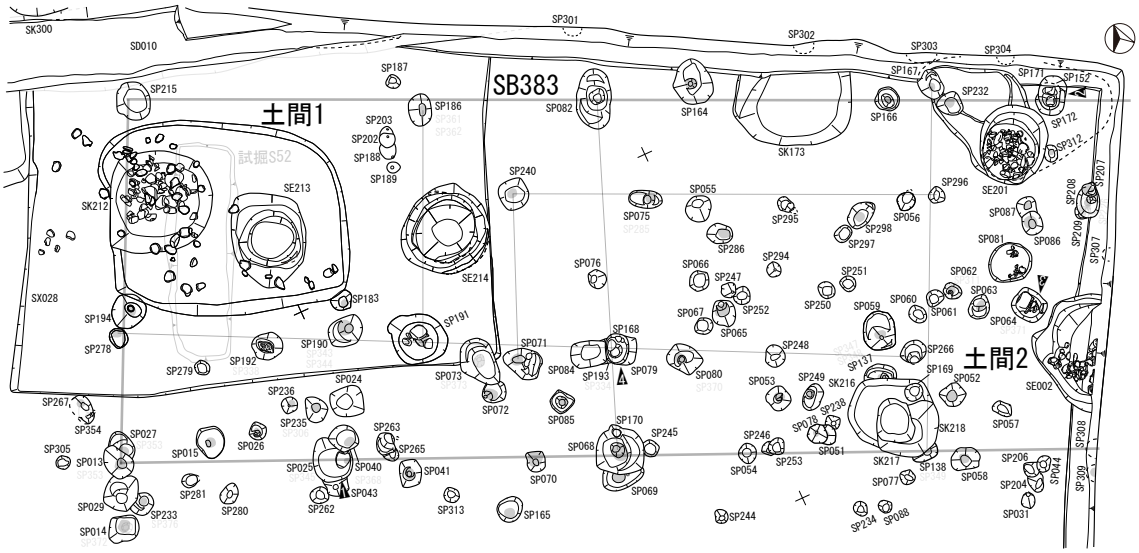


1.SP025 断面（南から）

2.SP152･171･172 断面（東から）

3.SP064 礎石・根石検出（北から）

4.SP168 根石検出 ･SP079･84･193（南から）



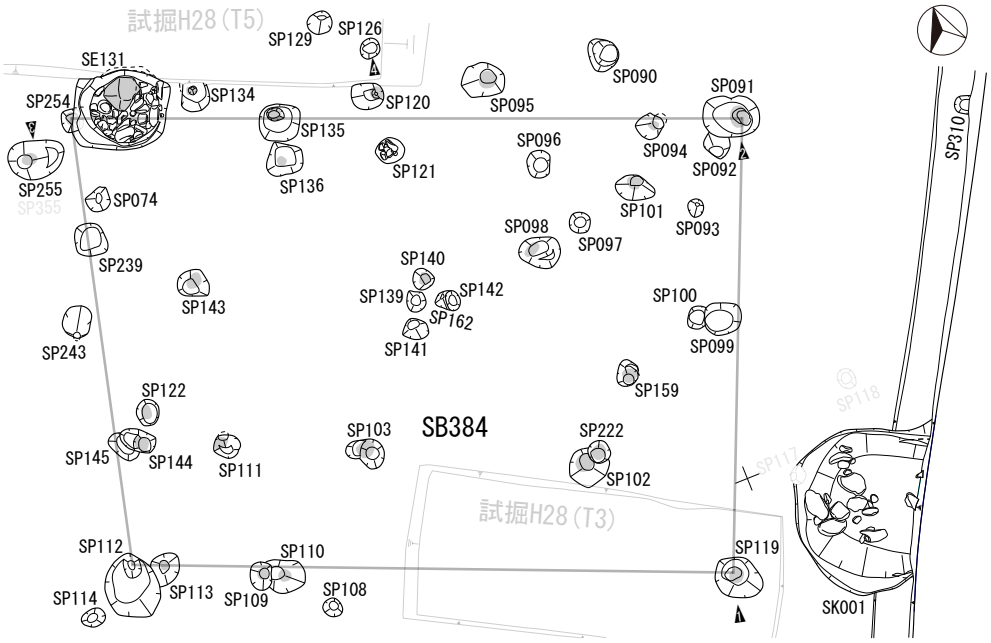
写真図版 8　区画 4(SB384)

1.SP119 断面（南から）

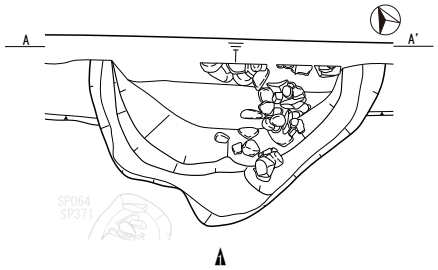
2.SP091 断面（南から）

3.SP255 断面（北から）

4.SP126 遺物出土状況（南から）



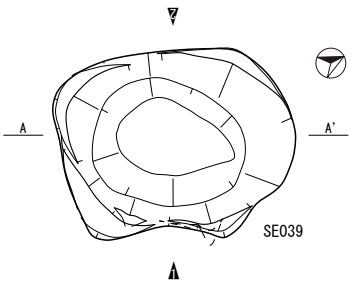
1.SE002 礫出土状況（西から）



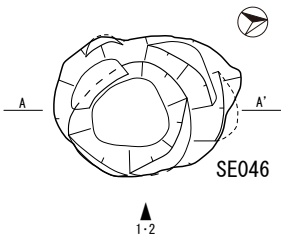
1.SE039 断面（東から）

2.SE039 完掘（西から）

1.SE046 礫出土状況（東から）



2.SE046 完掘（東から）



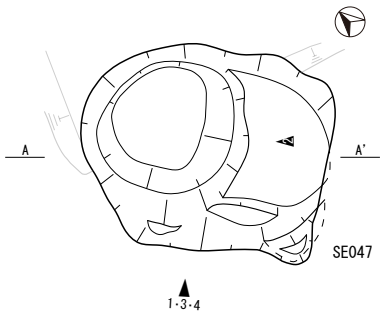
写真図版 10　井戸 (SE047･131)

1.SE047 礫出土状況（南から）

2.SE047 石臼出土状況（東から）

3.SE047 断面（南から）

4.SE047 完掘（南から）



1.SE131 断面（南から）

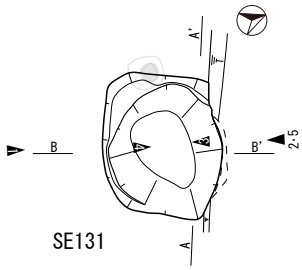
2.SE131 礫出土状況（北から）

3.SE131 石臼出土状況 1（北から）

4.SE131 石臼出土状況 2（南から）

5.SE131 完掘（北から）

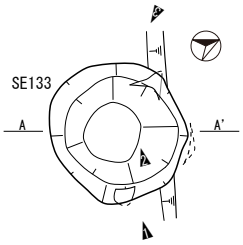
1.SE133 断面（東から）



2.SE133 礫出土状況（東から）

3.SE133 陶器椀出土状況（東から）

4.SE133 完掘（北から）

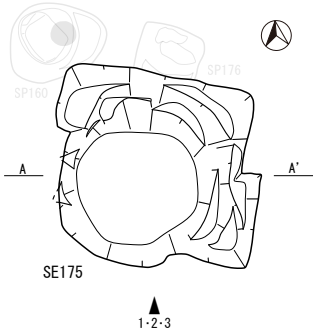


写真図版 12　井戸 (SE175･201)

1.SE175 礫出土状況（南から）

2.SE175 断面（南から）

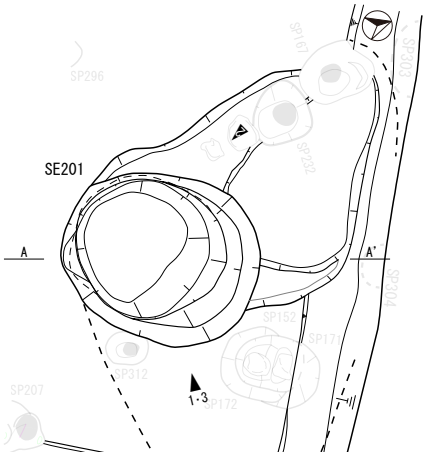
3.SE175 完掘（南から）



1.SE201 断面（東から）

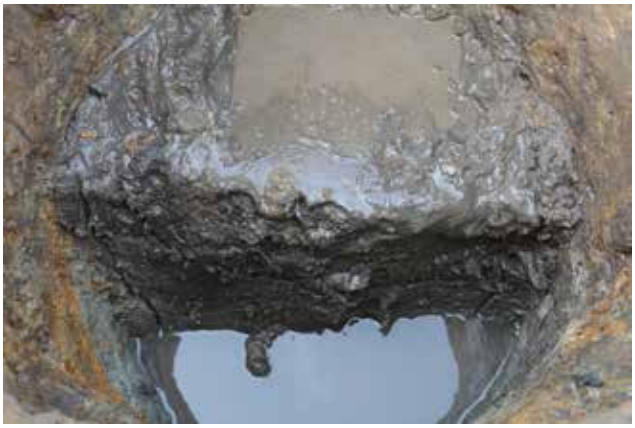
2.SE201 礫出土状況（北から）

3.SE201 完掘（東から）

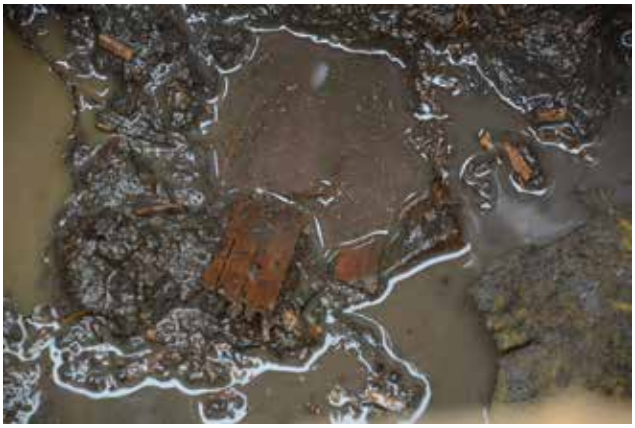


1.SE213 断面 1（南から）

2.SE213 遺物・礫出土状況（南から）



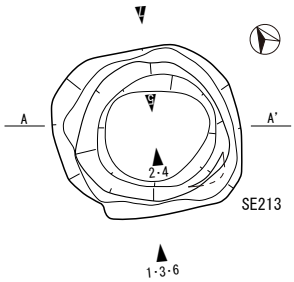
3.SE213 断面 2（南から）



4.SE213 有機物出土状況（南から）

5.SE213 有機物出土状況 2（北から）

6.SE213 完掘（南から）



7.SE213 完掘　冠水状況（南から）

写真図版 14　井戸 (SE214)

1.SE214 断面 1（南から）

2.SE214 炭化物集中範囲（東から）

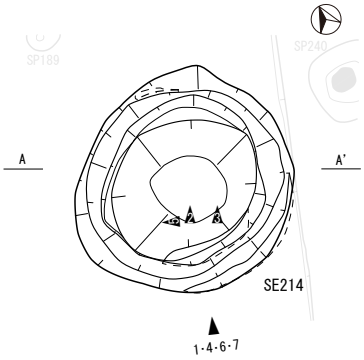
3.SE214 木製品出土状況 1（南から）

4.SE214 断面 2（南から）

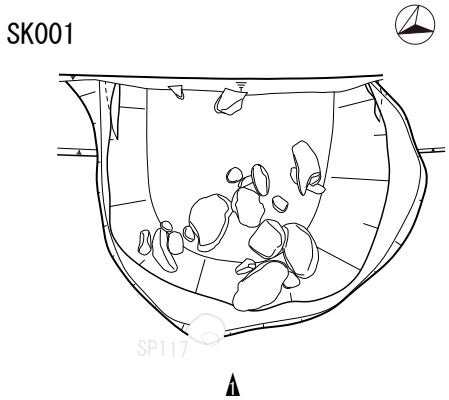
5.SE214 木製品出土状況 2（東から）

SE214 完掘（南から）

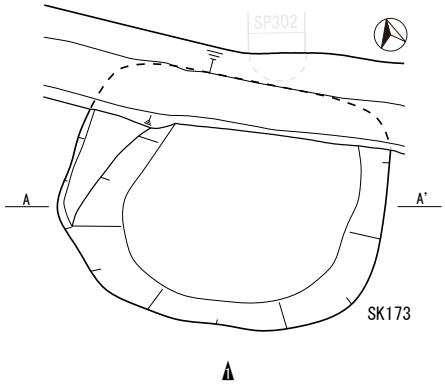
7.SE214 完掘　冠水状況（南から）



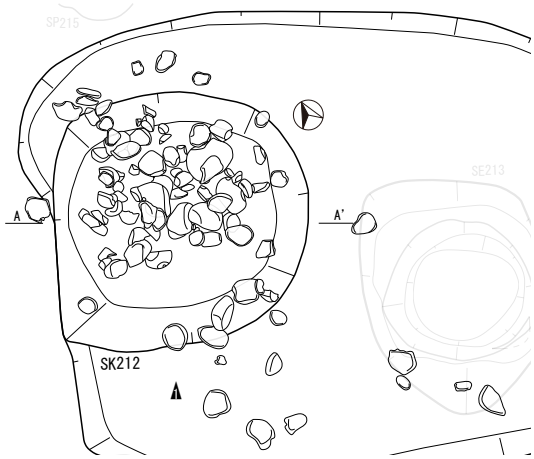
1.SK001 礫出土状況（西から）



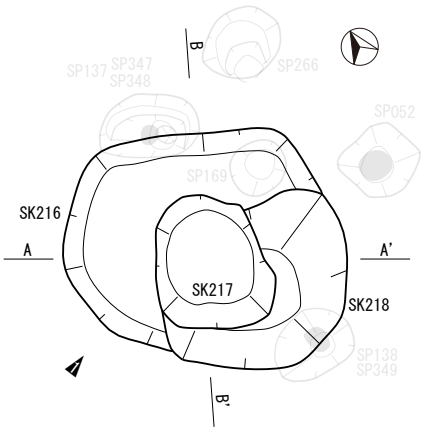
1.SK173 断面（南から）



1.SK212 礫出土状況（南から）



1.SK216･217･218 断面（南西から）

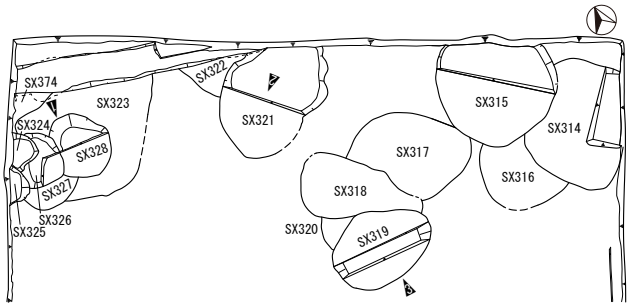


写真図版 16　樹木痕・暗渠

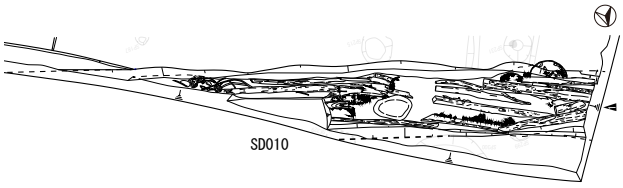
1. 向って左から SX328･326･324（北から）

2.SX321 断面（北から）

3.SX319 断面（南から）



4.SX314 断面（西から）



1.SD010 木材出土状況（西から）

区画 1 ～ 4、SE002･039･046･047

写真図版 18　出土遺物 (2)

SE131・133・175

SE201 (86 ～ 106)
86
87
89
90
88
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
SE213 (107 ～ 146)
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
※S≒4:1

写真図版 20　出土遺物 (4)

SE214、SK001・173・212、遺構外

報 告 書 抄 録

ふりがな	ますやま じょうかまち　　せんごくき しゅうらく　　ちょうさ
書　　名	増山城下町における戦国期集落の調査
副 書 名	室牧線鉄塔建替（No.62 ～ No.62-2）他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	野原大輔（砺波市）、片山博道（上智）、吉永亜紀子（日本動物考古学会員） 中村賢太郎・伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze 森雅志・バンダリ　スダルシャン・佐々木由香・小林克也・竹原弘展・藤根久・米田恭子 （パレオ・ラボ）
編集機関	①砺波市教育委員会 ②株式会社上智
所 在 地	①〒932-0393　富山県砺波市庄川町青島 401　TEL 0763-82-1904　FAX 0763-82-3521 ②〒939-1351　富山県砺波市千代 176 番地の 1　TEL 0763-33-2085　FAX 0763-33-2558
発行機関	北陸電力株式会社　富山支店　総務部　用地チーム
所 在 地	〒930-8543　富山県富山市桜橋通り 3-1　TEL 076-441-2511　FAX 076-442-8869
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
ますやまいせき 増山遺跡	とやまけんとなみしますやま 富山県砺波市増山	162086	208027	36 度 39 分 05 秒	137 度 02 分 11 秒	20170403 ～ 20170619	485.70 1 面 259.04 2 面 222.66	室牧線鉄塔建替 （No.62 ～ No.62-2） 他工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
増山遺跡	城下町	戦国～ 江戸初期	掘立柱建物・礎石建物 井戸・土坑	陶器（瀬戸美濃・越中瀬戸・越前・珠洲） 中国磁器（青磁・白磁・青花） 土師器（灯明皿）石製品（石臼・砥石） 金属製品（鉢、釘） 木製品（下駄・蓋・付木）	16 世紀後葉から 17 世紀前葉の建物を検出 備前系の加賀作見窯産の擂鉢が出土
	散布地	奈良・平安時代		須恵器杯	

要　　約

増山遺跡では、調査以前、土塁より東側の字下町が城下町とされていたが、過去の調査において、柱穴・土坑・井戸等が検出されたことにより、城下町の範囲が土塁より西側まで広がることが明らかにされた。

今回の調査では、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の掘立柱建物（柱穴群）・井戸・土坑と整地層、時代不明の樹木痕、現代の暗渠が確認された。また、各遺構や整地層からは 14 世紀から 17 世紀前葉の陶磁器・土師質土器・土師器・石製品・木製品・金属製品が出土した。陶磁器の生産地は越中瀬戸、瀬戸美濃、越前、珠洲、肥前系、備前系、中国と多くの生産地から本遺跡に搬入されている。特筆すべき点は掘立柱建物と井戸である。井戸は屋内と屋外があり、掘立柱建物の板間と土間が想定される。特に井戸からは豊富な湧水を調査時においても確認し、そのため、木製品が多数出土した。その中には、製品の他に、木や竹を削った破片、小枝を取り除いた自然木等、何らかの作業をしていた様子が窺われる。また、土間には掘り込んで整地している部分も確認された。遺物では備前系の加賀作見窯産の小破片が出土し、北陸における備前研究に一石を投じた。

その他、下層調査では浅い谷地形と樹木の痕跡を確認し、調査区周辺が森林であったと想像される。

本調査は、戦国期から近世への移行期に形成・衰退・村落化した城下町の貴重な調査で、今回は狭い調査区であったものの、約 400 基近くの遺構が検出されたことはそのことをよく物語っており、その重要性が指摘される。

本書の仕様
●判型……A ４判
●頁数……１１０頁
●組版……写真植字 (13 級明朝基本)
●印刷……オフセット印刷
●製版……挿写真 (白黒，S トーン)
写真図版　FM スクリーン印刷
●用紙……表　　紙　　アートポスト紙　153 kg
本　　文　　書籍用紙　46.5 kg
写真図版　　アート紙　70.5 kg
●製本……左無線綴じ
●表紙加工…マット P.P.(ポリプロピレン) 加工

増山遺跡発掘調査報告

増山城下町における戦国期集落の調査

― 室牧線鉄塔建替 (No.62 ～ No.62-2) 他工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

2018 年 (平成 30)3 月 30 日発行

編　　集　砺波市教育委員会
〒 932-0393　富山県砺波市庄川町青島 401
TEL 0763-82-1904 FAX 0763-82-3521
URL:http://www.city.tonami.toyama.jp/

株式会社上智
〒 939-1351　富山県砺波市千代 176 番地の 1
TEL 0763-33-2085 FAX 0763-33-2558
URL:http://www.johchi.co.jp/

発　　行　北陸電力株式会社

印刷・製本　中央印刷株式会社
〒 930-0817　富山県富山市下奥井 1-4-5
TEL 076-432-6572 FAX 076-432-2329
URL:http://www.c-printing.com/